

青森県埋蔵文化財調査報告書 第302集

# 上野尻遺跡Ⅱ

—青森県新総合運動公園建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2001年3月

青森県教育委員会



青森県埋蔵文化財調査報告書 第302集

# 上野尻遺跡Ⅱ

—青森県新総合運動公園建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2001年3月

青森県教育委員会





# 序

青森市の東部、野内川の北には縄文時代以降の遺跡が多数あります。これらのなかで今まで山野峠遺跡（後期。久栗坂地区）・長森遺跡（晩期。矢田地区）・大浦貝塚（晩期。野内地区）などが調査されており、本県の縄文文化を語るうえで欠かすことのできない遺跡として知られています。

平成7年に、青森県総合運動公園の移転に伴い、宮田地区が青森県新総合運動公園の建設予定地となり、当センターによって予定地内の確認調査が行われてきました。その結果、あらたに上野尻遺跡・山下遺跡・米山(2)遺跡など7ヶ所の遺跡が発見されました。

この宮田地区の本格的な発掘調査は、平成9年から当センターによって開始されており、平成10年までに、縄文時代や平安時代の集落跡のほか、中世以降とみられる遺構なども発見され、この地区一帯に縄文時代以来の人々の歴史が埋もれていることが明らかになりました。

平成11年には、平成9年に引き続いて上野尻遺跡の第2次調査が行われました。この調査によって、縄文時代後期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡などが発見され、さらに埋もれていた旧河川からは後期・晩期の土器・石器類が多数出土しました。この調査によって、上野尻遺跡は縄文時代後期から晩期にかけて営まれた集落跡であることが確認されました。

なお、この上野尻遺跡から、平成12年度の調査で環状に配置された掘立柱建物跡群が発見され、この区域が保存されることとなりましたので付記します。

この調査報告書は、平成11年の調査結果をまとめたもので、この地域の歴史を探る資料として、今後の調査・研究、文化財の保護・普及活動等を行ううえでご活用いただければ幸いです。

発掘調査の実施及び出土品の整理・調査報告書の作成にあたり、種々ご指導・ご協力いただいた方々に対し、心から感謝申し上げる次第です。

平成13年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 中島邦夫

## 例 言

- 1 本報告書は、平成11年度に青森県新総合運動公園建設事業に伴い発掘調査を実施した青森市上野尻遺跡の調査報告書である。
- 2 本遺跡は、平成10年3月に青森県教育委員会が編集・発行した『青森県遺跡地図』に、遺跡番号01278として登録されている。
- 3 本報告書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集・作成した。なお執筆者の氏名は、依頼原稿については文頭に記載し、その他は文末に記した。
- 4 本書に掲載した地形図（遺跡の位置）は、国土地理院発行の5万分の1地形図を複製したものである。
- 5 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付した。なお、遺物写真の縮尺は不同である。
- 6 試料の分析・鑑定などについては、次の方々に依頼した。

石器の石質鑑定	八戸市文化財審議委員	松山 力
放射性炭素年代測定		株式会社地球科学研究所
出土炭化材・土壌のリン・カルシウム分析及び樹種同定		バリノ・サーヴェイ株式会社
- 7 出土遺物のうち剥片石器の実測・トレース図の作成は、株式会社アルカに委託した。また、遺物の写真はシルバーフォト及びフォトスタジオらわずに依頼した。
- 8 堆積土層等の色調観察には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 1996）を用いた。
- 9 遺物の計測値は最大値であるが、破片については（ ）を付して残存最大値を示した。
- 10 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 11 挿図中で使用したスクリーントーンは以下の通りである。



焼土・被熱痕



炭化物



礫石器磨痕

# 目 次

序

例言

目次

## 第1章 発掘調査の経過

第1節 調査要項	1
第2節 調査の方法	2
第3節 調査の経過	3
第4節 遺跡の地質と基本層序	4

## 第2章 A区検出遺構と出土遺物

第1節 土坑	11
第2節 土坑群	21
第3節 ビット群・ビット	57
第4節 性格不明遺構	58
第5節 旧河川跡の遺物	62
第6節 遺構外の遺物	117

## 第3章 C区検出遺構と出土遺物

第1節 竪穴住居跡	130
第2節 土坑	132

## 第4章 D区検出遺構

第1節 竪穴状遺構	135
第2節 土坑	135
第3節 溝状土坑	137
第4節 ビット群	138

## 第5章 自然科学的分析

第1節 出土炭化材の放射性炭素年代測定	142
第2節 リン・カルシウム分析及び樹種同定	145
遺物観察表	149

第6章 まとめ	167
---------	-----

引用参考文献	172
--------	-----

写真図版

抄録

## 挿図目次

図1	遺跡位置図	図50	第103号遺物集中区 その他土器 (2)・石器---78
図2	調査対象区域図	図51	旧河川跡出土土器 (1) 1層 .....85
図3	基本層序 (1) .....6	図52	旧河川跡出土土器 (2) 1・2・3層 .....86
図4	基本層序 (2) .....7	図53	旧河川跡出土土器 (3) 3層-2 .....87
図5	A区遺構配置図 .....8	図54	旧河川跡出土土器 (4) 3層-3 .....88
図6	C区遺構配置図 .....9	図55	旧河川跡出土土器 (5) 3層-4 .....89
図7	D区遺構配置図 .....10	図56	旧河川跡出土土器 (6) 3層-5 .....90
図8	第101・102・103・105号土坑、 第104号性格不明遺構、出土遺物 .....12	図57	旧河川跡出土土器 (7) 3層-6 .....91
図9	第105号土坑 (2) .....14	図58	旧河川跡出土土器 (8) 3層-7、10層 .....92
図10	第105号土坑 出土遺物 (1) .....15	図59	旧河川跡出土土器 (9) 10層-2 .....93
図11	第105号土坑 出土遺物 (2) .....16	図60	旧河川跡出土土器 (10) 10層-3 .....94
図12	第106・110号土坑、出土遺物 .....18	図61	旧河川跡出土土器 (11) 10層-4、13層 .....95
図13	第118・140号土坑、出土遺物 .....20	図62	旧河川跡出土土器 (12) 13層-2 .....96
図14	第113号土坑 .....22	図63	旧河川跡出土土器 (13) 13層-3、旧河川跡一括 .....97
図15	第113号土坑 出土遺物 (1) .....23	図64	旧河川跡出土土器 (1) .....99
図16	第113号土坑 出土遺物 (2) .....24	図65	旧河川跡出土土器 (2) .....100
図17	第114・115・148・149号土坑、 第111号性格不明遺構 .....27	図66	旧河川跡出土土器 (3) .....101
図18	第114・115・148・149号土坑 .....28	図67	旧河川跡出土土器 (4) .....102
図19	第114号土坑 出土遺物 (1) .....29	図68	旧河川跡出土土器 (5) .....103
図20	第114・115号土坑 出土遺物 .....30	図69	第101号遺物集中区 遺物出土位置図 .....108
図21	第148号土坑 出土遺物 (1) .....32	図70	第101号遺物集中区 出土遺物 (1) .....109
図22	第148号土坑 出土遺物 (2) .....33	図71	第101号遺物集中区 出土遺物 (2) .....110
図23	第148・149号土坑 出土遺物 (1) .....35	図72	第101号遺物集中区 出土遺物 (3) .....111
図24	第149号土坑 出土遺物 (2) .....36	図73	旧河川跡出土 縄文時代晩期後葉遺物 (1) .....112
図25	第149号土坑・第111号性格不明遺構 出土遺物、 第123・124号土坑 .....38	図74	旧河川跡出土 縄文時代晩期後葉遺物 (2) .....113
図26	第123・124・125・126・141号土坑 .....40	図75	旧河川跡出土 縄文時代晩期後葉遺物 (3) .....114
図27	第125・126・141号土坑 出土遺物 .....42	図76	第101号遺物集中区・ 旧河川跡西半部出土土器 .....115
図28	第126号土坑 出土遺物 (1) .....43	図77	旧河川跡西半部 (縄文時代晩期後葉出土区) 出土土器 .....116
図29	第126号土坑 出土遺物 (2) .....44	図78	遺構外出土土器 (1) .....120
図30	第141・127・129・131号土坑 .....47	図79	遺構外出土土器 (2) .....121
図31	第129・131号土坑 .....48	図80	遺構外出土土器 (3) .....122
図32	第129号土坑 出土遺物 (2) .....50	図81	遺構外出土土器 (4) .....123
図33	第129号土坑 出土遺物 (3) .....51	図82	遺構外出土土器 (5) .....124
図34	第129号土坑 出土遺物 (4) .....52	図83	遺構外出土土器 (1) .....125
図35	第129・131号土坑 出土遺物 .....53	図84	遺構外出土土器 (2) .....126
図36	第131・142・143号土坑 .....55	図85	遺構外出土土器 (3) .....127
図37	第101号ピット群 .....57	図86	遺構外出土土器 (4) .....128
図38	第101号ピット、第101・106・107・108号 性格不明遺構 .....59	図87	遺構外出土土器 (5) .....129
図39	旧河川跡及び基本層序 .....63	図88	第101号整六住居跡、出土遺物 .....131
図40	第103号遺物集中区① 土器 (1) .....68	図89	第128・138・139・145号土坑、 出土遺物 .....134
図41	第103号遺物集中区① 土器 (1) .....69	図90	第101号整六状遺構、 第121・122・130号土坑 .....136
図42	第103号遺物集中区① 土器 (2) .....70	図91	第101・102号溝状土坑 .....138
図43	第103号遺物集中区① 土器 (3)、 遺物集中区②-1 .....71	図92	第102号ピット群 (1) .....139
図44	第103号遺物集中区②-2 .....72	図93	第102号ピット群 (2) .....140
図45	第103号遺物集中区② 土器 (1) .....73	図94	第102号ピット群 (3) .....141
図46	第103号遺物集中区② 土器 (2) .....74		
図47	第103号遺物集中区② 土器 (3)、 遺物集中区③ .....75		
図48	第103号遺物集中区③ 土器 (1) .....76		
図49	第103号遺物集中区③ 土器 (2)、 その他土器 (1) .....77		

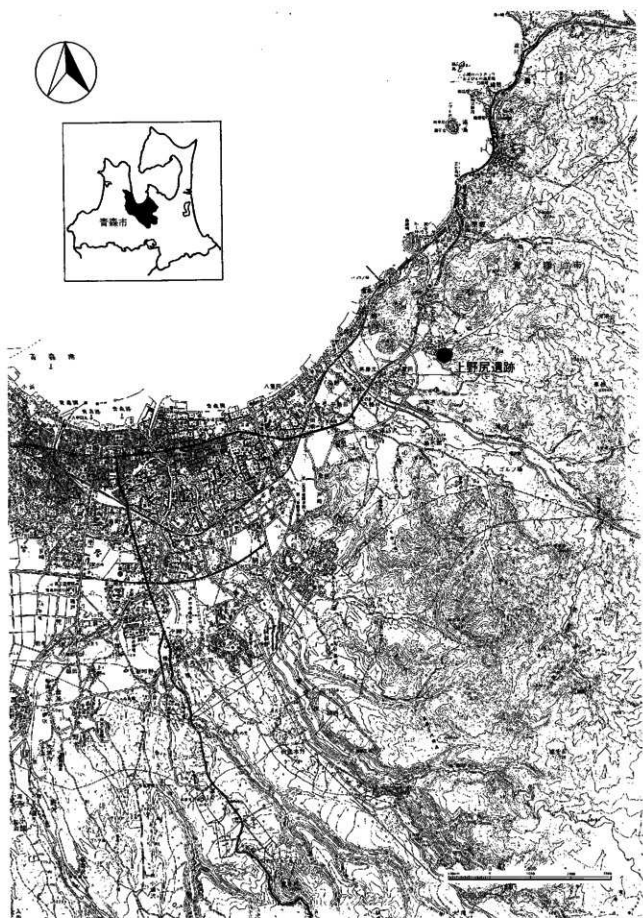


図1 遺跡位置図

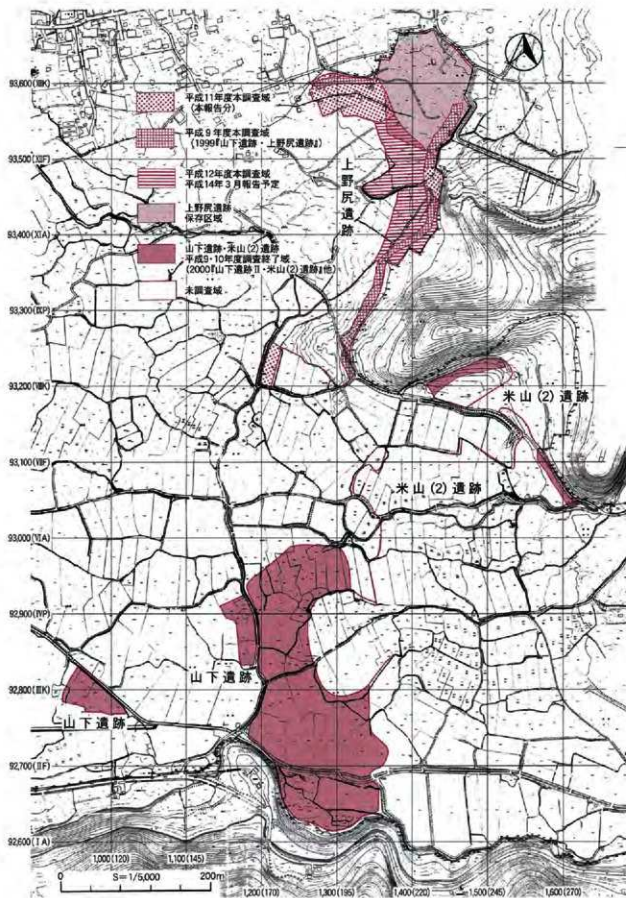


图2 調査対象区域図

## 第1章 発掘調査の経過

### 第1節 調査要項

#### 1 調査目的

青森県新総合運動公園建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する青森市上野尻遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財活用に資する。

#### 2 発掘調査期間

平成11年4月21日から11月12日まで

#### 3 遺跡名及び所在地

上野尻遺跡 青森市大字矢田字上野尻54ほか  
(青森県遺跡台帳番号 01-278)

#### 4 発掘調査面積

8,000㎡

#### 5 調査委託者

青森県土木部都市計画課

#### 6 調査受託者

青森県教育委員会

#### 7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

#### 8 調査協力機関

青森市教育委員会

#### 9 調査体制

調査指導員 市川 金丸 青森県考古学会会長（考古学）

調査協力員 池田 敬 青森市教育委員会教育長

調査員 松山 力 八戸市文化財審議委員（地質学）

調査員 葛西 勲 青森短期大学助教授（考古学）

調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター

所 長 中島 邦夫

次 長 成田 誠治

総務課長 成田 孝夫（現、青森県工業振興課課長補佐）

調査第二課長 福田 友之

文化財保護主事 工藤 由美子

文化財保護主事 永嶋 豊

調査補助員 藤谷 麻美、長谷川浩平、館岡 杏子、工藤 美希

## 第2節 調査の方法

### 1 グリッドの設定

グリッド番号の呼称は、新総合運動公園用地内の平成8・9・10年度の調査のものを踏襲している。グリッドは4×4mで1単位とし、公共座標の軸に合わせ、公共座標X=92,680、Y=644をII A-30とした。X軸の南北方向はローマ数字とアルファベットの組み合わせで呼称し、Y軸の東西方向は算用数字で呼称した。X軸で使用するアルファベットはA～Tまでとし、グリッド名は南西隅の交点を用いて表した。

### 2 調査の手順

まず、調査区に2m×2mのトレンチを数ヶ所設定し、人力で掘り下げを行った。その結果、遺物の出土状況・遺構の分布密度がおおよそ把握できたため、重機による表土除去を行った。遺物包含層・遺構確認には、上層より分層発掘による掘り下げを行った。

遺物の取り上げは、ローマ数字で表記した基本層序に従い、グリッド単位・層単位を基本として行った。良好な遺物または遺物の出土状況の場合は、できる限り座標値・標高の記録をした。

### 3 遺構の調査

遺構の調査は四分法及び二分法により、土層観察のためのベルトを設けて行った。実測は簡易遣り方測量によるものとした。遺構の実測図の縮尺は、必要に応じて10分の1・20分の1を使用することにした。遺構名は、種別ごとに確認順に付した。調査時には種別ごとに1番から付していたが、調査が複数年度にわたっているため、各調査年度分の遺構がそれぞれ区別できるように、整理時に平成11年度調査分については、すべての遺構を101番からとした。

遺構内の堆積土については、上位から下位に向かって順に算用数字を付した。土層観察にあたっては、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 1996）を用いて注記した。

### 4 写真撮影

写真撮影は適宜行うこととし、主としてカラーリバーサル及びモノクロームネガの2種類のフィルムを用いた。ただし、遺構や遺物の状況に応じて、カラーネガフィルムやボラロイドカメラも使用した。



### 第3節 調査の経過

4月13日、原因者との打ち合わせにより、今年度調査予定区の3分の2ほどの範囲がまだ調査に入れないことがわかった。調査に入れない部分の大部分(a区)は、買収は終わっているが上物の撤去が終わっていない地域であり、調査に入れるのは6月以降になるということだった。残りの部分(b区)はまったくの未買収区であるという。

4月21日、調査機材を搬入し調査を開始した。まず調査に入れる地域の北西側にトレンチを入れ、遺物の出土状況・遺構の分布状況などを確認していった。

その結果、北西側には旧河川跡が東西に走っていることがわかり、遺物も多量に出土した。

5月26日、a区の調査が可能になったという連絡があったので、a区の調査も開始した。

6月28～7月2日まで、重機による表土剥ぎを行った。

7月7日、b区(調査区域図のB区・C区)の買収が終了し、C区はただちに調査に入れるがB区は1ヶ月後から調査に入れるということになった。

7月14日、文化課より今年度の調査予定地区外である遺跡の南端(調査区域図のD区)1,000㎡の調査を優先し、今年度中に終わらせて欲しい旨の依頼があったため、ただちにトレンチを設定し、粗掘りを開始した。

8月3～6日、D区の重機による表土剥ぎを行った。終了後掘り下げを行ったが、遺物がほとんど出土しないため、9月7日にも重機を入れ、掘り下げを行った。同時にC区にも重機を入れた。

8月19日にはB区も調査可能となり、上物の撤去終了後にトレンチによって土壌堆積状況・遺物出土状況を確認し、9月8～10日に重機による表土剥ぎを行った。その結果、B区からは遺物も遺構も確認されなかった。

9月に入り、多量の降雨で調査区北西側の旧河川跡が水没し、調査は難航した。10月28日には記録的な大雨のため全く作業ができず、当初10月29日までの調査期間を延長して、11月12日までの期間、職員・補助員による調査を行った。

11月15日、C区が市道矢田2号線に隣接しているため、事故防止のため重機による埋め戻しを行って、平成11年度のすべての調査を終了した。

なお、平成12年度にも11年度に引き続き調査を行ったが、12年度の調査では遺跡北東側に掘立柱建物跡群を確認し、掘立柱建物跡群とそれに伴う一部の遺構の保存が決定されたため、遺跡保存区もあわせて調査対象区域図(図2)に含めた。

(工藤 由美子)

## 第4節 遺跡の地質と基本層序

### ①遺跡の位置・地形

上野尻遺跡は、陸奥湾の南奥部に広がる青森平野の東北端の青森市矢田地区に位置する。

新総合運動公園建設予定地内は北・東・南を急傾斜面で囲まれた洪積台地・沖積地上に立地し、近年まで多くの水田やリンゴ畑が営まれていた。このうち上野尻遺跡からは、間近の山稜によって八甲田山こそ見えないが、西南西方向に岩木山をのぞむことができる。

上野尻遺跡は北西～北東側を片越山山塊(標高295m)、東～南側を東岳山塊(標高684m)によって囲まれており、それらの山塊から延びる幅数百m程度の狭小な尾根状地形が遺跡周辺の平地部に幾筋か延びている。

遺跡北側500mには貴船川が、南側1.5kmには野内川が西進し沖積地を形成し、野内地区にて陸奥湾に注いでいる。土石流堆積物の礫層や砂が、遺跡地内に非常に多く見られることは、幾度ももわたる貴船川や谷状地形における大水時の氾濫が当遺跡の地理的環境形成に影響を与えたことを示唆している。

松山 力は、上野尻遺跡周辺の地形区分図を作成し、沖積地を下位面・中位面・上位面の3面に分け、洪積台地を下位面・上位面の2面に分けている(1999 『山下遺跡・上野尻遺跡』)。山塊から続く急傾斜面から洪積上位面、洪積下位面、沖積上位面、沖積中位面、沖積下位面と標高を下げている。上野尻遺跡は標高28～35mの洪積下位面、沖積上位面、沖積中位面からなる。

平成8年の試掘調査および範囲確認調査によって、予定地内の上野尻遺跡、米山(2)遺跡、山下遺跡、玉水(2)遺跡の存在および範囲を確認し、平成9年度より継続して本調査中であり、『山下遺跡・上野尻遺跡』(中村・杉野森 1999)・『山下遺跡Ⅱ 米山(2)遺跡』(畠山・永嶋 2000)が刊行されており、縄文時代後期や平安時代の集落跡、中世の井戸跡やカマド状遺構等が検出されている。このうち上野尻遺跡は南北幅約420m・東西幅約280m、遺跡面積30,800㎡(平成11年度調査終了時点)である。

平成11年度の調査では、洪積下位面上の遺跡北側部分と南側部分の調査を行った。遺跡の北側部分では、縄文時代後期後葉の遺物が多く出土した旧河川(沢)跡・土坑群・柱穴跡・中近世以降の小ピット群、遺跡南側部分では縄文時代後期の竪穴住居跡・中近世以降の小ピット群と土坑と竪穴状遺構が検出されている。

平成8・9・11年度の調査結果により、上野尻遺跡は縄文時代後期後葉期を主体とし、縄文時代中期・後期・晩期、弥生時代前期、中近世以降に利用されたものと考えられる。

なお、小字名である「上野尻」は近世より続く地名であり、『青森県の地名』(平凡社1982)によれば、当初長森村であったが、明治11年に支村であった矢田村に合併されている。上野尻遺跡の北東約500mの貴船川沿いの緩斜面には長森遺跡が所在し、縄文時代晩期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡と考えられる柱穴跡が検出されている。また上野尻遺跡の北北西1.5kmの山稜部に位置する山野峠遺跡では石棺墓群をはじめとする縄文時代後期前葉の墓域が検出されている。

## ②基本層序（図3・4）

平成11年度の調査区は、平成9年度調査区のB区とC区の間を主体としている。松山はB区を山地急斜面下の浅い小谷の谷頭の底部、C区を山地急斜面下の緩傾斜地ととらえている。

平成11年度調査では、A区北端部のXⅢI-219グリッド、A区の縄文時代後期土坑群付近のXⅡO-213グリッド、C区のⅤP-202グリッド、遺跡の南端部のD区のⅤT-175グリッドの4ヶ所で、土層断面図を作成した。

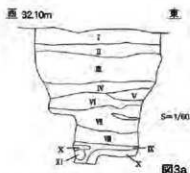
北側調査区では、土層観察用のグリッドを深掘りし、層名は、ローマ数字を用いて新たに命名・記録し、表土(第Ⅰ層)直下には遺物包含層である黒褐色の第Ⅱ層が見られ、第Ⅲ層以下の黄褐色ローム層、または千曳浮石層混じりの土層では遺物は出土していない。遺構確認は、第Ⅲ層以下で行った。表土と第Ⅱ層の区別は、植物の影響を多く受けた上方の土層を表土と呼称した。

各地点によって、第Ⅲ層以下の様相は異なっているが、第Ⅰ層と第Ⅱ層に関してはほぼ共通している。

(永嶋 豊)

## 【A区 XIII I-219グリッド】(図3a)

傾斜面に位置し、XIII J-216中心に遺物がII層中からややまで出土した。降下火山灰の2次堆積が多い。II層に千曳浮石層の若干の混入が見られ、III-VI層以下はそれ以前の堆積と考えられる。



## XIII I-219

層位	混入物・その他	色相	土色	土性	しまり	粘性
I	表土。にぶい黄褐色パミス微量混入。	10YR2/3	黒褐色	シルト	有	やや有
II	にぶい黄褐色や浅黄褐色パミス少量混入。	10YR5/3	暗褐色	シルト	かなり有	やや有
III	にぶい黄褐色や浅黄褐色パミス少量混入。	10YR4/4	褐色	シルト	かなり有	やや有
IV	浅黄褐色パミス微量混入。	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト	非常に有	ほとんど無
V	φ4~10cmの礫を含む。浅黄褐色パミス微量混入。	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	やや有	有
VI		10YR4/4	褐色	粘土質シルト	有	やや有
VII	φ1cm程度の黒色土ブロック少量混入。	10YR6/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト	有	有
VIII	φ3cm以下のにぶい黄褐色パミス微量混入。	10YR4/6	褐色	砂質シルト	有	やや有
IX	灰黄色パミス少量混入。	10YR5/6	黄褐色土	粘土質シルト	非常に有	有
X		10YR6/2	灰黄色	粘土質シルト	有	有
XI		10YR4/6	褐色	シルト質砂	非常に有	無

## 【A区 XII O-213グリッド】(図3b)

付近では縄文時代後期後葉を主体に多くの土坑が確認された。少数ではあるが、縄文時代後期前葉の土坑も見られる。I層が表土、II層が遺物包含層、III層以下は沖積地に堆積した流れ込みのロームを主体とする。VI~IX層は千曳浮石層の2次堆積土と考えられる。

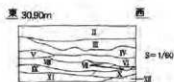


図3b

## XII O-213

層位	混入物・その他	色相	土色	土性	しまり	粘性
I	表土直下の遺物包含層。φ5mm以下のローム粒・炭化物を微量含む。	10YR2/3	黒褐色	シルト	有	やや有
II	II層が中量混入。	10YR4/3	黒褐色	粘土質シルト	有	やや有
III	黒褐色土が少量混入。	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	かなり有	やや有
IV	IV層の土層に鉄分が微量混ざったもの。	10YR4/4	褐色	シルト質粘土	かなり有	有
V	千曳浮石層の2次堆積層。	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	有	やや有
VI	VI層よりやや砂質が強い。φ5mm以下のパミスごく微量を含む。千曳浮石層の2次堆積層。	10YR6/6	明黄褐色	砂質シルト	有	やや有
VII	砂質と粘土質の混じった土層。φ10mm以下のパミスごく微量を含む。千曳浮石層の2次堆積層。	10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	有	やや有
VIII	VIII層よりやや砂質。千曳浮石層の2次堆積層。	10YR6/6	明黄褐色	砂質シルト	かなり有	やや有
IX	φ10mm以下の小礫を微量に含む。	10YR4/6	褐色土	シルト質粘土	やや有	有
X	φ20mm以下の小礫を微量に含む。	10YR6/4	にぶい黄褐色	粘土	かなり有	かなり有
XI		10YR7/4	にぶい黄褐色	粘土	かなり有	有
XII	II層よりピンクで、粘性が強い。	10YR7/4	にぶい黄褐色	粘土	かなり有	有

図3 基本層序(1)

## 【C区 VWP-202グリッド】(図4a)

山麓からの急斜面が緩斜をえ、緩斜面に移行する地形で、洪積台地下位面に位置する。縄文時代後期中葉～後葉の竪穴住居跡1軒が検出された。

平成10年度には約100m東方の米山(2)遺跡において、同様の立地条件で、同期の竪穴住居跡4軒が整然と並んで検出された。I層は表土と遺物を包含する土層、II層が千枚厚石層に相当し、IV～IX層まで鮮やかな赤褐色の非常に締まりの良いローム層が厚く堆積している。この赤褐色のローム層は青森市から野辺地町にかけてみられ、八戸地方の高嶺火山灰に対比される可能性がある。

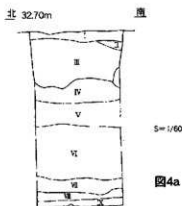


図4a

## VWP-202

層位	混入物・その他	色相	土色	土性	しまり	粘性
I	表土。明黄褐色バミス少量混入。	10YR4/3	暗褐色	シルト	あまり無	無
II	明黄褐色バミス少量混入。	10YR5/6	黄褐色土	シルト	有	無
III	赤褐色粒中量混入。	7.5YR5/6	明褐色	粘土質シルト	非常に有	やや有
IV	明黄褐色バミス微量混入。	5YR4/8	赤褐色土	粘土質シルト	非常に有	有
V	明赤褐色のブロックが少量混入。	5YR4/6	赤褐色土	粘土質シルト	非常に有	有
VI	黒色のブロックがまだらに微量混入	5YR4/8	赤褐色土	粘土質シルト	非常に有	有
VII	黒色のブロックがごく微量混入	5YR4/6	赤褐色土	粘土質シルト	非常に有	有
VIII	黒色のブロックがごく微量混入	5YR4/8	赤褐色土	粘土質シルト	非常に有	有
IX	明黄褐色バミスが少量混入	5YR4/8	赤褐色土	粘土質シルト	非常に有	有

## 【D区 VWT-175グリッド】(図4b)

上野尻遺跡の最南端部であり、縄文時代の遺物・遺構は希薄であるが、中近世以降と考えられる小ピット群と十坑と竪穴状遺構が検出された。

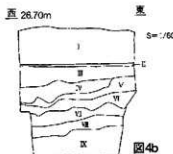


図4b

## VWT-175

層位	混入物・その他	色相	土色	土性	しまり	粘性
I	灰黄色・明黄褐色バミス少量混入。褐色の鉄分中量含む。水田の影響有。	10YR3/1	黒褐色	シルト	非常に有	無
II	灰黄色・明黄褐色バミス微量混入。褐色の鉄分少量を含む。水田の影響大。	10YR2/1	黒色	シルト	非常に有	無
III	明黄褐色・褐色バミス微量混入。I和II火火山灰微量に混入。縄文時代後期～平安時代に形成された土層。	10YR2/1	黒色	シルト	有	無
IV	にぶい黄褐色バミス少量。黒色の粒子微量混入。	10YR2/1	黒色	シルト	無	無
V	明黄褐色バミス中量混入。新移住	10YR2/2	暗褐色	シルト	有	無
VI	明黄褐色バミス少量混入。新移住	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	有	やや有
VII	φ1～5mmのバミスをも多く含む。岩片の混入も目立つ。千枚厚石層	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	非常に有	あまり無
VIII	φ2～3mmのバミス少量混入。	10YR5/8	黄褐色	砂質シルト	非常に有	やや有
IX	灰黄色のバミス少量混入。千枚厚石層堆積以前の土層。X重I-219の直列に対向。	10YR6/4	にぶい黄褐色	粘土質	非常に有	有

図4 基本層序(2)

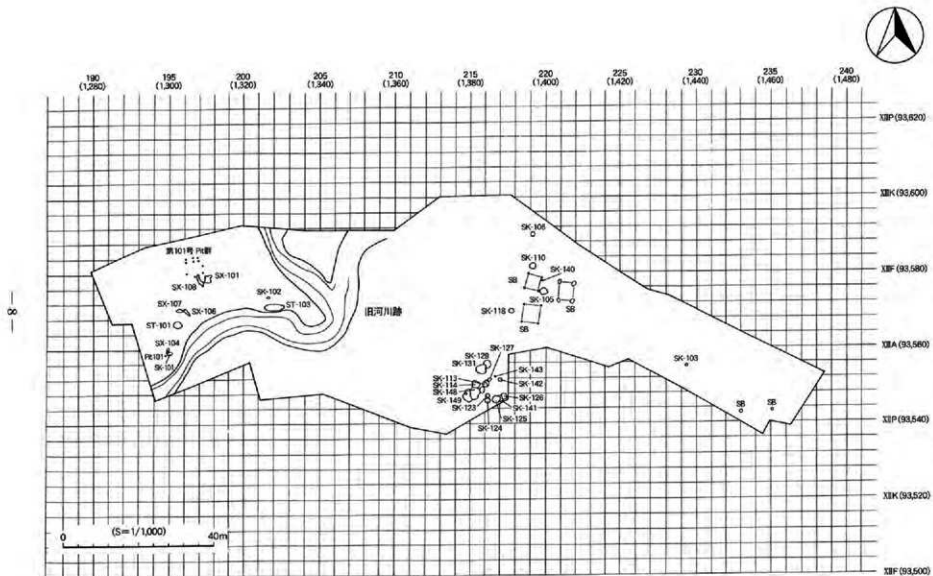


图 5 A区总模配置图

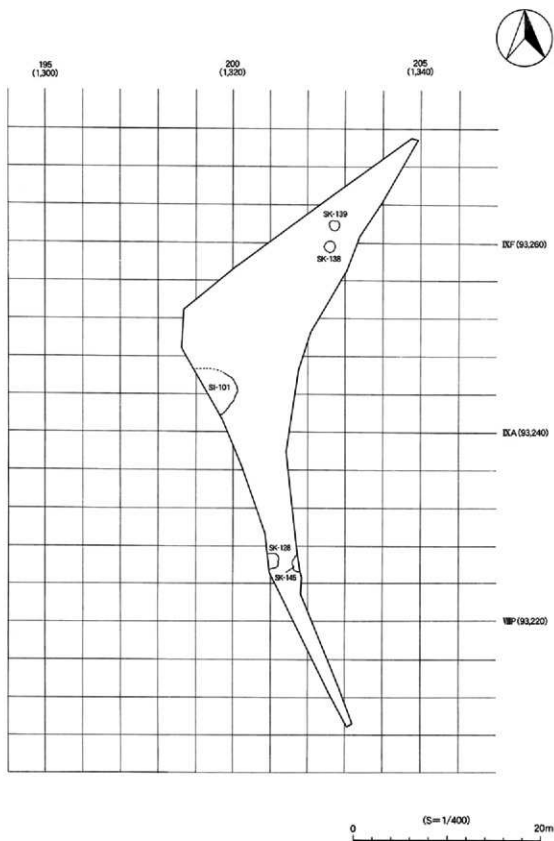


図6 C区遺構配置図

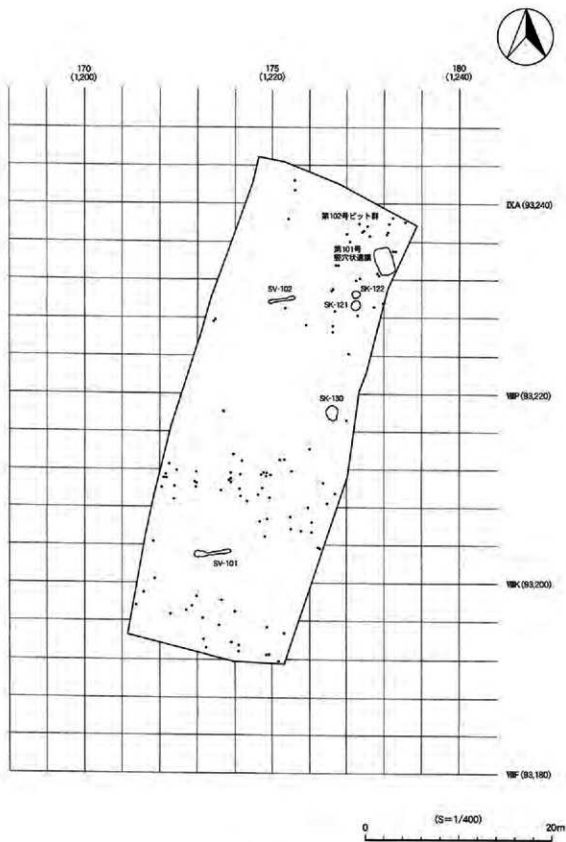


図7 D区遺構配置図



## 第2章 A区検出遺構と出土遺物

遺構は、土坑23基・ピット群1基・ピット1基・性格不明遺構5基・掘立柱建物跡3棟を検出した。そのうち、掘立柱建物跡3棟と平成11年度の調査時には土坑としていたもので平成12年度の調査により掘立柱建物跡に組まれた土坑2基については、来年度以降にまとめて報告することとし、本節からは除外した。なおXⅡQ-215～XⅡT-217グリッド付近で、15基の土坑が集中して検出され、この地域のみ「第3節 土坑群」として報告している。

### 第1節 土坑

#### 第101号土坑（図8）

〔位置・確認〕XⅡT-194・195グリッドに位置する。黒褐色土の楕円形プランとして確認した。

〔重複〕第104号性格不明遺構と重複し、第104号性格不明遺構を切っている。

〔平面形・規模〕平面形は楕円形を呈し、開口部推定長軸1m39cm×短軸77cm、底部推定長軸1m24cm×短軸60cm、深さ14cmである。土坑の北側中央部に土器を検出したが、本土坑との関係は不明である。

〔断面・底面〕壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面は平坦である。

〔堆積土〕7層に分層した。全体に黒褐色土・暗褐色土が堆積し、土坑の東側には褐色土が堆積している。また、3層には焼土が多量に混入している。

〔出土遺物〕確認面及び1・2・6・7層から土器が出土した。特に7層からの出土が多い。遺構全体から出土しているが、北東側に集中している。図示したのは破片3点である。出土遺物は平箱で1/3箱分で、総重量は約2.2kgである。すべて縄文時代中期末葉の土器に相当する。

〔小結〕出土遺物により、縄文時代中期末葉の遺構と思われる。

#### 第102号土坑（図8）

〔位置・確認〕XⅢD-201グリッドに位置する。黒褐色土のいびつな楕円形プランとして確認した。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕平面形はいびつな楕円形で、開口部長軸73cm×短軸64cm、底部長軸53cm×33cm、深さ19cmである。

〔断面・底面〕壁は底面からやや開くように立ち上がっている。底面は平坦で、礫を含んでいる。

〔堆積土〕2層に分層した。上位に黒褐色土、下位に褐色土が堆積している。

〔出土遺物〕土器破片が平箱で約1/6箱分出土した。総重量は0.38kgである。すべて小破片で、図示したのは破片2点である。図8-1は縄文時代後期中葉の土器、2は縄文時代後期の土器に相当する。

〔小結〕時期決定の根拠に欠けており、不明である。

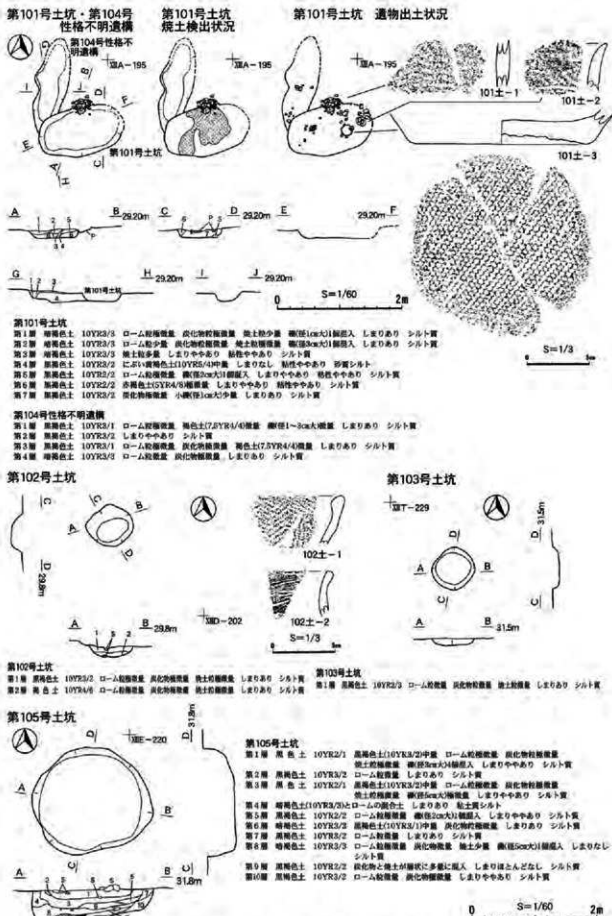


図8 第101・102・103・105号土坑、第104号性格不明遺構、出土遺物

## 第103号土坑(図8)

[位置・確認] XⅡS-229グリッドに位置する。黒褐色土の円形プランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形はいびつな楕円形で、開口部径69cm、底部長軸57cm×短軸51cm、深さ11cmである。

[断面・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 黒褐色土の単層である。

[出土遺物] なし。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

(工藤 由美子)

## 第105号土坑(図8~11)

[位置・確認] XⅢD-219・220グリッドに位置する。黒色土の円形プランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈し、開口部長軸1m97cm×短軸1m68cm、底面長軸1m63cm×短軸1m52cm、深さ60cmである。

[断面・底面] 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面は東側から西側に向かって緩やかに傾斜している。

[堆積土] 10層に分層した。上位に黒色土、中位に暗褐色土、下位には黒褐色土と焼土・炭化物が層状に堆積している。

[出土遺物] 土器・石器が多数出土した。遺物は、確認面及び1・3・5・6・8・9・10層から出土し、特に8・9層に集中している。上位・下位とも遺構の中央付近に土器が集中し、壁際からはほとんど出土していない。とくに中位から下位にかけては遺構の中央よりやや北西側に集中している。図示した土器破片数は57点、石器は7点である。

土器は平箱で約1箱分出土した。縄文時代中期末葉・縄文時代後期後葉の土器である。大半は縄文時代後期後葉の土器であるが、上位には縄文時代中期末葉の土器が目立ち、下位には後期後葉の土器が目立つ。器種は深鉢が主体で、全体の65%ほどにあたる。その他、鉢・壺・注口などが出土している。主体は無文・無文+貼瘤・羽状縄文・縄文の土器であり、無文が全体の約40%を占める。土器の総重量は5.06kgである。

石器は多数出土しており、尖頭器が1点、石匙が1点、二次加工ある剥片が1点、使用痕ある剥片が3点、フレイク43点、チップ80点が出土している。中でも9層からはフレイク10点、チップ52点が集中して出土している。また焼けた礫が多く出土していることも、当土坑の特徴である。

S1は1層出土の玉軸質珪質頁岩の尖頭器である。両面の縁辺部に二次調整を加え、厚みのある刃部を形成している。基部付近はやや広がりを見せている。

S2は磨製石斧の基部のような形態を呈するが、石材は縄文時代後期前葉の三角形岩板に用いられる軟質の細粒凝灰岩で、片面が平坦に整形されており、石製品と考えた。

S3は縦長剥片を素材にした大型の横型石匙である。最も厚い打面側をつまみ部分に利用せずに、刃部側の一端に配置している。つまみと反対側の刃部は腹面側のみに二次調整が施され、つまみ側は

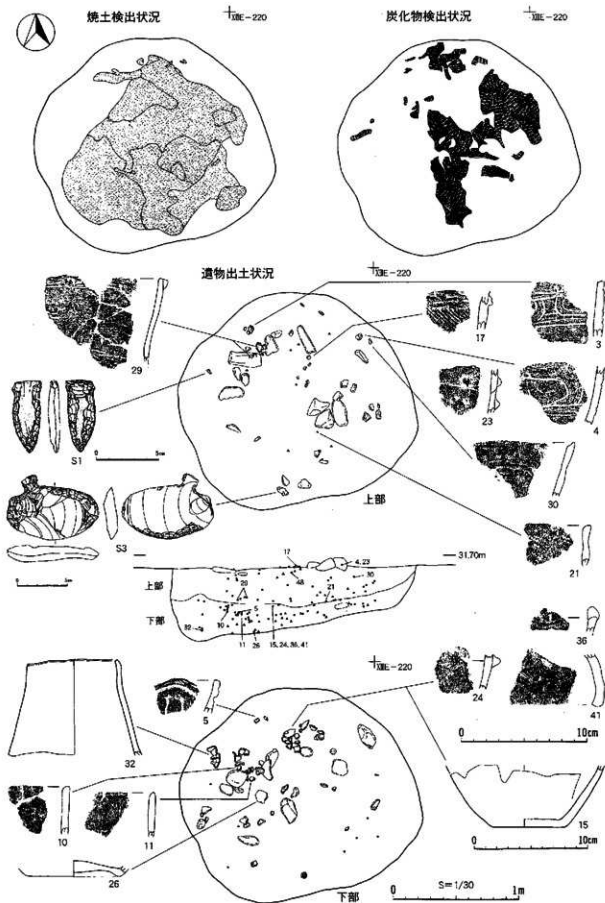


図9 第105号土坑(2)

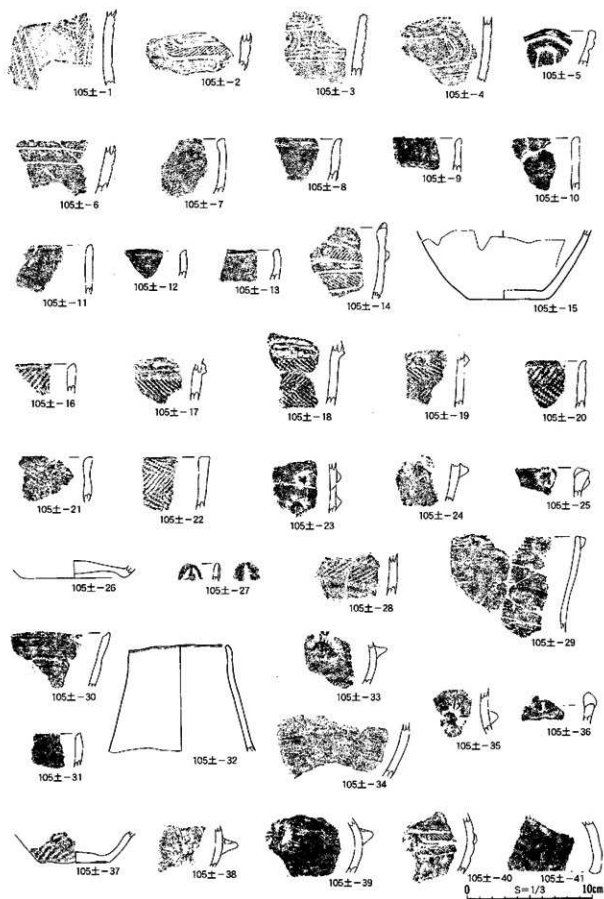


图10 第105号土坑 出土遺物(1)

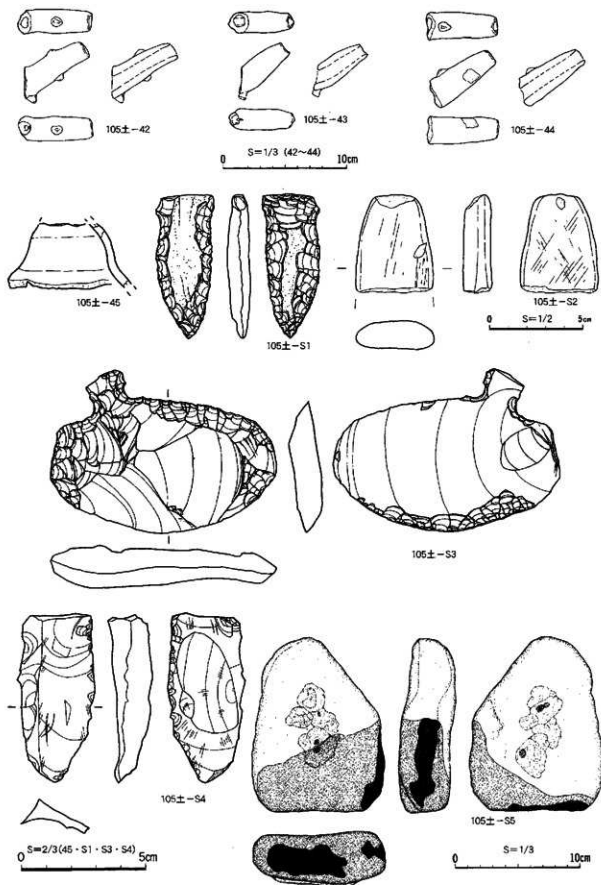


図11 第105号土坑 出土遺物(2)

背面側にもみ二次調整が施されている。

S4は縦長剥片を利用した二次加工ある剥片である。被熱痕が明瞭であり、焼けハジケも数ヶ所認められる。

S5は両面に深めの凹みが2～3箇所残された被熱した凹石である。図中で付着物としたスクリーン部分、石の表皮が被熱によって黒色化したものである可能性が高い。

当土坑の特徴として、焼け礫が非常に多い。特に1層と9層から集中して出土し、1層で4点、9層で11点、10層で1点の焼け礫を取り上げた。1層出土の焼け礫の総重量は6kgである。9層出土の焼け礫は、小さいものはφ6cmで重量0.4kg、大きなものは長さ18cmで重量3.3kgであり、総重量は10.6kgに達する。10層出土の焼け礫は1点のみで、重量1.8kgである。

〔小結〕出土遺物により、縄文時代後期後葉の遺構と思われる。

なお、多数の遺物と底面近くから検出した焼土・炭化物により墓穴の可能性があったため、9層から採取した炭化材と10層から採取した土壌のリン・カルシウム分析を行った。しかし、墓と断定できる資料は得られなかった（第5章第2節参照）。

（工藤 由美子、石器は永嶋 豊）

#### 第106号土坑（図12）

〔位置・確認〕XⅢH-218・219グリッドに位置する。黒褐色土の円形プランと多量の土器をもって確認した。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕平面形は楕円形で、開口部長軸1m15cm×短軸1m8cm、底部長軸93cm×短軸90cm、深さ18cmである。

〔断面・底面〕壁は北側・東側は底面からやや開くように立ち上がり、南側・西側では緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

〔堆積土〕黒褐色土の単一層である。

〔出土遺物〕確認面から1層にかけて平箱1/3箱分の土器がまとまって出土した。すべて縄文時代後期後葉の土器であり、無文と羽状縄文が主体である。図示したのは5点で、土器の総重量は1.96kgである。

〔小結〕出土遺物により、縄文時代後期後葉の遺構と思われる。

（工藤 由美子）

#### 第110号土坑（図12）

〔位置・確認〕XⅢF-218・219グリッドに位置する。黒色土の円形プランとして確認した。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕平面形は楕円形で、開口部長軸1m64cm×短軸1m48cm、底部長軸1m49cm×短軸82cm、深さ80cmである。

〔断面・底面〕断面形は方形で、底面は平坦である。

〔堆積土〕12層に分層した。上位と下位に黒色土、中位に黒褐色土、壁際と底面にやや明るめの土が堆積し、全体に炭化物が混入している。

〔出土遺物〕各層から土器が出土したが、とくに1・3・4層からの出土が多く、下位にいくに従つ

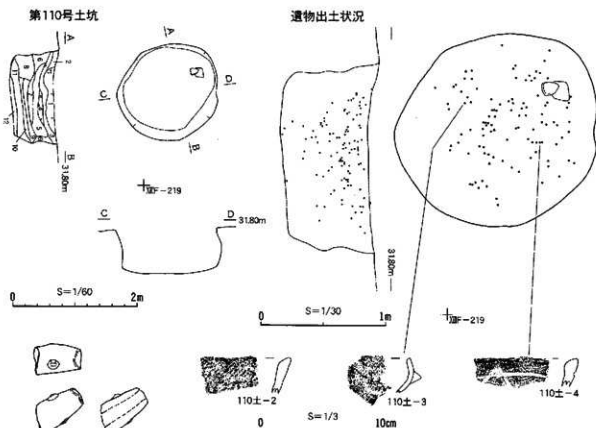
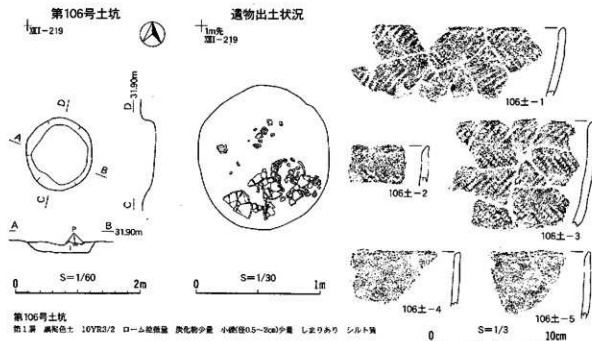


図12 第106・110号土坑、出土遺物



て出土数は少なくなる。図示したのは4点で、110土-4は縄文時代後期中葉の土器、その他は後期後葉の土器に相当する。土器総数は平箱で1/3箱分、土器の総重量は1.42kgである。無文と羽状縄文が多数を占め、その大半が後期後葉の土器である。

石器は、フレイク6点、チップ13点が出土している。また20cm×15cm×3cm大の扁平な板状礫が12層から出土している。

〔小結〕 出土遺物により、縄文時代後期後葉の遺構と思われる。

(工藤 由美子、石器は永嶋 豊)

#### 第118号土坑 (図13)

〔位置・確認〕 XⅢC-217グリッドに位置する。黒褐色土の楕円形プランとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 平面形は不整楕円形で、開口部長軸1m38cm×短軸1m、底部長軸1m29cm×短軸92cm、深さは55cmである。

〔断面・底面〕 断面形は方形で、底面は北西側が低くなっている。

〔堆積土〕 5層に分層した。上位に黒・暗褐色土、中位に黒色土、下位に褐色土が堆積しており、上位からは焼土が検出された。焼土の厚さは4～8cmほどである。

〔出土遺物〕 土器は上位から少量出土した。図示したのは4点で、いずれも縄文時代中期末葉の土器に相当する。

〔小結〕 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

#### 第140号土坑 (図13)

〔位置・確認〕 XⅢE-219グリッドに位置する。黒褐色土の楕円形プランとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形で、開口部長軸54cm×短軸41cm、底部長軸30cm×短軸21cm、深さは21cmである。

〔断面・底面〕 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面はレンズ状に中央部がくぼんでいる。

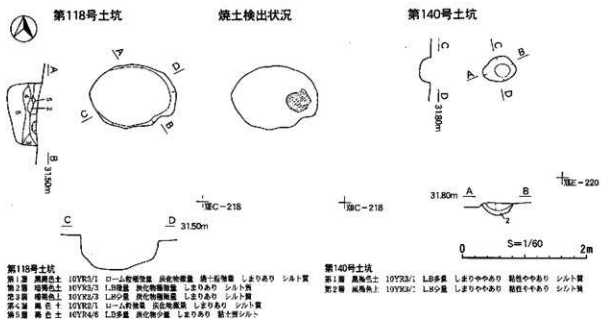
〔堆積土〕 2層に分層した。ロームを多量を含む黒褐色土が堆積している。

〔出土遺物〕 なし。

〔小結〕 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

なお、調査時に第107～109号・112号・117号・119号・120号・135～137号・146号・147号とした各土坑は、後に掘立柱建物跡の柱穴であることが判明したため、ほかの第104号・111号土坑とともに欠番とした。

(工藤 由美子)



第118号土坑出土遺物

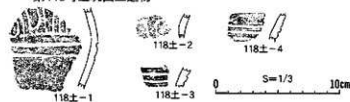


図13 第118・140号土坑、出土遺物

## 第2節 土坑群

XⅡQ-215～XⅡT-217付近で、15基の土坑を検出した。遺構内出土遺物は主に、縄文時代後期前葉と後期後葉の遺物に分けられる。

遺物は土坑廃絶後の埋没過程に、投げ込まれたような状態で出土するものが多い。しかし第113号土坑では、覆土中位付近に焼土が厚く堆積し、二次焼成の痕跡をよく残す煮沸用のほぼ完形の深鉢が出土しており、埋没過程の土坑（窪み）内で煮沸または火を焚く行為が行われたものと考えられる。

明らかに縄文時代後期前葉であると考えられる土坑は、第115号土坑だけである。また第127・131号土坑も後期前葉の土坑の可能性が高い。他の土坑は両時期の遺物を含むものの後期後葉の遺物の方が多いか、不可解ではあるが後期前葉の遺物より下層から検出されているものが多く、後期後葉に掘削・廃絶されたものが主体を占めると推定される。

### 第113号土坑（図14～16）

〔位置・確認〕XⅡR-215・216グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒褐色土の楕円形プラントとして確認した。当初は平面プランの形より2つの土坑の重複を想定していたが、覆土層位の観察により1つの土坑と判断した。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕不整楕円形の平面形を呈し、開口部長軸180cm×短軸150cm、底部長軸150cm×短軸140～160cm、深さ60cmである。

〔断面・底面〕壁は底面からやや開くように立ち上がり、西半分はフラスコ状にオーバーハングしている。

〔堆積土〕12層に分層し、黒褐色土を主体としている。覆土中位に焼土層5層が厚く堆積している。自然堆積と考えられるが、焼土層は明らかに人為的な作用によるものであり、遺物は上層から多く出土している。

〔出土遺物〕出土土器の総量は13.436kgで、掲載土器は2.443kgである。大半の遺物が焼土層より上層からの出土であり、縄文時代後期後葉と考えられる大型の深鉢や注口部片が出土している。

1層には後期前葉の遺物が若干含まれるが、後期後葉と考えられる遺物が主体であり、無文の深鉢（5～8）、羽状縄文の深鉢（11～16）、単節斜縄文の深鉢（18～21）、無文の鉢（23・25）・壺（26）・高坏と思われる台部（28）がある。20の肩部に付された横長瘤は、平らな上面側に刻みが一つ施されている。

2層出土の35・36は、1層出土の11・12と同一個体である。肥厚した口唇部に、頂部に刻み目を施した瘤状突起を二個一対で付しており、後期末葉とみられる。縄文は異原体羽状であるが、節が明瞭ではなく、無節の可能性もある。

4層からはほぼ完形となる38や比較的丁寧な縄文帯を有する41や46が出土している。38は口径33.2cm・推定器高38cmの大型の深鉢である。40は頂部に刻みを有する突起の口縁部側に瘤を貼付したもので、動物の顔のようにも見える。

5層（焼土層）からは、薄手の台付深鉢と考えられる台部が出土している。層位不明の覆土出土としたものには刻み目のある瘤が付された無文の注口部などがある。

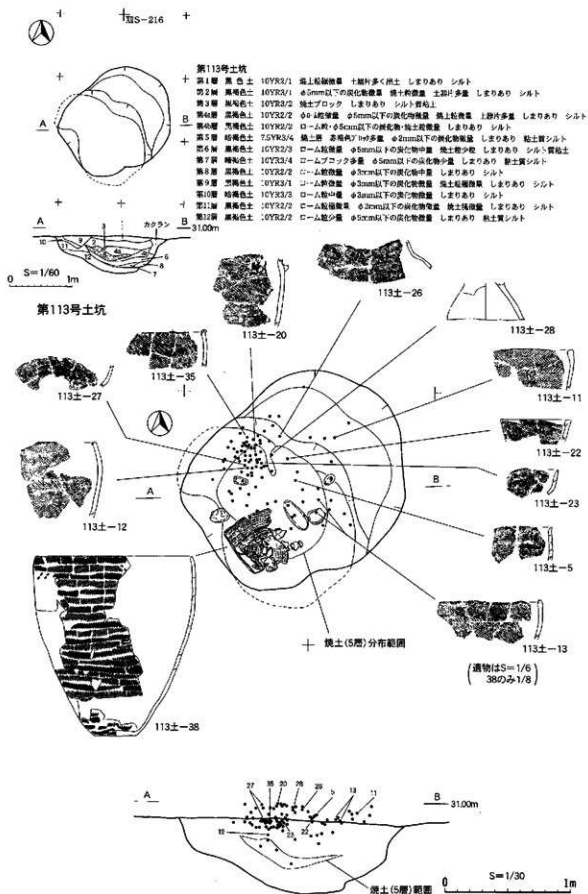


図14 第113号土坑

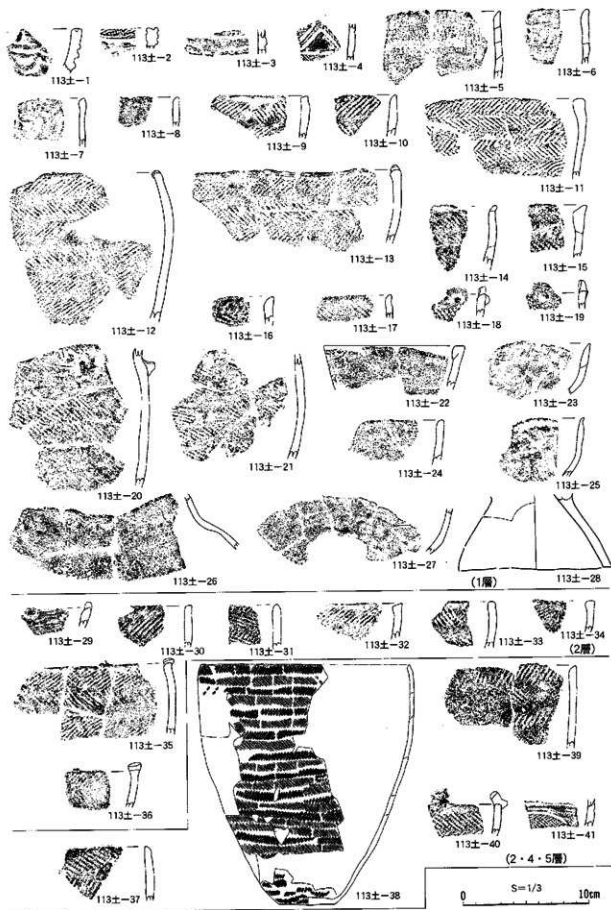


图15 第113号土坑 出土遺物(1)

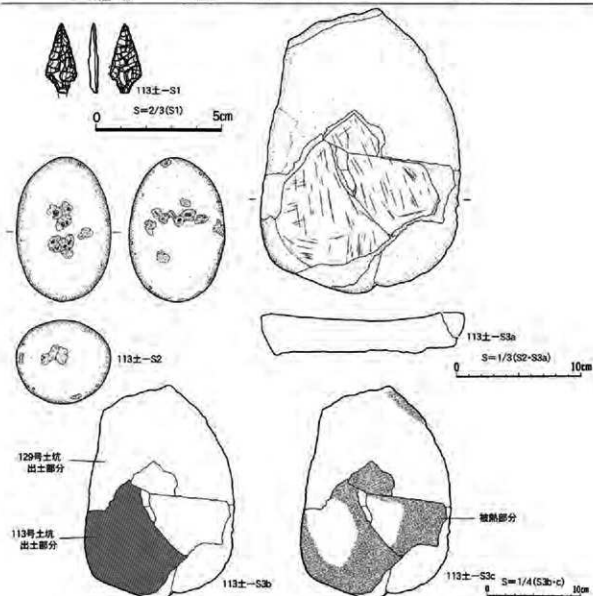
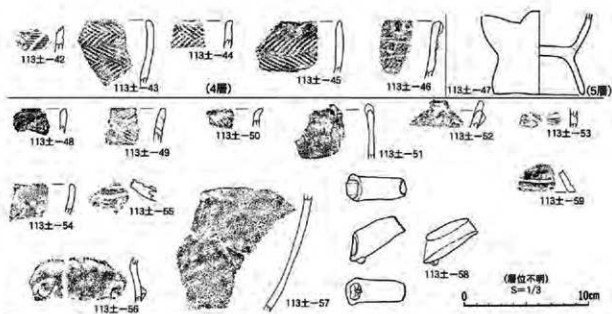


図16 第113号土坑 出土遺物(2)

粗製深鉢の口唇部形態には体部と同じ厚さのもの他に、肥厚するもの、内傾（内削ぎ）するものが見られる。

石器は石鏃1点・使用痕ある剥片3点・フレイク26点・チップ22点が出土している。S1は基部をやや欠損する有茎石鏃であるが、基部に固定用と考えられる黒色の付着物が認められる。S2は両面に凹み部が見られ、端部の片面に叩き痕が認められる。S3は破損した石皿で、使用面側の縁辺部がやや盛り上がっている。使用面側は半分ほど残存し、他は石皿の厚さの1/3程度で薄く規則的に剥落し、欠損している。全体に被熱痕が見られるが、破損が焼けハジケによるものか使用によるものか不明である。この石皿は大部分が第129号土坑出土であり、使用面の一部のみが当113号土坑出土である。このことより、両土坑は廃絶後に、同時期に埋まりきれない凹みであったことがわかる。

5層からは、長さ32cm、幅10～13cm、重さ4.3kgの細長い焼け礫が出土している。

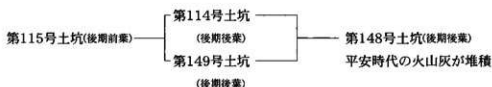
〔小結〕 覆土中位付近に焼土層の形成が見られ、ここで火を焚く行為が行われたものと考えられる。

また焼土形成以後は、ごみ捨て穴として利用されたものと考えられ、焼土より上位の各層から羽状縄文が施される深鉢などの縄文時代後期後葉の土器片が、数多く出土している。有文の土器片は、少なくかつ小片である。41は縄文帯構成の文様が施される壺・注口であるが、モチーフは不明である。12・13・35・36の刻み目入りの瘤状突起、20の上面刻み目入りの横長瘤、内傾（内削ぎ）する口唇部等は、十腰内Ⅳ式以前には認められず、十腰内Ⅴ式以降の要素と考えられる。縄文時代後期後葉以前に廃絶された土坑と考えられる。

#### 第114・115・148・149号土坑（図17・18）

XⅡQ-214～XⅡR-215グリッドの第Ⅲ層上面において5m×6m程の黒褐色土の不整楕円形プランとして確認した。プラン検出時には、住居跡や土坑の重複の可能性が高いと考え、長軸方向に1条・短軸方向に3条のベルトを設定して、当初は「第111号性格不明遺構」として調査を行った。その結果、少なくとも4つの土坑が重複していることが確認された。第111号性格不明遺構として調査していたときに、取り上げた少数の遺物は、帰属土坑が不明であるので、そのまま「第111号性格不明遺構出土遺物」として報告した。壁が明瞭に立ちあがり、比較的円形を呈するものを第114号土坑・第115号土坑とし、全体の形態ははっきりしないものや浅いものを第148号土坑・第149号土坑とした。

新旧関係は、縄文時代後期前葉の第115号土坑が最も古く、縄文時代後期後葉の第148号土坑が最も新しい。第114号土坑と第149号土坑は、共に縄文時代後期後葉と考えられるが、新旧関係は不明である。第148号土坑の覆土には、十和田a火山灰(To-a)と白頭山-苫小牧火山灰(B-Tm)という10世紀前半と考えられている降下火山灰の堆積が見られる。第148号土坑では、これらの火山灰より下位の覆土では、縄文時代後期後葉の遺物が数多く含まれており、土坑の構築および廃絶は近い年代を想定している。縄文時代晩期の始まりを約3,000年前とし、当土坑の年代を仮に3,100年前のものと考えると、約2,000年後の平安時代にはまだ、火山灰が堆積するほどの凹みが存在したことになる。



## 第114号土坑（図17～20）

【位置・確認】XⅡQ-215グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒褐色土の楕円形プランとして確認した。

【重複】第115号・第148号土坑と重複する。本土坑は第115号土坑より新しく、第148号土坑より古い。

【平面形・規模】不整楕円形の平面形を呈し、開口部長軸3m×開口部短軸推定2m70cm、底部長軸1m70cm×短軸1m68cm、深さ82cmである。

【断面・底面】壁は底面からやや開くように立ち上がるが、一部分のみ、フラスコ状に底部付近がオーバーハングしている。底面は中央付近でやや低くなる。

【堆積土】黒色・黒褐色の土を主体とし、5層に分層し、さらに細分した。遺物は3層以下の比較的深い部分から出土している。

【出土遺物】出土土器の総量は3.614kgで、掲載土器は2.786kgである。大半の遺物が3層以下からの出土である。1はLRの単節斜縄文が施される小型深鉢の胴部～底部である。2と4は、同一個体となる深鉢である。上下幅1～1.5cm程度のRL縄文が全面に施される。φ3mm以下の小礫・砂粒を非常に多く含み、炭化物の付着が両面共に明瞭である。上下段の縄文間に隙間を有する特徴から後期後葉であると考えられるが、0段多条の羽状縄文ではなく、口唇部の肥厚も顕著ではなく、砂粒の混和も非常に多く、つくりはやや粗雑であり、縄文時代後期後葉の中でも新しい様相を示すものと考えられる。3は無文の煮沸用の鉢である。瘤状突起の特徴を残さない、頂部二又の突起が複数個セットで付される。突起の刻みは、頂部というよりも内面側を意識しており、これも後期後葉の中でも新しい様相を示すと考えられる。

当土坑の図版には、7点の注口部が掲載されているが、遺物整理業務において混乱をきたし、第114号・115号・148号・149号土坑・第111号性格不明遺構出土の、注口部の出土地の特定ができず、第114号土坑出土としてしまった。よってそれぞれがどの遺構から出土したものかは不明であり、資料的価値の低下を招いたことは、大きな反省点である。

5は、2・3本一単位の沈線と根元付近に刻みを有する横長の瘤やφ6～8mmの瘤が付される。根元側の接着部全面にアスファルトが明瞭に残存する。6も同様に3本一単位の沈線に、両側面と下面にφ6mm程の瘤が付される。7は注口部中位付近の上下面にφ8mm程の瘤を貼付している。その瘤を起点として、左右対称に木葉状縄文帯が配され、根元付近には弧状縄文帯が配される。縄文は異原体羽状とLR単節である。8は注口部根元下面のφ6mm程の瘤を起点にし、下面と左右両面に木葉状縄文帯が配される。縄文はRL単節のみである。9～10は無文のものであり、上下面の中位から根元付近に瘤を付すものである。

12は、土製品の一部と考えられ、上下両端とも折れ面である。

石器はフレイク5点、チップ6点が3～5層で出土している。

【小結】縄文時代後期後葉の新しい段階の様相を示す遺物が見られる。

## 第115号土坑（図17・18・20）

【位置・確認XⅡ】XⅡR-215グリッドに位置する。当初、未確認であったが、第114号土坑・第





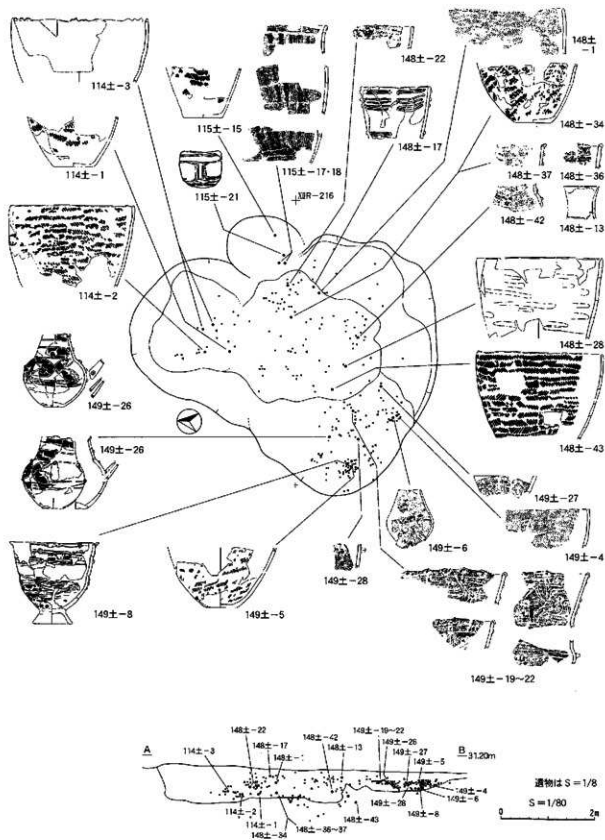


図18 第114・115・148・149号土坑

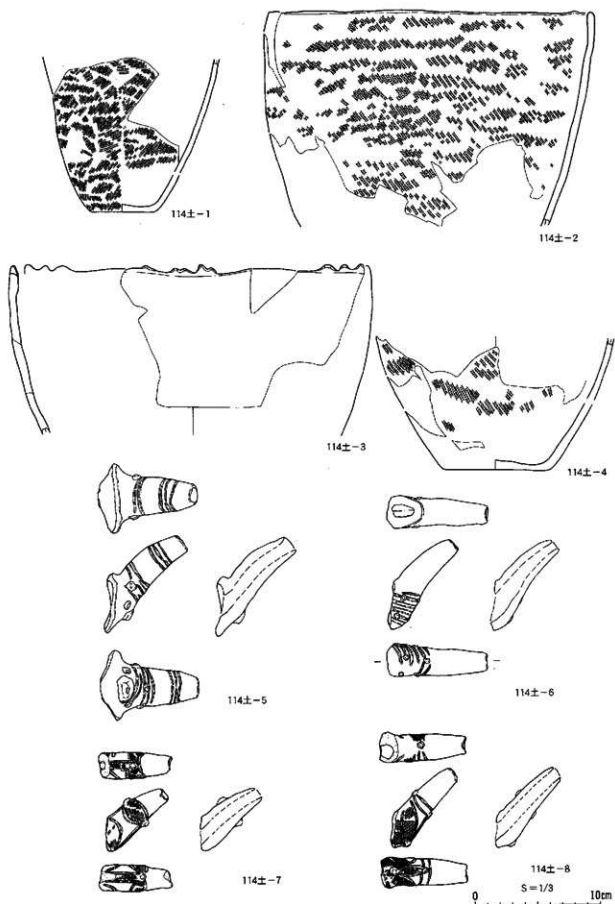
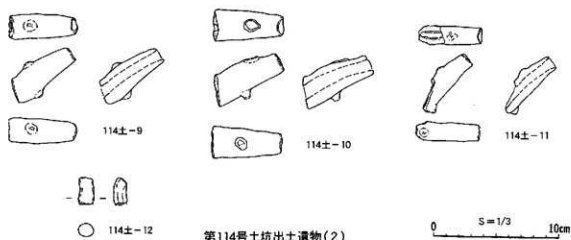


図19 第114号土坑 出土遺物(1)



第114号土坑出土遺物(2)

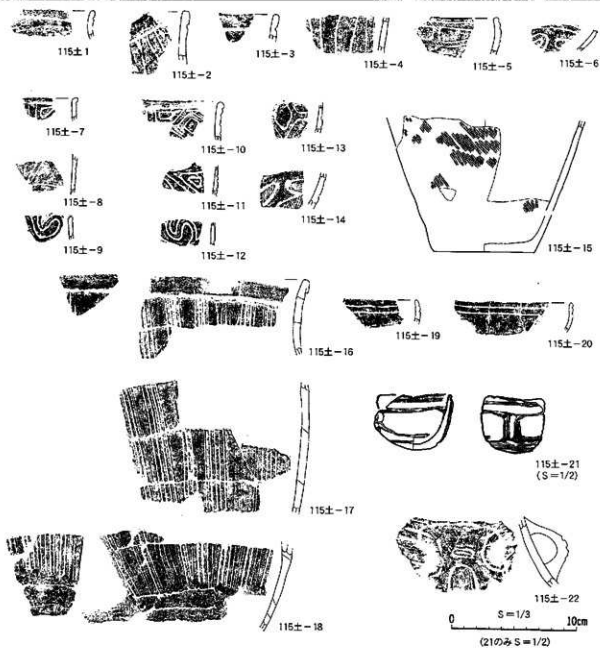


図20 第114・115号土坑 出土遺物

148号土坑調査中に、縄文時代前期前葉の遺物を含む黒色土で構成される本遺構を確認した。

〔重複〕 第114号土坑・第148号土坑と重複する。本土坑が最も古い。

〔平面形・規模〕 不整楕円形の平面形を呈し、開口部長軸推定1m70cm×開口部短軸推定1m20cm、底部長軸1m40cm×短軸1m8cm、深さ24cmである。

〔断面・底面〕 壁は底面からやや開くように立ち上がる。底面は平坦である。

〔堆積土〕 黒色土を主体とし、7層に分層した。

〔出土遺物〕 出土土器の総量は1.679kgで、掲載土器は0.719kgである。すべての土器片が縄文時代後期前葉に帰属する。最も目を引くのは、16～18の4～6本一単位の櫛歯状工具による縦位の条線が施された深鉢である。1本の条線の幅は約2mm程であり、しっかり深く施文されており、調整ではなく明らかに装飾を意識して施文されている。口縁部は折り返し口縁である。接合帯で割れる傾向にあるが、つくりは非常に丁寧な土器と言えよう。7～13は、小型有文深鉢である。2～4は同一個体の波状口縁の深鉢である。これは左右対称のV字形の沈線文が施されるものか。5は有文小型鉢である。21は2単位の楕円文が施される袖珍土器または土製品である。側面片側に肥厚する部分があるが、欠損している。22は橋状把手を有する壺形土器である。

石器はフレイク1点とチップが3点出土している。

〔小結〕 出土した土器などから、縄文時代後期前葉には廃絶された土坑である。

#### 第148号土坑 (図17・18・21～23)

〔位置・確認XⅡ〕 XⅡQ・R-215グリッドに位置する。第114・115号土坑、第149号土坑と重複しており、当初は判別できなかった。調査が進むうちに、本遺構の中段のラインを確認することができ、おおよその形態を判別した。また第Ⅲ層上面において、本遺構の上部を中心に平安時代の広域火山灰2枚(十和田a・白頭山-苫小牧火山灰)が堆積しており、範囲を認識するための目安となった。

〔重複〕 第114号土坑・第115号土坑・第149号土坑と重複する。本遺構が最も新しい。

〔平面形・規模〕 不整楕円形の平面形を呈し、中段での長軸推定3m20cm・短軸2m56cm・深さ68cmである。

〔断面・底面〕 壁は底面からやや開くように立ち上がる。底面は東から西に向けてやや傾斜している。

〔堆積土〕 黒褐色の土を主体とし、7層に分層し、さらに細分した。遺物は上層から下層まで、出土している。

〔出土遺物〕 出土土器の総量は7.823kgで、掲載遺物は4.723kgである。後期後葉の遺物が主体となるが、後期前葉の遺物も混じる。3層の2～5、4層の18～21は同一個体である。口縁内面沈線を有する深鉢と考えられ、体部には入組み渦状文が施される。

粗製深鉢は、28や43から観察できるように、口唇部が急角度で内傾(内削ぎ)するものが多い。当土坑出土の土器群は、15・42の上面刻目横長瘤の存在、2本1単位の沈線が瘤と瘤を結ぶ17や瘤状突起の内面に刻みを入れる手法の36～39から、縄文時代後期後葉の新相を示すものと考えられる。13は無文の細首の壺である。14～16は肩部や胴部に瘤が付される壺・注口である。17は類例は見当たらず、弘前市鬼沢沢遺跡第2号土坑出土の深鉢(2)のように、頸部で屈曲する下影れの器形であろうか。28は急角度で口唇部が内傾(内削ぎ)し、外面に粗雑なミガキが施される無文の深鉢で

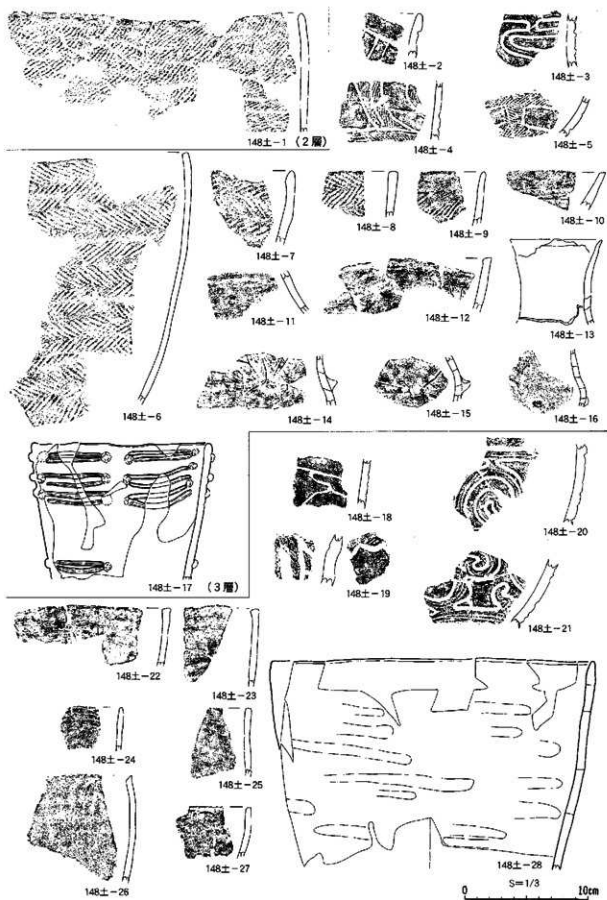


図21 第148号土坑 出土遺物(1)

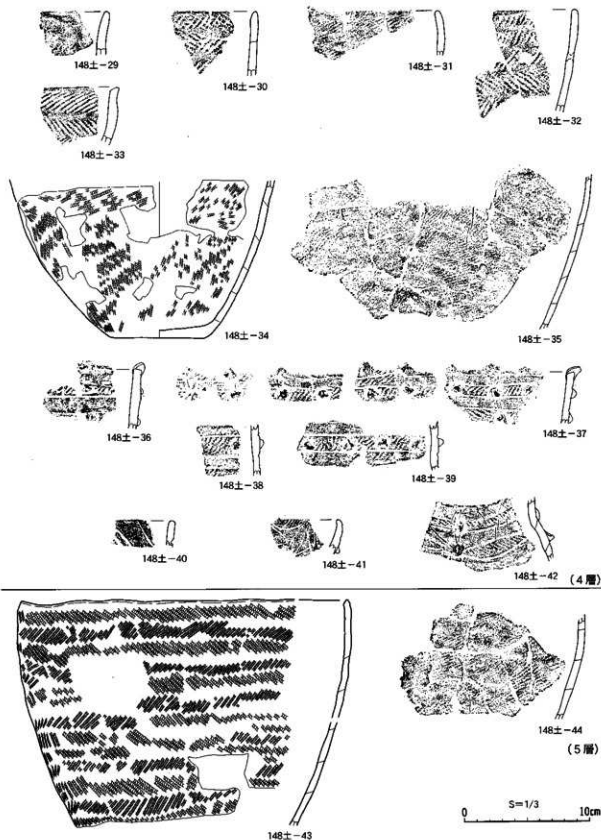


図22 第148号土坑 出土遺物(2)

ある。4層からは無文の深鉢の出土が多い。36～39は口縁部に内面刻目瘤状突起が施され、口頸部の横走縄文帯にも、突起の位置に対応してφ8mm程の突起が付される。42は木葉状縄文帯が肩部に横位に配される。

5層出土の43は、口唇部が急角度で内傾（内削ぎ）し、LRのみ0段多条である異原体羽状縄文が施される。口唇部外側がつまみ出したようにやや突出する。

石器は使用痕ある剥片6点、フレイクが34点、チップが51点出土した。図示したのは、礫石器4点である。S1～S3は凹石に分類した。S1は表裏両面と側面に深めの凹みが一箇所ずつ見られる。S2は表裏両面に浅めの凹みが、S3は片面に三箇所、もう片面に一箇所の凹みが見られる。S4は叩石で、礫の一端に叩きによるものと考えられる破損箇所が認められる。

〔小結〕縄文時代後期後葉の遺物を多く出土し、それ以前に廃絶された土坑と考えられる。

#### 第149号土坑（図17・18・23～25）

〔位置・確認XⅡ〕XⅡQ・R-214・215グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒褐色土のプランとして確認した。

〔重複〕第148号土坑と重複する。本遺構のほうが古い

〔平面形・規模〕東側を欠損するが、隅丸方形であるように思われる。開口部推定長軸3m20cm×短軸推定2m84cm、底部長軸2m82cm×短軸2m50cmである。深さは40cmと比較的浅い。

〔断面・底面〕壁は底面からやや開くように立ち上がる。底面はやや傾斜が見られる。

〔堆積土〕黒色の土を主体とし、4層に分層した。遺物は2層以下から多く出土している。

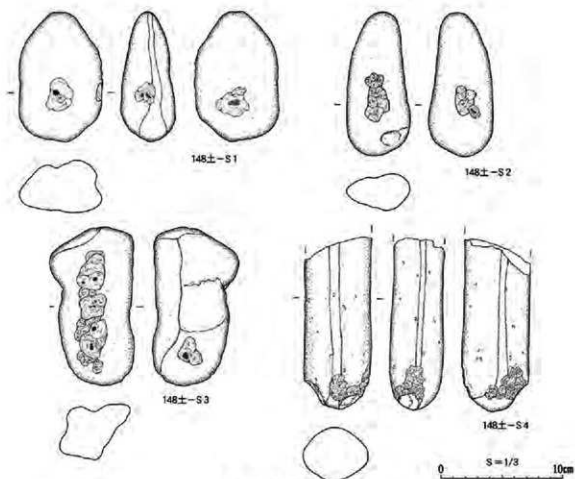
〔出土遺物〕出土土器の総量は5.75kgで、掲載遺物は2.442kgである。2層出土遺物の3・4は0段多条ではない異原体羽状縄文が施される、やや口唇部が内傾する深鉢で、同一個体である。5はLR斜行縄文が施される深鉢の体部下半～底部である。6は外面に非常に丁寧なミガキが施された、無文の小型壺である。8は上下3段の瘤間を2～3条の横走沈線で結ぶ。口縁部には上面が平坦または凹状になる大型横長瘤が付される。器面調整、沈線、瘤の刻み、縄文などそのほとんどの要素が複雑な様相である。上から3段目の文様は意図的に一つおきに瘤をやや上下させ、鋸歯状沈線となっているように見える。

3層出土遺物は、後期前葉の深鉢片が2片（9・10）混じるが、概ね後期後葉の新相を示すものが主体である。12は0段多条であるが、14・15は違う。17・18は内面刻目突起が付される。19～22は頸部で屈曲する有文深鉢である。縄文帯中にスリット状の分割線を有する、鍵状入組み縄文帯である。φ6～7mmの瘤が入組み縄文帯の交点や屈曲点に多く付される。26は肩部に木葉状縄文帯が4個一単位で4単位配される注口土器である。縦方向の細長い縄文帯が各単位を区切る。口縁部には内面刻目突起が付され、新相の様相を示す最下層4層から出土した、27は口唇部が非常に平坦で、あるいは台部の可能性もある。28は上面刻目横長瘤が付された粗製深鉢である。

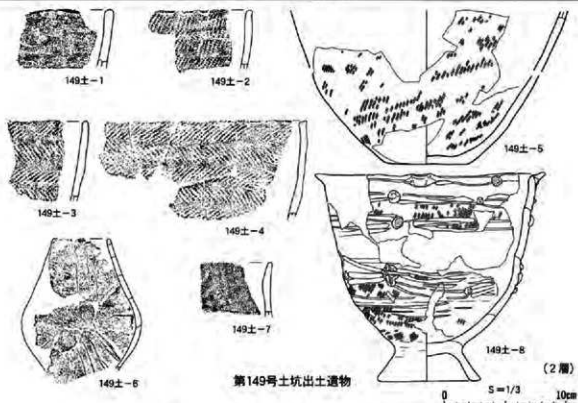
石器は石鏃4点、使用痕ある剥片が11点、フレイク22点、チップ18点が出土した。S1は側縁が丸みを帯びる有茎平基、S2・S3は側縁が直線的で基部が尖る。

S6は、青森県六ヶ所村の大石平遺跡において多く出土し、「大石平型石筥」と命名されたものである。従来石筥・石匙・ナイフ・両面加工石器・エンドスクレイパーと呼称されてきたが、時間的・地





第148号土坑出土遺物



第149号土坑出土遺物

図23 第148・149号土坑 出土遺物(1)

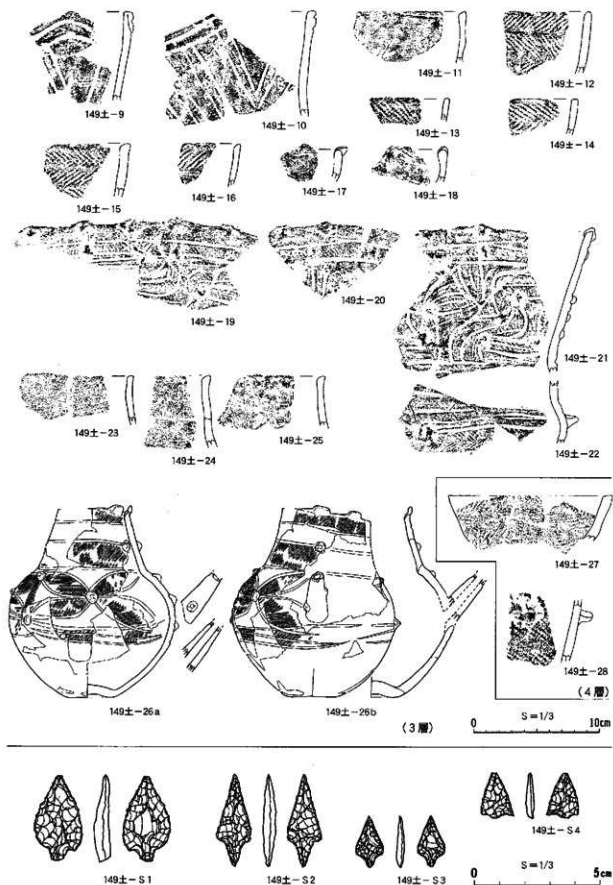


図24 第149号土坑 出土遺物(2)

域的に限定された分布を示す類型である為、石篋とは区別された。畠山界は大石平遺跡報文中で類例を挙げ、北海道南部地方・青森県・岩手と秋田県の北部の縄文時代中期末葉～後期前葉に多く見られ、特に縄文時代後期前葉（十腰内Ⅰ式期）に特徴的であるとしている（畠山 1986）。当遺跡出土のS6は、刃部側が楕円形を呈する「大石平型石篋 a 類」である。S8は表裏両面に深めの凹みが見られ、側面と端部に叩き痕が残る。

[小結] 縄文時代後期後葉の十腰内V群またはそれ以降の土器が出土しており、それ以前に廃絶された土坑と考えられる。

#### 第114号土坑・第115号・第148号・第149号土坑出土遺物（図25）

重複していた第114号・第115号・第148号・第149号土坑を、当初「第111号性格不明遺構」の名称を与えて調査を行った。ペルトを設定して精査を開始し、各土坑を確認していった。しかし、土坑として捉えられない浅い凹み部分出土の遺物などは、第111号性格不明遺構出土として取り上げた為、ここで遺物のみ触れることにする。なお遺物Noは、「SX111-1」などと表現する。

1と2は無文の深鉢または鉢である。2は無文の小型壺・注口である。4は穿孔瘤が付される壺の頸肩部である。大湊近川遺跡で多く出土しているが、出土遺跡は少ない。しかもすべてが横方向の穿孔であり、当遺跡例は上下方向の穿孔と判断した。

石器は、3点図示した。S1は縦長の剥片を利用したスクレイパーである。打面側以外の3つの縁辺には細かい二次調整または使用による微細剥離が見られる。S2は自然面が残る小型の縦長剥片の片面に二次調整が見られ、大石平型石篋の未製品とも考えたがスクレイパーに分類した。S3は上半部が破損した有茎凸基の石鏃である。

#### 第123号土坑（図25・26）

[位置・確認XⅡ] XⅡQ-216グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒色土の円形プランとして確認した。第124号土坑の北側に位置する。

[重複] 重複はないが、第124号土坑が南側に近接する。

[平面形・規模] 円形の平面形を呈し、開口直径1m5cm程度、底部直径95cm程度、深さ18cmである。

[断面・底面] 壁は底面からやや開いたり、直立気味に立ちあがる。底面は平坦である。

[堆積土] 4層に分層し、黒色土を主体とする。第124号土坑の堆積土と類似している。

[出土遺物] 出土土器の総量は2.893kgで、掲載遺物は2.442kgである。1は重弧文または渦巻状文が施された、縄文時代後期前葉の壺の体部である。

2・3は、LRのみ0段多糸の異原体羽状縄文が施される深鉢で口唇形態がやや異なるが、胎土の含有物・焼成から判断して、同一個体である。2の口唇部を観察すると、最上部の折り返し部をナデ調整で段差を無くす意図が感じられる。4は8mm×4mmの縦長瘤が付される深鉢の口縁部で、口唇部が急角度で内傾（内削ぎ）する。5～7は同一個体と考えられる、無文の壺・注口の口頸部である。口唇部はやや外側につまみ出したようであり、頸部に上面刻み横長瘤が付される。

石器は使用痕ある剥片が1点、フレイク14点、チップ15点が出土した。

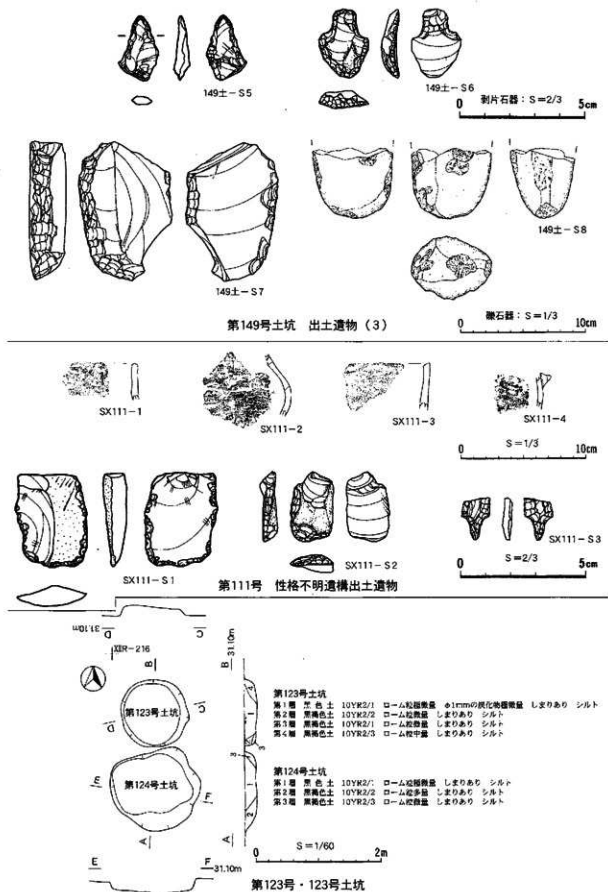


図25 第149号土坑、第111号性格不明遺構 出土遺物・第123・124号土坑

〔小結〕第124号土坑と近接し、覆土もほぼ一致する為、ほぼ同時期に埋没したものと考えられる。遺物の出土は多くないが、その中でも縄文時代後期後葉の遺物が主体を占め、それ以前に廃絶された土坑と考えられる。

#### 第124号土坑 (図25・26)

〔位置・確認XⅡ〕XⅡQ-216グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒色土の円形プランとして確認した。第123号土坑の南側に位置する。

〔重複〕重複はないが、第123号土坑が北側に近接する。

〔平面形・規模〕長楕円形の平面形を呈し、開口部長軸1m44cm・短軸1m22cm、底部長軸1m20cm・短軸90cm、深さ18cmである。

〔断面・底面〕壁は底面からやや開いたり、直立気味に立ちあがる。底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕3層に分層し、黒色土を主体とする。

〔出土遺物〕出土遺物の総量は0.329kgで、掲載遺物が0.129kgである。1は口唇部が急角度で内傾(内削ぎ)する無文の深鉢口縁部である。2は縄文帯に、非常に筋の小さい0段多条の異原体羽状縄文と縦16mmの大型縦長瘤が付される壺・注口の頸部である。

石器はフレイク1点のみが出土した。

〔小結〕覆土も第123号土坑と似ており、両土坑の埋没時期は近いものと考えられる。遺物は少数ではあるが、図示した1・2は縄文時代後期後葉の土器である。

#### 第125号・第126号・第141号土坑

3つの土坑が、横に並んで重複していた為、ここで順番に説明する。

##### 第125号土坑 (図26・27)

〔位置・確認〕XⅡQ-216グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒色土の楕円形プランとして確認した。

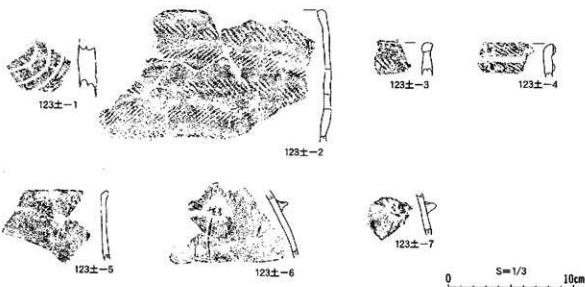
〔重複〕第141号土坑と重複し、本土坑の方が新しい。

〔平面形・規模〕不整楕円形の平面形を呈し、開口部長軸2m20cm×短軸1m90cm、底部長軸2m×短軸1m60cm、深さ42cmである。

〔断面・底面〕壁は底面からやや開くように立ち上がる。底面は北から南に向けて緩やかに傾斜し、東西方向では中心部がやや高くなる。

〔堆積土〕黒褐色の土を主体とし、8層に分層した。遺物は1層など上層から多く出土している。

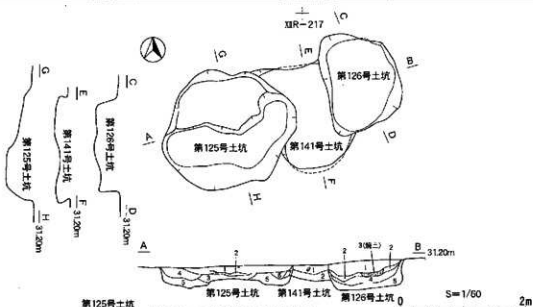
〔出土遺物〕出土土器の総量は3.245kg、掲載遺物が0.374kgである。大半の遺物が、1層など上層からの出土であり、縄文時代後期後葉の遺物のみ見られる。またこの土坑から注口部が4点出土したことになるが、遺物整理作業中の不手際で、第125号・第126号・第141号土坑出土の注口部の帰属が不明となってしまった。19の異形土器の注口部は、確実に第125号土坑出土であることが判明している。資料的価値の低下を招いたことは誠に遺憾ではあるが、これらの遺物はここにおいて触れたい。口唇部を外側につまみ出したような形態の深鉢が見られる。15はLRのみ0段多条の異原体羽状縄文が施される。8は無文の深鉢であり、外面にタール状の炭化物の付着が見られる。12はRL



第123号土坑出土遺物



第124号土坑出土遺物



第125号土坑

- 第1層 瓦片 I. 10YR2/1 ローム粒層 しまりあり シルト
- 第2層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒少量 しまりあり シルト
- 第3層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒少量  $\phi 3mm$ 以下の炭化物層 しまりあり シルト
- 第4層 灰褐色土 10YR2/2 ローム粒中量 しまりあり シルト
- 第5層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒少量  $\phi 1mm$ の炭化物層 しまりあり シルト
- 第6層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒少量 しまりあり シルト
- 第7層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒少量 しまりあり シルト
- 第8層 瓦片 I. 10YR2/1 ローム粒層  $\phi 2mm$ の炭化物層 しまりあり シルト

第126号土坑

- 第1層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒層  $\phi 3mm$ 以下の炭化物層 焼土粒層 しまりあり シルト
- 第2層 灰褐色土 10YR2/2 ローム粒少量  $\phi 3mm$ 以下の炭化物層  $\phi 6\sim 10mm$ の炭化物層 しまりあり シルト
- 第3層 黒褐色土 10YR2/2 焼土を多量に含む層 ローム粒層 シルト
- 第4層 黒色土 10YR2/1 ローム粒層  $\phi 10mm$ 以下の炭化物少量 焼土粒層 しまりあり シルト
- 第5層 黒色土 10YR2/1 ローム粒層 しまりあり シルト

第141号土坑

- 第1層 灰褐色土 10YR2/3 ローム粒少量  $\phi 3mm$ 以下の炭化物層 しまりあり シルト
- 第2層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒少量  $\phi 3mm$ 以下の炭化物層 しまりあり シルト

図26 第123・124・125・126・141号土坑

単節斜縄文が施される深鉢であるが、口唇部に瘤状突起が付される。7は三本一組の沈線で弧状のモチーフを描く、壺・注口である。外面調整は丁寧なミガキである。19は縄文時代後期後葉に特徴的な異形土器の注口部と考えられる。上面側は上下幅1mm程の微細な節のLR(0段多条)とRLの縄文が施される。下面側には左右対称に木葉状またはその他の縄文帯が施されている。注口部下面根元側と左右の側面に瘤が貼付される。無文部は丁寧なミガキが施される。接合帯は7~12mm程である。16~18は無文の注口部である。すべて根元側下面に瘤が付され、18は中位付近上下にも瘤が付される。

石器はフレイク、チップが多く出土しており、使用痕ある剥片4点、二次加工ある剥片1点、フレイク28点、チップ55点である。他に石核1点が出土している。

[小結] 当土坑は、隣接する第126号土坑と共に、フレイク・チップ等の石器の出土数が非常に多いことが、特徴である。土器は縄文時代後期後葉の遺物が見られ、中でも19の異形土器の注口部は類例も少ないものである。当遺跡では、平成9年度の調査においても、管状構造をとる異形の注口土器が出土している(中村・杉野森 1999 『山下遺跡・上野尻遺跡』)。

#### 第126号土坑(図26~29)

[位置・確認XⅡ] XⅡQ-217グリッドに、位置する。第Ⅲ層上面で、黒色土の楕円形プランとして確認した。

[重複] 第141号土坑と重複し、本土坑の方が新しい。

[平面形・規模] 不整楕円形の平面形を呈し、開口部長軸1m60cm×短軸1m16cm、底部長軸1m42cm×短軸1m4cm、深さ46cmである。

[断面・底面] 壁は底面から直立気味またはやや開くように立ち上がる。底面はほぼ水平で平坦である。

[堆積土] 黒褐色の土を主体とし、5層に分層した。遺物は下層から上層まで出土している。覆土中位付近に焼土を多量に含む3層が見られる。遺物は焼土層を挟む上下層から多く出土している。

[出土遺物] 出土土器の総量は3.908kgで、掲載遺物は0.958kgである。当土坑は、少数の縄文時代中期・後期前葉の遺物を含むが、主体を占めるのは縄文時代後期後葉の遺物である。石器も多数出土しているおり、ほとんどが縄文時代後期後葉に帰属するものと考えられる。

1層では無文の深鉢・鉢の出土が目立つ(2~6)。2・4・5層において、同一個体の深鉢片が多数出土している(9~15)。これらは、口唇部が急傾斜でやや丸みを帯びて内傾し、口唇部外面がややつまみ出された形態である。16は上面刻目瘤が付された壺・注口の頸部片である。出土層位不明の土器にも無文の深鉢・鉢の破片が目立つ(17~24)。それらのものも口唇部内傾(内削ぎ)の形態のものが多く、20はやや口唇部が肥厚する小型の深鉢である。28は煮沸用の有文深鉢片であり、縄文帯の中に異原体羽状縄文の接点に、スリット状の沈線が施されている。31は大型無文壺の肩部片である。外面には丁寧なミガキ調整が施される。32・33共に、縄文帯で文様が構成される壺である。32は壺の肩部で、木葉状縄文帯の一端にφ6mm程の瘤が付される。縄文は異原体の羽状縄文である。33も縄文帯が施されるが、文様構成は不明である。35は焼成粘土塊である。

石器は非常に多く出土しており、石核2点、石匙1点、フレイク55点、チップ76点が出土した。S1は石核または偽石器である。各側面に規則的ではない剥離が見られ、バルブも発達せず、ねじ切れ

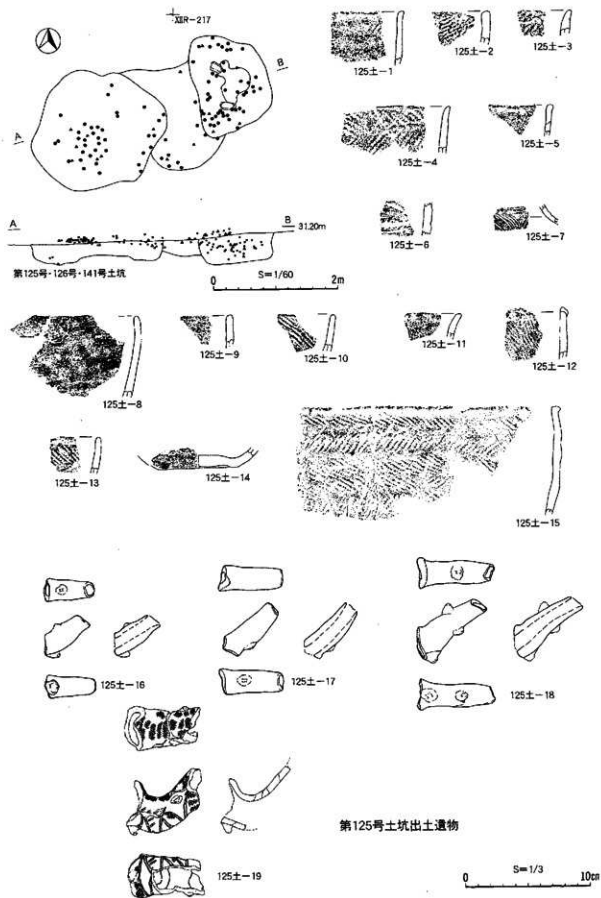


圖27 第125・126・141号土坑 出土遺物



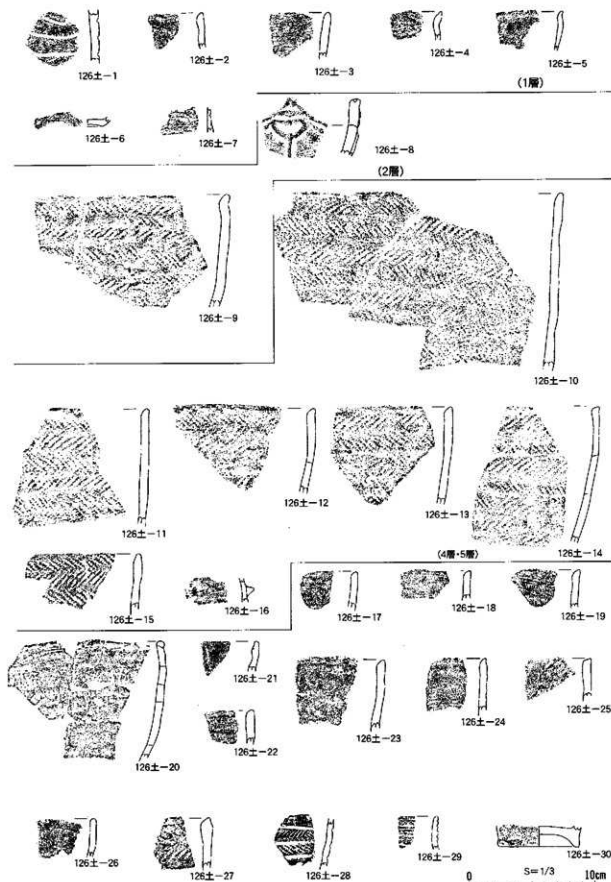


图28 第126号土坑 出土遗物(1)

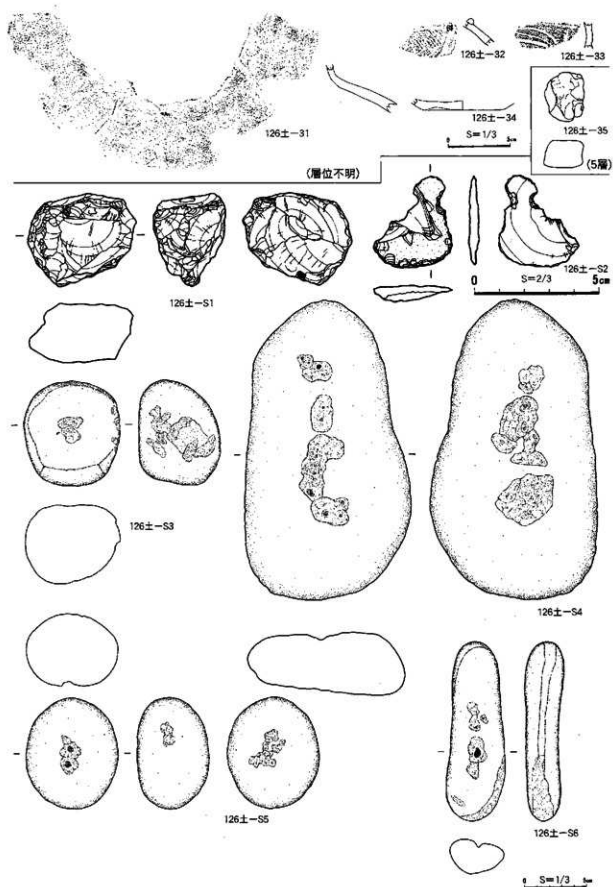


図29 第126号土坑 出土遺物(2)

たような剥離に思われ、偽石器の可能性が高い。S2は折れた剥片を用いた石匙である。つまみ部には両面から連続微細剥離が加えられ凹部が形成されている。刃部は片面に調整が施されている。表面には自然面、裏面には主要剥離面が多く残り、折れた剥片に、つまみ部と刃部を作出した、比較的簡単に製作された小型の石匙と言える。また剥片素材の用い方も特徴的であり、つまみ部に打面側や剥片の厚い部分を用いるのではなく、意図的に刃部側の一端に最も剥片の厚い部分がくるようにしている。このように薄いつまみ部では、着柄時の強度に不安が残るが、宮城県山王団遺跡出土例のようにつまみに紐を結び、携帯するのには問題ないと考えられる。

S3は片面と一方の側面に、浅い凹みと浅い凹み+叩き痕が見られる。S4は扁平な石英安山岩を用いた凹み石である。両面に3～4箇所浅い凹みが残されている。S5は片面に深い凹みが2箇所、もう片面に浅い凹みが2箇所、側面に叩き痕が見られる。S6は片面に浅い凹みと深い凹みが見られる。側面の一部分が磨りに用いられている可能性がある。

【小結】縄文時代後期後葉の遺物を多く出土しており、それ以前に廃絶された土坑と考えられる。

#### 第141号土坑 (図26・30)

【位置・確認XⅡ】XⅡQ-216・217グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒色土の楕円形プランとして確認した。

【重複】第125号・126号土坑と重複し、本土坑が最も古い。

【平面形・規模】第125号・第126号土坑と重複する為、全体形は明らかではないが、円形または楕円形と考えられる。南北方向は、開口部1m60cm、底部径1m74cmである。

【断面・底面】断面はフラスコ形を呈し、底面は一部で盛りあがる。

【堆積土】黒褐色の土層2層で構成される。

【出土遺物】出土土器の総量は0.236kgで、掲載遺物は0.037kgである。1は縄文時代後期前葉の深鉢である。2は異原体羽状縄文が施される深鉢、3は無文の深鉢、4は壺・注口の底部である。

石器は、フレイク2点、チップ1点が出土している。

【小結】遺物は少数であるが、縄文時代後期後葉の遺物が出土している。

#### 第127号土坑 (図30)

【位置・確認XⅡ】XⅡR-216グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒褐色土の楕円形プランとして確認した。

【重複】なし

【平面形・規模】長楕円形の平面形を呈し、開口部長軸1m4cm・短軸90cm、底部長軸68cm・短軸66cm、深さ24cmである。

【断面・底面】壁は底面からやや開いたり、直立気味に立ちあがる。底面はほぼ平坦である。

【堆積土】3層に分層し、黒褐色土を主体とする。

【出土遺物】出土土器の総量は、0.158kgである。1はLの燃糸文が施される、複合口縁の深鉢である。2は沿口沈線が施された波状口縁の深鉢である。3は口縁部に楕円文が施される有文深鉢である。

【小結】出土した土器は、縄文時代後期前葉の土器が多い。縄文時代後期前葉以前に廃絶された土坑

である可能性が高い。

### 第129号・第131号土坑

両土坑は、南北に並び重複していた為、ここで順番に説明する。

#### 第129号土坑（図30～35）

〔位置・確認〕主にXⅡS-216グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で黒色の楕円形プランとして確認した。

〔重複〕第131号土坑と重複する。平面プラン検出時には新旧関係は不明であったが、包含する遺物の帰属年代によって、第131号土坑よりも、本遺構の方が新しいと判断した。

〔平面形・規模〕平面形は楕円形を呈し、開口部長軸2m8cm・開口部短軸推定1m50cm、底部長軸2m18cm・底部短軸推定1m84cmである。深さは32～50cmである。

〔断面・底面〕断面はややフラスコ形を呈し、立ちあがる。底面両側に深い部分が見られ、中央部が相対的に高くなる。

〔堆積土〕5層に分層したが、更に細分された。

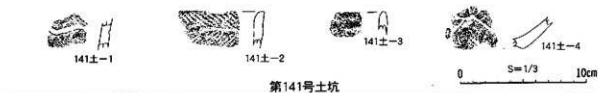
〔出土遺物〕出土土器の総量は8.477kgで、掲載遺物は1.918kgである。1層から5層にかけて、縄文時代後期前葉と後葉の遺物を共に出土する。上層では縄文時代後期前葉の遺物が主体であるが、下層では後期後葉の遺物が主体となる。1は複合口縁となる縄文時代後期前葉の無文の深鉢である。2・3は同一個体と考えられ、Rの燃糸文が施される深鉢である。4は波状口縁に対応して、体部に重層するV字形のモチーフが描かれる深鉢である。5～8も後期前葉の深鉢であり、それぞれ沿口沈線や渦巻状文や楕円文が施される。9は後期前葉の壺と考えられるが、縦横逆の可能性はある。10～13は後期後葉と考えられる。10は頂部で屈曲するタイプの深鉢であろうか、口縁部外面に3個/cmの刻目帯を有するもので、十腰内Ⅳ群の古い段階のものであろうか。11は深鉢または鉢であり、波状口縁頂部に内面刻みの瘤状突起が付される。それに対応して口縁部外面にはφ10mmの縦刻みの入った瘤が付されている。12は異原体の羽状縄文が施された深鉢である。口唇部形態は内面側に急傾斜で内傾（内削ぎ）する。13は無文深鉢の体部下半である。

14～22は2層出土の縄文時代後期前葉の土器である。14・15は、燃糸文が施される深鉢である。16～20は楕円文が施される有文深鉢である。21・22は同一個体の壺と考えられ、22は隆帯の剥落部に、割付用の下描き沈線が見られる。

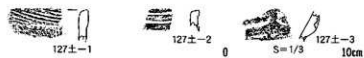
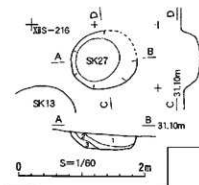
23～34は、2層出土の縄文時代後期後葉の遺物である。23は口唇部が内傾（内削ぎ）する無文の深鉢、26は横方向の条痕による調整が施された深鉢である。29・30・33は縄文帯で文様が構成される。29は縦9mmの縦長瘤が口縁部に付される深鉢である。31は肥厚する深鉢の口縁部に4個/cmの刻目隆帯が二条施される。34は底部中央が上底気味になる小型の壺・注口である。35は時期不明の壺の底部付近と考えられる。内面に鮮やかな赤色顔料の皮膜が形成されており、その容器であったことも考えられる。

36～40は、3層出土の縄文時代後期前葉の土器である。36・37は、同一個体で口縁部に横走沈線が施された深鉢である。38～40は楕円文や渦巻状文が施される小型の深鉢である。

41～59は、3層出土の縄文時代後期後葉の土器である。41・44は同一個体で、0段多条のRL縄



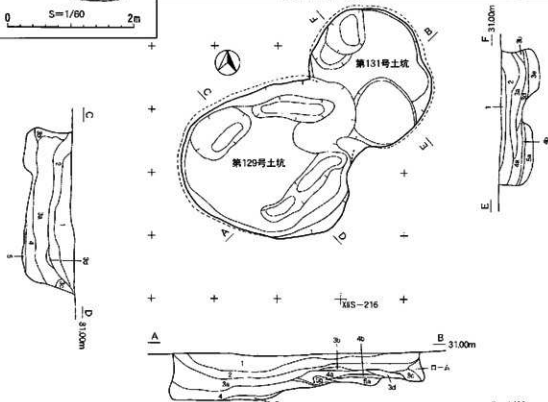
第141号土坑



第127号土坑

- 第1層 黒褐色土 10YR2/1 ローム粒・φ5mm以下の炭化物・粘土粒層 しまりあり シルト  
 第2層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒少量 φ1mm以下の炭化物・粘土粒層 しまりあり シルト  
 第3層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒多量 φ1mm以下の炭化物・粘土粒層 しまりあり シルト

第127号土坑



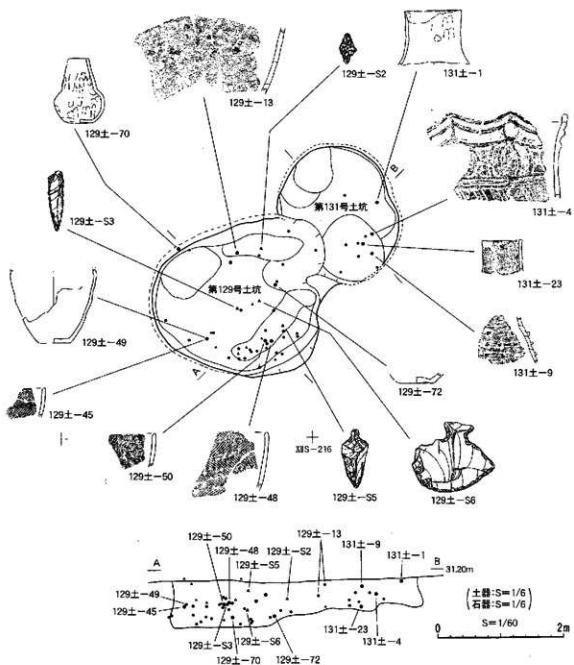
第129号土坑

- 第1層 黒色土 10YR2/1 ローム粒多量 φ20mm以下の炭化物・粘土粒層 しまりあり シルト  
 第2層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒少量 φ5mm以下の炭化物 しまりあり シルト  
 第3層 黒褐色土 10YR2/2 コーム粒多量 φ15mm以下の炭化物少量 しまりあり シルト黄粘土  
 第4層 黒褐色土 10YR4/3 ローム層 φ1mm以下の炭化物層 しまりありあり シルト黄粘土  
 第5層 黒褐色土 10YR4/2 ローム粒少量 φ1mm以下の炭化物層 しまりあり シルト  
 第6層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒少量 φ2mm以下の炭化物層 しまりあり 粘土質シルト  
 第7層 黒褐色土 10YR2/1 ローム粒多量 φ10mm以下の炭化物少量 しまりあり 粘土質シルト  
 第8層 黒色土 10YR2/1 ローム粒多量 しまりあり シルト

第131号土坑

- 第1層 黒色土 10YR2/1 ローム粒・粘土粒層 しまりあり シルト(第29号土坑の1層に対応)  
 第2層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒・φ7mm以下の炭化物・粘土粒層 しまりあり シルト(第29号土坑の2層に对应)  
 第3層 黒褐色土 10YR3/1 ローム粒・φ5mm以下の炭化物・粘土粒層 しまりあり シルト  
 第4層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒・φ5mm以下の炭化物・粘土粒層 しまりあり シルト  
 第5層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒・粘土粒層 しまりありあり シルト  
 第6層 黒褐色土 10Y2/1 ローム粒・粘土粒層 しまりありあり シルト  
 第7層 黒褐色土 10YR2/1 ローム粒・φ7mm以下の炭化物・粘土粒層 しまりあり シルト  
 第8層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒少量 φ5mm以下の炭化物・粘土粒層 しまりあり シルト  
 第9層 黒褐色土 10YR5/6 ロームと40層が混じり合った土層 しまりあり  
 第10層 黒褐色土 10YR2/1 ローム粒多量 φ5mm以下の炭化物・粘土粒層 しまりあり シルト  
 第11層 黒褐色土 10YR5/6 ロームと50層が混じり合った層 しまりあり

図30 第141・127・129・131号土坑



第129・131号土坑遺物 出土位置図

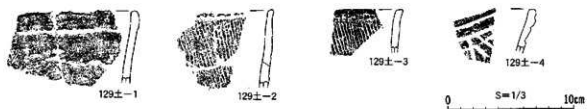


图31 第129・131号土坑

文が施される。口唇部の肥厚が特徴的で、他の土器よりもやや古手の特徴を示している。この土坑でも口唇部が急角度で内傾（内削ぎ）するものが見られる（43・46・47・48・54）。

47・48は同一個体で、異原体羽状縄文が付される。口縁部に内面刻目の突起が付され、その正面に $\phi 10\text{mm}$ 程の瘤が突出する。49は無文の小型深鉢である。ミガキ調整がなされた器表面が摩滅し、砂粒の混和が多いことが分かる。口縁部は一部のみ残存しているが、波状口縁の可能性もある。52は無文の鉢の袖珍土器である。丸底に近い平底である。砂粒も多く器表面にみられ、丁寧なつくりとは言えない。53は瘤状突起を有する鉢である。55・57は深鉢の台部であろうか。57は小型壺の上底気味の底部である。

4層出土の60は、縄文帯の中に $\phi 1.5\text{mm}$ 程の刺突列が上下2段に施されている。62～73は4層出土の縄文時代後期後葉の土器である。65～67は同一個体で、LR縄文が施される深鉢である。口唇部が急角度で内傾（内削ぎ）するが、内面側は稜を有さない。68はスリット状沈線を有する縄文帯で文様が構成される。69は細い横走縄文帯と瘤の組み合わせで、メガネ状沈線のなモチーフが構成される壺の口頸部である。胎土・焼成から見て、第131号土坑出土の131土-9と同一個体である可能性が高い。瘤の数の多さや縄文帯の細さから、十腰内V群以降に位置付けられよう。70はほぼ完形の小型無文壺で、西側の壁の底面近くから出土しており、その性格として副葬用も可能性にあげられよう。やや上底気味で、縦方向の指ナデの跡が明確に残る。砂粒の混和が多く見られる。

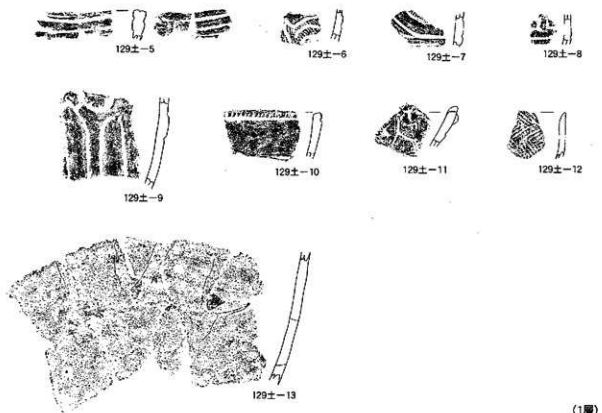
他に出土層位不明遺物として、無文の注口部が2点出土している（80・81）。80は根元下面に $\phi 8\text{mm}$ 程の瘤が付される。

石器も非常に多く出土している。石鎌2点、石錐2点、石匙2点、二次加工ある剥片1点、使用痕ある剥片10点、フレイク73点、チップ111点が出土している。

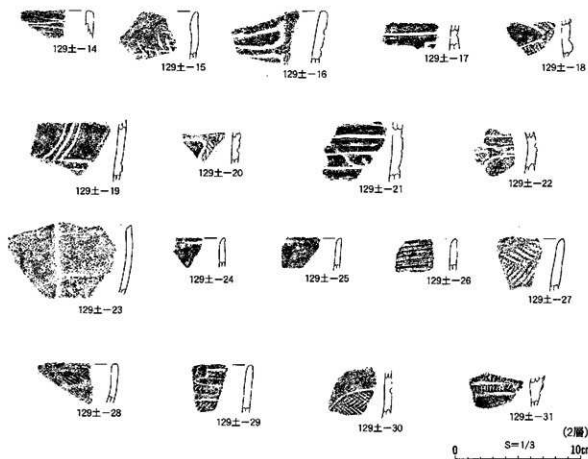
S1は有茎凸基の石鎌で、両側縁は直線的である。S2も有茎凸基の石鎌で、側面側を一部欠損する。S3は縦長剥片を用いた片面の縁辺のみ調整が施される石錐である。先端部のみ両面に剥離が見られるが、使用による剥離であるのか意図的な調整なのか不明である。

S4は両面調整の石錐である。先端部は使用による摩滅が認められる。S5は縦長剥片を用いた、縦長の石匙である。つまみ部分のみ両面から調整が加えられるが、刃部は片面の縁辺のみ調整が加えられる。S6は縦長剥片を用いた、横長の石匙である。主要剥離面の打面側をつまみ部に加工するのではなく、刃部の側片にくるように素材を用いている。これは明らかに意図的であり、最も厚い部分が刃部側にくることが、都合の良い使用方法であったと考えられる。つまみ部の両面からの調整であり、刃部は片面の縁辺のみ二次調整が施される。S7は不規則な剥片剥離が行われた石核か、偽石器であると考えられる。S8は、113土-S3と同一であり、第113号土坑において説明している。スクリーントーンをかけたところが第113号出土部分で、ほとんどの部分が当土坑出土である。表面が被熱しており、欠損している。

【小結】縄文時代後期前葉の遺物も多く出土しているが、底面付近に縄文時代後期後葉の遺物が多い為、後期後葉以前に廃絶された土坑と考える。後期前葉の遺物が多いのは、後期前葉の遺物を多く包含する、第131号土坑と重複していることも一因と考えられる。



(1層)



(2層)

図32 第129号土坑 出土遺物(2)



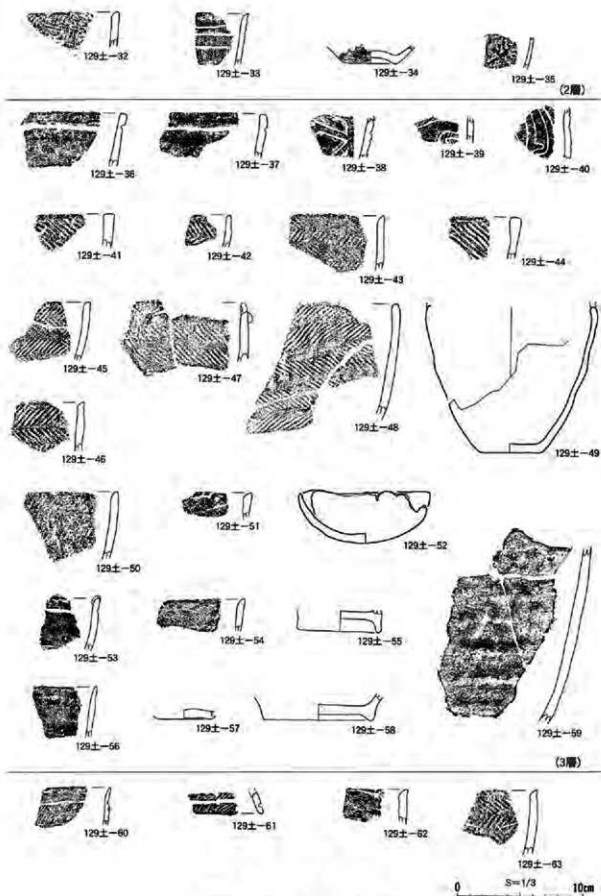


図33 第129号土坑 出土遺物(3)

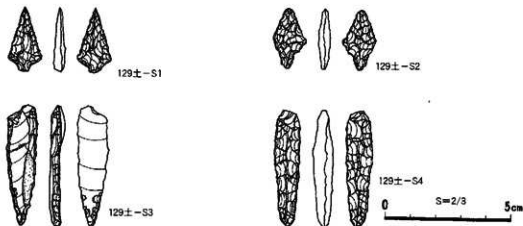
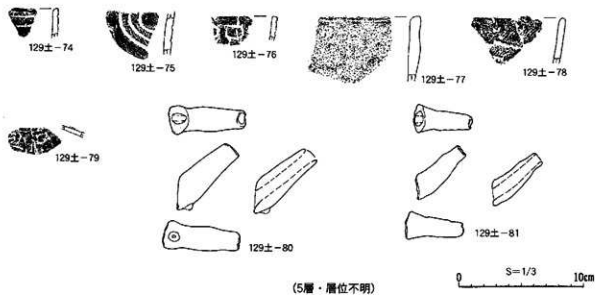
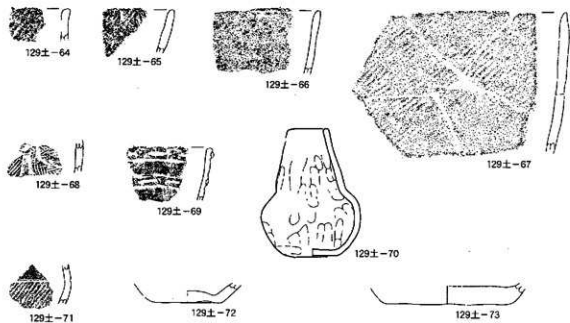
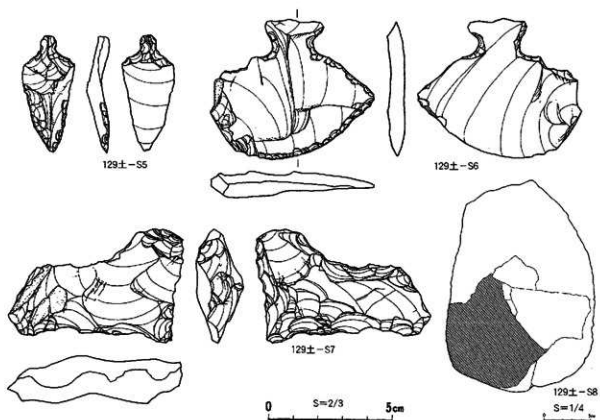
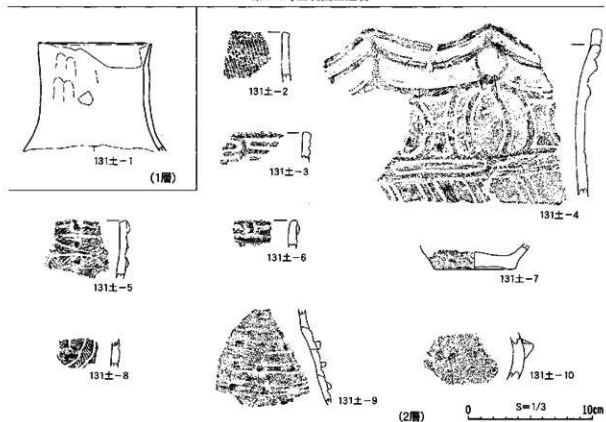


図34 第129号土坑 出土遺物(4)



第129号土坑出土遺物



第131号土坑出土遺物

图35 第129·131号土坑 出土遺物

## 第131号土坑（図30・31・35・36）

〔位置・確認〕主にXⅡS-215グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で黒色の楕円形プランとして確認した。

〔重複〕第129号土坑と重複する。平面プラン検出時には不明であったが、出土遺物の帰属時期から、第129号土坑よりも、本遺構の方が古いと判断した。

〔平面形・規模〕第129号土坑同様ややフラスコ形の断面と考えられる。本土坑の開口部南東部分はやや掘り過ぎと考えられるために、規模は推定となる。開口部推定長軸2m72cm・開口部推定短軸2m36cm、底部推定長軸2m86cm・底部推定短軸2m52cm、深さは60～76cmである。

〔断面・底面〕断面はややフラスコ形を呈し、立ちあがる。底面両側に深い部分が見られ、中央部が相対的に高くなる。

〔堆積土〕5層に分層したが、更に細分された。

〔出土遺物〕出土土器の総量は3.541kgで、掲載遺物は0.85kgである。1は無文の壺の口頸部で、縄文時代後期後葉のものと考えられる。

2～4は、2層出土の縄文時代後期前葉の土器である。2・3は燃糸文・楕円文が施される平坦口縁の深鉢である。

5～10は2層出土の後期後葉の土器である。5・6は縄文帯による入組み文が施される深鉢で、口縁部に縦10mmの縦長瘤が付される。9は平行沈線間の隆帯部にφ7mm程の瘤が多数付される壺の頸肩部で、胎土・焼成から見て、第129号土坑出土の129土-69と同一個体の可能性が高い。10は上面刻み瘤が付される壺・注口である。4は楕円文が施される波状口縁の深鉢である。当遺跡の該期の遺物の中では、最も文様構成が明らかにできる例である。5層出土の25も同一個体と考えられる。

11・12は3層出土の後期前葉の土器である。11は、4層出土の20・21、5層出土の26・27と同一個体であり、楕円文や渦巻状文が施される、つくりの丁寧な鉢である。

12は格子目状の沈線が、縄文の上から施される。

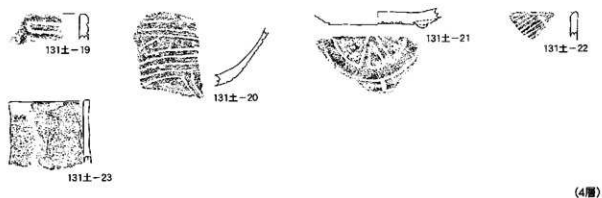
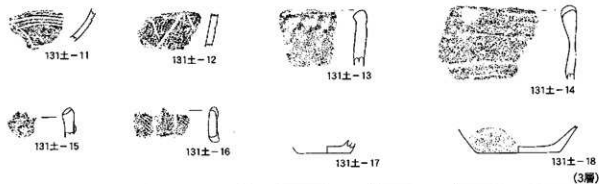
13～16は後期後葉の遺物で、13・14は口唇部が内傾し肥厚する深鉢である。16は透かしを有する香炉の一部であると考えられる。

19～21は4層出土の縄文時代後期前葉の土器である。19は3と同一個体である。20・21は3層出土の11、5層出土の26・27と同一個体の丁寧なつくりの鉢である。21は底部であり、V字形の沈線文の間にφ3mm程の刺突列が施され、底部の高台部分に穿孔が見られる。23は無文の細首の壺である。後期前葉の土器に胎土は似ている。

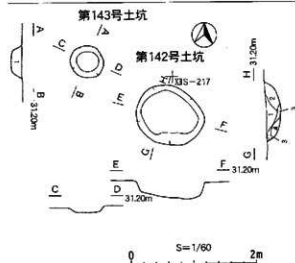
5層出土の24は頸部で屈曲する無文の深鉢である。口縁部外面の面取りが特徴的である。25は4と同一、26・27は20・21と同一個体である。

石器も多数出土しており、使用痕ある剥片5点、フレイク52点、チップ63点である。

〔小結〕当土坑は、出土遺物からみて縄文時代後期前葉以前に廃絶されたものと考えられる。縄文時代後期後葉の遺物を多く包含する、第129号土坑と重複する為、後期後葉の遺物も見られる。



第131号土坑出土遺物



第142号土坑出土遺物

- 第142号土坑
- |     |      |         |        |       |     |
|-----|------|---------|--------|-------|-----|
| 第1層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | 中-小粒少量 | しまりあり | シルト |
| 第2層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | 中-小粒少量 | しまりあり | シルト |
| 第3層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | 中-小粒少量 | しまりあり | シルト |
| 第4層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | 中-小粒少量 | しまりあり | シルト |



第143号土坑出土遺物

- 第143号土坑
- |     |      |         |                |       |     |
|-----|------|---------|----------------|-------|-----|
| 第1層 | 暗褐色土 | 10YR3/2 | 黒褐色(7.5)を多量に含む | しまりあり | シルト |
|-----|------|---------|----------------|-------|-----|

第143号・143号土坑

図36 第131・142・143号土坑

#### 第142号土坑（図36）

〔位置・確認〕 XⅡR-216・217グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、黒褐色土の楕円形プランとして確認した。第143号土坑が北西側に近接する。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 楕円形の平面形を呈し、開口部長軸1m10cm×短軸90cm、底部長軸92cm×短軸72cm、深さ26cmである。

〔断面・底面〕 壁は底面からやや開くように立ち上がる。底面は西側から東側へ向って斜めに緩く傾斜している。

〔堆積土〕 黒褐色の土を主体とし、混入する黄褐色ロームの量で、4層に分層した。

〔出土遺物〕 出土土器の総量は0.246kgである。1は上底気味の底部片である。2は口縁部に2条の刻目隆帯が施される縄文時代後期後葉の深鉢である。

石器は、使用痕ある剥片2点、フレイク1点、チップ1点が出土した。

〔小結〕 遺物数は少ないが、2は縄文時代後期の十腰内Ⅳ群期と考えられる。土坑の帰属時期はそれ以前であろうか。

#### 第143号土坑（図36）

〔位置・確認〕 XⅡS-216グリッドに位置する。第Ⅲ層上面で、暗褐色土の楕円形プランとして確認した。第143号土坑が南東側に近接する。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 直径54cmのほぼ円形を呈する。深さ16cmである。

〔断面・底面〕 壁は底面からやや開くように立ち上がる。底面は平坦である。

〔堆積土〕 暗褐色の単一のシルト層である。

〔出土遺物〕 出土土器の総量は0.036kgで、掲載遺物は0.018kgである。1は口唇部が肥厚する深鉢で、縄文時代後期後葉と考えられる。

石器は、チップが1点のみ出土した。

〔小結〕 出土した土器は、縄文時代後期後葉のものであるが、土坑の廃絶時期との関係は不明である。

（永嶋 豊）

## 第3節 ビット群・ビット

## 第101号ビット群 (図37)

〔位置・確認〕 XⅢF-195、XⅢE・F・G-196、XⅢF-197グリッドに位置し、10基のビットが環状に連なって確認された。

〔平面形・規模〕 ビットの広がる範囲は北東5m10cm、南西4m90cmほどで、環状に配置されている。北側は6基のビットが東西に長い長方形に配置されている。ビットの平面形は円形、楕円形、

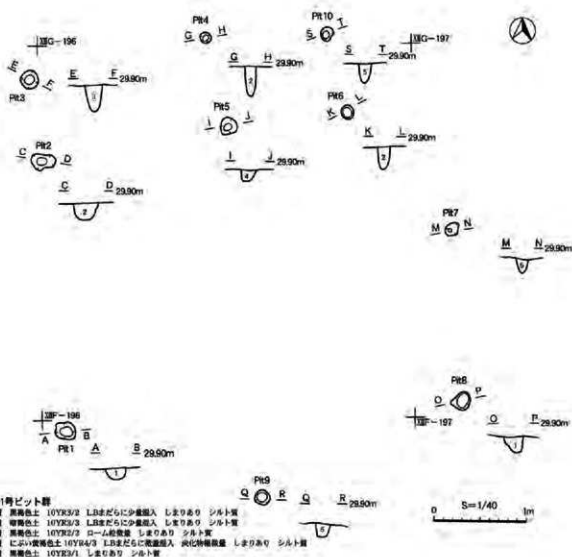


図37 第101号ビット群

不整楕円形などである。開口部は径12～27cmで、平均18cmほど、深さは12～32cmで、平均20cmほどである。柱痕は確認できなかった。

〔堆積土〕単一層であり、黒褐色土を主体とした土が堆積している。

〔出土遺物〕なし。

〔小結〕時期・用途とも不明である。

#### 第101号ピット（図38）

〔位置・確認〕XⅡT-194グリッドに位置する。暗褐色土の不整楕円形プランとして確認した。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕平面形はいびつな長楕円形で、開口部長軸47cm×短軸28cm、底部長軸26cm×短軸18cm、深さ42cmである。

〔断面・底面〕断面形は方形で、底面はほぼ平坦である。

〔堆積土〕6層に分層し、上位に暗褐色土、中位に褐色土、下位に黒褐色土主体の覆土が堆積している。

〔出土遺物〕確認面及び1層から土器が少量出土したが、摩滅しているため時期は不明である。無文・縄文・羽状縄文の土器がみられる。

〔時期〕時期決定の根拠に欠けており、不明である。

（工藤 由美子）

## 第4節 性格不明遺構

#### 第104号性格不明遺構（図8）

〔位置・確認〕XⅡT・XⅢA-194グリッドに位置する。第101号土坑とともに黒褐色土の不整楕円形プランとして確認した。

〔重複〕第101号土坑と重複し、本遺構が切られている。

〔平面形・規模〕平面形はいびつな長楕円形で、開口部の推定長軸1m56cm×短軸49cm、底部の推定長軸1m27cm×短軸30cm、深さ19cmである。

〔断面・底面〕断面は底面からやや開くように立ち上がり、底面は南側が一段低くなっている。

〔堆積土〕4層に分層した。暗褐色土主体の覆土で、上位と北側壁際に黒褐色土が堆積している。

〔出土遺物〕確認面及び4層から土器が少量出土した。

〔時期〕第101号土坑に切られていることから、縄文時代中期末葉以前の遺構と思われるが、詳細な時期は不明である。

（工藤 由美子）

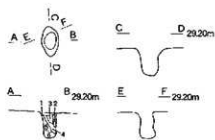
#### 第101号性格不明遺構（図38）

〔位置・確認〕XⅢE-197グリッドに位置する。第Ⅲ層検出時に黒褐色土の長方形プランとして確認した。長軸方向がほぼ南北方向に一致する。

〔重複〕東側の一部に、攪乱の跡が見られる。



第101号ピット 131A-195



## 第101号ピット

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒微量 炭化物微量 しまりあり シルト質  
 第2層 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒微量 しまりあり 粘性ややあり 粘土質シルト  
 第3層 黒褐色土 10YR4/1 しまりややあり 粘性ややあり 粘土質シルト  
 第4層 灰黄褐色土 10YR4/2 炭化物微量 しまりなし 砂質シルト  
 第5層 ぶい暗褐色土 10YR4/3 ローム粒少量 炭化物微量 しまりあり シルト質  
 第6層 黒褐色土 10YR3/2 しまりあり 粘性ややあり 粘土質シルト

0 S=1/60 2m

第108号性格不明遺構 第101号性格不明遺構



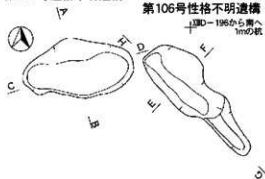
## 第101号性格不明遺構

- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 ①ローム粒微量 しまりあり シルト

## 第108号性格不明遺構

- 第1層 灰黄褐色土 10YR3/2 ①5cm以下のローム粒・炭化物微量 骨粒に於てマンガン凝結 しまりあり シルト  
 第2層 黒色土 10YR4/4 ①1cm程度のローム粒少量 ②2cm程度の炭化物微量  
 第3層 黒褐色土 10YR3/2 ①2cm程度のローム粒少量 ②3cm程度の炭化物微量 しまりあり シルト  
 第4層 ぶい暗褐色土 10YR4/3 ①1cm程度のローム粒少量 ②2cm程度の炭化物微量 骨粒少量 しまりあり シルト  
 第5層 黒色土 10YR2/2 ①1cm程度のローム粒少量 ②1cm程度の炭化物微量 しまりややあり シルト  
 第6層 黒褐色土 10YR3/3 ①1cm程度のローム粒少量 ②1cm程度の炭化物微量 ③2cm程度の骨粒微量 しまりあり シルト

## 第107号性格不明遺構



## 第106号性格不明遺構

## 第106号性格不明遺構

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒少量 ①15mm以下の炭化物微量 しまりあり シルト

## 第107号性格不明遺構

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 ①1mm以下のローム粒少量 しまりかなりあり シルト  
 第2層 褐色土 7.5YR4/4 ①5mm以下のローム粒少量 しまりあり シルト  
 第3層 黒褐色土 10YR2/2 ①1mm以下のローム粒少量 しまりあり シルト

0 S=1/60 2m

図38 第101号ピット、第101・106・107・108号性格不明遺構

〔平面形・規模〕掘乱や掘り過ぎによって、北東部が広がっているが、本来は南北1 m76cm、東西1 m60cm程の長方形の堅穴状の遺構であったと考えられる。確認面から底面までは非常に浅く、壁は5～6 cmしか残っていない。

〔断面・底面〕底面はやや凹凸があるが、概ね平坦である。

〔堆積土〕黒褐色土の1層のみ確認した。

〔出土遺物〕なし。

〔小結〕平面プランの明瞭さや黒味が強い覆土であることから、中近世以降の遺構と考えられる。

#### 第108号性格不明遺構（図38）

〔位置・確認〕XⅢE-196・197グリッドに位置する。第Ⅲ層検出時に、南北方向に細長い黒褐色土の長方形プランとして確認した。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕細長い形を呈し、長軸3 m32cm、短軸64cm程、深さ16～40cmである。

〔断面・底面〕長軸方向では浅い部分と深い部分が交互に見られる。短軸方向では東側にむかって傾斜する傾向がある。

〔堆積土〕6層に分層し、黒褐色土を中心とした土層で構成されている。

〔出土遺物〕なし。

〔小結〕当遺跡に近い山下遺跡で多く検出されたカマド状遺構と平面形態は類似するが、断面形態は底面に高低部分があり異なる。平面プランの明瞭さや黒味が強い覆土から考えて、中近世以降と考えたい。

#### 第106号・第107号性格不明遺構

##### 第106号性格不明遺構（図39）

〔位置・確認〕XⅢC-195・196グリッドに位置する。第Ⅲ層検出時に暗褐色土の細長いプランとして確認した。

〔重複〕西側に、第107号性格不明遺構が隣接する。

〔平面形・規模〕北西側が広く、南東側が狭くなる細長い形態である。

長軸2 m26cm、東西32～78cm程、深さ10～26cmである。

〔断面・底面〕北西側が深く、南東側が浅くなる。

〔堆積土〕暗褐色土の1層のみ確認した。

〔出土遺物〕なし。

〔小結〕不明である。

##### 第107号性格不明遺構（図38）

〔位置・確認〕XⅢC-195グリッドに位置する。第Ⅲ層検出時に暗褐色土の細長い楕円形プランとして確認した。主軸方向はほぼ東西方向と一致する。

〔重複〕東側に、第106号性格不明遺構が隣接する。

〔平面形・規模〕 東西方向に細長い楕円形を呈する。開口部長軸1m72cm・短軸80～1m程度、深さ20cmである。中心付近でやや広くなる。

〔断面・底面〕 底面からやや開くか、直立気味に立ちあがる。底面はほぼ平坦であるが、東側でやや傾斜を有する。

〔堆積土〕 3層に分層し、黒褐色土を主体とする。

〔出土遺物〕 なし。

〔小結〕 不明である。

(永嶋 豊)

## 第5節 旧河川跡の遺物

遺跡の調査区北西側に、埋没した縄文時代の旧河川跡を検出した(図39)。旧河川は遺跡内を北東側から南西側へ流れていたものと思われる。調査区においては、北東側と北側から南側に向かって流れ込んだ2つの河川が合流し、そこから大きく西側へと蛇行している。調査の結果、旧河川跡としてくくった範囲の中で、北東側は礫層になり、また南西側は無遺物層の黒色土が厚く堆積しているため、遺物包含層として残っている部分は今年度の調査部分のみであると考えられる。

旧河川跡の基本層序は、第1層から第18層までに区分された(但し第15～17層は欠番・図39)。注記は以下の通りである。

第1層	黒色土	10YR2/1	ローム粒(径5mm以下) 微量 炭化物(径3mm以下) 微量 焼土粒(径3mm以下) 極微量 しまりあり シルト質
第2層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒(径1mm以下) 微量 炭化物(径2～3mm以下) 微量 焼土粒(径1mm以下) 極微量 しまりあり シルト質
第3層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒(径4mm以下) 極微量 しまりややあり シルト質
第4層	黒色土	10YR1.7/1	焼土粒(径1mm以下) 極微量 しまりややあり シルト質
第5層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒(径5mm以下) 極微量 焼土粒(径1mm以下) 極微量 しまりあり シルト質
第6層	黒色土	10YR2/1	しまりあり シルト質
第7層	黒色土	10YR2/1	ローム粒(径5mm以下) 極微量 焼土粒(径1mm以下) 極微量 しまりあり シルト質
第8層	黒色土	10YR1.7/1	しまりあり シルト質
第9層	黒色土	10YR2/1	ローム粒(径4mm以下) 微量 炭化物(径1mm以下) 極微量 焼 土粒(径1mm以下) 極微量 しまりあり シルト質
第10層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒(径6mm以下) 極微量 しまりややあり 粘土質シルト
第11層	黒色土	10YR1.7/1	ローム粒(径1mm以下) 極微量 しまりややあり 粘土質シルト
第12層	黒褐色土	10YR3/2	火山灰層 上位に白頭山火山灰、下位に十和田A火山灰堆積 しまりあり シルト質粘土
第13層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	砂層 礫(径10mm以下) 少量 しまりなし 砂
第14層	黒褐色土	10YR3/1	混礫砂層 礫(径10mm以下) 多量 しまりなし 砂
第18層	黒色土	10YR2/1	にぶい黄褐色土(10YR5/4) まだらに中量混入 礫(径15mm以下) 微量 しまりややあり 砂質シルト

旧河川跡から多量の遺物が出土した。平箱にして約140箱分で、総重量は約1,030kgである。特に遺物が集中していた地区は、XⅢC-201～203グリッド付近(第103号遺物集中区)、XⅢB-195グリッド付近(第101号遺物集中区)、XⅢB-202～205グリッド付近である。XⅢB-202～205グリッド付近は、北東から流れてきた旧河川が西側へと急にカーブする地点で、水の流れが緩やかに

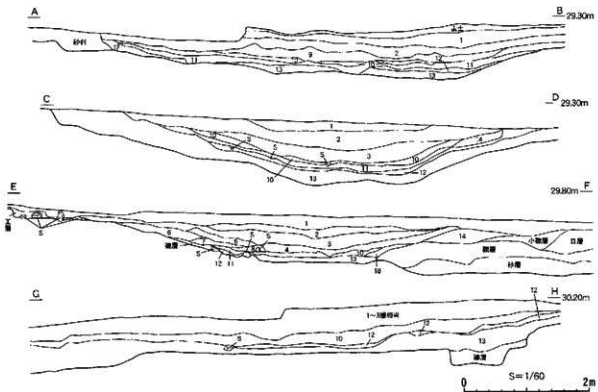
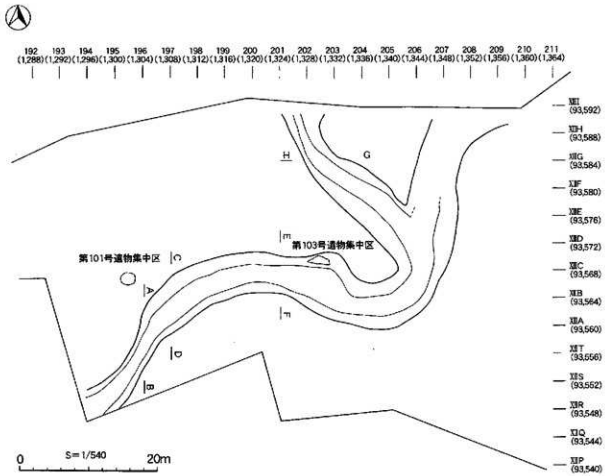


図39 旧河川跡及び基本層序

なり、遺物が堆積したものとされる。

遺物は、縄文時代中期前葉から弥生時代前期のものまで出土しているが、主体は縄文時代後期後葉の遺物である。グリッド199ラインの東側から縄文時代中期～後期の土器、西側から縄文時代晩期から弥生時代の土器が出土している。第103号遺物集中区とXⅢB-202～205グリッド付近では縄文時代後期後葉の土器、第101号遺物集中区では晩期後葉の土器がまとまって出土している。また、XⅢA-203、XⅢE-203グリッド付近からは焼土が検出されたが、原位置のものではなく、投棄か廃棄されたものと思われる。

ここでは、1. 第103号遺物集中区の遺物、2. 縄文時代中期から後期にかけての遺物（旧河川跡東側の土器・石器）、3. 第101号遺物集中区の遺物、4. 縄文時代晩期の土器（旧河川跡西側の土器）の順に遺物について述べる。

今回報告する土器は、以下のとおり第Ⅰ群から第Ⅶ群土器に大別した。

- 第Ⅰ群土器 縄文時代中期前葉～後葉の土器
- 第Ⅱ群土器 縄文時代中期末葉の土器
- 第Ⅲ群土器 縄文時代後期初頭～前葉の土器
- 第Ⅳ群土器 縄文時代後期中葉の土器
- 第Ⅴ群土器 縄文時代後期後葉の土器
- 第Ⅵ群土器 縄文時代後期とみられるが型式不明の土器
- 第Ⅶ群土器 縄文時代晩期後葉の土器

## 1 第103号遺物集中区の遺物

旧河川跡の河川が、北側と北東側から流れ込んで合流し、西側へ向かって大きくカーブする場所の北岸に位置している。

### 土器

土器がXⅢC-201～203グリッドの4m×12mの範囲から集中して出土した。標高29.1～29.5mで何層にもわたって出土しているが、特に標高29.3～29.4mからの出土が多い。

土器は平箱で約16箱分出土した。土器の総重量は、約141.27kgである。土器は小片が多く、完形もしくは完形に近いものは1点もない。図示した土器は180点で、平箱にして約2箱分である。

出土した土器は、縄文時代中期の円筒上層式期から縄文時代後期後葉までのものである。縄文時代中期～後期前葉～中葉の土器は少数で、後期後葉の土器が全体の86%を占めている。後期後葉の次に多いのは後期前葉の土器であるが、全体の6%にも満たない。

器種としては、深鉢・鉢・壺・注口の4種類が出土している。そのうち、深鉢が全体の65%を占めている。

文様は、無文、羽状縄文・縄文・条痕文・条線文などの地文のみのも、沈線文+縄文・沈線文+縄文+貼瘤・縄文帯+貼瘤・沈線文+爪形刺突文・縄文+貼瘤・縄文帯・沈線文+羽状縄文・縄文+沈線文+爪形刺突文などの文様をもつものがみられる。無文・地文のみを施文しているものが主体で、全体の約80%を占めている。なかでも、無文が全体の約50%と抜きん出て多く、羽状縄文も全体の

約25%となっている。

炭化物・ススの付着は、無文・地文のみ施したものにみられ、全体の15%を占めている。

図示しなかった土器は平箱13箱分で、そのほとんどが小破片である。土器の口縁のみをピックアップすると479個、5.16kgとなる。口縁部文様の種類としては無文が圧倒的に多く、次いで羽状縄文、縄文のみとなっている。口縁部に炭化物またはススが付着しているものは13個のみである。

ここでは土器の出土状況を、①標高29.4m地点（図40）、②標高29.3m地点（図43.44）、③その他（図47）、に分けて図示し、それぞれから出土した土器をその後ろに続けて掲載した。③の土器のあとには、出土状況図には掲載していない遺物を載せた。①図40では、図の上半分が無文土器・下半分が有文土器の出土状況となっている。②は範囲が広いので、さらに2ヶ所に分けた。図43は左側が無文土器・右側が有文土器の分布状況、図44は上半分が無文土器・下半分が有文土器の分布状況である。③図47は遺物量がそれほど多くないため、無文・有文土器とも一括して掲載した。

①～③の出土状況を見ると、標高差による出土遺物の傾向には特に違いは見られないため、①～③の土器を一括して観察することとする。

#### 第Ⅰ群土器 縄文時代中期前葉～後葉の土器（図47、48-107）

1点のみの出土である。胴部から底部につながる部分で、胴部に多軸絡条体が施文されている。

#### 第Ⅱ群土器 縄文時代中期末葉の土器（図40、図41-1、43、45-55）

2点出土した。ともに深鉢の破片である。1・55とも地文RL縄文に沈線が施文されている。1には外面にススが付着している。

#### 第Ⅲ群土器 縄文時代後期初頭～前葉の土器（図40、41-2、43・44、45-56～59、47、48-108・109、49-139～142）

数点出土した。2・56～59・108・109・141は深鉢で、139・140は鉢か壺、142は壺の破片である。すべてに沈線が施文され、なかには縄文（56・108）や隆帯（139・140）、櫛歯状文（109）があわせて施文・貼付されているものもみられる。

#### 第Ⅳ群土器 縄文時代後期中葉の土器（図40、41-3、43、45-60、47、48-110、49-143・144・146）

数点出土した。3・60・110は深鉢、143は鉢、144・146は広口壺か鉢の破片である。文様は沈線間に縦位の刻み目が入るもの（3・60・144・146）、棒状工具による縦位圧痕が口縁部に施文されるもの（110）、縄文帯を構成しているもの（143）がある。

#### 第Ⅴ群土器 縄文時代後期後葉の土器（図40・43・44・47、41-4～43-48、43-50～54、45-61～46-95、46-97～47-105、48-111～49-138・145・147～156、50-158～163・165～181）

第103号遺物集中央区で最も多量に出土した土器群である。掲載した土器片数は156点である。ここでは、器種別にみていく。出土している器種は深鉢・鉢・壺・注口であるが、破片資料のため、深鉢

か壺か、または壺か注口か判別できないものもある。

A. 深鉢 (図40・43・44・47、41-4~43-45・50、45-61~46-100、47-105、48-111~49-134・137・145・147~156、50-158~173)

全体の約85%を占めている。文様は、無文・羽状縄文・条痕文・条線文・LR斜行縄文・RL斜行縄文・沈線文+縄文+貼瘤・沈線文+縄文・沈線文+爪形刺突文・縄文帯+貼瘤・縄文+貼瘤・縄文帯のみ等がみられる。第103号遺物集中区の主体となる土器のため、前述したように無文・羽状縄文が多く、地文のみを施した土器が多数を占める。なかでも無文は47%と全体の約半数を占める。羽状縄文は28%である。地文のみを施文したものは87%にのぼる。炭化物・ススが付着した土器は18%である。

①無文・地文のみを施文したもの

- 無文・・・深鉢全体の47%と約半数を占める。炭化物・ススが付着した土器は15%ほどである。
- 羽状縄文・・・全体の28%である。炭化物・ススが付着したものは25%ほどである。
- 斜行縄文・・・全体の7%ほどで、それほど多くはない。LR・RL縄文が施文されている。
- 条痕文・・・5%程度である。44には補修孔がみられる。
- 条線文・・・1点のみの出土である (130)。

②文様を施文しているもの

沈線・縄文・貼瘤・縄文帯等が施文されている。43・100・134・173には沈線と沈線間に爪形刺突文が施文されている。134・173は同一個体と思われる。また、137は口縁に貼付された突起部分であるが、動物の頭部を表したものである。内面は丹念に磨かれ、動物の首と思われる部分には粘土紐が2本貼付されている。動物の首の外面には粘土を貼付しており、瘤の形状であるが、不明である。この動物は、おそらくクマを表現したものではないかと思われる。外面にはLR縄文が施されている。これと同一個体の突起部が旧河川跡から1点出土している (図63-452)。

B. 鉢 (図40・43・44・47、43-46・47・51、46-101、49-135、50-175・176)

図示したのは7点で、うち6点は無文である。101は口縁部に縄文を施文し、無文部には丁寧なミガキが施されている。

C. 壺 (図40・43・44・47、43-52・53、46-102、49-138、50-177・178)

図示したのは6点で、2点は無文である。52は沈線文とLR・RL縄文が施された後にナデ消しされているため、文様が明確でない。53は、口縁部に沿口沈線・沈線間にLR縄文が施文されている。102は、沿口沈線・平行沈線が施文され、口唇部と沿口沈線間・肩から胴部にかけての部分にLR縄文が施されている。138は有孔把手状突起部で、突起中央に横位貫通孔がある。平行沈線とLR・RL縄文が施されている。

D. 壺か深鉢 (図49-136、50-179)

図示したのは2点で、136は無文の口縁部破片である。179は波状口縁波状部で、波頂部に小突起・外面に瘤が貼付され、口縁に沿ってLR縄文が施文されている。



## E. 壺か注口 (図40・44、43-48・54、46-103・104、50-180)

図示したのは5点で、すべて小破片のため壺か注口か判別ができなかった。無文は1点(48)である。54は沈線とLR縄文が施され、無文部にはミガキが施されている。103には縄文帯(羽状縄文)が施文され、無文部には丁寧なミガキが施されている。104には沈線と羽状縄文・LR・RL縄文が施されている。180には沈線と羽状縄文が施文され、無文部は丁寧に磨かれている。

## F. 注口 (図50-181)

明らかに注口とわかるものは1点のみである。181は注口部分で、縄文帯(LR)と貼瘤が施文されている。

## 第VI群土器 縄文時代後期とみられるが型式不明の土器 (図40・44、43-49、46-96、49-157、50-164)

図示したのは4点で、49・157・164は底部である。49・157は無文、164はLR縄文が施されている。96は口縁部破片で、LR縄文が施されている。

(工藤 由美子)

## 石器

石器は、1層からフレイク3点、2層から石匙2点・フレイク18点・チップ17点、3層から石鏃1点・使用痕ある剥片1点・フレイク12点・チップ20点、10層からスクレイパー1点・使用痕ある剥片2点・フレイク18点・チップ12点、沢13層からフレイク1点が出土した。

S1は、玉髄質珪質頁岩を用いた、小型の有茎凸基の石鏃である。S2は、自然面が残る側に、二次調整が見られるスクレイパーであるが、つまみ部と刃部の一部を欠損した石匙である可能性もある。S3・S4は、縦型の石匙である。S3は縦長剥片の打面の反対側に、つまみ部を作出し、刃部は背面側の縁辺に二次調整が施される。S4は、横長剥片を用いた縦型石匙である。主要剥離面の打面が刃部側の一部に残る。主要剥離面の剥片剥離方向とつまみ部の軸のなす角度は、約90°である。背面側の両側縁と腹面側の側縁に、二次調整が施される。S5は、縦長剥片の一端に、つまみ作出を意図したと思われる二次調整が見られるが、つまみ部はあまり明瞭ではない。背面側の側縁に、二次調整が施されている。石匙の未製品の可能性もある。

(永嶋 豊)



図40 第103号遺物集中区①

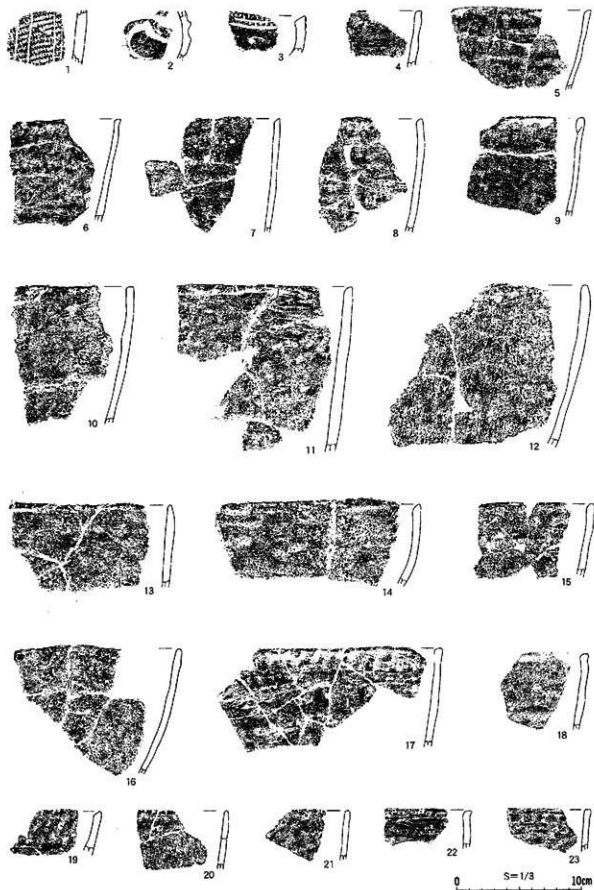


图41 第103号遺物集中区① 土器 (1)

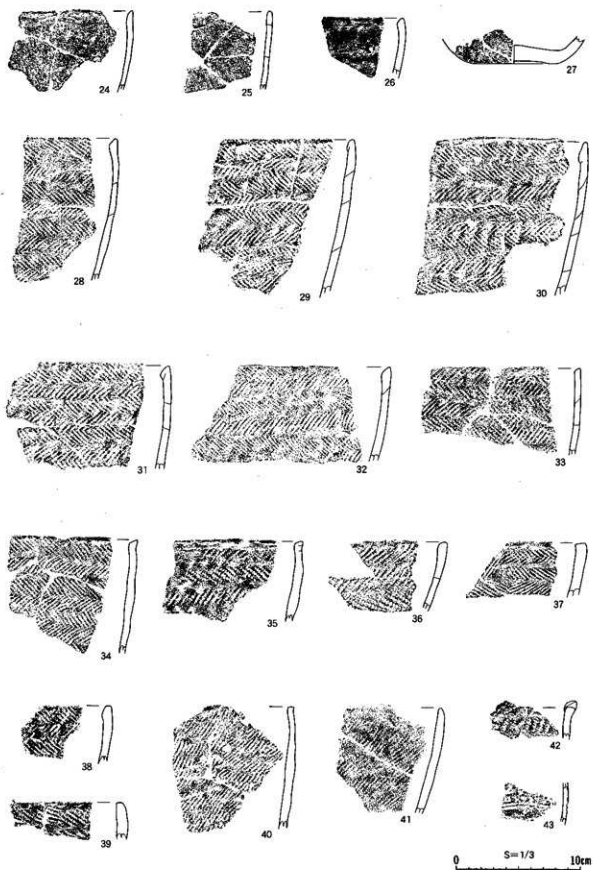
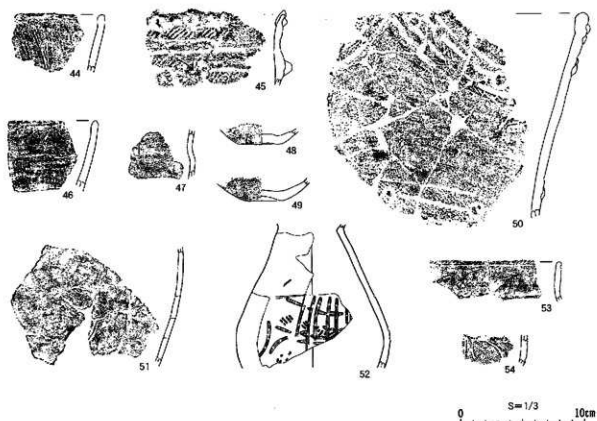


图42 第103号遺物集中区① 土器(2)



第103号遺物集中区②

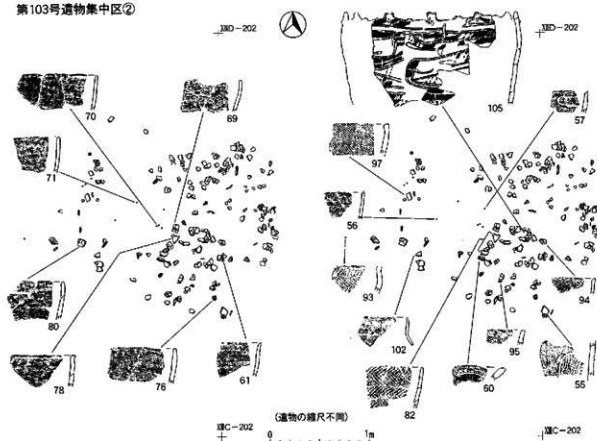


図43 第103号遺物集中区① 土器 (3)、遺物集中区②-1



図44 第103号遺物集中区②-2

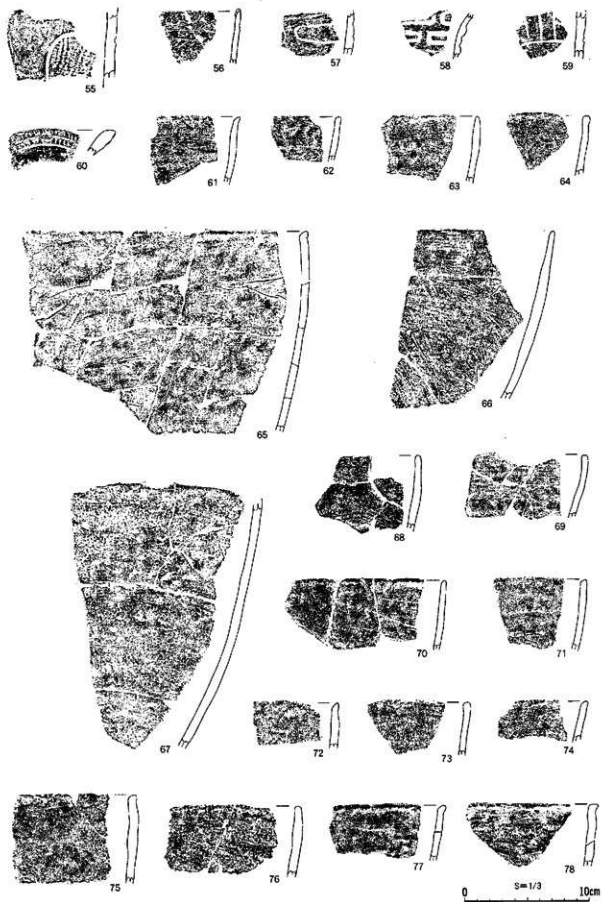


图45 第103号遺物集中区② 土器(1)

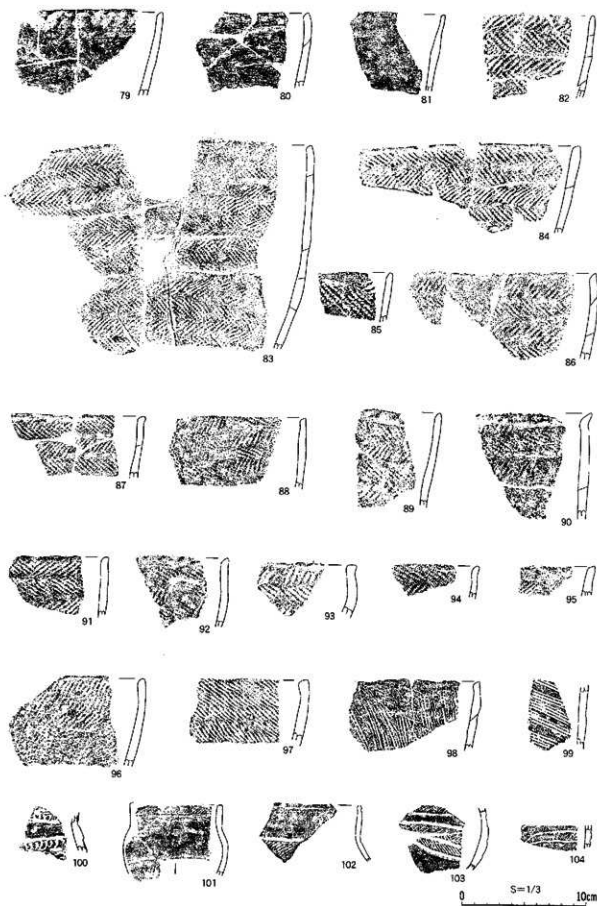
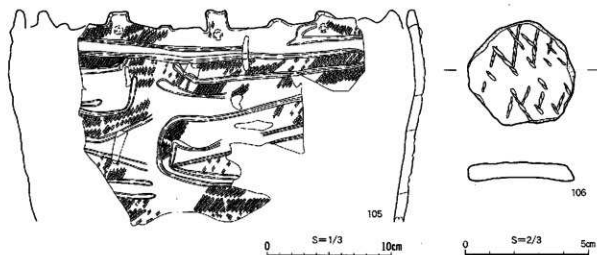


图46 第103号遺物集中区② 土器(2)





第103号遺物集中区③

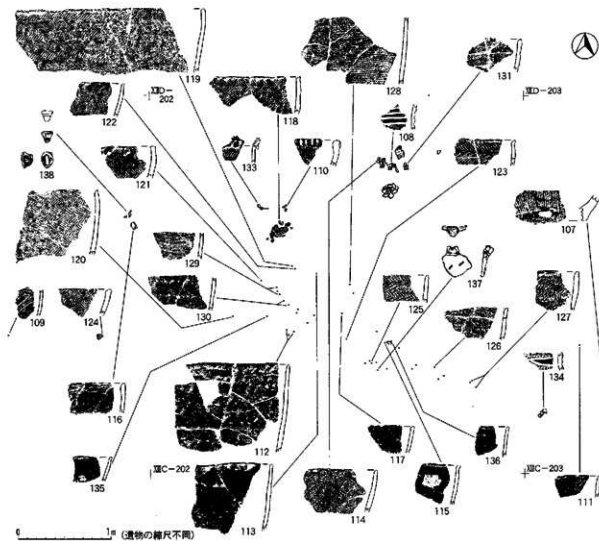


図47 第103号遺物集中区② 土器(3)、遺物集中区③

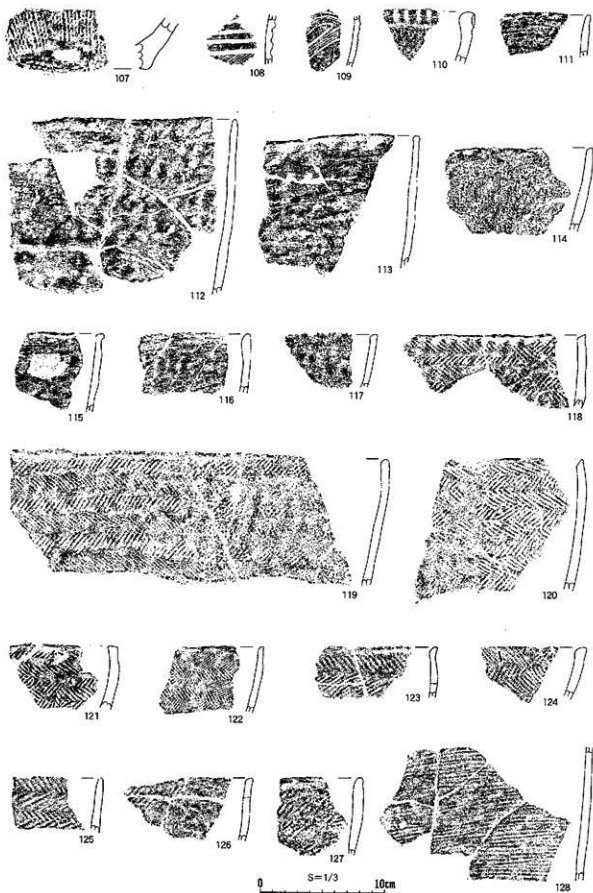
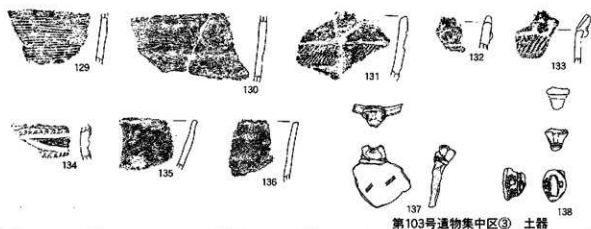


図48 第103号遺物集中区③ 土器(1)



第103号遺物集中区③ 土器

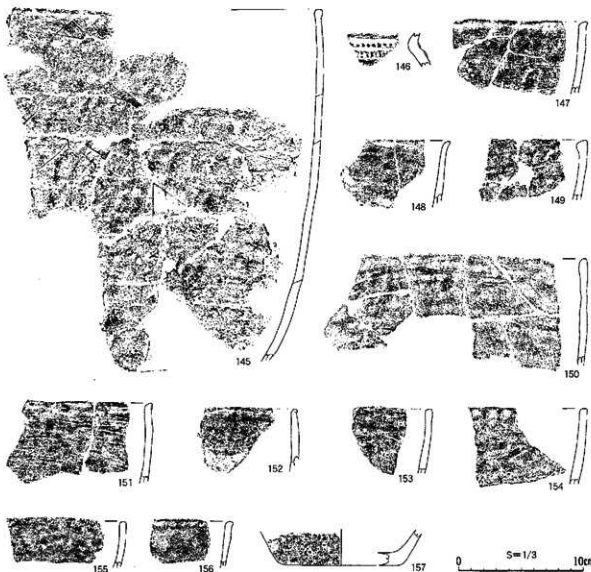


図49 第103号遺物集中区③ 土器(2)、その他土器(1)

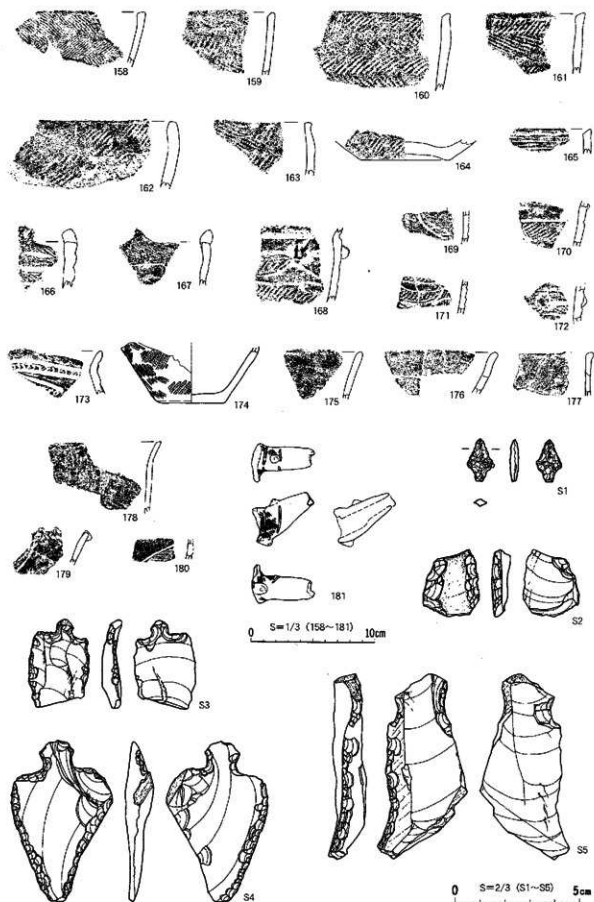


図50 第103号遺物集中区 その他土器(2)・石器

## 2 旧河川跡の縄文時代中期から後期にかけての遺物

### 土器

土器は平箱で127箱分出土した。総重量は約880kgになる。縄文時代中期前葉・中期末葉・後期初頭・後期前葉・後期中葉・後期後葉の土器である。最も多いのは縄文時代後期後葉の土器で、全体の約80%以上を占めている。次いで後期初頭から前葉、中期末葉、後期中葉の順となっている。

出土地点は、32グリッドにわたる。Y軸=1,316を境にして西側からはこの時期の土器は出土していない。時期別にみると、特にいずれかのグリッドに集中しているわけではなく、どの時期の遺物も東側全域から出土している。後期後葉の土器は2ヶ所に集中区があり、旧河川跡中央部と北側である。グリッドでは、中央部はXⅢA-203~205・XⅢB-202~205・XⅢC-202グリッド、北側はXⅢG-205~207・XⅢH-204~206グリッドである。特にXⅢB-203・205グリッドからの出土が多い。

旧河川跡の遺物の取り上げは、基本的に基本層序に則り層ごとに行った。遺物は、1・2・3・10・13層から出土している。特に黒色土の1層・3層・10層と砂層でにぶい黄褐色土の13層から多量に土器が出土した。

器種は、深鉢・鉢・壺・注口がみられるが、深鉢が圧倒的に多く、全体の77%に及ぶ。袖珍土器も数点出土している。

炭化物・ススの付着率は、全体の約40%とかなり高くなっている。そのうち炭化物・ススが付着している地文のみの土器は85%を占めている。

以下、層ごとに述べていきたい。

### I. 1層

平箱数12箱、総重量約90kgの土器が出土した。そのほとんどが第V群土器の深鉢である。

#### 第Ⅲ群土器（図51-182~189）

##### A. 深鉢

図示したのは1点である（182）。無文口縁部で、折り返し口縁となっている。

##### B. 壺

図示したのは7点である（183~189）。183には沈線文が、185・187~189には楕円文が施されている。186は無文で頸部に隆線文が施された土器である。

#### 第Ⅳ群土器（図51-190・191）

##### A. 深鉢

図示したのは1点である（190）。縄文帯+沈線文が施文され、沈線間に刻み目が施されている。また外面には炭化物が付着している。

##### B. 鉢

図示したのは1点（191）で、縄文帯（羽状縄文）・平行沈線と沈線間に刻み目が施されている。

#### 第Ⅴ群土器（図51-192~図52-214）

##### A. 深鉢（192~208）

1層出土土器の約半数を占める。無文・地文のみが施文されたものがほとんどである。

①無文・地文のみを施したもの

- 無文・・・図示したのは7点（192～198）で、そのうち4点（192～195）にはスガが付着している。
- 羽状縄文・・・図示したのは2点（201・202）である。
- 縄文・・・図示したのは1点（200）で、LR縄文が施文されている。
- 条痕文・・・図示したのは3点（203～205）で、すべて同一個体である。
- 条線文・・・図示したのは3点（206～208）で、すべて同一個体である。

②文様を施文しているもの

199のみである。口縁に小突起が貼付され、突起頂部から内面には棒状圧痕が施文されている。外面には平行沈線文とRL縄文・貼瘤がみられる。また外面にスガが付着している。

B. 鉢（211～214）

図示したのは4点で、すべてに文様が施文されている。211・212・214は沈線文で、211には口縁部に小突起が、214には瘤が貼付されている。213は口縁部に小突起があり、外面には地文にLR縄文を施文し、小突起部に貼瘤を施している。

C. 深鉢か鉢（209・210）

いずれも小破片であるため、深鉢か鉢か判別できないものである。209は無文で、210には条痕文が施文されている。

## II. 2層

平箱数5箱、総重量約40kgの土器が出土した。深鉢が主体である。

### 第Ⅲ群土器（図52-218）

図示したのは1点である。深鉢の折り返し口縁部破片で、外面にRL縄文が施文されている。

### 第Ⅴ群土器（図52-215～217・219）

図示したのは4点で、いずれも深鉢の破片である。219は無文、215・216は条痕文である。217は胴部破片で斜行縄文が施文されている。

## III. 3層

平箱で40箱分、総重量約290kgの土器が出土した。旧河川跡出土土器の33%を占め、最も多量に土器が出土した層である。なかでも第Ⅴ群の深鉢が主体である。

### 第Ⅱ群土器（図52-220～223）

図示したのは3点で、すべてに縄文・沈線文が施文されている。220・221にはLR縄文、222にはRL縄文と縦位沈線文が施文されている。

### 第Ⅲ群土器（図52-223～226、53-228）

図示したのは5点である。器種は223・224・226は深鉢の破片、228は深鉢の胴部から底部、225は不明である。223は、地文RL縄文に隆線文（上にRL縄文）と沈線文が貼付・施文されている。後期初頭のものと思われる。224・228は沈線文が施されている。225は波状口縁部で、隆帯文が貼付されている。226は沈線文で、沈線間には条痕文が充填されている。

### 第Ⅳ群土器（図52-227、53-229）

図示したのは2点である。227は深鉢の口縁部片で、羽状縄文が施文されている。229は深鉢か鉢の胴部片で、平行沈線と沈線間に刻目が施されている。

#### 第V群土器（図52-230～56-305）

図示したのは100点で、無文・地文のみの土器が3層V群土器全体の80%以上を占める。炭化物・ススが付着したものは約半数で、他の層に比べて付着率が高い。

器種は深鉢・鉢・壺・注口が出土しているが、深鉢が約80%を占めている。

文様は、無文・羽状縄文・斜行縄文・条痕文・沈線文+縄文+貼瘤・縄文帯・沈線文・縄文帯+貼瘤などがみられる。

#### A. 深鉢（図53-230～56-305）

##### ①無文・地文のみを施文したもの

- 無文・・・深鉢全体の40%程度を占める。図示したのは28点（図53-230～54-259）である。
- 羽状縄文・・・深鉢全体の35%程度を占める。図示したのは27点（図54-260～55-281・283～56-287）である。
- 縄文・・・深鉢全体の15%ほどを占める。図示したのは12点で、282・288・290・291・294・295にはLR縄文、289・292・293・296～298にはRL縄文が施文されている。
- 条痕文・・・図示したのは5点である（図56-299～303）。

##### ②文様を施文しているもの

図示したのは2点（304・305）である。304は大波状口縁波状部で、波頂部外面に縦位短沈線を施文し、沿口沈線と沈線文間にLR・RL縄文、貼瘤を施している。305は平口縁に小突起を貼付し、外面にRL縄文と沈線文を施文している。

#### B. 鉢（図57-311～315・317・319）

7点図示した。無文（312～314）・LR縄文（311）・縄文帯（315・317・319）のものがみられる。317と319は同一個体である。

#### C. 深鉢か鉢（図56-306～57-310）

5点図示した。306は無文で、小突起が付されている。307はRL縄文、308～310は羽状縄文が施文されている。

#### D. 壺（図57-320）

図示したのは1点である。弧状沈線文が施文されている。

#### E. 注口（図57-329）

注口とわかるのは1点である。底部は欠損しているが、器形のわかる数少ない土器のひとつである。口縁は平口縁で、小突起が貼付されている。突起の内面には棒状圧痕が施されている。口縁から頸部には平行沈線と沈線間にRL縄文が施文されている。胴部には、胴部を4分割して文様を施文している。縄文帯（RL・LR縄文）+貼瘤・平行沈線（沈線間は羽状縄文）が施文されている。4分割したうちの3ヶ所には貼瘤、残りの1ヶ所には注口がくる。貼瘤は口縁小突起の突起間のちょうど中央部にくるように配置されている。

## F. 壺か注口（図57-316・318・321～328）

壺か注口か判別できなかったものは10点である。316は外面に平行沈線とRL縄文、327は外面に平行沈線と羽状縄文が施文される。どちらも平口縁であるが、316は平口縁に小突起が付されている。318・326・328には縄文帯が施文されている。323は縄文帯に瘤が貼付されている。324には縄文帯・沈線文・貼瘤がみられる。322には平行沈線・沈線文・RL縄文・瘤が施文・貼付されている。321は弧状沈線文に瘤が貼付された痕跡が残る。325は沈線文のみである。

## 第VI群土器（図58-330）

1点のみ掲載した。かなり摩滅しているが、胴部に斜行縄文が施文され、底部には網代痕がみられる。

## IV. 10層

平箱で31箱分、総重量240kgの土器が出土した。旧河川跡の土器では3層に次いで多量の土器が出土した。3層同様に第V群土器の深鉢が主体である。

## 第II群土器（図58-331・332）

図示したのは2点である。331・332とも地文LR・RL縄文に沈線文が施文されている。

## 第III群土器（図58-333～338）

図示したのは6点で、334～338は後期前葉十層内I式期の土器に相当する。333は後期初葉のものと思われ、地文RL縄文に平行沈線が施文されている。334・335・336には楕円文が施文されるが、335は沈線で区画された文様の中に条痕文を充填している。337・338は沈線文のみを施文したものである。333～337は深鉢、338は深鉢か鉢である。

## 第IV群土器（図58-339）

1点のみ出土した。鉢の口縁部破片で、口縁部に平行沈線と沈線間に刻目が、胴部に縄文帯（羽状縄文）が施文される。内面にはススが付着している。

## 第V群土器（図58-340～61-411）

旧河川跡10層出土土器の90%近くを占めている。炭化物・ススが付着しているものは40%であり、うち図示したのは72点である。

器種は深鉢・鉢・壺で、その他に袖珍土器が2点出土している。全体の約85%は深鉢である。

文様は無文・羽状縄文・縄文・条痕文・縄文帯・縄文帯+貼瘤・縄文帯+沈線+貼瘤などがみられる。

## A. 深鉢（図58-340～61-401）

## ①無文・地文のみを施文しているもの

- 無文・・・図示したのは35点であるが、10層V群土器の半数は無文の深鉢である。
- 羽状縄文・・・図示したのは18点（375～392）で、10層V群土器の20%を占める。
- 縄文・・・LR・RL縄文を施文している（394～397）。
- 条痕文・・・2点図示した（398・399）。

## ②文様を施文しているもの

- 3点出土している（393・400・401）。393は地文LR縄文に内外面に貼瘤を施している。



401は、口唇部に小突起、外面にRL縄文・沈線文・貼瘤を施文している。400は縄文帯を施文している。

B. 鉢 (図61-404)

図示したのは1点で、無文の口縁部破片である。

C. 深鉢か鉢 (図61-403)

図示したのは1点で、胴部下半から底部にかけてが残存している。文様は沈線文とRL縄文が施されている。

D. 壺 (図61-405・408)

図示したのは2点で、405・408のどちらにも縄文帯が施文されている。408には貼瘤もみられる。

E. 鉢か壺 (図61-402)

1点出土した。縄文帯が施文され、外面にススが付着している。

F. 壺か注口 (図61-406・407・409)

図示したのは3点で、3点とも縄文帯が施文されている。406には貼瘤もみられる。

G. 袖珍土器 (図61-410・411)

2点出土した。410は無文の小型浅鉢、411はLR縄文が施された小型鉢である。

## V. 13層

平箱18箱分、総重量にして140kgの土器が出土した。第V群土器の深鉢が主体であるが、他の層と比較して第Ⅲ群土器の割合が高く、約30%近くを占めている。

### 第Ⅲ群土器 (図61-412~420)

412から419は深鉢、420は深鉢か鉢である。

412・413・415~417・419・420には楕円文が施文されている。413・416・417は波状口縁で、416は波頂部と波頂部から外面に粘土を貼付し、沿口沈線を施文している。417も波頂部に粘土紐を貼付しており、沿口沈線を施文している。414も波状口縁で、沿口沈線に菱形沈線文を施文している。418は渦巻状の沈線文を施文している。

### 第Ⅳ群土器 (図62-421)

深鉢の波状口縁波状部で、外面に逆S字状隆帯が貼付されている。

### 第Ⅴ群土器 (図62-422~436・438~440)

13層出土土器の半数以上を占める。器種は深鉢・鉢・注口と袖珍土器である。文様は、無文・羽状縄文・斜行縄文・縄文帯などで、無文が10層第Ⅴ群土器の45%ほどを占めている。

#### A. 深鉢 (図62-422~436)

無文・地文のみを施文しているもののみで、文様を施文しているものはない。

- 無文・・・図示したのは9点で(422~430)、422~425・428には外面に炭化物・ススが付着している。
- 羽状縄文・・・図示したのは4点(431~434)であり、432・433は口唇部がやや肥厚している。
- 縄文・・・図示したのは2点(435・436)で、いずれもRL縄文が施文されている。

B. 鉢 (図63-439)

図示したのは1点で、縄文帯を施文した口縁部破片である。

C. 深鉢か鉢 (図63-438)

図示したのは1点で、羽状縄文が施文され、外面にススが付着している。

D. 注口 (図63-440)

図示したのは1点で、縄文帯が施文されている。注口部は欠損している。

E. 袖珍土器 (図63-441・442)

2点出土した。441は無文の小型深鉢である。442は無文で、口縁部に小突起がみられる。胴部の口縁部小突起直下には貼瘤がみられ、土器を4分割したもう一ヶ所にも貼瘤がみられる。また、4分割した別の箇所には注口部らしき痕跡がみられる。おそらく3方が貼瘤、1方が注口の小型注口土器と思われる。

第VI群土器 (図63-437)

1点出土している。深鉢の口縁部で、口縁下の土器が外反する部分に隆帯を横位に貼付している。

VI. その他の土器

旧河川跡で一括して取り上げた遺物を最後に掲載した。

第I群土器 (図63-443)

1点のみ出土した。円筒上層式期の土器で、口頸部に鋸齒縄文・口頸部から胴部にかけて隆帯貼付・胴部に羽状縄文が施文されている。

第II群土器 (図63-444~447)

図示したのは4点である。444・446はLR縄文に沈線文が施文されている。447はRL縄文のみが施文された口縁部破片で、445はヒレ状突起である。

第IV群土器 (図63-449)

図示したのは1点で、大波状口縁の波状部である。突起側面には沈線文が施文されている。

第V群土器 (図63-448・450~456)

A. 深鉢

448は無文、450は羽状縄文、451は条痕文の口縁部破片である。452は、前述した第103号遺物集中区から出土した口縁部破片 (図49-137) と同一の動物形突起である。453は小突起のある口縁部破片で、沈線文と貼瘤が施されている。

B. 壺

455は胴上部破片で、縄文帯と上割瘤が施文されている。456は口唇部にわずかに粘土を貼付している。内外面に瘤を貼付し、外面には沿口沈線文が施文されている。

C. 壺か注口

454は有孔把手状突起の突起部で、縦位の貫通孔と沈線文がみられる。

(工藤 由美子)

石器 (図64~68)

S6~S14は、石鏃である。有茎平基 (S6・9)、有茎凸基 (S7・8・10・11)、無茎円基 (S13)、

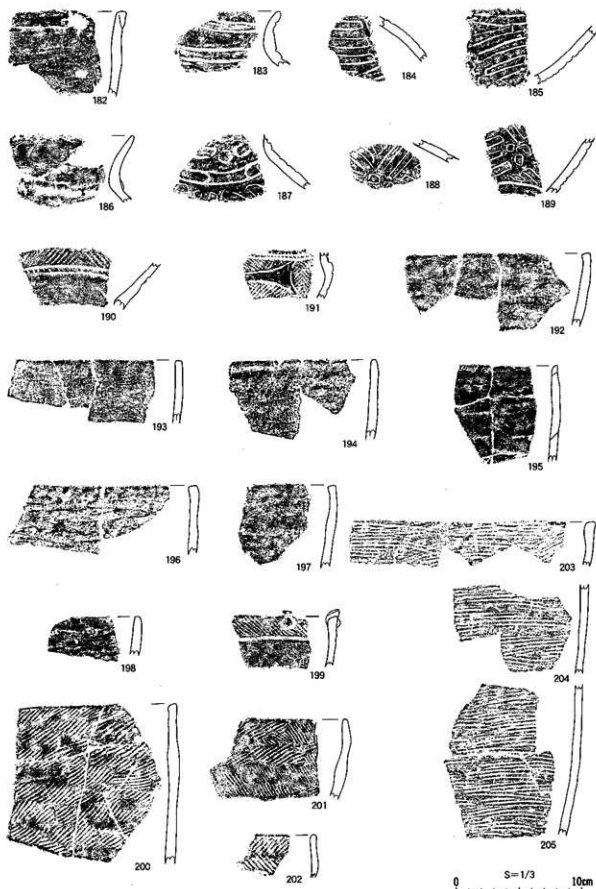


図51 旧河川跡出土土器(1) 1層

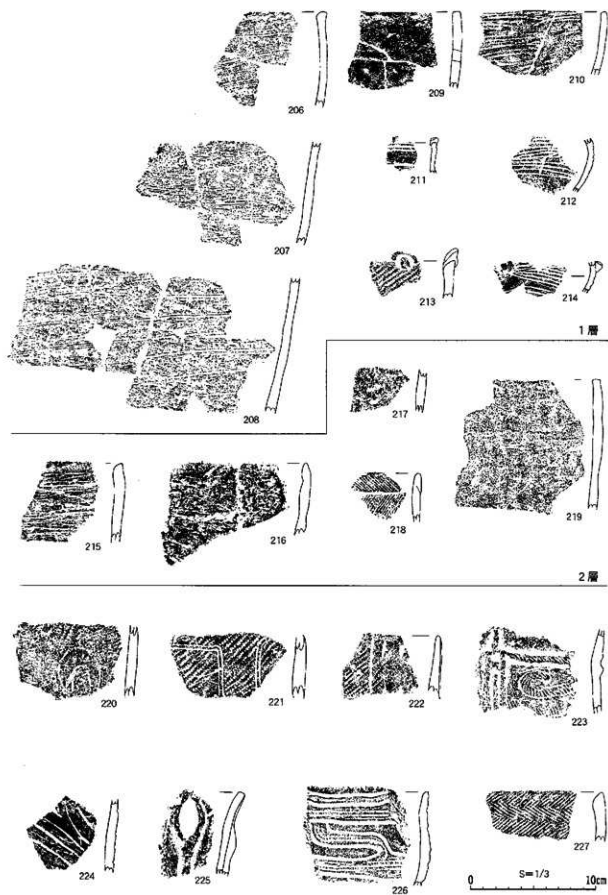


圖52 旧河川跡出土土器(2) 1・2・3層

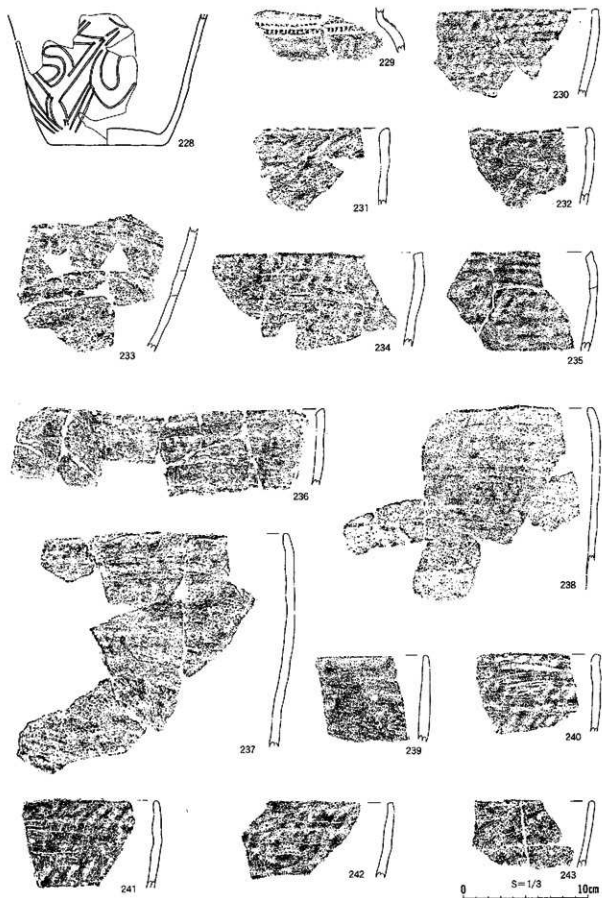


図53 旧河川跡出土土器(3) 3層-2

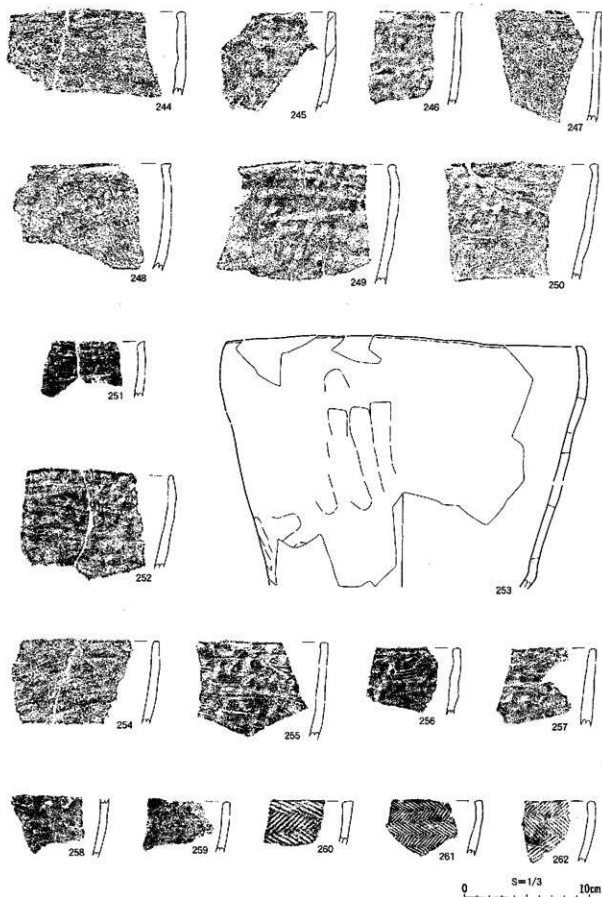


圖54 旧河川跡出土土器(4) 3層-3

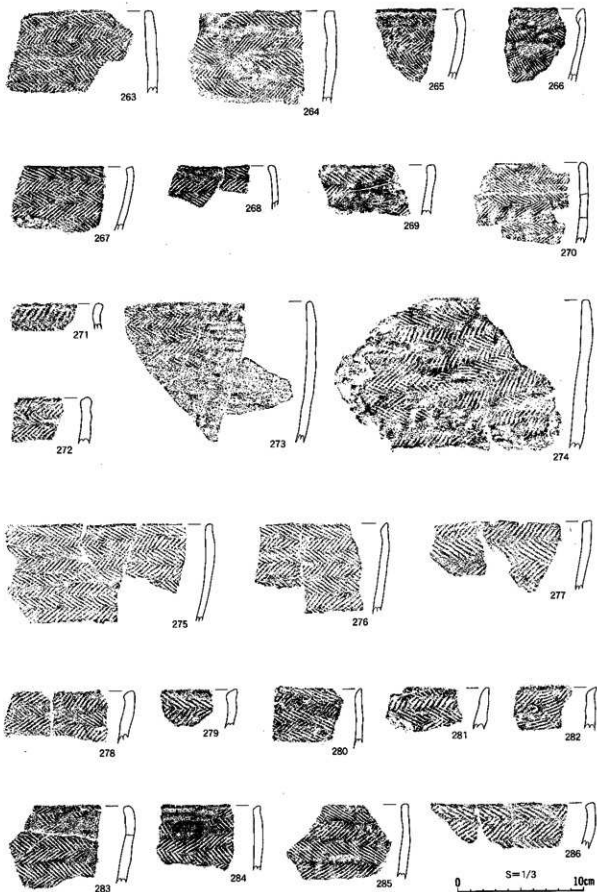


図55 旧河川跡出土土器(5) 3層-4

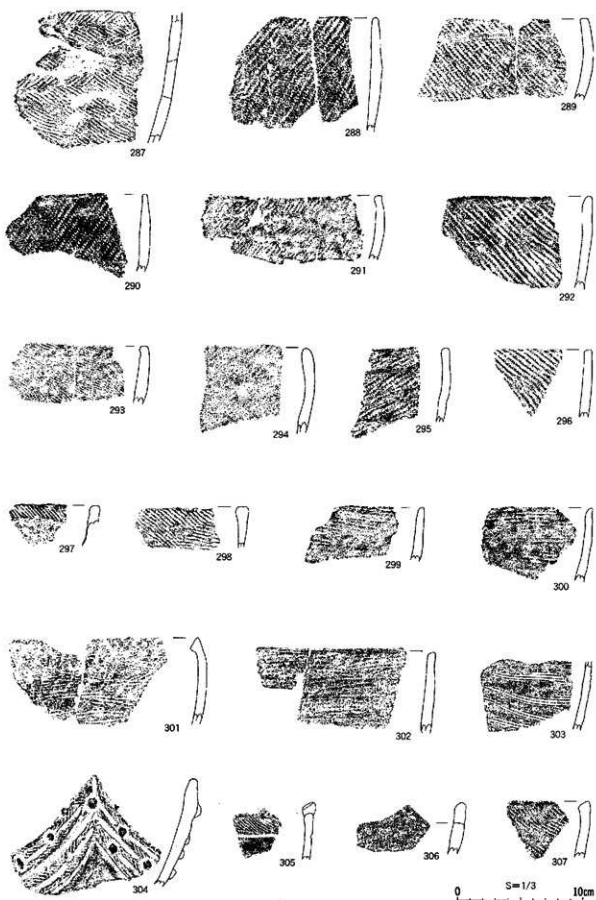


図56 旧河川跡出土土器(6) 3層-5



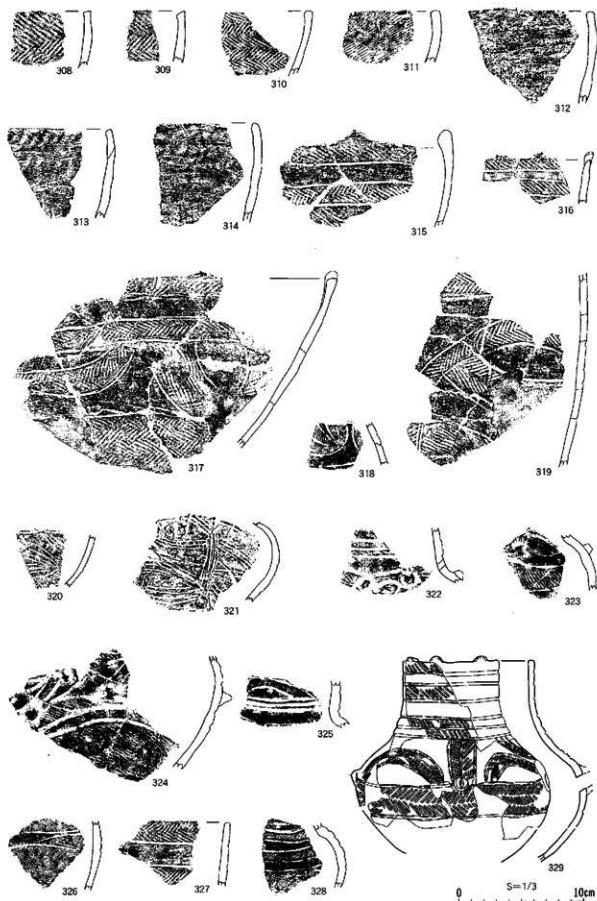


図57 旧河川跡出土土器(7) 3層-6

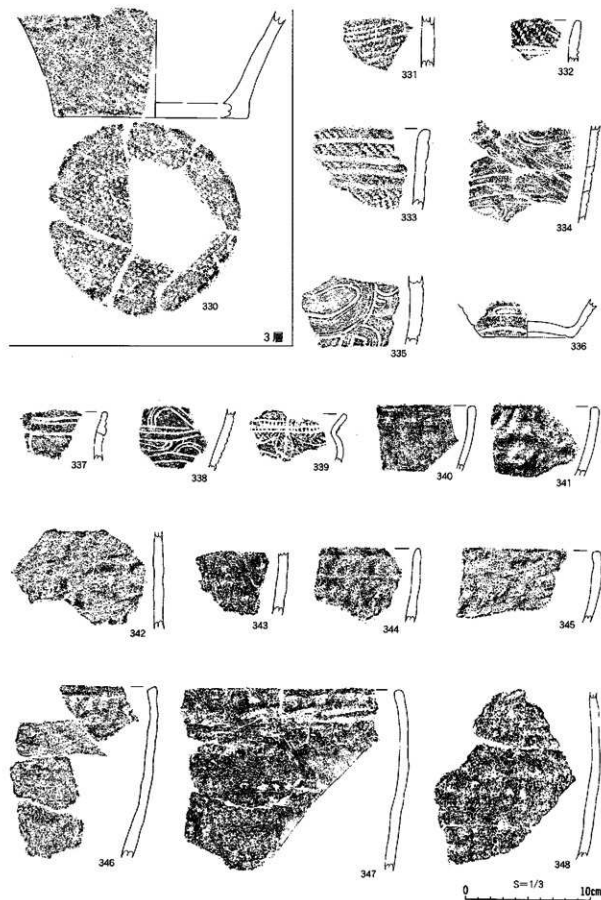


図58 旧河川跡出土土器(8) 3層-7、10層

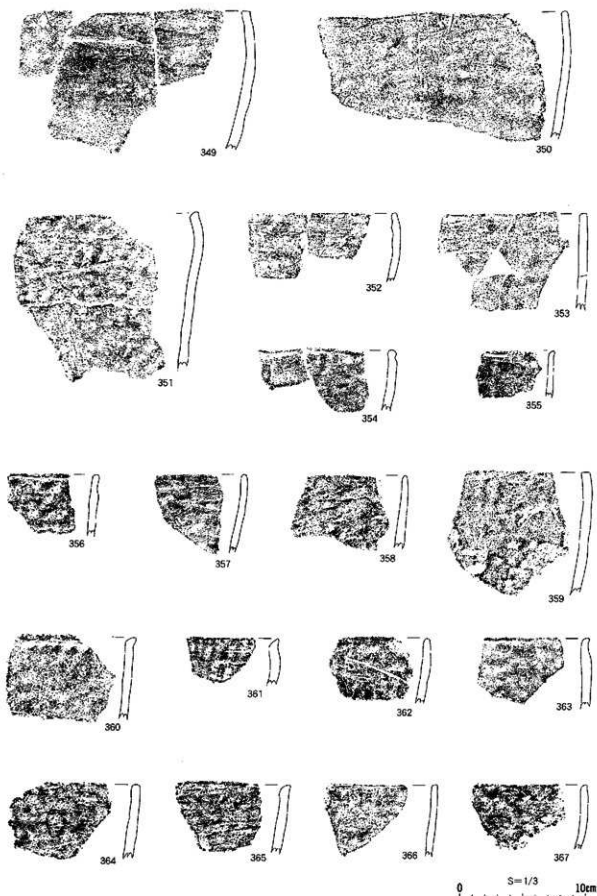


図59 旧河川跡出土土器(9) 10層-2

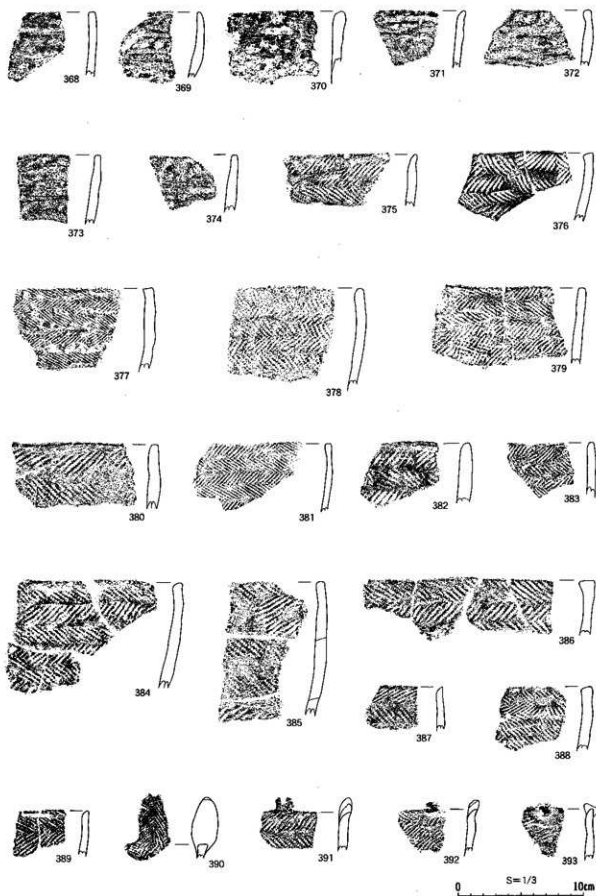


図60 旧河川跡出土土器 (10) 10層-3

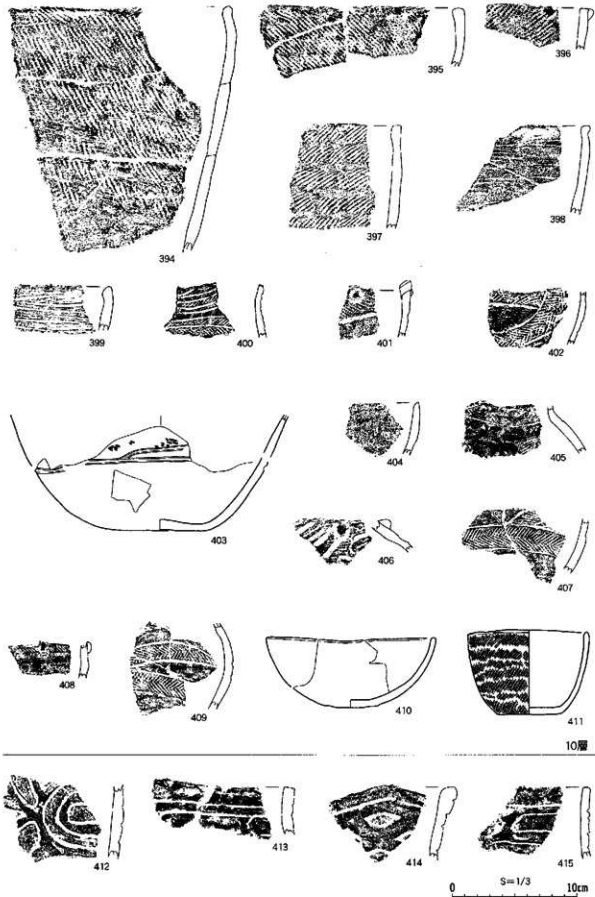


図61 旧河川跡出土土器(11) 10層-4、13層

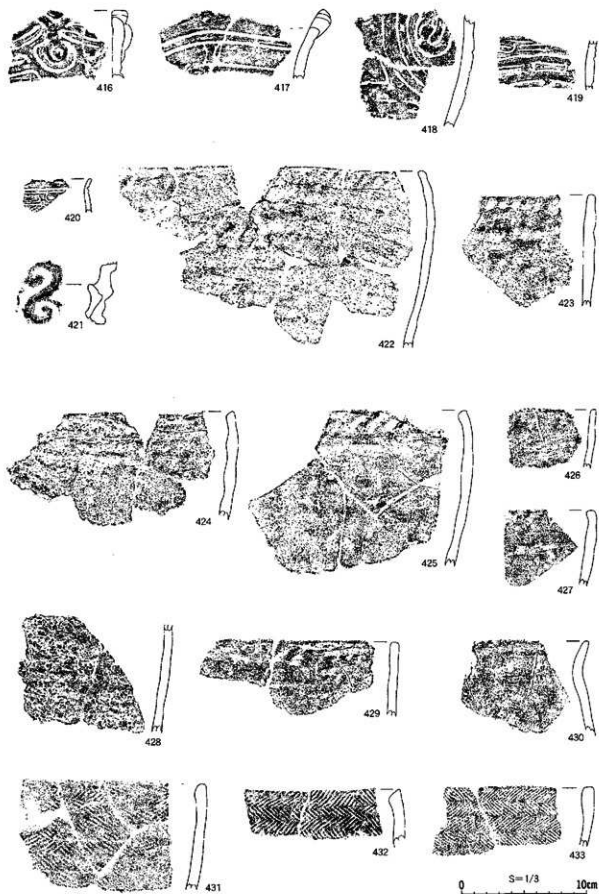


図62 旧河川跡出土土器 (12) 13層-2

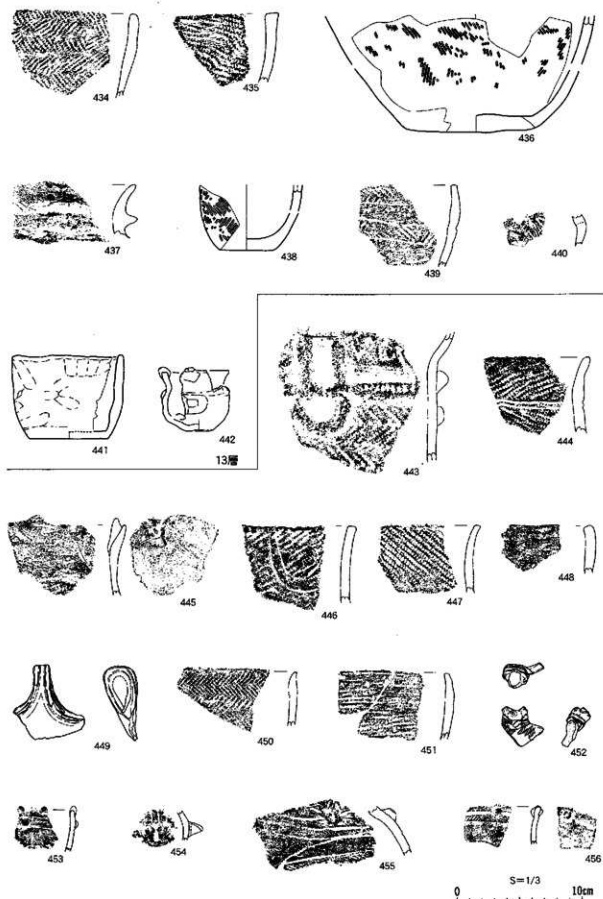


図63 旧河川跡出土土器 (13) 13層-3、旧河川跡一括

無茎尖基 (S14) のものがある。S12は、石鏃の未製品である。

S15・16は、石鏃である。S15は、両面加工のもので先端部に磨耗痕が明瞭に見られる。S16は素材剥片の片面のみを加工し、機能部を作出している。

S17～24は、石匙である。S17・19は、両極剥片を素材にした縦型の石匙である。S17はつまみ部の作出以外に、規則的な二次調整が見られない。S19は、刃部側を欠損するが、残存部の観察から両面の縁辺部の加工が認められる。S18は、縦長剥片を素材にし、打面側につまみ部を作出する。刃部は片面のみ加工されている。S20は、剥片を素材に、つまみを作出し、刃部は片面の側縁のみ二次調整が施される。S21は、横長剥片を素材にし、つまみを打面側に作出し、刃部側は片面の縁辺に二次調整が加えられる。S22は、縦長剥片を素材にした横型石匙である。刃部側は片面の縁辺にのみ二次加工が施される。S23は横長剥片を素材にし、刃部は背面側の縁辺にのみ二次加工が施される。S24は、縦長剥片を素材にした横型石匙である。背面側はほぼ全面、腹面側は縁辺にのみ二次調整が施される。

S25は、両面調整が施されるもので、その形態から筥状石器とした。S27・28は背面の縁辺にのみ、二次調整が施されるスクレイパーである。S29は使用痕のある縦長の剥片。S32は、三角形の突出部を5ヵ所作出していたと考えられる異形石器で、残存している突出部は2ヵ所のみである。両面の縁辺部に二次調整が加えられる。S33・34は、礫器と考えられ、S33は縁辺の三辺は片面からの加工、一辺は両面からの加工で、鋸歯状の刃部状を呈する。

S35～S47は、凹石・叩石・磨石である。複数の用途に用いられるものも多く、その場合、「叩凹石」・「磨叩石」などと分類した。S35は、両面に浅い凹みが、一側面に叩き痕が残される叩凹石である。S36は、両面に浅い凹みが1ヵ所ずつ残される凹石である。S37は両面に浅い凹みと深い凹みが残され、上下の両端部に叩き痕があり、破損が見られる叩凹石である。S38は両面に浅い凹みと磨痕が残る磨凹石である。S39・40・42～45は叩凹石である。S42～45のように、石英安山岩や流紋岩の細長い石材も利用される。S41は片面に深い凹みと破損跡、もう片面には磨痕が多く残る磨凹石である。S46・47は、磨叩石である。S48は、凝灰岩製の石皿である。使用面の縁辺にはやや高くなった縁が作り出されている。S49は、叩き痕も残るが、砥石にも用いられたものと考えられる。幅2～4mm、深さ2mm程度の断面V字形の溝が4本、一面の端部に近いほうに残される。

S50は、上下を欠損する石棒の一部と考えられる。全面に成形時の敲打痕と擦痕がよく残る。

S51は、上半部を欠損する石刀である。石材を荒打ちし、その後、磨いて整形した痕跡がよく残る。刃部側と考えられる柄が突出する。柄より上位は平坦に整形され、刃部に近づくにつれて、平坦部が狭くなる。

(永嶋 豊)

### 3 第101号遺物集中区・(図69～72)

XIII B-195グリッドを中心とした区域とそれに隣接する旧河川跡西側の堆積土内から、縄文時代晩期後葉と考えられる土器群が出土した。両地点で、同一個体の破片を含むため、ここにまとめて報告する。一部、弥生時代前期の砂沢式期の遺物を含むが、概ね「大洞A' 式古段階」に相当するものが



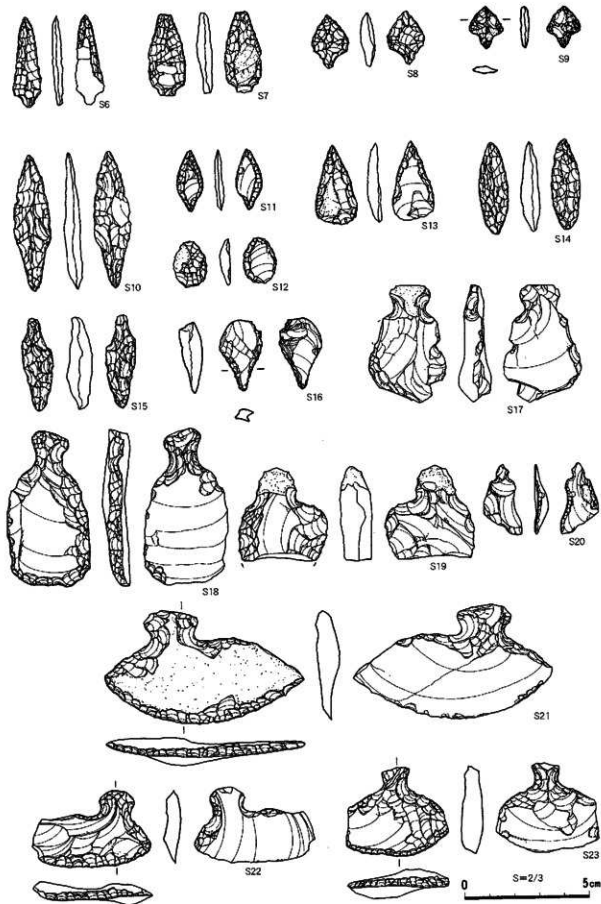


図64 旧河川跡出土石器 (1)

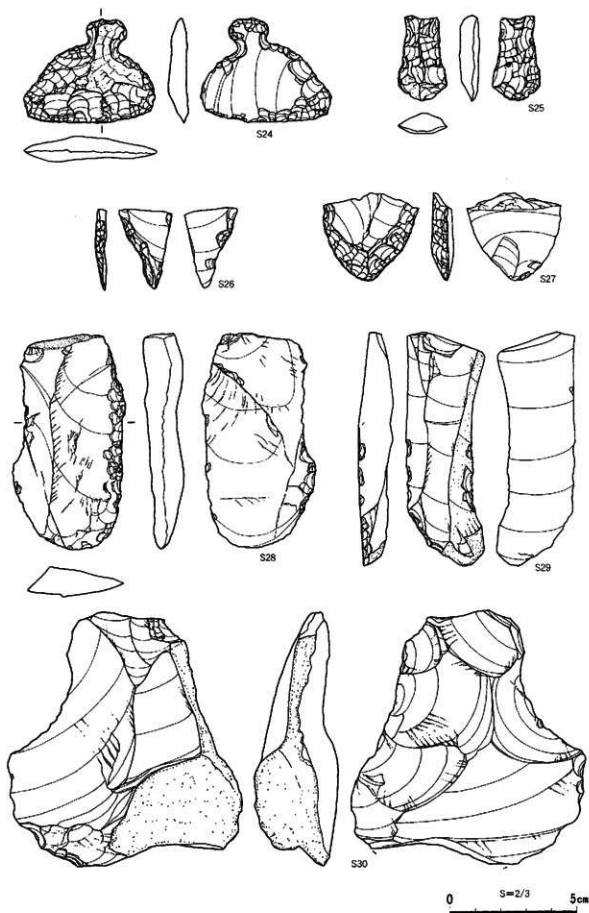


圖65 旧河川跡出土石器(2)

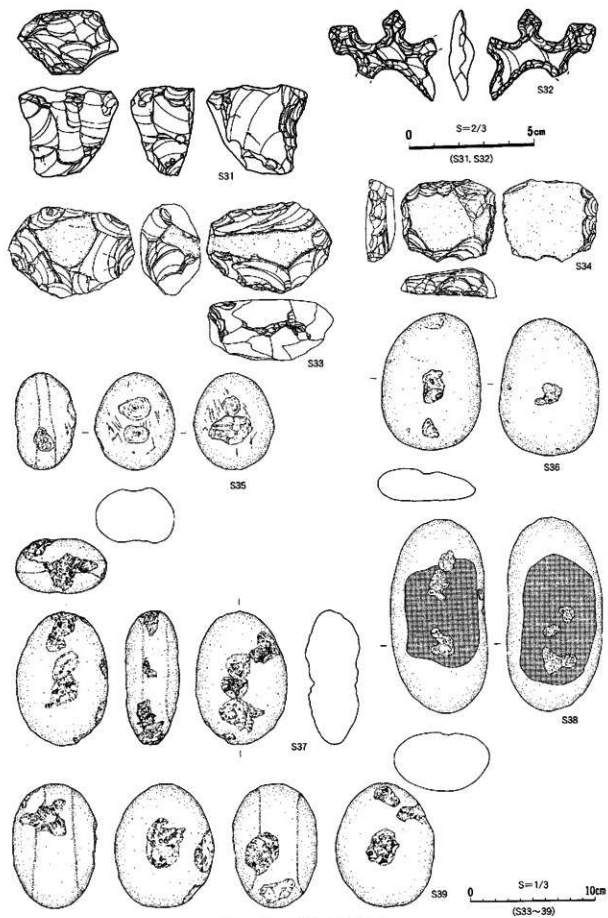


図66 旧河川跡出土石器(3)

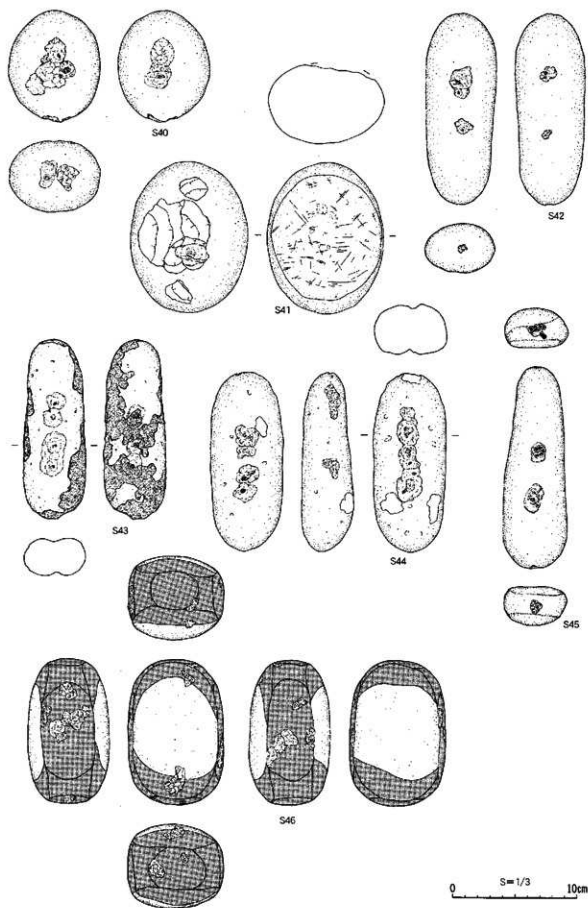


圖67 旧河川跡出土石器（4）

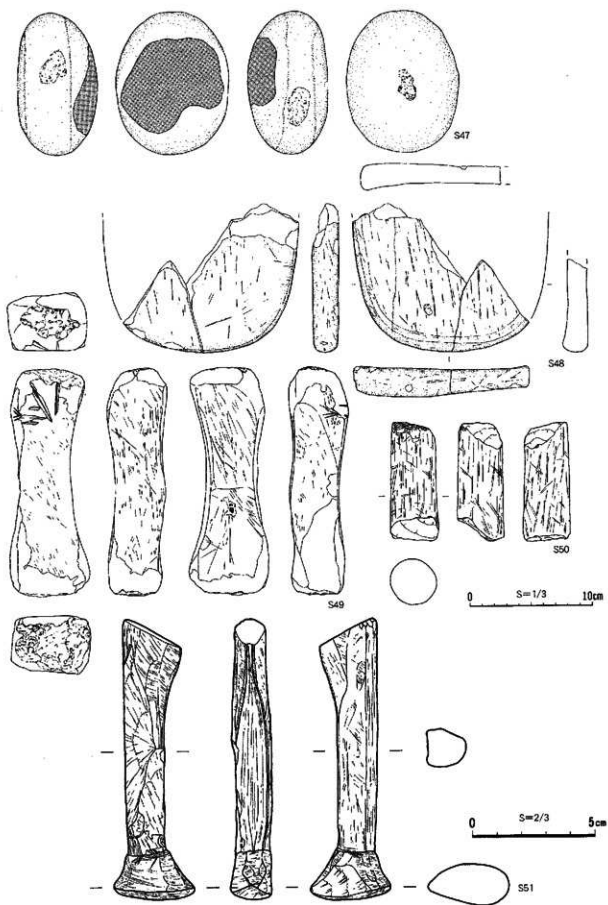


図68 旧河川跡出土石器(5)

主体を占めている。

【遺物集中出土区1 出土土器】(図69～72)

出土土器群の中で、主体を占めるのは、縦方向の条線文・条痕文を施文した後に、口頸部に3～5本の平行沈線を施す煮沸用の深鉢である。このタイプの煮沸用の深鉢は、縄文時代晩期中葉～後葉に、青森県津軽地方で盛んに用いられるもので、当遺跡においては縄文施文の煮沸用深鉢よりも目立つ。条線の施文工具幅は10～20mm程度である。

口頸部の平行沈線と組み合わせられる体部文様として、無文や縄文もある。

I層出土土器で、図示したものは6点のみである。圧倒的にII層出土のものが多く、I層出土のものも、本来は2層に包含されていたものと考えられる。457・458は、縦方向の条線文施文の後に、5本の平行沈線が施文される。

460は、全面にRL縦走縄文を施した後に、口頸部に窟貼付などで、平行工字文を構成する煮沸用の深鉢と考えられる。沈線幅は4mm程と太いが、沈線断面形態は三角形状であり、砂沢式の特徴からは外れる。461は、全面にRL斜行縄文が施され、口頸部の4本の平行沈線の2本目と3本目を縦の幅広の短沈線で結び、平行工字文化している。短沈線によって切られた向かい合う隆線端部には、僅かな盛り上がり確認できる。工字文直上の口唇部には、二又の突起が付される。外面に炭化物が付着しており、煮沸用の深鉢である。462は口縁部のみ若干薄く、無文となる煮沸用の鉢と考えられる。

463～511はすべてII層出土である。464は口唇部が押圧による波状口縁となる無文の深鉢である。465・466は、縦方向の条線のみが施される深鉢で、465は押圧による波状口縁となる。480は平行沈線と無文体部の組み合わせである。472は幅2mm弱の細い沈線が施され、太い沈線が多い他の土器と比べて異質である。470～480は、条線文と口縁部に3～5本の平行沈線が組み合わせられる。470は、口頸部付近のみに横方向の条線が施され、その後には施された縦方向の条線で目立たなくなっている。

476と477は同一個体であり、押しつぶされたような状態で出土した。476～480まではすべて、条線文と4本組平行沈線の組み合わせである。481～485までは、地文不明の土器である。486は無文の体部と4本組平行沈線の組み合わせで、口唇部に斜めの刻みを施す。

487～492は、頸部で微妙に屈曲するものである。487は幅1.5mmほどの細い沈線で平行沈線が施され、口縁部が押圧による波状口縁を呈するものである。488は口縁内面がやや肥厚する。489は、右がりの浅い条線文施文後に、7本の細い平行沈線が施されるもので、頸部で屈曲し、頂部二又の突起が付される。頸部を意図的に凹状に整形している。

490は、押しつぶされたような状態で出土した。口縁内面が肥厚する。491は上から2本目が、連続短沈線となる装飾的なもので、これも口縁内面が肥厚する。492は内面沈線が施される。

493は、断面半円形の太い沈線と大きめの瘤が平行工字文に貼付される、煮沸用の有文深鉢である。口縁内面にも上下幅6mmの幅広の沈線が施され、口縁外面にも縄文が施されており、494と共に弥生時代前期の砂沢式の特徴を有する。494は頸部に無文帯を有する煮沸用の有文深鉢で、砂沢式期に特徴的な形態である。495も同様の形態であるが、沈線はやや細めで、内面沈線が施される。496は、頸部に窟貼付の平行工字文が施される深鉢である。

500・501は口頸部平行沈線と体部縄文が組み合わせられるものである。503は矢羽根状沈線文また

は波状工字文が施される鉢と考えられる。

504は体部全面に、変形工字文が重層する鉢である。内外の沈線内には赤色顔料が明瞭に残る。変形工字文を構成する三角形の頂点には、左右にφ2mm程度の小さな貼瘤が付される。変形工字文の上部には向かい合う二又の突起が見られるが、砂沢式期のものほどは発達しない。

505は完結型の変形工字文が口頸部に施される浅鉢である。沈線が細く、文様帯が狭く、大洞A'式古段階の特徴を示している。506は、π字文が施される浅鉢・高坏である。507はシャープな沈線で、変形工字文が施文されるもので、口唇部にも沈線が施される。

509は、無文の壺の頸肩部、510・511は煮沸用の台付深鉢・鉢の台部である。

#### 4 旧河川跡出土・縄文時代晩期後葉の遺物 (図73~77)

沢1層出土の土器は、512~526である。512は口唇部に指頭状の間隔で押圧が加えられ、RL斜行縄文が施される深鉢。513は口頸部の平行沈線を、短い弧線で結び平行工字文を作り出している。515は521と同一個体であり、また集中出土区1の461とも同一である。4本の沈線中、2本目と3本目を縦の短沈線で結び、平行工字文を作り出している。

516は、口唇部に指頭状の押圧を加え、波状口縁としている。頸部に、ミガキの施される無文帯を有し、口縁部と体部にはRLの縦走縄文が施される。

517~519は同一個体で、頸部に無文帯を有する煮沸用深鉢である。口唇部に押圧が加えられ波状をなし、通常は頸部文様帯に平行工字文が施文されるものが多い。縄文はLRの縦走である。

522・523は、器面の磨耗が著しいが、頸肩部に8条の沈線が施され、平行沈線文と考えられるが、一部沈線が斜行するものも認められ、あるいは変形工字文の可能性もある。

524は口縁部に二又の突起、頸部に短沈線列が施され、その下におそらく波状工字文またはその組形文様が施文される台付深鉢と考えられる。

525・526は変形工字文が施されるもので、526は円板状突起が変形工字文の上位に位置する。変形工字文の頂部には挟りと粘土のよせが確認できる。貼付される粘土粒は比較的大きく、φ4mm程度である。

527~532は、沢2層出土土器である。529は、変形工字文が施される鉢である。無文帯を挟んだ後に体部に、もう一段変形工字文が配置されることも予想される。文様要素の三角形の頂部・中点内に刻みが加えられる。532は、煮沸用の台付深鉢の台部である。

533~545は、沢3層出土土器である。縄文のみの深鉢が、1点のみ見られる(533)。534~537は縄文と平行沈線文が組み合わせられるもの、538~541は条線文と平行沈線文が組み合わせられるものである。537は口唇部に斜めの刻目が施される。543は、微小な瘤で構成された平行工字文が施文される鉢。544は、貼瘤の大きさ、沈線の太さや半円形の沈線断面形から、砂沢式期のものと考えられる。

546~560は、沢6層出土土器である。546・547はそれぞれ、縄文・条線のみが施された深鉢。548は、平行沈線が施される深鉢に、二又の突起が付されるものである。549~551は縄文と平行沈線が組み合わせられる深鉢。553は、遺物集中出土区1の489と同一個体であることから、両区の遺物

は同時期のものを含む事がわかる。

557は、頂部二又の突起が付され、平行沈線の下に斜沈線または波状工字文が施される(台付)深鉢・鉢で、外面に炭化物が明瞭に残る。559は、完結型の変形工字文が施される浅鉢である。変形工字文の頂点間中点や底角部に挟りこみが認められる。

560は、頂部二又の突起が付され、平行工字文または流水工字文が施される浅鉢である。口頸部と体部の屈曲部に、2個/cmの刻目が施される。

561～566は、沢13層上面出土である。561は7本の平行沈線とLR縦走縄文が施される深鉢・鉢であり、大洞A式～大洞A'式古段階に見られる平行工字文が施されることが多い煮沸形態である。

563は、上面が「逆Sの字形」になる突起が付され、無文帯+平行工字文が施される煮沸用の有文深鉢である。566は器面の磨耗が著しく、文様が確認しづらいが全面に雑な平行沈線文が施されているようである。

567～579は沢13層出土土器である。568・569は、口唇部が薄く処理され、体部に縦走縄文が施される。570は、指頭状の押圧で波状口縁となる、LR縄文が施される深鉢である。571～574は縄文と平行工字文が組み合わされる深鉢である。

577・578は、波状工字文が施される壺である。頸部には、推定で12単位となる瘤を用いた平行工字文が、その下には波状モチーフが途切れずに一周巡る波状工字文が施される。

580は沢14層出土であり、内面刻み突起が付され、口頸部に平行沈線と連続短沈線が巡る(台付)鉢である。

581～587は、層位不明の沢出土の土器である。582・584は平行工字文と縦走縄文が施される煮沸用の深鉢である。585は、波状工字文が施される煮沸用の台付鉢である。文様施文前に、器面全体にLR縦走縄文が施される。口縁部には厚さの薄いものと厚いもの2種の二又の突起が付され、頸部には刺突列が巡る。586もおそらく波状工字文が施される、煮沸用の台付鉢であり、突起外面や文様間に平面形三角形の刺突が充填される。587は楕円文を利した工字文風の文様が施される台部である。

#### 【遺物集中出土区1・旧河川西側 出土石器】(図76・77)

縄文時代晩期後葉の土器のみが排他的に出土した、遺物集中出土区1と旧河川西側で出土した石器も同時期である可能性が高いので、ここにまとめて掲載した。

S52～S56は、集中出土区1から出土したものである。S52は有茎石鏃で、側縁部から基部に斜めに移行する形態である。S53はつまみを有する石鏃で、刃部側は両面加工であるが、つまみ側は片面の側縁のみ二次調整が施される。つまみ側が打面となる縦長の剥片が素材に用いられているが、打面側の折り取りが行われた可能性がある。

S54は縦長剥片を用いた石匙で、素材剥片の軸に対して斜めにつまみを有する。つまみ部の作出には、剥片の打面の反対側に残った自然面部分が選択されている。打面側の厚い部分は、剥離によって薄く加工され、その後、刃部背面側の縁辺にのみ二次調整が施されている。S55は、スクレイパーに分類したが、刃部と考えた部分の剥離が不規則で、人為的な二次調整ではなく、偽石器の可能性もある。



S57～S63は、旧河川西側の出土である。S57は有茎平基の石鏃で、当遺跡では珍しい黒曜石が用いられている。S58は、刃部の片面側にだけ二次加工が施される石匙で、つまみには打面となった自然面が残る。S59は、ほぼ原石の大きさを残す石匙と考えられ、小さな丸石状の原石を両極剥離によって素材剥片を得ている。刃部は自然面を残す側のみ二次調整が施される。

S60は剥片の周縁部を加工した、スクレイパーである。S61は横長剥片を素材としたもので、形状から筈状石器に分類したが二次調整は多くなく、偶然このような形に剥離した剥片である可能性もある。S62は剥片の鋭利な縁辺を利用した、使用痕ある剥片である。S63は細粒凝灰岩の扁平な石器である。片面は平坦に加工されているが、用途は不明であり、同様の形状のものは第105号土坑でも検出されており、軟質の石材である為、利器とは考えず、石製品に分類した。

(永嶋 豊)

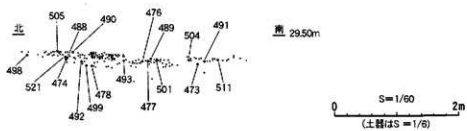
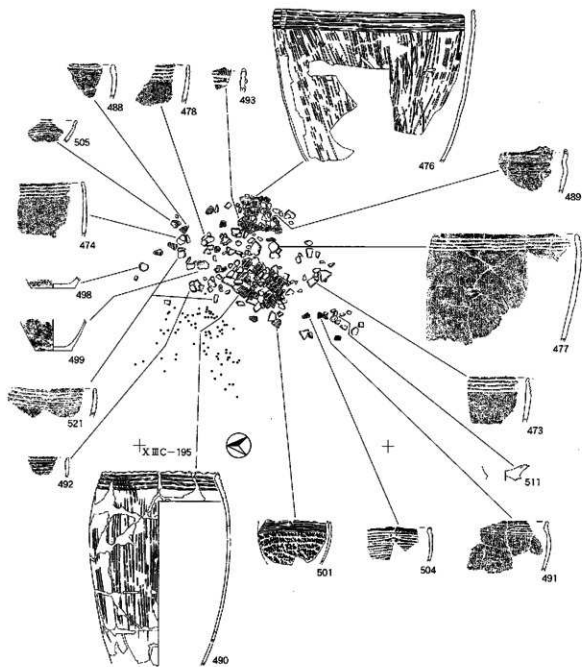


图69 第101号遺物集中区 遺物出土位置図

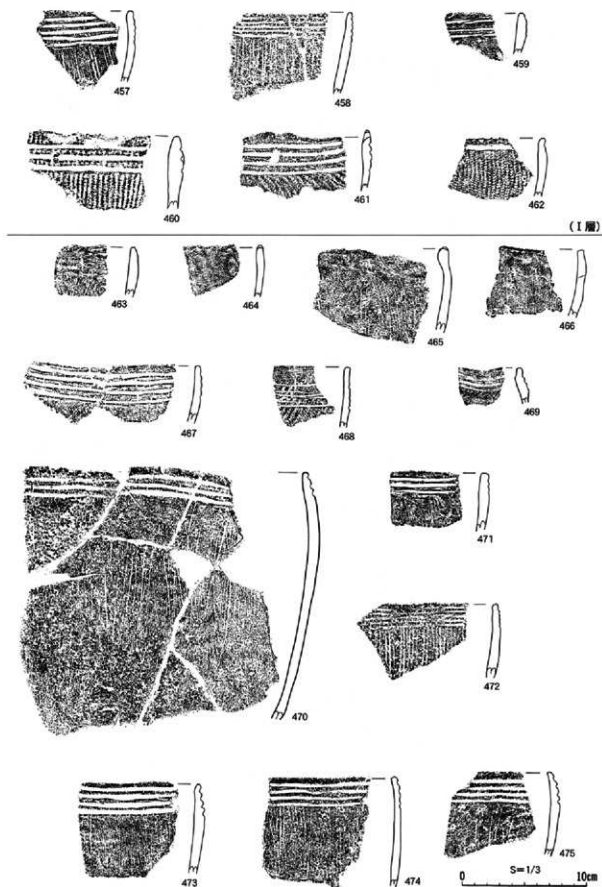


図70 第101号遺物集中区 出土遺物(1)

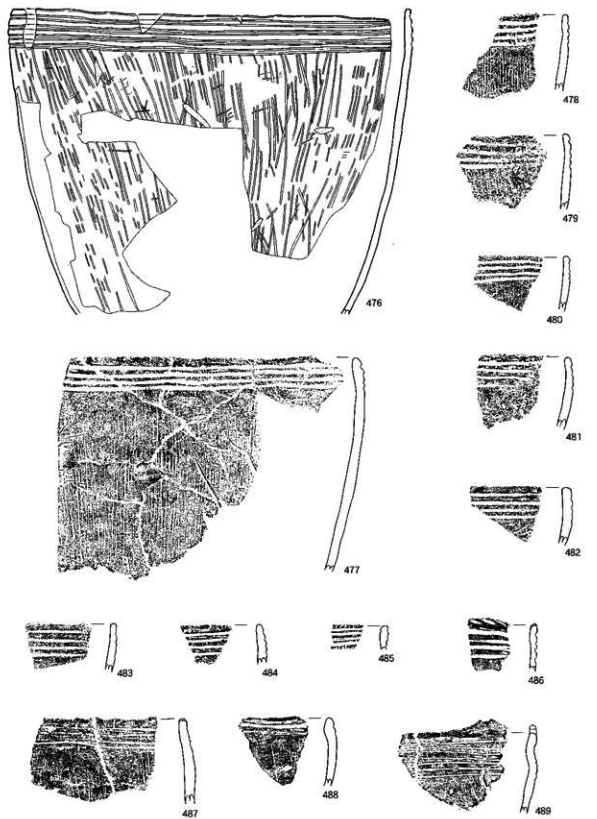


图71 第101号遺物集中区 出土遺物(2)

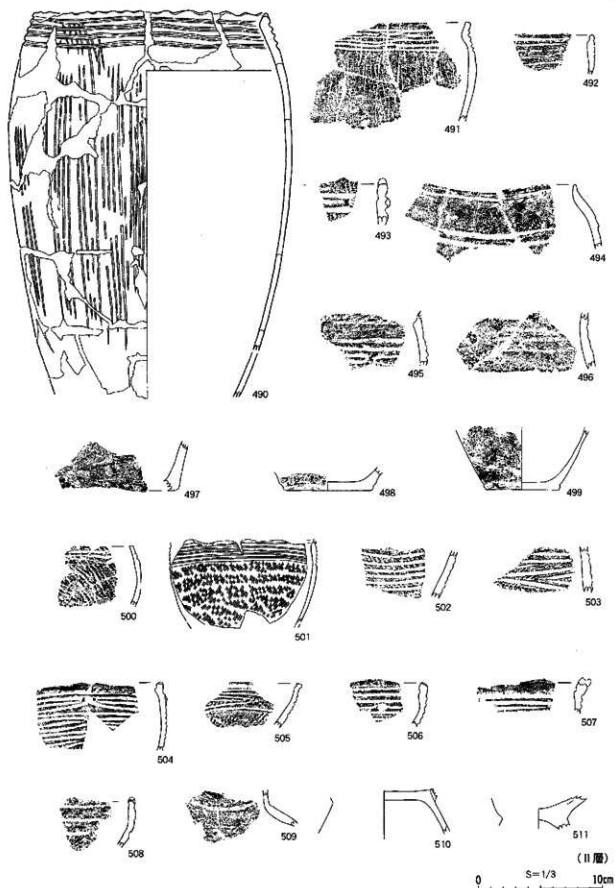


图72 第101号遗物集中区 出土遗物(3)

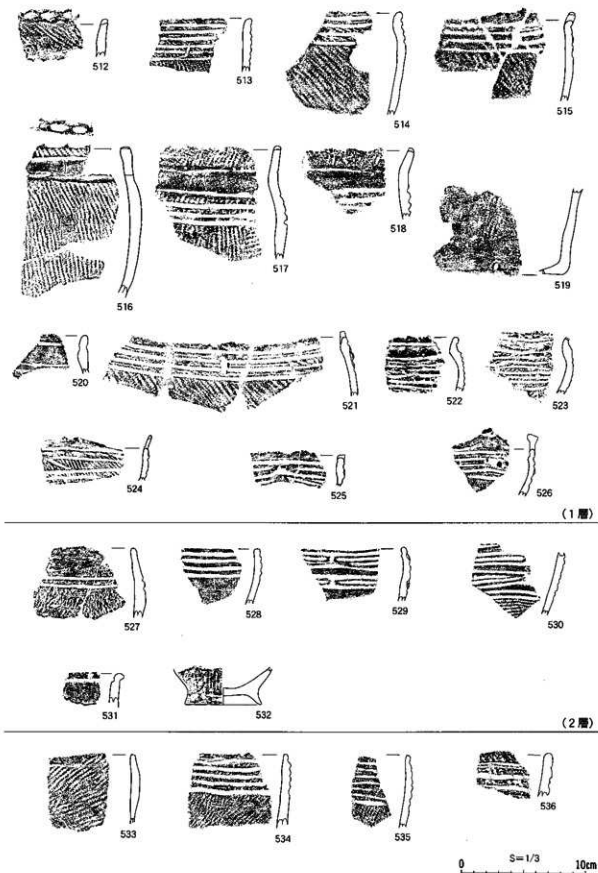


図73 旧河川跡出土 縄文時代晩期後葉遺物 (1)

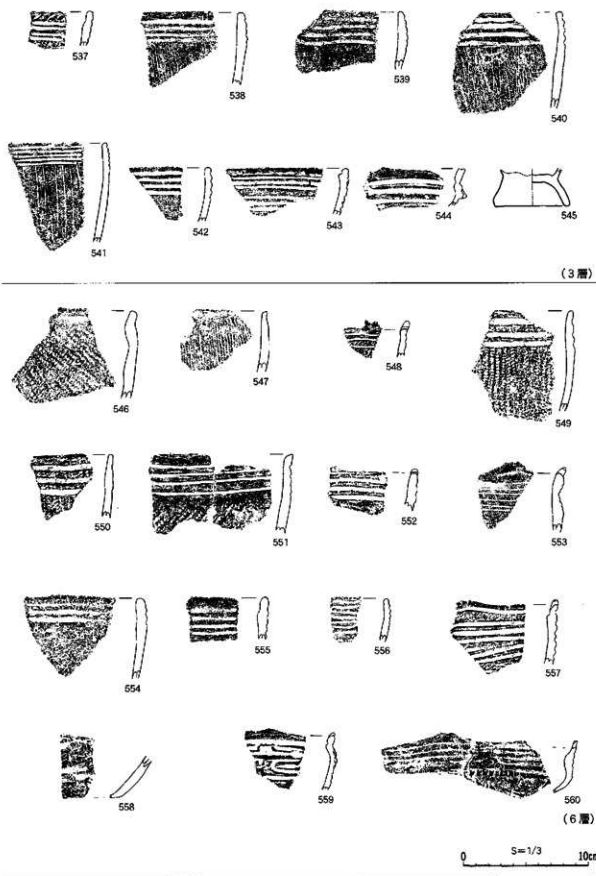


図74 旧河川跡出土 縄文時代晩期後葉遺物(2)

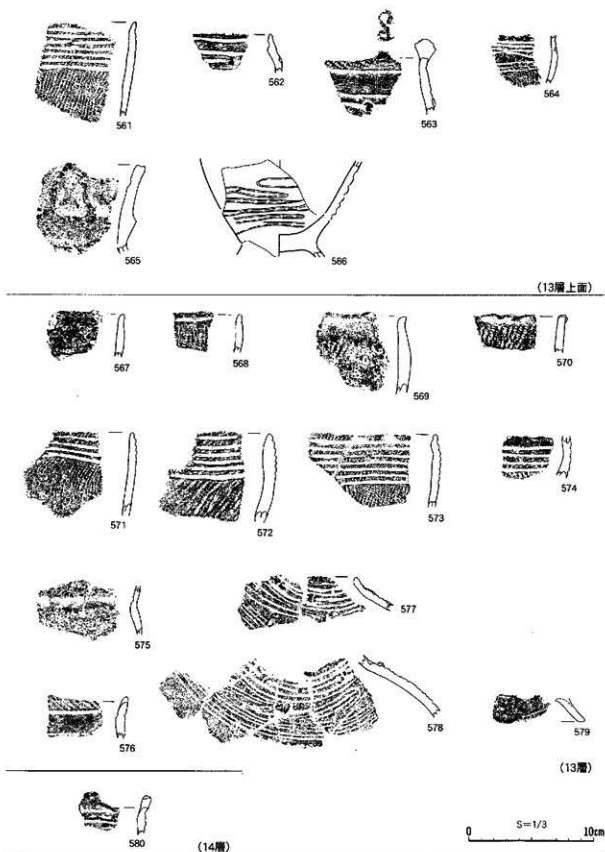
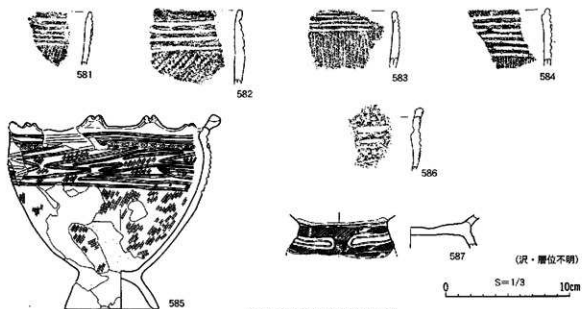
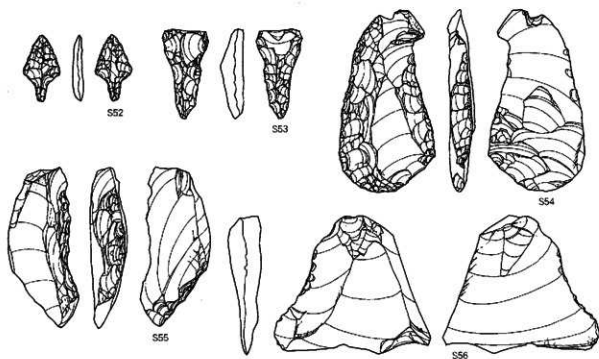


図75 旧河川跡出土 縄文時代晩期後葉遺物(3)

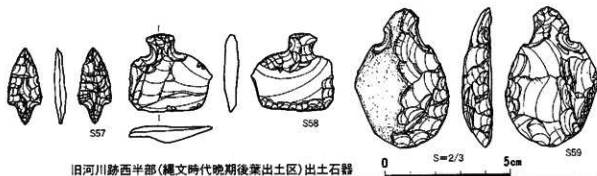




旧河川跡出土縄文時代晩期後葉遺物



第101号遺物集中区出土石器



旧河川跡西部(縄文時代晩期後葉出土区)出土石器

图76 第101号遺物集中区・旧河川跡西部出土石器

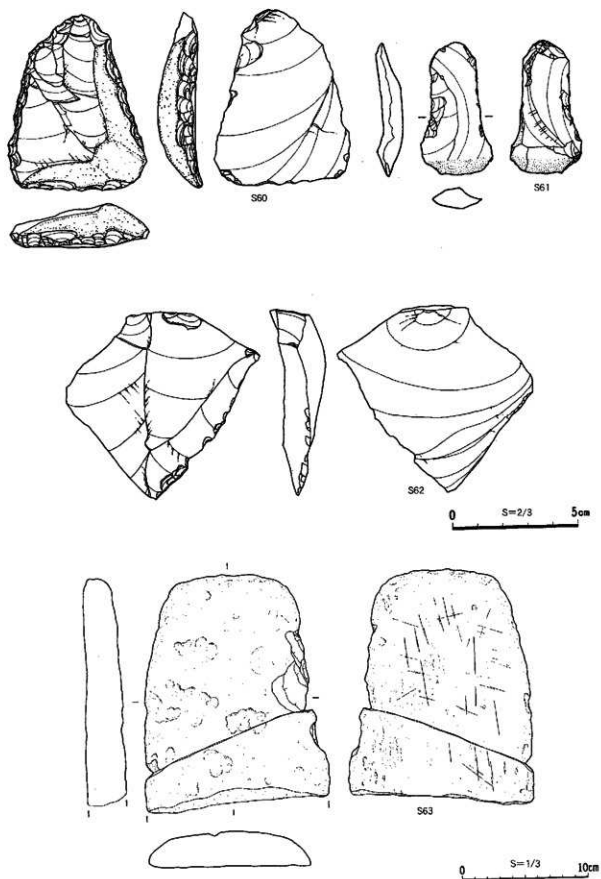


図77 旧河川跡西半部（縄文時代晩期後葉出土区）出土石器

## 第6節 遺構外の遺物（図78～87）

### 土器（図78～82）

588・589は、緩やかに外反する深鉢の口頸部で、共に縦方向にLR縄文が施されるもので、縄文時代中期末の大木10式期と考えられる。

590～610は、縄文時代後期前葉の土器と考えられる。590～592は、網目状糸文が施される深鉢である。593は平坦口縁の深鉢で、楕円文が施されている。594～606は、大波状口縁の有文深鉢で、楕円文が施されるものが多い。細めの沈線を、先端が扁平な鉋状の施文工具を立てた状態で、深めに施文するものが目立ち、沈線内の調整や重ね描きはあまり見られない為、沈線の切り合いが明瞭に残る。597・599は、口縁波頂部に楕円の沈線文が施され、口唇部にも沈線が見られる。600は、細く、やや粗雑な沈線で文様が構成されるもので、他のものに比べて新出の様相を示す。601～603は、波頂部から垂下する、粘土紐貼付の隆帯で装飾がなされる。607は渦巻状文に充填縄文が組み合わされるものである。609は壺の口縁部、610は壺の頸肩部に付される橋状把手である。

611～670は、縄文時代後期中葉～後葉の土器である。611～616は、無文の深鉢である。成形時の指による押さえ痕が目立ち、横方向の粗雑なナデ調整が多用される。617・618は、頸部で緩やかに外反する深鉢で、外面は丁寧なミガキ調整が施される。620は緩やかに外反する深鉢で、口頸部には横方向の条痕または粗雑なナデ調整が施され、体部にはRL斜行縄文が施されるようである。

621～632は、縄文のみが施文される深鉢である。621～630は異原体羽状縄文である。二種とも0段多条、LRのみ0段多条、両方とも0段多条ではないものがみられ、RLのみ0段多条のものは見当たらない。621～625はすべて口唇部が内傾（内削ぎ）するものである。626～629は口唇部が肥厚する。630は、上面が6mm×5mmの瘤が口唇部に非常に多く付される。縄文は異原体羽状縄文である。632は内面刻目突起とセットで、口縁部にφ9mmの円形の瘤が付されるものである。

633～639は、貼瘤が付される有文深鉢、壺・注口である。634・635は、スリット状沈線が入った入組み帯状文が施される、壺・注口である。上面刻目突起が付される。

636は、頸部で屈曲する有文の深鉢で、φ6mmとφ9mmの瘤が多数、縄文帯の中に付される。沈線が浅く、摩滅によって文様構成は確認は難しいが、棒状入組み文または鍵状入組み文のいずれかのバリエーションと考えられよう。口唇部は急角度で内傾（内削ぎ）する。637～639は有文深鉢の同一個体である。内面刻目突起とセットで丸形の瘤が付される。瘤は、スリット状沈線の入った縄文帯にも付され、φ8～13mmの丸形の瘤の他、9mm×6mmの縦長の瘤も付される。

641～643は、縄文時代後期中葉の大型の突起である。644～646は、無文の鉢である。647は、鉢または広口短頸壺と呼べそうな器形である。刻目帯が口頸部に3条施される。648は661と同一個体である。刻目帯が2条見られ、縄文帯で文様が構成される。649は袖珍土器の台付浅鉢であり、φ5mm程の竹管状の施文工具で、底上面に17個の刺突が重複して加えられる。650～652は、無文の壺の口頸部である。652のみ口縁部に山形突起が付される。653は、3本一組の平行沈線と貼瘤が組み合わせとなる壺の頸部である。

655は、瘤が多数付される無文の壺・注口である。最も高い瘤は器面から14mmも突出する。

656・657は壺・注口の同一個体で、細めの縄文帯で入組み文を施文し、その中に正面からφ3mm

の刺突を施す瘤が貼付される。その左右の縄文帯上にも、同様の小型の瘤が付される。

658・659も、壺・注口の同一個体で、上面刻目瘤と上下穿孔瘤が縄文帯に付される。660は、ほぼ完形の注口土器である。内湾気味に立ち上がる頸部には、横位の木葉状縄文帯が上面三角形の瘤を境に4単位施される。体部には、注口の付け根部分と同じ高さで上面刻目瘤が90°ごとに3点配置され、それを目安に入組み帯状文が4単位配される。入組み帯状文の屈曲部の内側にのみ貼瘤が付される。底部は低い高台が付く。注口部は中位の上下に瘤が付される。

664・665は、間隔の狭い2本一組の沈線が施されることによって、その内側に残る部分が微隆起線文のように見える効果を有する。台部最大径付近に、二条の刻目隆帯があり、その間を微細な斜沈線で矢羽根状のモチーフで充填する。刻目隆帯レベルには、器面から1.4mmも突出する親指形の突起が付され、また上下の刻目隆帯をC字形の隆帯で結ぶ。微隆起線には径2mm程の微細な瘤が約1cm間隔で付される。刻目隆帯の上位には、微隆起線によって、樺状入組み文が施される。沈線内や665のアーチ部内外面には、赤色顔料が多く残る。664はアーチ状の上位部分であり、突起や刻目帯などが見られ、これにも赤色顔料が鮮やかに残っている。

666～669は台部である。斜行縄文が施されるもの(666)、無文のもの(667・669)、横走縄文帯に異原体羽状縄文が施されるものが見られる。

## 石器(図83～87)

S64～72は石鏃である。有茎平基(S64・72)・有茎凸基(S65～70)・未製品または無茎(S71)が見られる。S71は有茎の未製品の可能性も考えられ、僅かであるが抉りが認められる。

S73～84は石匙である。S73～82は縦型の石匙である。S73～76・80・81・82は打面側につまみを作出する。S79は、打面の反対側につまみを作出する。

S73・74・80・81は、刃部の背面側の縁辺にのみ二次調整が施される。S75・76は、背面側・腹面側で、それぞれ一側縁のみに二次調整が施される。S77・78は、刃部の両面の側縁に二次加工が施される。

S84は、横長剥片を素材にした横型の石匙である。刃部は背面側にのみ、二次調整が施される。

S85は、剥片の末端部に急角度の刃部が形成され、石筥に分類した。

S86～91は、剥片の縁辺に連続的に二次調整が加えられ、スクレイパーに分類した。

S93は、剥片にノッチ状の加工を両面から施し、突出部を作出しており、異形石器とした。

S92・94は、礫器である。素材となる礫の縁辺に両面から剥離を施し、刃部を形成している。

S95・96は、共に安山岩を素材とする磨製石斧で、同一グリッドからの出土である。両方とも、荒打ちの痕跡が残る。S95は、基部側を欠損する。S97は、緑色細粒凝灰岩を素材とする小型の磨製石斧であり、側面には自然面が残るが、刃部から両面の中央部は、擦痕が明瞭に残る。

S98～104は、凹石、叩石、磨石などである。S98は叩石であり、両面に浅い凹みが残されるもので、被熱痕が認められ、出土時には、4片に割れていた。S99も両面に深い凹みが残される凹石である。

S102は両面に浅い凹みが、端部の一端には叩き痕が、二側面には明瞭な磨痕が見られ、磨叩凹石とした。S103は形態はS102と似ているが、二側面が磨りに使用されたと考えられ、磨石とした。

S104は、両端部、一側面に叩き痕が残る叩石である。

S105は、扁平な円形の凝灰岩の両面の周縁または一部に剥離を加え整形するもので、片面の中央部には、擦痕らしきものが見られるが明瞭ではなく、用途不明である。台石の類であろうか。

#### 文化遺物 (図87)

鐔形土製品1は、つまみの部分である。つまみの両面には亀甲形のモチーフが、側面には楕円らしきモチーフが施される。また側面にはφ2mm程の穴が穿孔されている。

S106～108は、凝灰岩製の三角形岩版である。3点とも無文のものであり、片面を平坦に、片面を蒲鉾状に整形している。

(永嶋 豊)

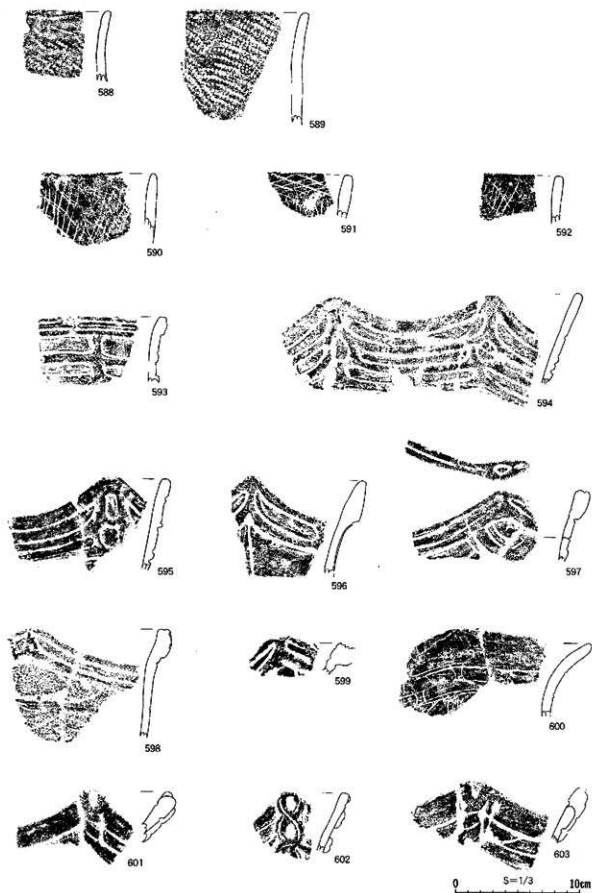


図78 遺構外出土土器(1)

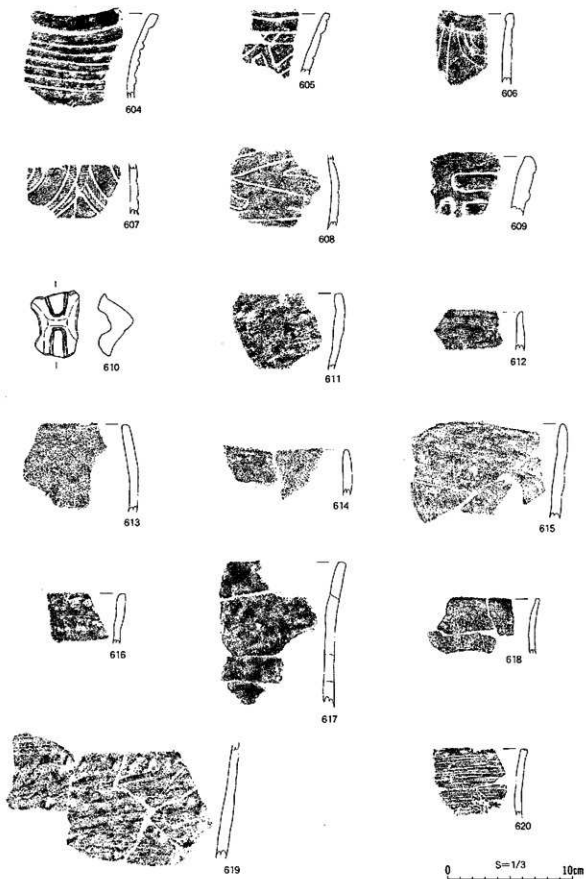


図79 遺構外出土土器(2)

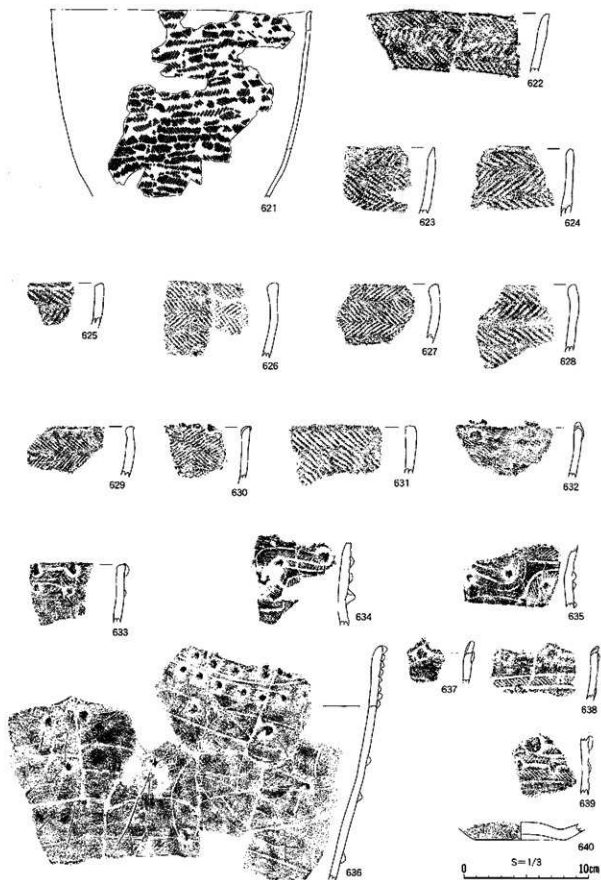


図80 遺構外出土土器(3)



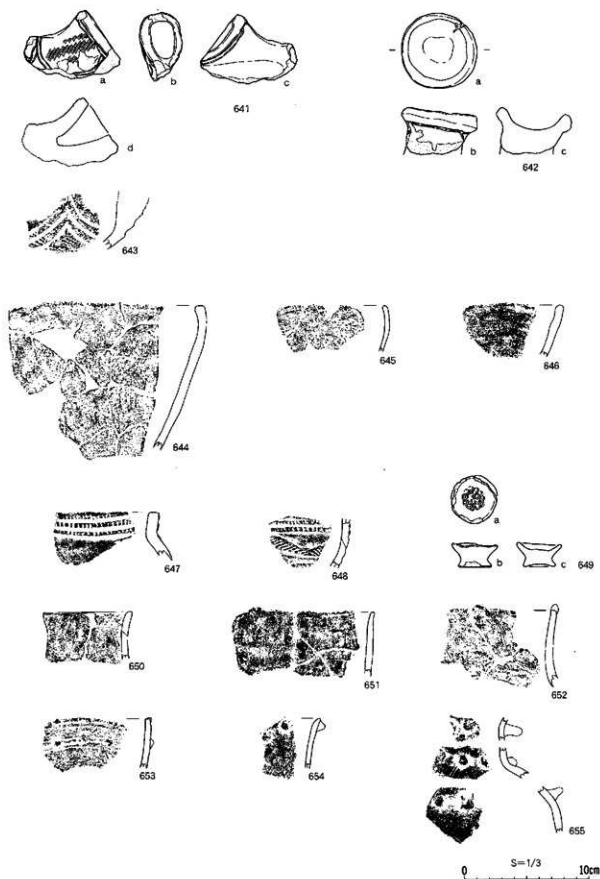


图81 遺構外出土土器(4)

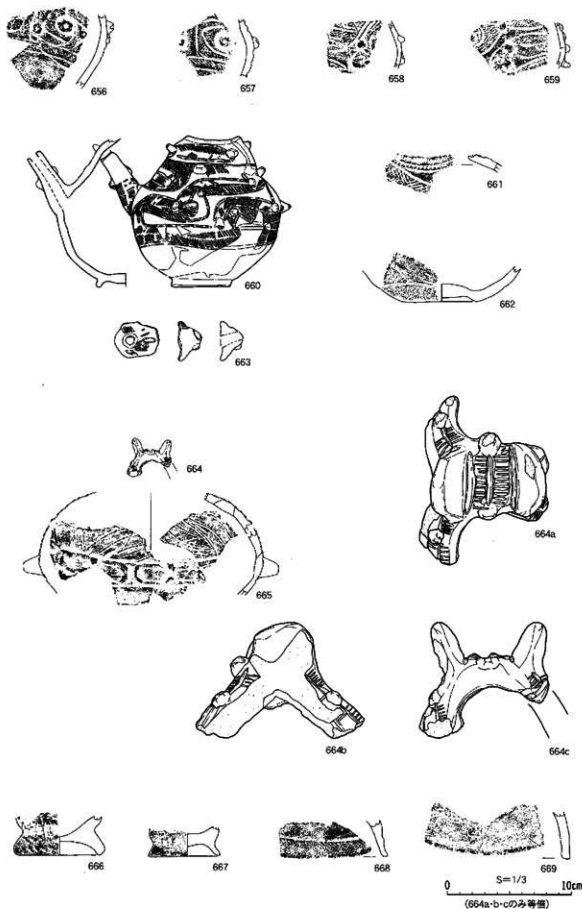


図82 遺構外出土土器(5)

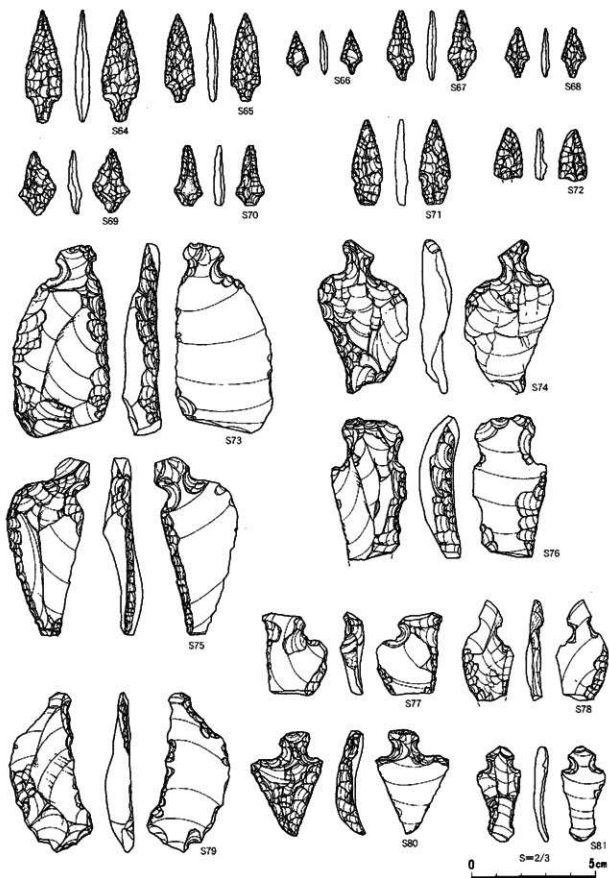


图83 遺構外出土石器(1)

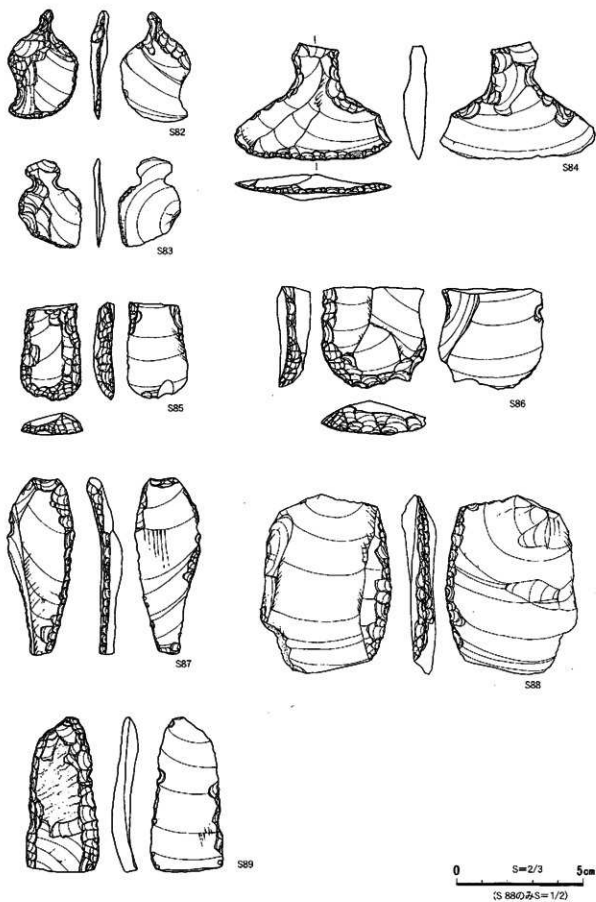


図84 遺構外出土石器(2)

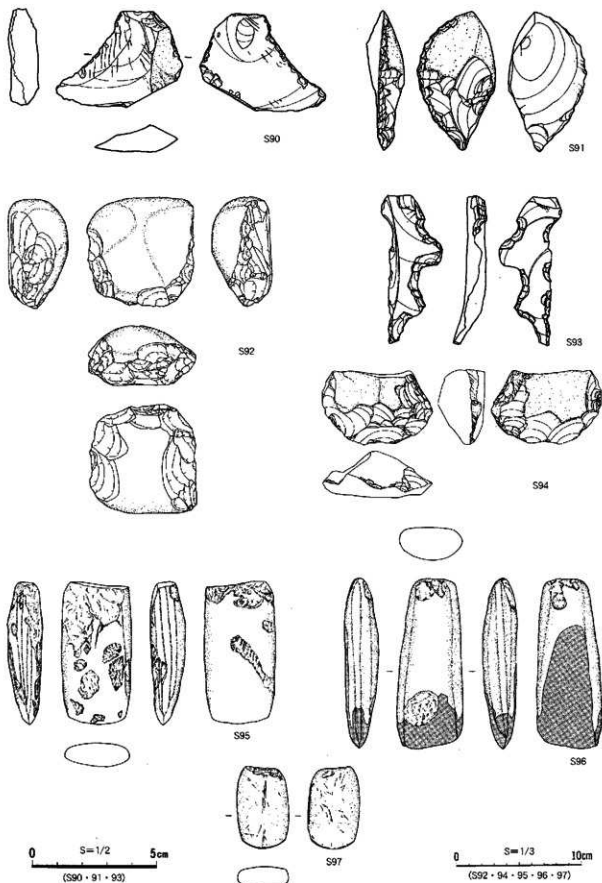


图85 遗址外出土石器(3)

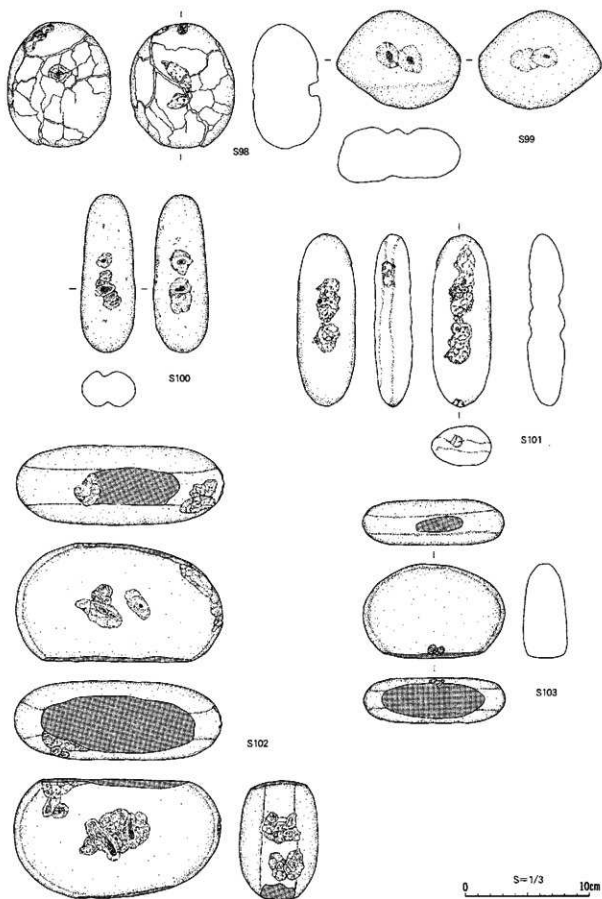


图86 遺構外出土石器(4)

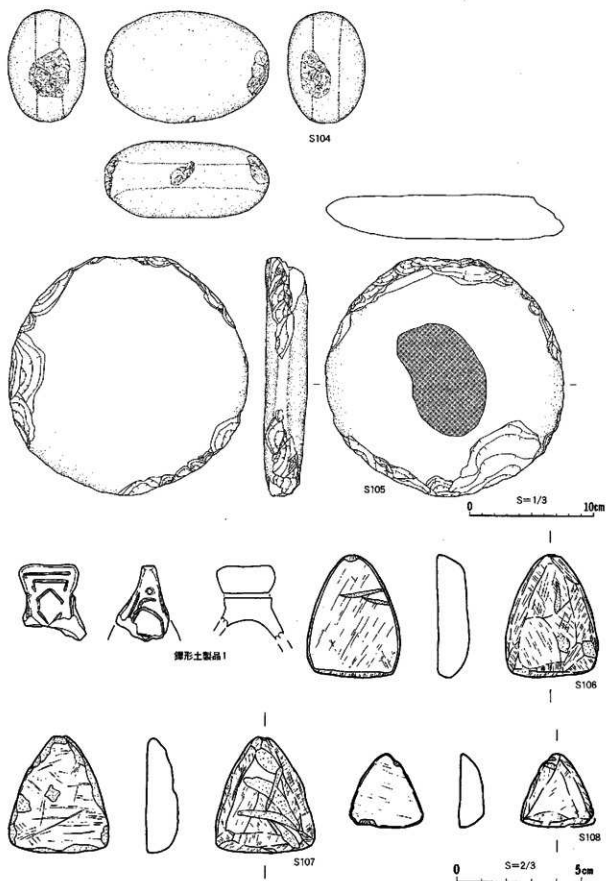


図87 遺構外出土石器(5)

### 第3章 C区検出遺構と出土遺物

C区からは竪穴住居跡1軒、土坑4基を検出した。

#### 第1節 竪穴住居跡

##### 第101号竪穴住居跡（図88）

〔位置・確認〕IXA・B-199・200、IXB-198グリッドに位置する。木の根の周りに黒色土の半円形プランとして確認した。

〔重複〕重複はないが、遺構の西側は市道にかかっている。また、遺構の中央に木の根があり、土は攪乱されていた。

〔平面形・規模〕かなりの削平を受けているため、遺構の北側は立ち上がりが確認できなかった。また西側は市道にかかっているため、調査することができなかった。そのため全体形は不明であるが、おそらく円形に近い形になると思われる。開口部推定長軸は5m60cm、残存短軸は3m18cm、深さは60cmである。残存床面積は13.12㎡である。

〔壁・床面〕東側・南側で壁の立ち上がりを確認した。壁高は東側は10cm、南側は50cmほどである。床面はほぼ平坦で、堅緻である。

〔炉〕遺構西側の床面壁際に炉の一部を検出した。確認した焼土範囲の規模は60cm×30cmで、地床炉と思われる。

〔壁溝〕確認できなかった。

〔ピット〕ピットを16基検出した。その内壁柱穴と思われるものは10基である。ピットの直径は5～45cm、深さは6～36cmである。

〔その他の施設〕溝を2基と不整形の落ち込みを確認した。溝は南東側と南側で検出した。南東側の溝は長軸1m85cm×短軸16cm、深さ3～6cmほどの大きさで、ピット10につながっている。南側の溝は、75cm×16cm、深さ5cmほどで、ピット12につながっている。不整形の落ち込みは北側で検出された。長軸1m26cm、短軸95cm、深さ10～33cmほどである。

〔堆積土〕黒褐色土主体の覆土構成で、下位を中心とところどころにわずかに褐色土・黄褐色土が堆積している。炉が検出された場所の上位の層には焼土塊・焼土粒が混入している。

〔出土遺物〕削平により遺物はあまり検出されなかったが、炉の近くの床面直上から十腰内Ⅳ式の土器が出土した（101住-1）。

〔小結〕出土遺物により、縄文時代後期中葉から後葉にかけての遺構と思われる。

（工藤 由美子）



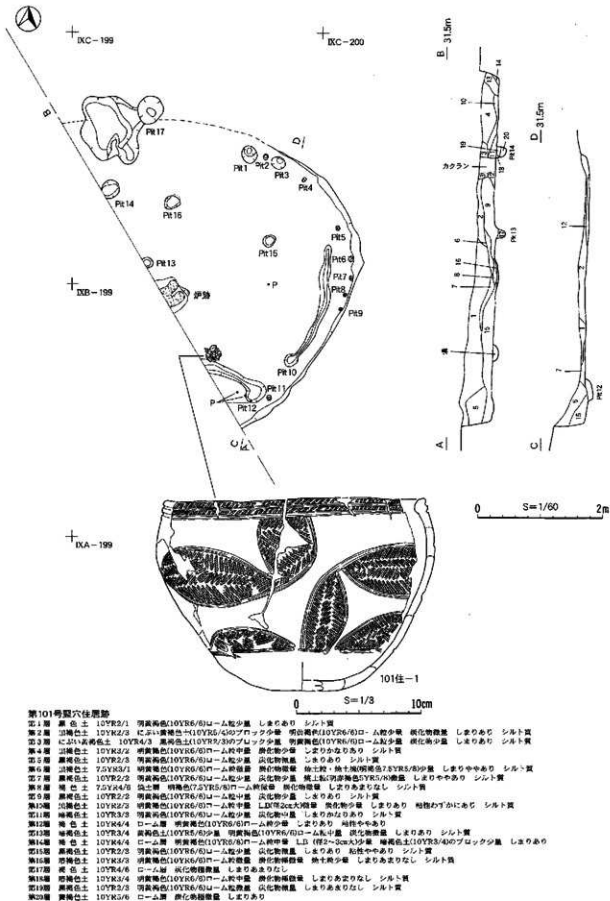


図88 第101号竪穴住居跡、出土遺物

## 第2節 土坑

### 第128号土坑 (図89)

〔位置・確認〕ⅧQ・R-200・201グリッドに位置する。黒色土の方形プランとして確認した。

〔重複〕重複はないが、遺構の西側が市道により消失している。

〔平面形・規模〕平面形は遺構西側が消失しているため不明であるが、おそらく隅丸方形か隅丸長方形になると思われる。開口部は1m62cm×残存1m45cm、底部は1m56cm×残存1m40cm、深さは92cmである。

〔断面・底面〕断面形は四角形で、底面は平坦である。また、底面西側・東側にはピットがある。西側のピットは道路に切られている。規模は西側が37cm×残存23cm、東側が26cm×17cmである。

〔堆積土〕16層に分層した。褐色土主体の覆土構成で、上位に黒褐色土、下位に明褐色土が堆積している。

〔出土遺物〕出土しなかった。

〔小結〕時期決定の根拠に欠けており、不明である。

### 第138号土坑 (図89)

〔位置・確認〕IXE・F-202グリッドに位置する。第139号土坑とともに黒色土の円形プランとして確認した。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕平面形は楕円形で、開口部長軸1m16cm×短軸1m9cm、底部長軸1m13cm×短軸1m9cm、深さは42cmである。

〔断面・底面〕断面形は四角形であるが、底面がやや外側に開いている。底面は平坦である。

〔堆積土〕3層に分層した。上位に黒色土、下位に黒褐色土が堆積している。

〔出土遺物〕土器破片が数点出土した。138土-1は縄文時代前期の円筒下層d式に相当すると思われる。

〔小結〕時期決定の根拠に欠けており、不明である。

### 第139号土坑 (図89)

〔位置・確認〕IXF-203グリッドに位置する。第138号土坑とともに黒色土の円形プランとして確認した。

〔重複〕なし。

〔平面形・規模〕平面形は楕円形で、開口部長軸1m15cm×短軸1m9cm、底部長軸1m16cm×短軸1m14cm、深さは38cmである。

〔断面・底面〕断面形は四角形であるが、東側・南側は底面にむかってフラスコ状にやや外側に広がる。底面は平坦である。

〔堆積土〕6層に分層した。黒褐色土主体の覆土構成で、上位・中位に黒色土が堆積している。

〔出土遺物〕出土しなかった。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

#### 第145号土坑 (図89)

[位置・確認] ⅧQ-201グリッドに位置する。調査区域境界際に暗褐色土の半円形プランとして確認した。

[重複] 重複はないが、調査区域境界際に検出したため、遺構の一部のみを調査した。

[平面形・規模] 平面形はおそらく円形か楕円形になるとされる。残存開口部長軸1m72cm×短軸59cm、残存底部長軸1m67cm×短軸54cm、深さは40cmである。

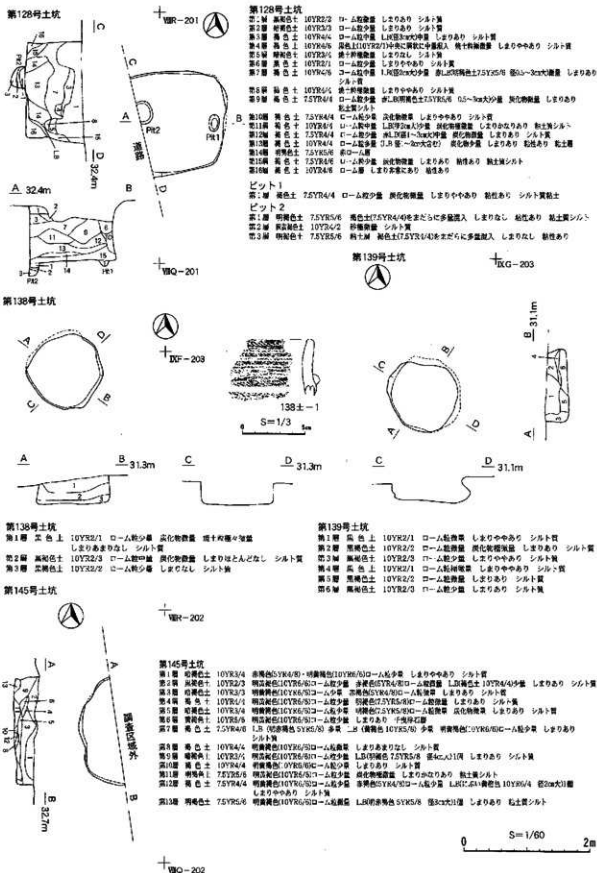
[断面・底面] 断面形は四角形で、底面は平坦である。

[堆積土] 13層に分層した。明黄褐色ローム粒が混入する暗褐色土が主体で、上位に黒褐色土、中位から下位にかけて褐色土・黄褐色土が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

(工藤 由美子)



## 第4章 D区検出遺構

D区では、竪穴状遺構1基、土坑3基、溝状土坑2基、ピット群を検出した。ピット群はD区のほぼ全体に広がっている。

### 第1節 竪穴状遺構

#### 第101号竪穴状遺構（図90）

〔位置・確認〕 VII S-177・178グリッドに位置する。黒褐色土の長方形プランとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 平面形は隅丸長方形で、開口部長軸2 m94cm×短軸1 m93cm、底部長軸2 m94cm×短軸1 m87cm、深さ32cmである。

〔断面・底面〕 断面形は四角形で、底面は平坦である。

〔堆積土〕 9層に分層した。黒褐色土を主体とした覆土構成である。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

〔小結〕 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

（工藤 由美子）

### 第2節 土坑

#### 第121号土坑（図90）

〔位置・確認〕 VIII R-177グリッドに位置する。黒色土の円形プランとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 平面形は円形で、開口部径97cm、底部径51cm、深さ86cmである。

〔断面・底面〕 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面は平坦である。

〔堆積土〕 5層に分層した。黒色土・黒褐色土が堆積し、全体にロームブロックが多量に混入している。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

〔小結〕 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

#### 第122号土坑（図90）

〔位置・確認〕 VIII R-177グリッドに位置する。黒色土の円形プランとして確認した。

〔重複〕 なし。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形で、開口部長軸84cm×短軸74cm、底部長軸53cm×短軸34cm、深さは1 m15cmである。

〔断面・底面〕 壁は底面からやや開くように立ち上がり、底面にはやや起伏がある。

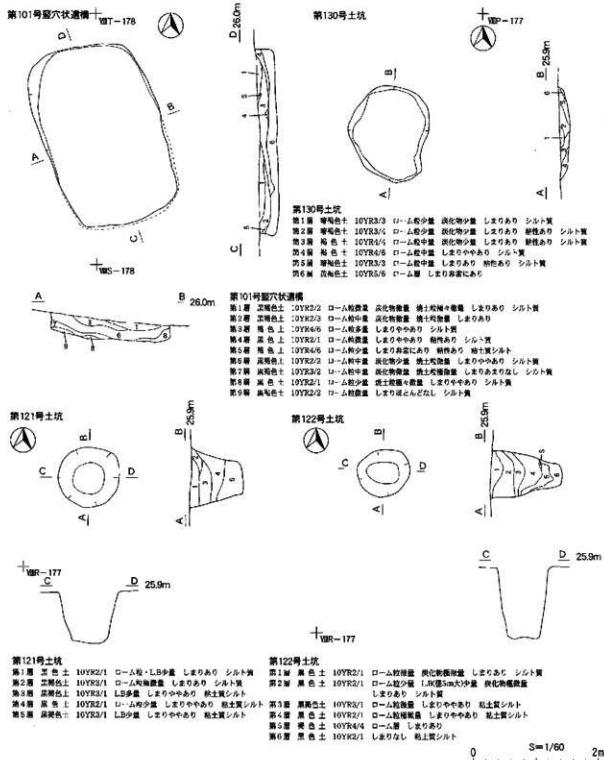


図90 第101号竪穴状遺構、第121・122・130号土坑

[堆積土] 6層に分層した。黒色土主体の覆土構成である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

#### 第130号土坑 (図90)

[位置・確認] VII O-176グリッドに位置する。黒褐色土の楕円形プランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形はいびつな楕円形で、開口部長軸1 m54cm×短軸1 m29cm、底部長軸1 m42cm×短軸1 m13cm、深さは19cmである。

[断面・底面] 壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

[堆積土] 6層に分層した。暗褐色土と褐色土主体の覆土構成である。

[出土遺物] 出土しなかった。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

(工藤 由美子)

### 第3節 溝状土坑

#### 第101号溝状土坑 (図91)

[位置・確認] VII K-172・173グリッドに位置する。黒色土の東西に細長いプランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 開口部で最大長3 m90cm、最大幅70cm、深さ45cmの溝状を呈するが、西側の遺構の約1/3程度がかなり膨らんでいる。底面は最大長3 m95cm、最大幅61cmである。長軸方向は南西—北東である。

[断面・底面] 断面形は短軸は開口部が若干開く形で、長軸は袋状を呈している。底面は平坦であるが、東側に向かってやや低くなっている。

[堆積土] 4層に分層した。黒色土主体の覆土構成で、下位にロームブロックを含んだにぶい黄褐色土が堆積している。

[出土遺物] 出土しなかった。

[小結] 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

#### 第102号溝状土坑 (図91)

[位置・確認] VII R-174・175グリッドに位置する。黒褐色土の東西に細長いプランとして確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 開口部で最大長2 m90cm、最大幅39cm、深さ32cmの溝状を呈する。底面は最大長2 m93cm、最大幅28cmである。長軸方向は南西—北東である。

[断面・底面] 断面形は短軸は四角形で、長軸は袋状を呈する。底面は平坦である。

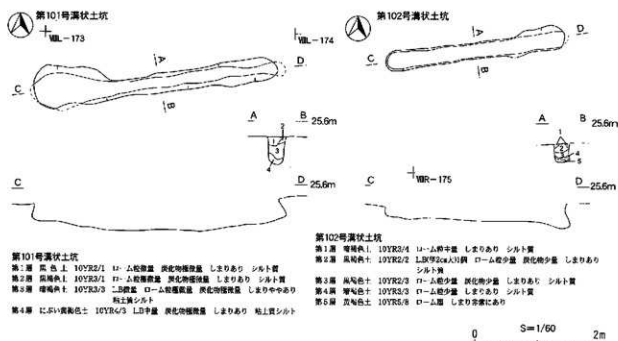


図91 第101・102号溝状土坑

〔堆積土〕 5層に分層した。黒褐色土主体の覆土構成で、下位はローム層になっている。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

〔小結〕 時期決定の根拠に欠けており、不明である。

(工藤 由美子)

#### 第4節 ビット群

規則性のみられない用途・時期不明のビットを多数検出した。第102号ビット群としたものは、調査時には範囲が広い為、便宜上第2・3・4号ビット群として取り扱っていたが、ここではまとめて第102号ビット群として報告する。

##### 第102号ビット群 (図92～94)

〔位置・確認〕 VIIH-175、VIJ-L-171、VIJ-172、VIIM・N-172、VII I・J-173、VIIM-O-173、VIQ-R-173、VII I・J-174、VIL-L-N-174、VIH I・I-175、VIL-L-N-175、VIQ-Q-R-175、VIIT-KA-175、VIK-N-176、VIQ-Q-T-176、VIO-O-177、VIQ-Q-T-177、VIR-R-T-178グリッドに位置する。

〔平面形・規模〕 ビットの広がる範囲は北東52m、南西が30mほどで、ビットは110基確認できた。配列に規則性はみられない。切り合いはいくつかみられた。ビットの平面形は円形・楕円形・不整楕円形で、開口部径10～44cmで、平均26.5cm、深さは5～41cmで、平均17.7cmである。柱痕は確認できなかった。



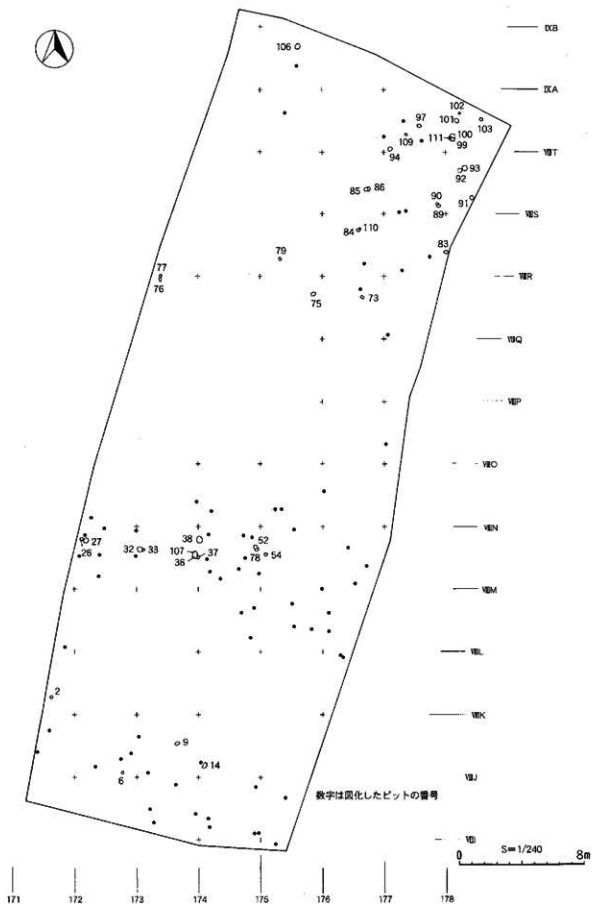


図92 第102号ビット群(1)



## 第102号ピット群

PTT2	
第1層	褐色土 10YR4/4 ローム状中量 炭化物散見 しまり非常にあり シルト質
第2層	黄褐色土 10YR5/6 ローム層 しまり非常にあり
PTT4	
第1層	黒褐色土 10YR2/2 ローム状少量 しまりややあり 粘性あり シルト質
第2層	褐色土 10YR4/6 ローム層 しまりややあり 粘性あり シルト質
PTT9	
第1層	黒褐色土 10YR2/2 ローム状中量 しまりややあり 粘性あり シルト質
PTT14	
第1層	黒色土 10YR1/1 ローム状中量 土灰径2~5cm大塊 しまりあり 粘性あり シルト質
PTT26	
第1層	暗褐色土 10YR3/3 ローム状中量 しまりあり シルト質
PTT27	
第1層	暗褐色土 10YR3/4 ローム状中量 しまりあり 粘性あり シルト質
第2層	褐色土 10YR4/6 ローム層 しまりあり
PTT32	
第1層	暗褐色土 10YR3/3 ローム状少量 しまりありなし シルト質
第2層	黄褐色土 10YR5/6 ローム状中量 しまりややあり 粘性あり シルト質
PTT33	
第1層	暗褐色土 10YR3/4 ローム状少量 しまりあり
PTT36-107	
第1層	黒褐色土 10YR2/2 ローム状中量 しまり非常にあり シルト質
第2層	褐色土 10YR4/4 ローム状少量 土灰径1cm大塊 しまり非常にあり シルト質
PTT37	
第1層	黄褐色土 10YR2/3 ローム状中量 しまり非常にあり シルト質
PTT38	
第1層	黒褐色土 10YR2/2 ローム状少量 しまりあり シルト質
第2層	褐色土 10YR4/6 ローム層 しまり非常にあり
第3層	黒褐色土 10YR2/2 ローム状少量 しまりあり シルト質
PTT52	
第1層	褐色土 10YR1/1 ローム状少量 しまりあり 粘性あり シルト質
PTT78	
第1層	暗褐色土 10YR2/2 ローム状中量 土灰径2cm大塊 しまりあり 粘性あり シルト質
第2層	黄褐色土 10YR5/2 ローム状少量 しまりあり 粘性あり シルト質
PTT54	
第1層	黒褐色土 10YR2/2 ローム状少量 炭化物少量 しまりあり 粘性あり シルト質
第2層	褐色土 10YR4/6 ローム層 粘性あり しまりあり シルト質
PTT73	
第1層	褐色土 10YR2/1 ローム状少量 しまりややあり シルト質
PTT75	
第1層	褐色土 10YR2/2 ローム状少量 炭化物散見 しまりあり シルト質
第2層	黄褐色土 10YR5/6 ローム層 しまり非常にあり
PTT76	
第1層	褐色土 10YR4/4 ローム状少量 しまりあり 粘土質シルト
第2層	褐色土 10YR2/1 ローム状少量 しまりややあり シルト質
第3層	黒褐色土 10YR2/1 ローム状中量 しまりあまりなし 粘土質シルト
第4層	褐色土 10YR4/6 ローム層 しまりあり 粘性あり
PTT77	
第1層	褐色土 10YR2/1 ローム状少量 しまりあまりなし シルト質
第2層	黄褐色土 10YR5/2 ローム状中量 しまりややあり シルト質
第3層	黄褐色土 10YR2/3 ローム状中量 しまりあり 粘性あり シルト質
第4層	黄褐色土 10YR5/6 ローム層 しまり非常にあり
PTT79	
第1層	黄褐色土 10YR5/2 ローム状少量 しまりあり シルト質
第2層	黄褐色土 10YR5/6 ローム層 しまりあり

PTT83	
第1層	褐色土 10YR4/4 ローム状少量 しまりややあり シルト質
第2層	黄褐色土 10YR5/2 ローム状中量 しまりややあり シルト質
第3層	黄褐色土 10YR2/3 ローム状中量 しまりややあり 粘性あり シルト質
PTT84	
第1層	黒褐色土 10YR2/2 ローム状少量 しまりややあり 粘性あり
PTT110	
第1層	褐色土 10YR2/1 ローム状少量 しまりなし
PTT85	
第1層	褐色土 10YR1/1 ローム状少量 しまりあり 粘性あり シルト質
第2層	褐色土 10YR4/6 ローム層 しまりあり 粘性あり
PTT86	
第1層	褐色土 10YR1/1 ローム状少量 しまりあり 粘性非常にあり シルト質
第2層	黄褐色土 10YR5/6 ローム層 しまりあり 粘性あり
PTT89	
第1層	褐色土 10YR1/1 ローム状少量 しまりややあり 粘性あり シルト質
第2層	褐色土 10YR2/1 ローム状少量 しまり非常にあり 粘性あり シルト質
PTT90	
第1層	黄褐色土 10YR5/6 ローム層 しまりあり 粘性あり
PTT91	
第1層	褐色土 10YR1/1 ローム状少量 しまりややあり 粘性あり シルト質
第2層	黄褐色土 10YR2/2 ローム状少量 しまり非常にあり 粘性あり シルト質
第3層	暗褐色土 10YR2/3 土灰径2cm大塊 ローム状中量 しまりあり 粘性あり シルト質
PTT92	
第1層	黄褐色土 10YR2/3 ローム状中量 しまりあり 粘性あり シルト質
第2層	褐色土 10YR2/1 ローム状少量 しまりややあり 粘性あり シルト質
第3層	褐色土 10YR4/6 ローム層 しまりややあり シルト質
PTT93	
第1層	褐色土 10YR2/1 ローム状中量 しまり非常にあり シルト質
第2層	黄褐色土 10YR2/2 ローム状少量 しまり非常にあり 粘性あり シルト質
第3層	黄褐色土 10YR2/3 土灰少量 ローム状少量 しまり非常にあり シルト質
PTT94	
第1層	褐色土 10YR1/1 ローム状少量 しまりあり 粘性あり
PTT97	
第1層	褐色土 10YR1/1 ローム状少量 しまりあまりなし 粘性あり シルト質
第2層	褐色土 10YR4/6 ローム層
PTT99	
第1層	褐色土 10YR1/1 ローム状少量 しまりあり 粘性あり シルト質
第2層	褐色土 10YR4/4 ローム層 しまり非常にあり 粘性あり
PTT100	
第1層	褐色土 10YR2/1 褐色土塊入り しまりあり 粘性あり シルト質
第2層	褐色土 10YR4/6 ローム層 しまり非常にあり 粘性あり
PTT101	
第1層	黄褐色土 10YR2/2 ローム状少量 しまりややあり 粘性あり シルト質
第2層	黄褐色土 10YR5/6 ローム層 しまり非常にあり 粘性あり
PTT102	
第1層	暗褐色土 10YR3/4 ローム状少量 しまりややあり 粘性あり シルト質
PTT103	
第1層	暗褐色土 10YR3/4 ローム状少量 しまりややあり シルト質
PTT106	
第1層	暗褐色土 10YR3/4 ローム状少量 しまりあまりなし
第2層	褐色土 10YR2/1 ローム状少量 しまりややあり
第3層	褐色土 10YR1/1 ローム状少量 しまりややあり 粘性あり
PTT109	
第1層	褐色土 10YR1/1 ローム状少量 しまりあり 粘性あり

図94 第102号ピット群(3)

〔堆積土〕 1~4層に分層した。黒褐色土・黒色土を主体とする覆土構成で、下位に褐色土が堆積しているものもみられる。

〔出土遺物〕 出土しなかった。

〔小結〕 規則性はなく、また遺物も出土しなかったため、用途・時期は不明である。

(工藤 由美子)

## 第5章 自然科学的分析

### 第1節 出土炭化材の放射性炭素年代測定

(株)地球科学研究所

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

#### 報告内容の説明

**14C age (y BP)** : 14C 年代測定値  
試料の 14C/12C 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。半減期として5568年を用いた。

**補正 14C age (y BP)** : 補正 14C 年代値  
試料の炭素安定同位体比(13C/12C)を測定して試料の炭素の同位体分別を知り 14C/12C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。

**δ 13C (permil)** : 試料の測定 14C/12C 比を補正するための 13C/12C 比。  
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表現する。

$$\delta 13C (\text{‰}) = \frac{(13C/12C)[\text{試料}] - (13C/12C)[\text{標準}]}{(13C/12C)[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、13C/12C [標準] = 0.0112372である。

**暦年代** : 過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の 14C の測定、サンゴのU-Th年代と 14C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40 (3))により約19000年までの換算が可能となった。\*

\*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

#### 測定方法などに関するデータ

**測定方法 AMS** : 加速器質量分析

**Radiometric** : 液体シンチレーションカウンタによるβ-線計数法

**処理・調整・その他** : 試料の前処理、調整などの情報

**前処理** acid-alkali-acid : 酸-アルカリ-酸洗浄  
acid washes : 酸洗浄  
acid etch : 酸によるエッチング  
none : 未処理

**調整、その他**

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理  
Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出  
Cellulose Extraction : 木材のセルローズ抽出  
Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

**分析機関** : BETA ANALYTIC INC.  
4965 SW 74 Court, Miami, FL33155, U.S.A

試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	$\delta^{13}\text{C}$ (permil)	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 137335	3110 ± 40	-28.0	3070 ± 40
試料名 ( 12910) KAMINOJI-1 (5±)			
測定方法、期間 Standard-AMS			
試料種、前処理など charred material acid-alkali-acid			
Beta- 137336	3150 ± 40	-26.6	3130 ± 40
試料名 ( 12911) KAMINOJI-2 (5±)			
測定方法、期間 Standard-AMS			
試料種、前処理など charred material acid-alkali-acid			
Beta- 137337	3100 ± 40	-25.0	3100 ± 40
試料名 ( 12912) KAMINOJI-3 (29±)			
測定方法、期間 Standard-AMS			
試料種、前処理など charred material acid-alkali-acid			

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダン リファレンス スタンダードは、国際的な慣例として、NBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

(株)地球科学研究所 〒468 名古屋市天白区榎田本町1-608 TEL052-802-0703

2000年2月3日

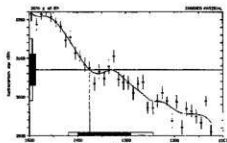
1 / 1

## CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variable C13/C12=29.8‰ ± 0.4)  
 Laboratory Number: Beta-137315  
 Conventional radiocarbon age: 3070 ± 40 BP  
 Calibrated results: cal BC 1428 to 1345 (Cal BP 3370 to 3195)  
 (2 sigma, 95% probability)

Integrator date:  
 Intercept of radiocarbon age  
 with calibration curve: cal BC 1371 (Cal BP 3323)

1 sigma calibrated results: cal BC 1400 to 1290 (Cal BP 3350 to 3240)



Reference:  
 Calibration Software  
 Caltrans Program  
 Stuiver, M., & Peck, J., 1986. Radiocarbon Age Calibration  
 0-10,000 Years BP. Radiocarbon 28, 281-291.  
 Stuiver, M., & Reimer, P., 1993. Radiocarbon Age Calibration  
 0-10,000 Years BP. Radiocarbon 35, 1055-1063.  
 Stuiver, M., & Reimer, P., 1995. Radiocarbon Age Calibration  
 0-10,000 Years BP. Radiocarbon 37, 1033-1043.  
 Stuiver, M., & Reimer, P., 1997. Radiocarbon Age Calibration  
 0-10,000 Years BP. Radiocarbon 39, 1033-1043.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

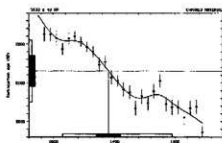
4802 E.F. Way Court, Miami, Florida 33133 • Tel: (305) 671-2307 • Fax: (305) 671-0994 • Email: beta@betaanalytic.com

## CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variable C13/C12=26.6‰ ± 0.4)  
 Laboratory Number: Beta-137314  
 Conventional radiocarbon age: 3130 ± 40 BP  
 Calibrated results: cal BC 1485 to 1380 (Cal BP 3430 to 3255)  
 (2 sigma, 95% probability)

Integrator date:  
 Intercept of radiocarbon age  
 with calibration curve: cal BC 1410 (Cal BP 3360)

1 sigma calibrated results: cal BC 1450 to 1350 (Cal BP 3380 to 3240)



Reference:  
 Calibration Software  
 Caltrans Program  
 Stuiver, M., & Peck, J., 1986. Radiocarbon Age Calibration  
 0-10,000 Years BP. Radiocarbon 28, 281-291.  
 Stuiver, M., & Reimer, P., 1993. Radiocarbon Age Calibration  
 0-10,000 Years BP. Radiocarbon 35, 1055-1063.  
 Stuiver, M., & Reimer, P., 1995. Radiocarbon Age Calibration  
 0-10,000 Years BP. Radiocarbon 37, 1033-1043.  
 Stuiver, M., & Reimer, P., 1997. Radiocarbon Age Calibration  
 0-10,000 Years BP. Radiocarbon 39, 1033-1043.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

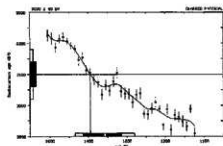
4802 E.F. Way Court, Miami, Florida 33133 • Tel: (305) 671-2307 • Fax: (305) 671-0994 • Email: beta@betaanalytic.com

## CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variable C13/C12=25.8‰ ± 0.4)  
 Laboratory Number: Beta-137307  
 Conventional radiocarbon age: 2890 ± 40 BP  
 Calibrated results: cal BC 1435 to 1380 (Cal BP 3385 to 3230)  
 (2 sigma, 95% probability)

Integrator date:  
 Intercept of radiocarbon age  
 with calibration curve: cal BC 1355 (Cal BP 3345)

1 sigma calibrated results: cal BC 1415 to 1355 (Cal BP 3365 to 3305) and  
 cal BC 1335 to 1315 (Cal BP 3305 to 3285)



Reference:  
 Calibration Software  
 Caltrans Program  
 Stuiver, M., & Peck, J., 1986. Radiocarbon Age Calibration  
 0-10,000 Years BP. Radiocarbon 28, 281-291.  
 Stuiver, M., & Reimer, P., 1993. Radiocarbon Age Calibration  
 0-10,000 Years BP. Radiocarbon 35, 1055-1063.  
 Stuiver, M., & Reimer, P., 1995. Radiocarbon Age Calibration  
 0-10,000 Years BP. Radiocarbon 37, 1033-1043.  
 Stuiver, M., & Reimer, P., 1997. Radiocarbon Age Calibration  
 0-10,000 Years BP. Radiocarbon 39, 1033-1043.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4802 E.F. Way Court, Miami, Florida 33133 • Tel: (305) 671-2307 • Fax: (305) 671-0994 • Email: beta@betaanalytic.com

## 第2節 リン・カルシウム分析及び樹種同定

### 上野尻遺跡の自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本遺跡は、東岳から連なる丘陵裾部およびその丘陵下の低地に位置する。発掘調査の結果、丘陵部で縄文時代の竪穴住居跡・土坑が、低地部で縄文時代の土坑・土器捨て場・竪立柱建物跡、時期不明のピット群が検出されており、縄文時代後期を主体とする遺跡であることが明らかにされている。

今回は、炭化材を伴う土坑が墓坑として利用されていたか検討するためにリン・カルシウム分析を、また当時の燃料材について検討することを目的として炭化材の樹種同定と灰像分析をそれぞれ実施する。

#### 1. 試料

リン・カルシウム分析試料は、第105号土坑の底部から平面的に3点（サンプルE・F・G）、第105号土坑付近から1点、第113号土坑の4a層・6層および土器内土壌の3点、第113号土坑付近から1点、合計8点である（図1）。樹種同定試料は、第105号土坑の3・8・9層から出土した炭化材4点（サンプルG・B・A・D）である。いずれも、タッパー中に複数片の炭化材が認められる。灰像分析試料は、同じく第105号土坑の8層から採取された試料（サンプルB）である。なお、試料の詳細は、各分析結果とともに表示する。

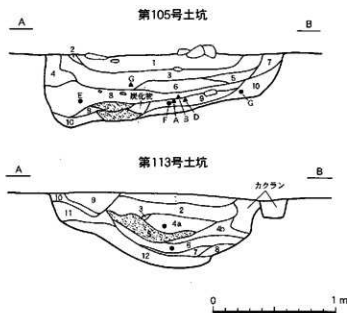


図1 第105号土坑・第113号土坑の土層断面および土壌採取位置  
●は土壌採取位置、▲は炭化材採取位置、網かけ部は焼土を示す。

#### 2. 分析方法

##### (1) リン・カルシウム分析

リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解-原子吸光光度法でそれぞれ行った（土壌養分測定法委員会，1981）。以下に操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を、

加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（ $P_2O_5$ ）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（ $P_2O_5$ mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

## （2）樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

## （3）灰像分析

珪化細胞列など組織構造を呈する植物珪酸体の大半は、植物体が土壌中に取り込まれた後に土壌化や攪乱などの影響によって分離して単体となる。しかし、植物体が燃えた後の灰には、組織構造が珪化組織片などとして残存する場合が多い（例えば、バリノ・サーヴェイ株式会社、1993）。そのため、珪化組織片の産状により当時の燃料材などの種類が明らかになると考えられる。

試料は有機物が含まれていたため、植物珪酸体分析の手法を用いた。試料の一部を採取し、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W、250KHz、1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、珪化組織片や植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュワラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現する珪化組織片を、近藤・佐瀬（1986）の分類を参考にしながら同定・計数する。

## 3. 結果

### （1）リン・カルシウム分析

結果は、表1に示す。第105号土坑およびその付近では、リン酸含量0.80～1.67 $P_2O_5$ mg/g、カルシウム含量4.08～4.38CaOmg/gである。第113号土坑およびその付近ではリン酸含量1.66～2.84 $P_2O_5$ mg/g、カルシウム含量2.13～5.15CaOmg/gである。

表1 リン・カルシウム分析結果

採取地点	試料名・層位等	土性	土色		$P_2O_5$ (mg/g)	CaO(mg/g)
第105号土坑	サンプルE 8層	Lic~HC	10YR2/2	黒褐色	1.09	4.08
	サンプルF 9層	Lic~HC	10YR3/2	黒褐色	1.66	4.12
	サンプルG 10層	Lic~HC	10YR3/1	黒褐色	1.67	4.38
第105号土坑付近		HC	10YR4/3	にぶい黄褐色	0.80	3.92
第113号土坑	4a層	Lic~HC	10YR2/1	黒	2.45	5.15
	6層	HC	10YR3/1	黒褐色	1.66	5.03
	P-103&104の内側	Lic~HC	10YR3/2	黒褐色	2.51	3.54
第113号土坑		Lic~HC	10YR3/4	暗褐色	2.84	2.13

注1) 土色：マンセル表色系に準じた新基準土色誌（農林省農林水産技術会議編、1967）による。

注2) 土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。

Lic：軽粘土（粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%）

HC：軽粘土（粘土45～100%、シルト0～55%、砂0～55%）



## (2) 樹種同定

結果は、表2に示す。試料番号Aには2種類が認められた。炭化材は、落葉広葉樹1種類(クリ)とイネ科タケ亜科に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc.)

## ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1~4列、孔圏外で急激~やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

・イネ科タケ亜科

(Gramineae subfam. Bambusoideae)

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱が認められる。組織は全て軸方向組織で、放射組織は認められない。タケ亜科にはタケ・ササ類があるが、解剖学的特徴で区別できない。

## (3) 灰像分析

結果を表3に示す。試料中からは、珪化組織片が全く認められなかった。単体の植物珪酸体では、クマザサ属を含むタケ亜科が多産する。この他に、ヨシ属、ウシクサ族(ススキ属を含む)、イチゴツナギ亜科などが検出される。

## 4. 考察

## (1) 土坑の検討

土壌中で普通に含まれているリン酸量、すなわち天然賦存量の上限は、Bowen (1983)、Bolt & Bruggenwert (1980)、川崎ほか (1991)、天野ほか (1991) などの調査例を参考にすると、約  $3.0P_2O_5mg/g$  程度と推定される。また、化学肥料の施用など人為的な影響を受けた黒ボク土の既耕地では、 $5.5P_2O_5mg/g$  という報告 (川崎ほか, 1991) がある。また、当社における分析調査事例では、骨片などの痕跡が認められる土壌では、 $6.0P_2O_5mg/g$  を越える場合が多い。一方、カルシウムの天然賦存量は普通  $1 \sim 50CaOmg/g$  (藤貫, 1979) といわれ、含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。

第105号土坑では、リン酸含量・カルシウム含量ともに天然賦存量の範囲内にある。また、対照試料として遺構付近から採取された試料と比較しても、有意差が認められない。したがって、本遺構内に遺体が埋納されていたか不明である。第113号土坑では、対照試料と比較するとカルシウム含量に差が認められるが、上述の通りカルシウム含量の含量幅が大きいことから、有意差とはいえない。また、リン酸含量は対照試料とほぼ同様な値である。これより、第113号土坑でも、遺体が埋納されていたか不明である。

表2 樹種同定結果

遺構名	層位	番号	樹種
第105号 土坑	9層	A	クリ
	8層	B	イネ科タケ亜科
	9層	D	クリ
	3層	G	イネ科タケ亜科

表3 灰像分析結果

種 類	試料番号	B
イネ科葉部短細胞珪酸体		
タケ亜科クマザサ属		31
タケ亜科		147
ヨシ属		1
ウシクサ族ススキ属		7
イチゴツナギ亜科		1
不明キビ型		16
不明ヒゲシバ型		18
不明ダンク型		14
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
タケ亜科クマザサ属		31
タケ亜科		108
ヨシ属		1
ウシクサ族		3
不明		5
合 計		
イネ科葉部短細胞珪酸体		235
イネ科葉身機動細胞珪酸体		148
総 計		383

以上、両遺構ともにリン・カルシウム含量の値が低いことから、これらの成分を富化する内容物の痕跡は指摘できなかった。したがって、今回の分析結果からみれば、両遺構ともに遺体が埋納されていたか不明である。

## (2) 燃料材の検討

第105号土坑の9層中では、珪化組織片が全く認められなかった。このため、燃料材として利用された草本類の種類は不明である。一方、第105号土坑から出土した炭化材は、燃料材の一部が残存したものと考えられている。これらの樹種はクリであり、他にタケ亜科が混じる。この結果から、燃料材はクリを中心とした種類構成であったと推定される。

青森県内では、これまでも多くの遺跡で縄文時代の住居構築材や燃料材などの樹種同定が行われている（嶋倉，1979，1982，1985）。これらの結果ではクリが多い結果が得られており、今回の結果とも一致する。このことから、クリが縄文時代の住居構築材や燃料材に広く利用されていたと推定される。

クリは果実が生食可能であり、縄文時代の植物食糧としても重要な種類であり、縄文時代に栽培されていた可能性が指摘されている（千野，1983；山中ほか，1999）。現在栽培されているクリは、9年生～10年生以後から20年生前後の樹齢が成果期であり、一般に20年生以後は年毎に収量が減少する（志村，1984）。このことから、栽培によって果実の収量を安定させるとともに、収量の落ちた老木を用材として利用していたことが指摘されている（千野，1983）。本遺跡でも同様の利用が行われていた可能性がある。今後、周辺での古環境調査なども行いたい。

## 引用文献

- 千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生 —南関東地方を中心に—、東京都埋蔵文化財センター研究論集、Ⅱ、p.25-42。
- 近藤隼三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用。第四紀研究、25、p.31-64。
- バリノ・サーヴェイ株式会社（1993）自然科学分析からみた人々の生活（1）、慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」、p.347-370、慶應義塾。
- 嶋倉巳三郎（1979）青森市近野遺跡から出土した炭化材の樹種。青森県埋蔵文化財調査報告書第47集「近野遺跡 発掘調査報告書（Ⅳ）—青森県総合運動公園建設関係発掘調査—」、p.321-323、青森県教育委員会。
- 嶋倉巳三郎（1982）炭化材の樹種同定。青森県埋蔵文化財調査報告書第70集「馬場瀬遺跡 発掘調査報告書」、p.284-285、青森県教育委員会。
- 嶋倉巳三郎（1985）尻高(4)遺跡出土の炭化材について。青森県埋蔵文化財調査報告書第89集「尻高(2)・(3)・(4)遺跡 発掘調査報告書」、p.235、青森県教育委員会。
- 志村 勲（1984）クリの生育特性。「農業技術体系 果樹編5 クリ基礎編」、p.11-16、社団法人農山漁村文化協会。
- 山中慎介・岡田康博・中村郁郎・佐藤洋一郎（1999）植物遺体のDNA多型解析手法の確立による縄文時代前期三内丸山遺跡のクリ栽培の可能性。考古学と自然科学、38、p.13-28。

遺構内土器観察表1

図番	番号	遺構名	グリップ	形状	部位	口 周 部	割 面	地 文	内部調整	分類 (時期)	番号	同一	説明 点	
図8	101±1	101±1	X B T-194	深鉢	胴上		縄文	IR, 剥光	ナデ	Ⅱ	P-79		3	
図8	101±2	101±1	X B T-194	深鉢	口	縄文, 沈線文		IR, 削行	ナデ	Ⅱ	P-136		3	
図8	101±3	101±1	X B T-194	深鉢	胴下		縄文 流面=削代	IR, 削行	ナデ	Ⅱ	P-100		3	
図8	102±1	102±1	X B D-201	黄土 鉢	口	口唇部沈線, IR, 剥光(沈線), 沈線文		剥光削代	ナデ+ミガキ	IV			4	
図8	102±2	102±1	X B D-201	1 深鉢	口	糸線文?			不明	VI			5	
図10	105±1	105±1	X B D-219	1-7 深鉢	胴上		沈線文, 縄文	IR, 削行	ナデ+ミガキ	Ⅲ			16	
図10	105±2	105±1	6 深鉢	胴下		横引文, 縄文		1, 削行	ナデ+ミガキ	Ⅲ			27	
図10	105±3	105±1	X B D-219	1 深鉢	胴下		平行沈線文, 横引文		ナデ	Ⅲ			10	
図10	105±4	105±1	1 深鉢	胴下			平行沈線文, 横引文		ナデ	Ⅲ	P-1		11	
図10	105±5	105±1	9 深鉢	突起	山形突起, 白口沈線, 横引文				ナデ+ミガキ	Ⅲ	P-64		134	
図10	105±6	105±1	X B D-219	1 深鉢	胴下			平行沈線文, 縄文	IR, 削行	ナデ	Ⅲ		29	
図10	105±7	105±1	1 深鉢	口	縄文				ナデ	V	136		133	
図10	105±8	105±1	3 深鉢	口	縄文				ナデ	V			129	
図10	105±9	105±1	6 深鉢	口	縄文				ナデ+ミガキ	V			143	
図10	105±10	105±1	8 深鉢	口	縄文, 外唇スス付				ナデ	V	P-18		122	
図10	105±11	105±1	8 深鉢	口	縄文, 外唇スス付				ナデ	V	P-27		125	
図10	105±12	105±1	8 深鉢	口	縄文				ナデ	V			135	
図10	105±13	105±1	9 深鉢	口	縄文				ケズリナデ	V			128	
図10	105±14	105±1	9 深鉢	口=胴上	口唇に粘土粒付(内唇 横引文)	縄文帯, 筋線, 沈線削代等	IR, 削行		ナデ+ミガキ	V			202	
図10	105±15	105±1	8 深鉢	胴下	縄文	縄文, 外唇スス付			ナデ	V	P-50		682	
図10	105±16	105±1	深鉢	口	縄文				IR, 削行	ナデ+ミガキ	V		144	
図10	105±17	105±1	1 深鉢	胴上		隆線の上に沈線, 縄文		IR, 削行	ナデ	V	P-3	25.32	7	
図10	105±18	105±1	1 深鉢	胴上		隆線の上に沈線, 縄文	異原羽状	異原羽状	ナデ	V	7.25	32	19	
図10	105±19	105±1	X B D-219	1 深鉢	胴上下		異原羽状, 筋線	異原羽状	ナデ+ミガキ	V			23	
図10	105±20	105±1	3 深鉢	口	異原羽状			異原羽状	ナデ	V			123	
図10	105±21	105±1	6 深鉢	口	異原羽状			異原羽状	ナデ+ミガキ	V	P-62		140	
図10	105±22	105±1	9 深鉢	口	異原羽状			異原羽状	ナデ	V			131	
図10	105±23	105±1	1 深鉢	胴上下		沈線文, 縄文, 筋線	縄文		ナデ	V	P-2		137	
図10	105±24	105±1	8 深鉢	胴下		縄文, 筋線			ナデ+ミガキ	V	P-60		28	
図10	105±25	105±1	8 深鉢	口	放射状線状筋線, 外反した口唇内面に粘土粒付, 外唇に筋線				ナデ+ミガキ	V			127	
図10	105±26	105±1	9 深鉢	底					ナデ+ミガキ	V	P-61		120	
図10	105±27	105±1	9 深鉢	突起	表面に沈線文				ナデ	V			145	
図10	105±28	105±1	X B D-219	1 深鉢	胴上下		縄文		IR, 削行	ナデ+ミガキ	Ⅴ		148	
図10	105±29	105±1	2 深鉢	口=胴上	平行沈線文, 沈線削代に筋線				ナデ	V	P-11, 14	18.26, 141	24	
図10	105±30	105±1	9 深鉢+中巻	口	縄文				ケズリナデ	V		133, 117-119	118	
図10	105±31	105±1	9 深鉢	口	縄文				ナデ	V			130	
図10	105±32	105±1	9 深鉢	口唇	縄文				ケズリナデ	V	P-62		160	
図10	105±33	105±1	9 深鉢	胴上下		縄文, 筋線			ナデ	V			132	
図10	105±34	105±1	9 深鉢	胴下		縄文			ミガキ	V			15	
図10	105±35	105±1	9 深鉢	胴上		縄文, 筋線			ナデ+ミガキ	V			138	
図10	105±36	105±1	8 深鉢+中巻	口	口唇部に粘土粒付(小突起)				ナデ+ミガキ	V	P-60		146	
図10	105±37	105±1	8 深鉢+中巻	胴下		縄文			不明	V			22	
図10	105±38	105±1	唇+口	胴上下		縄文, 上筋線			ナデ	V			139	
図10	105±39	105±1	唇+口	胴上下		縄文, 上筋線			ナデ	V			126	
図10	105±40	105±1	X B D-219	2 注口	胴上下	縄文帯, 筋線, 注口の割線帯あり		IR, 削行	ナデ	V			21	
図10	105±41	105±1	8 台形	唇		縄文			ナデ+ミガキ	V	P-60	14.12, 142	121	
図11	105±42	105±1		注口	注口	筋線			ケズリナデ	V			715	
図11	105±43	105±1		注口	注口	上筋線			ケズリナデ	V			716	
図11	105±44	105±1		注口	注口	筋線			ケズリナデ	V			752	
図11	105±45	105±1	9 台形+中巻			縄文			ナデ+ミガキ	V	P-11+7		701	
図12	106±1	106±1	X B H-219	1 深鉢	口=胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ+ミガキ	V	P-1	5.30	31	
図12	106±2	106±1	X B H-219	1 深鉢	口	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ+ミガキ	V	P-1	30.31	9	
図12	106±3	106±1	X B H-219	1 深鉢	口=胴上	異原羽状	異原羽状	異原羽状	ナデ+ミガキ	V	P-1	5.31	30	
図12	106±4	106±1	X B H-219	1 深鉢	口	縄文, 外唇わずかにスス付			ナデ	V	P-2	8	12	
図12	106±5	106±1	X B H-219	1 深鉢	口	縄文, 外唇わずかにスス付			ナデ	V	P-2	12	8	
図12	110±1	110±1		注口	注口	筋線			ケズリナデ	V			84	
図12	110±2	110±1	X B P-219	覆土 深鉢	口唇部中巻付, 異原羽状				ナデ	V			81	
図12	110±3	110±1		唇+口	口	筋線			ナデ	V	P-36		82	
図12	110±4	110±1	X B P-219	11 深鉢	口	口唇部, 平行沈線, 沈線文, 筋線			筋状縄文	ナデ	Ⅲ	P-101	85	
図13	118±1	118±1	X B C-217	2 唇	胴上下				ナデ	Ⅲ			86	
図13	118±2	118±1	X B C-217	覆土 深鉢	胴上				ナデ	Ⅲ			89	
図13	118±3	118±1	X B C-217	2 唇	胴上				ナデ	Ⅲ			87	
図13	118±4	118±1	X B C-217	1 唇	胴上				ナデ	Ⅲ			88	
図88	101位-1	101位	IR-A-199	覆土 深鉢	口唇部	口唇部=平行沈線文, 沈線削代(縄文, 筋線)			異原羽状	異原羽状	ナデ+ミガキ	V	P-1	767
図89	138±1	138±1	IR-B-202	1 深鉢	口=胴上	口唇部=IR, 筋線, 口唇部=IR, 筋線=IR, 筋線=IR, 筋線		IR, 削行	ミガキ	縄文削代	P-1		335	

遺構内土器観察表 2

図番	番号	遺構名	層位	図様	器名	器種	器文	内面調整	分層時期	備考	同一群	
図15	113上-1	113上	1	浮鉢	突底	黒緑文		ナデ	I		64	
図15	113上-2	113上	1	浮鉢	口	右口縁に凸線にし黒文		ナデ	Ⅱ		66	
図15	113上-3	113上	1	浮鉢	縁下		横内文	ミガキ	Ⅱ		75	
図15	113上-4	113上	1	不明	胴上		三角状文	別L斜行	ミガキ	Ⅱ	73	
図15	113上-5	113上	1	鉢	口縁	黒文		ミガキ	V	内縁結合	78	
図15	113上-6	113上	1	浮鉢	口	黒文		ナデ	V	内縁結合	50	
図15	113上-7	113上	1	浮鉢	口縁	黒文			V		46	
図15	113上-8	113上	1	浮鉢	口	黒文			Ⅱ		148	
図15	113上-9	113上	1	浮鉢	口	黒文		羽状黒文(無彫)	ナデ	V	57	
図15	113上-10	113上	1	浮鉢	口	黒文		黒草羽状	ナデ	V	羽状の重なり感、ナデ磨し	43
図15	113上-11	113上	1	浮鉢	口縁	黒文		黒草羽状	ミガキ	V	口縁部肥厚	158
図15	113上-12	113上	1	不明	口~胴上	二次突底・黒文		黒草羽状	ミガキ	V	一部黒文磨り	59
図15	113上-13	113上	1	浮鉢	口縁	二次突底・黒文		黒草羽状	ミガキ	V	内面黒文物付着	88
図15	113上-14	113上	1	浮鉢	口縁	黒文		別L斜行	ミガキ	V		33
図15	113上-15	113上	1	浮鉢	口	黒文		黒草羽状	ミガキ	V		150
図15	113上-16	113上	1	浮鉢	口	黒文		羽状黒文	ナデ	V		47
図15	113上-17	113上	1	浮鉢	口	黒文		別L斜行	ナデ	V		84
図15	113上-18-19	113上	1	浮鉢	突底	突底内面ナギミ・黒		ナデ	V		107	
図15	113上-20	113上	1	浮鉢	縁上	黒文・上縁部		別L斜行	ナデ	V	灰化物付着	38
図15	113上-21	113上	1	浮鉢	縁上	黒文		別L斜行	ナデ	V		38
図15	113上-22	113上	1	鉢	口縁	黒文	黒文	ナデ	V	口縁部磨り返し	68	
図15	113上-23	113上	1	鉢	口~胴上	黒文		ミガキ	V		74	
図15	113上-24	113上	1	鉢	口縁	黒文		ナデ	V		44	
図15	113上-25	113上	1	鉢	口~胴上	黒文		ナデ	V		65	
図15	113上-26	113上	1	蓋	胴上		黒文	ナデ	V		153	
図15	113上-27	113上	1	蓋	胴下		黒文	ミガキ	V		79	
図15	113上-28	113上	1	台部	台		黒文	ナデ	V	台縁部ミガキ	686	
図15	113上-29	113上	2	浮鉢	口	凸状突底		ナデ	V		90	
図15	113上-30	113上	2	浮鉢	口	黒文		L斜行	ナデ	V	154	
図15	113上-31	113上	2	浮鉢	口	黒文		黒草羽状	ナデ	V	149	
図15	113上-32	113上	2	浮鉢	口	黒文		L(無彫)	ナデ・ミガキ	V	突底部磨り	52
図15	113上-33	113上	2	浮鉢	口縁	黒文		別L斜行	ナデ	V	77	
図15	113上-34	113上	2	浮鉢	口	黒文		ナデ	V		49	
図15	113上-35	113上	2	浮鉢	口縁上	二次突底・黒文		黒草羽状(無彫)	ミガキ	V	61	
図15	113上-36	113上	2	浮鉢	口	二次突底・黒文		羽状黒文	ミガキ	V	48	
図15	113上-37	113上	2.4.5	浮鉢	口縁	黒文		黒草羽状	ナデ	V	185	
図15	113上-38	113上	2.4.5	浮鉢	突底	黒文	黒文	黒草羽状	ミガキ	V	684	
図15	113上-39	113上	2.4.5	浮鉢	口~胴上	黒文		黒草羽状	V	口内縁	35	
図15	113上-40	113上	2.4.5	浮鉢	口	二次突底・黒		別L斜行	ナデ	V	41	
図15	113上-41	113上	2.4.5	鉢	縁上		黒文・縁部黒文	黒草羽状	ナデ	V	76	
図15	113上-42	113上	4	不明	不明		黒文・縁部黒文	別L斜行	ミガキ	V	73	
図15	113上-43	113上	4	浮鉢	口縁上	黒文		黒草羽状	ナデ	V	45	
図15	113上-44	113上	4	浮鉢	口	黒文		羽状黒文	ミガキ	V	53	
図15	113上-45	113上	4	浮鉢	口	黒文		黒草羽状	ナデ	V	156	
図15	113上-46	113上	4	浮鉢	口縁	黒文・縁部黒文・口縁部に縦長溝		L斜行	ミガキ	V	内面灰化物付着	387
図15	113上-47	113上	5	台部	台		黒文	ナデ	V		685	
図15	113上-48	113上		浮鉢	口	黒文		ナデ	V		151	
図15	113上-49	113上		浮鉢	口	黒文		両草羽状(L・口)	ミガキ	V	黒土層厚5mm	55
図15	113上-50	113上		浮鉢	口	黒文		別L斜行	ナデ	V	内縁結合	51
図15	113上-51	113上		浮鉢	口	凸状突底・黒文		ナデ	V		147	
図15	113上-52	113上		浮鉢	突底	突底内面ナギミ・黒		ナデ	V		56	
図15	113上-53	113上		不明	不明		沈積・黒文	別L斜行	ミガキ	Ⅱ	73	
図15	113上-54	113上		香炉	黒文			ナデ	V	土製品の可能性有	43	
図15	113上-55	113上		蓋	胴上		沈積・黒	ナデ	V	磨り跡あり	70	
図15	113上-56	113上		蓋・口	黒	黒文・縦(4単位?)		ナデ	V		72	
図15	113上-57	113上		蓋	胴下		黒文・縦方向のナゲ磨り	ナデ	V		187	
図15	113上-58	113上		洗口	洗口	洗口下にナゲミのある面		不明	V	洗口上部	80	
図15	113上-59	113上		台部	台		横長凸線・黒文	別L斜行	ミガキ	V	52	
図19	114上-1	114上	3	浮鉢	胴上・底	黒文		L斜行	ミガキ	V	外縁磨り	690
図19	114上-2	114上	4	浮鉢	口~胴上	黒文		別L斜行	ミガキ	V	内外面灰化物付着	693
図19	114上-3	114上	4	鉢	口~胴下	内面ナギミ突底・3割1セット? 黒文	黒文	ミガキ	V	内面黒草羽磨り	692	
図19	114上-4	114上	4	浮鉢	胴上・底	黒文		別L斜行	ミガキ	V	内面灰化物磨り	691
図19	114上-5	114上		洗口	洗口	下縁部付近に平行凸線と黒			V		597	
図19	114上-6	114上		洗口	洗口	3本と3本一組の突底が口を一周、洗口のみに磨り	下縁部元の色、大きめで、磨りあり。		V		708	
図19	114上-7	114上		洗口	洗口	本草羽状黒文・上下半分に磨			V		709	
図19	114上-8	114上		洗口	洗口	本草羽状黒文3単位・横元下縁に磨	上下半部分に磨	別L斜行	V	外縁ミガキ	710	

遺構内土器観察表 3

図号	番号	遺構名	層位	器種	部位	口部	底	地文	内面調査	分類(内装)	備考	同一	資料
図20	114-9	114土	3	深鉢	口部	上側中央付近に傷・下側にも傷		不明	V				755
図20	114-10	114土	3	深鉢	口部	上側中央付近に傷		不明	V		外周ミガキ		753
図20	114-11	114土	3	深鉢	口部	上側中央付近に傷・下側破片にも傷			V				781
図20	114-12	114土	3	深鉢	口部	どららの端部も割付口である			V				754
図20	115-1	115土	2	深鉢	口部	底に沈着			ミガキ				113
図20	115-2	115土	3	深鉢	口部	底に沈着			ミガキ		口部沈着物と底に沈着物		98
図20	115-5	115土	3	深鉢	口部	底に沈着			R.L.削行	ミガキ			114
図20	115-6	115土	3	深鉢	口部	底に沈着			R.L.削行	ミガキ			110
図20	115-7	115土	5	深鉢	口部	底に沈着			削行	ミガキ	小型深鉢等较多		105
図20	115-13	115土	3	深鉢	口部	底に沈着			削行	ミガキ	砂较多		100
図20	115-14	115土	3	深鉢	口部	底に沈着			L.R.削行	ナゾ	外周断面ヘラミガキ		99
図20	115-15	115土	4	深鉢	口部	底に沈着			R.L.削行	ミガキ	外周結合、結合帯幅1.7cm程		694
図20	115-16	115土	5	深鉢	口部	底に沈着					4本/12mmの線状工具で削位の赤褐色		94
図20	115-17	115土	5	深鉢	口部	底に沈着					丁寧なミガキ		94
図20	115-19	115土	5	深鉢	口部	底に沈着					ミガキ		101
図20	115-21	115土	5	深鉢	口部	口縁と底面付近に褐色沈着、その間に削行ミガキ							713
図20	115-22	115土	5	深鉢	口部	底に沈着							113
図21	148-1	148土	2	深鉢	口部	底に沈着			L.R.削行	ナゾ			360
図21	148-2	148土	3	深鉢	口部	底に沈着							432
図21	148-3	148土	3	深鉢	口部	底に沈着							435
図21	148-4	148土	3	深鉢	口部	底に沈着							431
図21	148-5	148土	3	深鉢	口部	底に沈着							430
図21	148-6	148土	3	深鉢	口部	底に沈着							393
図21	148-7	148土	3	深鉢	口部	底に沈着							370
図21	148-8	148土	3	深鉢	口部	底に沈着							386
図21	148-9	148土	3	深鉢	口部	底に沈着							389
図21	148-10	148土	3	深鉢	口部	底に沈着							408
図21	148-11	148土	3	深鉢	口部	底に沈着							346
図21	148-12	148土	3	深鉢	口部	底に沈着							347
図21	148-13	148土	3	深鉢	口部	底に沈着							358
図21	148-14	148土	3	深鉢	口部	底に沈着							345
図21	148-15	148土	3	深鉢	口部	底に沈着							348
図21	148-16	148土	3	深鉢	口部	底に沈着							355
図21	148-17	148土	3	深鉢	口部	底に沈着							706
図21	148-18	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							433
図21	148-19	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							422
図21	148-20	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							423
図21	148-22	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							419
図21	148-23	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							417
図21	148-24	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							404
図21	148-25	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							400
図21	148-26	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							407
図21	148-27	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							381
図21	148-28	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							705
図21	148-29	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							366
図21	148-30	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							373
図21	148-31	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							352
図21	148-32	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							392
図21	148-33	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							379
図21	148-34	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							704
図21	148-35	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							351
図22	148-36	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							418
図22	148-37	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							378
図22	148-41	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							434
図22	148-42	148土	4	深鉢	口部	底に沈着							326
図22	148-43	148土	5	深鉢	口部	底に沈着							689
図22	148-44	148土	5	深鉢	口部	底に沈着							353
図23	149-1	114土	2	深鉢	口部	底に沈着							368
図23	149-2	114土	2	深鉢	口部	底に沈着							383
図23	149-3	114土	2	深鉢	口部	底に沈着							363
図23	149-4	114土	2	深鉢	口部	底に沈着							395
図23	149-5	114土	2	深鉢	口部	底に沈着							707
図23	149-6	114土	2	深鉢	口部	底に沈着							537
図23	149-7	114土	2	深鉢	口部	底に沈着							398
図23	149-8	114土	2	深鉢	口部	底に沈着							396
図24	149-9	114土	3	深鉢	口部	底に沈着							424
図24	149-11	114土	3	深鉢	口部	底に沈着							405

遺構内土器観察表 4

図版	番号	透視名	形状	器種	部位	口部部	胴部	底文	内面調整	分組 (時期)	備考	測 尺		
図24	149土-13	114±2	3	深鉢	口	縄文			R.L.斜行	不明		34		
図25	149土-14	114±2	3	深鉢	口	縄文			黒底斜紋	V	口唇内縁	365		
図26	149土-15	114±2	3	深鉢	口	縄文			V	V	口唇内縁肥厚	375		
図27	149土-16	114±2	3	深鉢	口	縄文	平行縄文帯		L.R.斜行	V	口唇内縁-肥厚	376		
図28	149土-17	114±2	3	鉢	口	縄文	内面斜め・縁状突起			V		367		
図29	149土-18	114±2	2	鉢	口	縄文	内面斜め状突起・縄文			V		384		
図30	149土-19 20-21-22	114±2	3	深鉢	口	縄文	縁状突起・帯・中下部縦入組文	平行縄文帯・上斜紋・縄文	黒底斜紋	縦線なしギキ	V	縁多量、入組縁状文をベースに、付縄文先縁	426	
図31	149土-23 24-25	114±2	3	壺	口	縄文	無文			V	口唇内縁、内面斜め状突起・内面調整帯	3940 41		
図32	149土-26	114±2	3	注口	先形	内面短突起・平行縄文帯	本家縄文帯4単位・本家縄文帯	無文		V	ナデ+ミギキ	V	上底	
図33	149土-27	114±2	4	全部	弁	縄文	無文		黒底斜紋	V		396		
図34	149土-28	114±2	4	深鉢	胴上	上斜紋・縄文			R.L.斜行	V	ミギキ	V	350	
図35	SX111-1	SX111	3	深鉢	口	縄文	無文			V		409		
図36	SX111-2	SX111	3	壺	胴下	縄文	無文			V	内外面に傾・状状付帯	388		
図37	SX111-3	SX111	4	深鉢	口	縄文	無文			V	口唇内縁	401		
図38	SX111-4	SX111	4	香付口	胴上					V	径3mmの棒状工具で穿孔	349		
図39	123土-1	123±1	1	壺	胴下		上下穿孔部			V		165		
図40	123土-2	123±1	1	深鉢	口	縄文	無文			V		161		
図41	123土-3	123±1	1	深鉢	口	縄文	無文		R.L.斜行	V	口唇肥厚	164		
図42	123土-4	123±1	1	深鉢	口	縄文	帯状縄文帯・縦長帯		R.L.斜行	V		162		
図43	123土-5	123±1	1	壺	口	縄文	無文			V		160		
図44	123土-6	123±1	1	壺	口	縄文	無文			V		160		
図45	123土-7	123±1	1	壺	口	縄文	無文			V		162		
図46	124土-1	124±1	1	深鉢	口	縄文	無文			V	口唇内縁	166		
図47	124土-2	124±1	1	壺	口	縄文	帯文・入組文・縦長帯			V	口唇外縁中々突出	167		
図48	125土-1	125±1	1	深鉢	口	縄文	無文			V	ミギキ	V	168	
図49	125土-2	125±1	1	深鉢	口	縄文	無文		L.R.斜行	V		172		
図50	125土-3	125±1	1	深鉢	口	縄文	無文		L.R.斜行	V	ミギキ	V	176	
図51	125土-4	125±1	1	深鉢	口	縄文	無文		黒底斜紋	V	縦線なしギキ	V	178	
図52	125土-5	125±1	1	香付	合		無文			V		169		
図53	125土-6	125±1	1	深鉢	胴上		沈線文・縄文		L.R.斜行	V		174		
図54	125土-7	125±1	1	壺	胴上		縦線入組文			V	沈線幅1mm程度	180		
図55	125土-8	125±1	1	深鉢	口	縄文	無文			V	外縁タール状物付帯	179		
図56	125土-9	125±1	1	深鉢	口	縄文	無文			V		183		
図57	125土-10	125±1	1	深鉢	口	縄文	無文			V	ナデ+ミギキ	V	177	
図58	125土-11	125±1	1	香付	合		無文			V	ナズリナデ	V	173	
図59	125土-12	125±1	1	深鉢	口	縄文	口縁突起・縄文・帯		R.L.斜行	V		185		
図60	125土-13	125±1	1	深鉢	口	縄文	無文		R.L.斜行	V		171		
図61	125土-14	125±1	1	壺	底		無文			V	上げ底底施	182		
図62	125土-15	125±1	1	深鉢	口	縄文	無文		黒底斜紋	V	縦線なしギキ	V	口唇外縁つきみ出し	668
図63	125土-16	125±1	1	注口	注口	上唇中に帯				V	不明	V	757	
図64	125土-17	125±1	1	注口	注口	下唇底に帯				V	不明	V	758	
図65	125土-18	125±1	1	注口	注口	上唇中に帯・下唇にも帯				V	不明	V	756	
図66	125土-19	125±1	1	深鉢	口	縄文	無文		L.R.・R.L.斜行	V	具形土器、縁合部7~12mm	184		
図67	126土-1	126±1	1	深鉢	胴上		横内文			V	不明	■	189	
図68	126土-2	126±1	1	深鉢	口	縄文	無文			V		212		
図69	126土-3	126±1	1	深鉢	口	縄文	無文			V	調整工具痕跡3mm程度	210		
図70	126土-4	126±1	1	深鉢	口	縄文	無文			V		196		
図71	126土-5	126±1	1	鉢	口	縄文	無文			V		200		
図72	126土-6	126±1	1	不明	底		無文			V		208		
図73	126土-7	126±1	1	不明	底		沈線文・縄文		L.R.斜行	V		211		
図74	126土-8	126±1	2	深鉢	口	縄文	縁状文			V	ミギキ? 縄文中部	内面付帯調整帯、上縁c式	183	
図75	126土-9	126±1	2	深鉢	口	縄文	無文			V	ナズリナデ	V	口唇内縁	680
図76	126土-10 ~14	126±1	4-5	深鉢	口	縄文	無文			V	縄文の上下幅12mm程度	JM41 JM53	406	
図77	126土-15	126±1	5	深鉢	口	縄文	無文		黒底斜紋	V	縦線なしギキ	V	199	
図78	126土-16	126±1	5	壺	底		沈線文・上斜紋			V	内縁縁合	191		
図79	126土-17	126±1	5	壺	底		無文			V	内面に付帯	192		
図80	126土-18	126±1	5	深鉢	口	縄文	無文			V	口唇内縁	204		
図81	126土-19	126±1	5	深鉢	口	縄文	無文			V		202		
図82	126土-20	126±1	5	深鉢	口	縄文	無文			V	縁合	195		
図83	126土-21	126±1	5	深鉢	口	縄文	無文			V		205		
図84	126土-22	126±1	5	深鉢	口	縄文	無文			V		201		
図85	126土-23	126±1	5	深鉢	口	縄文	無文			V		207		
図86	126土-24	126±1	5	鉢	口	縄文	無文			V	口唇内縁肥厚気味	186		
図87	126土-25	126±1	5	深鉢	口	縄文	無文		不明	V		197		
図88	126土-26	126±1	5	鉢	口	縄文	無文		L.R.斜行	V		190		
図89	126土-27	126±1	5	深鉢	口	縄文	無文			V	口唇内縁	187		
図90	126土-28	126±1	5	深鉢	胴上		縄文帯縁状文		黒底斜紋	V	ミギキ	V	口唇内縁肥厚	203
図91	126土-29	126±1	5	深鉢	口	縄文	平行沈線文・上斜紋		L.R.斜行	V	V	底縁幅1mm程度で帯めに縄文	189	

遺構内土器観察表5

調査番号	遺構名	層位	器種	器位	口部	胴部	底文	内面調整	分層(有無)	備考	頁	資料No.	
BE18	126-30	126土	台座	台		無文		不明	V			194	
BE19	126-31	126土	壺	胴上		無文		磨面加工有	V	内面調整(具痕跡)→4mm		669	
BE19	126-32	126土	壺	胴上		縄文華成文		ナブ	V	縄文華成4中分輪(リット)なし		206	
BE19	126-33	126土	壺	胴上		縄文華成文		L形削行	ナブ			209	
BE19	126-34	126土	不明	底		無文		ミガキ	V			192	
BE19	126-35	126土	5	硝焼粘土						不明	上下幅20mm, 上下平坦な為土器成形の可能性有		789
BE20	141土-1	141土	漆鉢	胴上		沈積土		ミガキ	Ⅲ			329	
BE20	141土-2	141土	漆鉢	口部	縄文		具原形状	不明	V	口部内縁		326	
BE20	141土-3	141土	漆鉢	口	無文			ナブ	Ⅳ	外周縁付着		338	
BE20	141土-4	141土	巻口口	底		無文		ナブ	V	高径(15mm)程の押圧有		337	
BE20	127土-1	127土	1	漆鉢	口	華輪紋状(赤)第1種	←	L	ナブ	Ⅲ		213	
BE20	127土-2	127土	2	漆鉢	口					Ⅲ		215	
BE20	127土-3	127土	3	漆鉢	口	横文			不明	Ⅲ		214	
BE21	129土-1	129土	1	漆鉢	口部	無文・横合口縁			ナブ	Ⅲ		224	
BE21	129土-2	129土	2	漆鉢	口部	華輪紋状(赤)第1種	←	Ⅲ	ミガキ	Ⅲ		240	
BE21	129土-3	129土	3	漆鉢	口部	華輪紋状(赤)第1種	←	Ⅲ	ナブ	Ⅲ		260	
BE21	129土-4	129土	4	漆鉢	口・胴上	台口沈積			不明	Ⅲ		255	
BE21	129土-5	129土	5	漆鉢	口	台口沈積			不明	Ⅲ		242	
BE22	129土-6	129土	6	漆鉢	胴上		横文		Ⅲ	Ⅲ		229	
BE22	129土-7	129土	7	漆鉢	胴上		横文		Ⅲ	Ⅲ		231	
BE22	129土-8	129土	8	漆鉢	胴上		横文		Ⅲ	Ⅲ		220	
BE22	129土-9	129土	9	壺	胴下		横文		ナブ・ミガキ	Ⅲ		218	
BE22	129土-10	129土	10	漆鉢	口部	横目帯・無文・横合口縁			ナブ	Ⅳ		258	
BE22	129土-11	129土	11	漆鉢	口部	内面部分突起・横合口縁		L形削行	ナブ	V		268	
BE22	129土-12	129土	12	漆鉢	口	無文		具原形状	ミガキ	V	外周縁付着	299	
BE22	129土-13	129土	13	漆鉢	胴下		無文		ナブ	Ⅳ		297	
BE22	129土-14	129土	14	漆鉢	口	華輪紋状(赤)第1種		L	ナブ	Ⅲ		252	
BE22	129土-15	129土	15	漆鉢	口	無文		←	ナブ	Ⅲ		261	
BE22	129土-16	129土	16	漆鉢	口	横文			ナブ	Ⅲ		264	
BE22	129土-17	129土	17	漆鉢	胴上		横文		ナブ	Ⅲ		219	
BE22	129土-18	129土	18	漆鉢	胴上		横文		L形削行	ミガキ	Ⅲ	226	
BE22	129土-19	129土	19	漆鉢	胴下		沈積土		ミガキ	Ⅲ	沈積層・横文	228	
BE22	129土-20	129土	20	漆鉢	胴上		横文		L形削行	ナブ	Ⅲ	237	
BE22	129土-21	129土	21	壺	胴下		横文		ナブ・ミガキ	Ⅲ		217	
BE22	129土-22	129土	22	不明	胴上		横文		ミガキ	Ⅲ	胴部下に下層有	300	
BE22	129土-23	129土	23	漆鉢	口部	無文			ミガキ	Ⅲ		301	
BE22	129土-24	129土	24	不明	口	無文			ナブ	Ⅳ		259	
BE22	129土-25	129土	25	不明	口	無文			ミガキ	Ⅳ		253	
BE22	129土-26	129土	26	漆鉢	口部	赤色		赤色文	ナブ	V		263	
BE22	129土-27	129土	27	漆鉢	口部	無文		具原形状	ナブ	V		245	
BE22	129土-28	129土	28	漆鉢	口部	横文		沈積層	ナブ	V	口部厚縁有	289	
BE22	129土-29	129土	29	漆鉢	口部	平行横文帯・横文・横		L形削行	ミガキ	V	内面硝化付着	267	
BE22	129土-30	129土	30	漆鉢	胴上		横文華成文		具原形状	ミガキ	Ⅲ	296	
BE22	129土-31	129土	31	漆鉢	口	突起・横目帯			不明	Ⅳ	器面中後遺	223	
BE22	129土-32	129土	32	漆鉢	口	横文		沈積層	ミガキ	V	口部内面削り直し	304	
BE22	129土-33	129土	33	壺	口部	平行横文帯		L形削行	ナブ	V		262	
BE22	129土-34	129土	34	壺	底		無文		ナブ	V	小型器?	225	
BE22	129土-35	129土	35	壺	胴下		不明		不明	Ⅳ	内面に赤色の皮膜状に焼存	245	
BE22	129土-36	129土	36	漆鉢	口部	横合口縁			ミガキ	Ⅲ		271, 270	
BE22	129土-37	129土	37	漆鉢	口部	横合口縁			ミガキ	Ⅲ	口部厚縁見地	270, 271	
BE22	129土-38	129土	38	漆鉢	胴上				ミガキ	Ⅲ		226	
BE22	129土-39	129土	39	漆鉢	胴上		台口沈積・横文		L形削行	ナブ	Ⅲ	221	
BE22	129土-40	129土	40	漆鉢	胴下		横文		ミガキ	Ⅲ		233	
BE22	129土-41	129土	41	漆鉢	口	無文		L形削行	ナブ	V	口部厚縁有	284	
BE22	129土-42	129土	42	漆鉢	口	無文		具原形状	ナブ	V		278	
BE22	129土-43	129土	43	漆鉢	口部	無文		具原形状	ミガキ	V	口部内縁	283	
BE22	129土-44	129土	44	漆鉢	口部	無文		L形削行	ナブ	V	口部厚縁	247	
BE22	129土-45	129土	45	漆鉢	口部	無文		具原形状	ナブ	V		261	
BE22	129土-46	129土	46	漆鉢	口部	無文		具原形状	ミガキ	V	口部内縁・砂付多	285	
BE22	129土-47	129土	47	漆鉢	口・胴下	内面部分突起・横・横文		無文	具原形状	ミガキ	V		201
BE22	129土-48	129土	48	漆鉢	底		無文		ミガキ	V	底沈口縁?	695	
BE22	129土-49	129土	49	漆鉢	底		無文		L形削行	ナブ	Ⅲ	磨砂状多	239
BE22	129土-50	129土	50	漆鉢	口部	無文			ミガキ	V	口部内縁	276	
BE22	129土-51	129土	51	漆鉢	口	無文		L形削行	ナブ	Ⅲ	輪縁土器	298	
BE22	129土-52	129土	52	漆鉢	底		無文		ナブ	V		232	
BE22	129土-53	129土	53	漆鉢	口部	横合口縁			ナブ	V	口部内縁	249	
BE22	129土-54	129土	54	漆鉢	口	不明			ナブ	V	口部内縁	227	
BE22	129土-55	129土	55	漆鉢	台		無文		ナブ	V	口部外縁に突出	266	
BE22	129土-56	129土	56	不明	口部	無文			ナブ	V	口部外縁に突出	266	
BE22	129土-57	129土	57	不明	底		不明		ナブ	V	器干上底	262	
BE22	129土-58	129土	58	漆鉢	底		不明		ナブ	Ⅳ	上底	216	
BE22	129土-59	129土	59	漆鉢	胴下		無文		ミガキ	Ⅳ	外周硝化付着	302	

遺構内土器観察表 6

図版	番号	遺構名	層位	器種	部位	口部部	断面	地文	内面調整	分組(時期)	備考	図	整理%
図版3	129土-60	129土	4	厚鉢	口部	平行縄文帯・刺突列(φ1.5mm)		1.8斜行	ナズ	Ⅲ	内面灰化物付着		266
図版3	129土-61	129土	4	厚鉢	口	口部口縁		1.8斜行	不明	Ⅲ			277
図版3	129土-62	129土	4	厚鉢	口	縄文		1.8斜行	ミガキ	V	口部内縁肥厚		272
図版3	129土-63	129土	4	厚鉢	口	縄文		扇形斜行	ナズ	V	口部内縁、砂粒多		289
図版3	129土-64	129土	4	厚鉢	口部	縄文		1.8斜行	ナズ	Ⅳ			274
図版4	129土-65	129土	4	厚鉢	口	縄文		1.8斜行	ナズ	Ⅳ			279
図版4	129土-66	129土	4	厚鉢	口部	縄文		1.8斜行	ナズ	Ⅳ	腹砂粒多		273
図版4	129土-67	129土	4	厚鉢	口部	縄文		1.8斜行	ナズ	Ⅳ			281
図版4	129土-68	129土	4	厚鉢	胴上		縄文帯横成文	扇形斜行	ナズ	V			287
図版4	129土-69	129土	4	香付口	口部	平行縄文帯・瘤		1.8斜行	ナズ+ミガキ	V	瘤多		241
図版4	129土-70	129土	4	壺	胴~底	縄文		ナズ	V	縦方向の指ナズ痕が全面に明確に残る			695
図版4	129土-71	129土	4	不明	胴上	縄文・穴縁・横文		1.8斜行	ナズ	V			284
図版4	129土-72	129土	4	厚鉢	底	縄文		ナズ	Ⅳ				230
図版4	129土-73	129土	4	厚鉢	底	不明		不明	不明	不明	底部器厚1.7cmと厚い		234
図版4	129土-74	129土	5	不明	口	平行縄文帯		1.8斜行	ミガキ	V	口部外縁に突出		246
図版4	129土-75	129土	4	厚鉢	胴下	縄文斜行			ミガキ	Ⅲ			222
図版4	129土-76	129土	4	鉢	口	横口文			ナズ+ミガキ	Ⅲ			250
図版4	129土-77	129土	4	厚鉢	口部	不明			ナズ	Ⅳ	器面磨耗著しい		238
図版4	129土-78	129土	4	厚鉢	口	縄文		1.8斜行	ミガキ	Ⅳ			243
図版4	129土-79	129土	4	壺	胴上		縄文帯横成文・瘤	不明	不明	V			275
図版4	129土-80	129土	4	注口	注口	縄文・下側に瘤1点		不明	V				761
図版4	129土-81	129土	4	注口	注口	縄文		不明	V				760
図版5	131土-1	131土	1	壺	口部	縄文			ナズ+ミガキ	V	外面調整ミガキ		697
図版5	131土-2	131土	2	厚鉢	口	車輪状突起1個		Ⅲ	ナズ+ミガキ	Ⅲ	口部部平直		315
図版5	131土-3	131土	2	厚鉢	口	横口文			ミガキ	Ⅲ	外縁磨合		326
図版5	131土-4	131土	2	厚鉢	口~胴上	波状口縁・波状文・縄文	波状文	1.8斜行	ミガキ	Ⅲ			670
図版5	131土-5	131土	2	厚鉢	口部	縄文帯入組文・瘤		ナズ	V	口縁部のみ、縦長コブ			329
図版5	131土-6	131土	2	厚鉢	口部	平行穴縁・縦長帯・縄文		1.8斜行	ミガキ	V	口縁部コブ、底によるツメみ出し		320
図版5	131土-7	131土	2	合部	台	縄文		ナズ	V				321
図版5	131土-8	131土	2	壺	胴上		縄文帯横成文・瘤刻痕痕有		V				310
図版5	131土-9	131土	2	壺	胴	平行穴縁部多数		ナズ	V	接合部幅20mm程、外縁磨合			312
図版5	131土-10	131土	2	香付口	胴上	縄文・上割部		ナズ	V	器底面磨合			303
図版5	131土-11	131土	3	厚鉢	口部	横口文			ミガキ	Ⅲ	波状部磨合三角部		314
図版5	131土-12	131土	3	厚鉢	胴上		斜長目文・縄文	1.8縦走	ミガキ	V			67
図版5	131土-13	131土	3	厚鉢	口部	縄文・口縁直下に指ナズ工跡		ナズ	V	指ナズ工跡幅13mm程			311
図版5	131土-14	131土	3	厚鉢	口部	波状突起・平行縄文帯		ナズ	V	口部内縁調整			327
図版5	131土-15	131土	3	厚鉢	突起	二次突起・瘤			ミガキ	V			316
図版5	131土-16	131土	3	香付口	口	波(状突起)・波状・縄文		1.8斜行	ナズ	V			318
図版5	131土-17	131土	3	不明	底			ナズ	V	砂粒多			46
図版5	131土-18	131土	3	不明	底		縄文		ミガキ	V			313
図版5	131土-19	131土	4	厚鉢	口	横口文			ミガキ	Ⅲ			308
図版5	131土-20	131土	4	鉢	胴上		横口文		ミガキ	Ⅲ	波状部磨合三角部の部分有		328
図版5	131土-21	131土	4	壺	底		V字形穴縁文・刺突列・穿孔		ミガキ	Ⅳ	φ3mmの棒状工具で調整		325
図版5	131土-22	131土	4	厚鉢	口	縄文		1.8斜行	ナズ	V	口部内縁		309
図版5	131土-23	131土	4	壺	口部	縄文			ミガキ	V	砂粒多		322
図版5	131土-24	131土	5	厚鉢	口部	縄文			ナズ	Ⅲ	口部外縁肥厚		317
図版5	131土-25	131土	5	壺	胴下		横口文		ミガキ	Ⅲ	外縁磨合		323
図版5	131土-26	131土	4	鉢	胴上		横口文		ミガキ	Ⅲ	波状部磨合三角部の部分有		324
図版5	131土-27	131土	4	鉢	胴上		横口文		ミガキ	Ⅲ	波状部磨合三角部の部分有		319
図版5	142土-1	142土	1	不明	底		不明		ミガキ	V	上底		340
図版5	142土-2	142土	1	厚鉢	口	斜長目文・波状文			ミガキ	V	斜長目文/cm		341
図版5	143土-1	143土	1	厚鉢	口部	不明		不明	ナズ	V	器底面磨合		342

遺構内石器観察表 1

図版	番号	器種	素材/用途	石質	出土地	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	整理%
図版11	105土-51	石鏃		玉髄質珪質質	105土	1	58	24	8.1	13.8		64
図版11	105土-52	石鏃片?		磨粒粗瑣質	105土	9	83	41	16	27.1	磨粒粗瑣質基盤のような特徴であるが軟質の石材である	190
図版11	105土-53	石鏃	磨粒粗瑣片	珪質瑣質	105土	1	92	64	14.6	69.1	主要部断面打点磨痕有	33
図版11	105土-54	二次加工ある石鏃	磨粒粗瑣片	珪質瑣質	105土	8	68	30.5	15	22.2	波面・横付ハシケ有	184
図版11	105土-56	凹石		燧石	105土	9	139	107	43	69.3		102
図版16	113土-51	石鏃		珪質瑣質	113土	1	28	13	3.5	0.8	有黒点付着物有	1
図版16	113土-52	凹石		石英質山岩	113土	1	114	76	65	687.8		154
図版16	113土-53 (129土-98)	石鏃			113土 129土	1	225	161	33	1015.2	129土-58と結合	201
図版23	148土-51	凹石		燧石	148土	3	105	68	44	374.3		155
図版23	148土-52	凹石			148土	116	52	29	189.3		302	
図版23	148土-53	凹石		燧山岩	148土	3	128	69	45	469.5		166
図版23	148土-54	凹石			148土	139	85	44	445.7		200	



遺構内石器観察表 2

図版番号	器名	器種	素材形態	石質	出土地	層位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	備考	整理No.
図24	149土-S1	石鏃		玉髄質珪質頁岩	149土		34	19	5.6	3	有茎平基-横長割片利用	7
図24	149土-S2	石鏃		珪質頁岩	149土	3	37	14	4.4	1.6	有茎凸基	6
図24	149土-S3	石鏃		珪質頁岩	149土	3	20	11	3.1	0.7	有茎凸基	5
図24	149土-S4	石鏃		玉髄質珪質頁岩	149土		18	13	3	0.6	有茎平基	8
図25	149土-S5	石鏃(未製品)	割片	珪質頁岩	149土	2	26	15	6	1.7		115
図25	149土-S6	大石平型石鏃	両側割片	玉髄質珪質頁岩	149土	4	20	27	5.7	2.8	大石平型石鏃	61
図25	149土-S7	スタレイバー	割片	珪質頁岩	149土	3	55	38	14.7	31	上半部折れ	88
図25	149土-S8	明礬石			149土	4	55	63	53	181.8		203
図25	SK111-S1	スタレイバー	縦長割片	珪質頁岩	SK111	Ⅱ	37	29	6	10		103
図25	SK111-S2	スタレイバー	割片	珪質頁岩	SK111	3	28	18	5.1	3.1		70
図25	SK111-S3	石鏃		珪質頁岩	SK111	4	7	11	3.3	0.5	有茎凸基	4
図29	126土-S1	佛石鏃		珪質頁岩	126土	5	34	42.5	29.5	5.0		118
図29	126土-S2	石鏃	割片	玉髄質珪質頁岩	126土	5	37	32	4	4.8	溝い割片利用	117
図29	126土-S3	明礬石			126土		84	78	64	606.7		306
図29	126土-S4	明礬石		石冨安山岩	126土		243	135	52	2113.4		151
図29	126土-S5	明礬石		石冨安山岩	126土		90	74	59	503.4	凹部形成後の熱処理痕	153
図29	126土-S6	明礬石			126土	4	144	47	28	247		206
図34	129土-S1	石鏃		玉髄質珪質頁岩	129土	3	26	14	4	0.9	有茎凸基	2
図34	129土-S2	石鏃		珪質頁岩	129土	3	24	13	4.1	0.9	有茎凸基	3
図34	129土-S3	石鏃	縦長割片	珪質頁岩	129土	3	48	13	4.5	3		29
図34	129土-S4	石鏃		玉髄質珪質頁岩	129土	6	47	10	7.7	3.4		30
図35	129土-S5	石鏃	縦長割片	珪質頁岩	129土	1	47	21	6.7	4.2		34
図35	129土-S6	石鏃	縦長割片	珪質頁岩	129土	3	56	66	8	23.9	主要断面打点検出溝い割片を利用	35
図35	129土-S7	佛石鏃		珪質頁岩	129土	5	46	71	18.1	45		77
図35	129土-S8 (113土-S20)	石鏃			113土	1	225	161	33	1015.2	113土-S3と接合 当地域土層分が主体	201

遺構外石器観察表 1

図版番号	グリッド	層位	器種	部位	口部	底	柄部	地文	内面調整	分製(時期)	備考	同一	整理No.
図41-1	XBC-202	F03	鏃	割上下			横文、縦位込彫、外縁スス付	瓦、削行	ナブ	Ⅱ	P-676		729
図41-2	XBC-202	F02	鏃	割上下			成彫文		ナブ	Ⅱ	P-317		737
図41-3	XBC-202	F02	鏃	口	六角状口、口縁、底縁、縦位込彫				ナブ+ミガキ	Ⅳ	P-315		628
図41-4	XBC-201	F02	鏃	口	横文				ナブ	V	P-114		509
図41-5	XBC-202	F02	鏃	口	横文				ナブ+ミガキ	V	P-417		533
図41-6	XBC-202	F02	鏃	口→割上	横文		横文		ナブ	V	P-157	615	359
図41-7	XBC-202	F02	鏃	口→割上	横文		横文		ナブ	V	P-189		561
図41-8	XBC-202	F02	鏃	口→割上	横文		横文		ナブ	V	P-992		632
図41-9	XBC-202	F03	鏃	口→割上	横文、口唇部内面彫		横文		ナブ+ミガキ	V	P-764-751		568
図41-10	XBC-202	F02	鏃	口→割下	横文		横文		ナブ	V	P-204		833
図41-11	XBC-202	F02	鏃	口→割上	横文、外面凹凸付		横文		ナブ	V	P-418, 716		641
図41-12	XBC-202	F03	鏃	口→割上	横文		横文		ケズリ+ナブ	V	P-765		828
図41-13	XBC-202	F03	鏃	口→割上	横文		横文		ナブ	V	P-599		634
図41-14	XBC-202	F16	鏃	口→割上	横文		横文		ケズリ+ナブ	V	P-1151		829
図41-15	XBC-202	F16	鏃	口→割上	横文		横文		ナブ+ミガキ	V	P-1125		630
図41-16	XBC-202	F16	鏃	口→割上	横文		横文		ナブ	V	P-992		639
図41-17	XBC-202	F16	鏃	口→割上	横文		横文		ナブ	V	P-96, 96, 96, 96		569
図41-18	XBC-202	F16	鏃	口→割上	横文		横文		ケズリ+ナブ	V	P-1683		604
図41-19	XBC-202	F03	鏃	口	横文		横文		ケズリ+ナブ	V	P-519		616
図41-20	XBC-202	F16	鏃	口	横文		横文		ケズリ+ナブ	V	P-945		529
図41-21	XBC-202	F03	鏃	口	横文		横文		ケズリ+ナブ	V	P-775		617
図41-22	XBC-202	F03	鏃	口	横文		横文		ナブ+ミガキ	V	P-532		624
図41-23	XBC-202	F03	鏃	口	横文		横文		ナブ	V	P-775		603
図42-4	XBC-202	F03	鏃	口→割上	横文		横文		ナブ	V	P-554		528
図42-5	XBC-202	F16	鏃	口	横文		横文		ケズリ+ミガキ	V	P-945		529
図42-6	XBC-202	F16	鏃	口	横文		横文		ナブ+ミガキ	V	P-1411		619
図42-7	XBC-202	F03	鏃	割下→底			横文		ナブ	V	P-579		504
図42-8	XBC-202	F02	鏃	口→割上	彫削付		彫削付	彫削付	ナブ	V	P-185		552
図42-9	XBC-202	F02	鏃	口→割上	彫削付		彫削付	彫削付	ナブ	V	P-403, 404, 735	648, 650	657
図42-30	XBC-202	F02	鏃	口→割上	彫削付		彫削付	彫削付	ナブ	V	P-377, 378	648, 657	650
図42-31	XBC-202	F02	鏃	口→割上	彫削付		彫削付	彫削付	ナブ	V	P-390	650, 657	655
図42-32	XBC-202	F02	鏃	口→割上	彫削付		彫削付	彫削付	ナブ	V	P-420		648
図42-33	XBC-202	F02	鏃	口→割上	彫削付、外縁スス付		彫削付、外縁スス付	彫削付	ナブ	V	P-382		540
図42-34	XBC-202	F03	鏃	口→割上	彫削付		彫削付	彫削付	ナブ+ミガキ	V	P-536		519

遺構外土器類表 2

図表番号	グリッド	層位	器種	部位	口 頸 部	胴 部	地 文	内面装飾	分類(時期)	備 考	同一	整理No.	
図42-35	XⅢC-202	Ⅱ02	深鉢	口	黒膠状		黒膠状	ナデ	V	P-225		517	
図42-36	XⅢC-202	Ⅱ02	深鉢	口	黒膠状		黒膠状	ナデ+ミガキ	V	P-158		559	
図42-37	XⅢC-202	Ⅱ03	深鉢	口	黒膠状		黒膠状	ナデ+ミガキ	V	P-225		543	
図42-38	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	黒膠状		黒膠状	ケズリ+ナデ	V	P-1131		523	
図42-39	XⅢC-202	Ⅱ03	深鉢	口	織文		織文	織文+ナデ	V	P-713		1055	
図42-40	XⅢC-202	Ⅱ02	深鉢	口→胴上	織文、外蓋ス付着	織文	L&R斜行	ケズリ+ナデ	V	P-196		523	
図42-41	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口→胴上	織文、外蓋ス付着	織文、外蓋ス付着	L&R斜行	ナデ	V	P-1122		586	
図42-42	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	小穴眼、内面内縁に準状凸線、織文		L&R斜行	ナデ+ミガキ	V	P-183		508	
図42-43	XⅢC-202	Ⅱ02	深鉢	胴上下				ナデ	V	P-319		746	
図43-44	XⅢC-202	Ⅱ02	深鉢	口	条状文、準状凸		条状文	ナデ+ミガキ	V	P-192		635	
図43-45	XⅢC-202	Ⅱ10	鉢	口→胴上	小穴眼、口縁下内面に準状凸線、織文、外蓋ス付着		L&R斜行	不明	V	P-1123, 1127		511	
図43-46	XⅢC-202	Ⅱ10	鉢	口	織文			ナデ+ミガキ	V	P-1410		613	
図43-47	XⅢC-202	Ⅱ03	鉢	胴→胴上	織文、ミガキ			ケズリ+ナデ	V	P-701	530	535	
図43-48	XⅢC-202	Ⅱ03	徳小仕口	胴下→底	織文			ナデ+ミガキ	V	P-702		539	
図43-49	XⅢC-201	Ⅱ02	徳小仕口	胴下→底	織文			ナデ	V	P-72		603	
図43-50	XⅢC-202	Ⅱ02	深鉢	口→胴上	大穴眼口縁、内口縁凸線、口口縁織文、口縁上凸線、外蓋ス付着		平行状織文、織文、条状文、外蓋ス付着	L&R斜行	ナデ	V	P-383	609	
図43-51	XⅢC-202	Ⅱ02	鉢	胴上下	織文			ナデ	V	P-415		534	
図43-52	XⅢC-202	Ⅱ10	壺	胴上下	織文		波線、織文、ナデ刺しされている	L&R、L斜行	ケズリ+ナデ	V	P-783, 1132, 1149	703	
図43-53	XⅢC-202	Ⅱ02	壺	口	平行状織文、織文			ナデ	V	P-346, 300		538	
図43-54	XⅢC-202	Ⅱ01	徳小仕口	胴上下	織文		波線、織文、織文刺しミガキ	L&R斜行	ナデ	V	P-65	743	
図43-55	XⅢC-203	Ⅱ10	深鉢	胴上	織文			ナデ	V	P-1178		720	
図43-56	XⅢC-201	Ⅱ10	深鉢	口	織文、長径-平行状織文、口内面に準状凸線			ナデ	V	P-1205		728	
図43-57	XⅢC-201	Ⅱ10	深鉢	胴上下	織文			ナデ	V	P-1450		727	
図43-58	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	壺	横内文			ケズリ+ナデ	V	P-1407		725	
図43-59	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	胴下	波線			ナデ	V	P-1866		748	
図43-60	XⅢC-201	Ⅱ02	深鉢	口	大穴眼口縁、口口縁、口口縁上凸線、口口縁目			ナデ+ミガキ	V	P-93		506	
図43-61	XⅢC-202	Ⅱ02	深鉢	口	織文			ケズリ+ナデ	V	P-99		605	
図43-62	XⅢC-202	Ⅱ02	深鉢	口	織文			ナデ	V	P-279		612	
図43-63	XⅢC-202	Ⅱ02	深鉢	口	織文			ナデ	V	P-160		620	
図43-64	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	織文			ケズリ+ナデ	V	P-1801		614	
図43-65	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口→胴上	織文			ケズリ+ナデ	V	P-1651, 1854	662	663	
図43-66	XⅢC-202	Ⅱ03	深鉢	口→胴下	織文			ケズリ+ナデ	V	P-685		640	
図43-67	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	胴上下	織文			ケズリ+ナデ	V	P-1657	663	662	
図43-68	XⅢC-202	Ⅱ02	深鉢	口→胴上	織文			ナデ	V	P-312		638	
図43-69	XⅢC-201	Ⅱ03	深鉢	口	織文			ナデ+ミガキ	V	P-476		531	
図43-70	XⅢC-201	Ⅱ10	深鉢	口→胴上	織文			ナデ	V	P-1465, 1221		635	
図43-71	XⅢC-201	Ⅱ10	深鉢	口	織文、外蓋のわずかにス付着			ナデ	V	P-1437		588	
図43-72	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	織文			ナデ	V			1482	
図43-73	XⅢC-202	Ⅱ03	深鉢	口	織文			ケズリ+ミガキ	V	P-643		596	
図43-74	XⅢC-202	Ⅱ03	深鉢	口	織文			ナデ	V	P-712		601	
図43-75	XⅢC-202	Ⅱ03	深鉢	口→胴上	織文			ナデ	V	P-704		1043	
図43-76	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	織文			ケズリ+ナデ	V	P-1810		1054	
図43-77	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	織文			ナデ	V	P-875	559	615	
図43-78	XⅢC-201	Ⅱ03	深鉢	口	織文			ナデ	V	P-474		580	
図43-79	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	織文			ケズリ+ミガキ	V	P-1364		557	
図43-80	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	織文			ナデ	V	P-1879		627	
図43-81	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	織文			ナデ	V	P-1788		586	
図43-82	XⅢC-201	Ⅱ02	深鉢	口→胴上	黒膠状、外蓋ス付着	黒膠状、外蓋ス付着	黒膠状	ナデ	V	P-102		551	
図43-83	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口→胴上	黒膠状、外蓋ス付着	黒膠状、外蓋ス付着	黒膠状	ケズリ+ナデ	V	P-302, 1302		680	
図43-84	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口→胴上	黒膠状	黒膠状	黒膠状	ナデ	V	P-1301, 1776		649	
図43-85	XⅢC-202	Ⅱ03	深鉢	口	黒膠状			ナデ	V	P-638		576	
図43-86	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口→胴上	黒膠状、外蓋ス付着	黒膠状、外蓋ス付着	黒膠状	ナデ	V	P-924, 913		541	
図43-87	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	黒膠状			ナデ+ミガキ	V	P-933		545	
図43-88	XⅢC-202	Ⅱ03	深鉢	口	黒膠状			ナデ	V	P-691		1052	
図43-89	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口→胴上	黒膠状、内蓋のわずかにス付着	黒膠状、内蓋のわずかにス付着	黒膠状	ナデ	V	P-1567, 1571		663	
図43-90	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口→胴上	黒膠状			ナデ+ミガキ	V	P-1807		1081	
図43-91	XⅢC-202	Ⅱ03	深鉢	口	黒膠状			ナデ+ミガキ	V	P-627		520	
図43-92	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	黒膠状			ナデ	V	P-1859		546	
図43-93	XⅢC-201	Ⅱ10	深鉢	口	黒膠状			ナデ	V	P-1430		548	
図43-94	XⅢC-202	Ⅱ03	深鉢	口	黒膠状			ナデ	V	P-492		625	
図43-95	XⅢC-201	Ⅱ02	深鉢	口	織文			ナデ	V	P-91		608	
図43-96	XⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口→胴上	織文	織文		L&R斜行	ナデ	V	P-1567	654	
図43-97	XⅢC-201	Ⅱ10	深鉢	口	織文			L&R斜行	ナデ+ミガキ	V	P-833	549	
図43-98	XⅢC-202	Ⅱ02	深鉢	口→胴上	条状文	条状文		条状文	ケズリ+ナデ	V	P-191, 204	518	
図43-99	XⅢC-202	Ⅱ03	深鉢	胴上下	条状文	条状文		条状文	ナデ	V	P-649	721	
図43-100	XⅢC-203	Ⅱ02	鉢	胴→胴上	波線、点状織文			L&R斜行	ナデ	V	P-439	744	
図43-101	XⅢC-202	Ⅱ02	鉢	口→胴上	L&R斜行織文、織文、ミガキ			織文	ケズリ+ナデ	V	P-348	535	530
図43-102	XⅢC-202	Ⅱ10	壺	口→胴上	平行状織文、口唇と波線状凸線	織文		L&R斜行	ナデ	V	P-1061	542	
図43-103	XⅢC-202	Ⅱ03	徳小仕口	胴上下	黒膠状			黒膠状	ナデ	V	P-636	516	
図43-104	XⅢC-202	Ⅱ10	徳小仕口	胴上下	波線、織文			黒膠状、L&R、L斜行	ナデ	V	P-1262	741	

遺構外土器観察表 3

調査番号	グリッド	層位	器種	部位	口 部 部	胴 部	地 文	内面装飾	分限(時期)	備 考	同一	整理号	
図47-105	ⅤⅢC-202	Ⅱ03	深鉢	口～胴上	小突起, 突起下に線, 縄文帯	縄文帯	L&R斜行	ナブ	V	P-748		701	
図47-106	ⅤⅢC-203	Ⅱ10	深鉢	口	土器片割れ片, 割面一部線, 草輪, 粘土帯等3種			ナブ	Ⅲ	P-187, Ⅲ割土器		750	
図48-107	ⅤⅢC-203	Ⅱ10	深鉢	胴下～底		縄文	多斜線条帯	ナブ	I	P-1877		749	
図48-108	ⅤⅢC-202	Ⅱ02	深鉢	胴上		平行波線文, 縄文	L&R斜行	ナブ	Ⅲ	P-412		721	
図48-109	ⅤⅢC-201	Ⅱ10	深鉢	胴下		波線文, 垂線状文	ナブ	Ⅲ	P-1425			780	
図48-110	ⅤⅢC-202	Ⅱ02	深鉢	口	小突起, 凹線, 凹線付帯, 草輪付帯, 波線			ナブ	Ⅲ			610	
図48-111	ⅤⅢC-203	Ⅱ10	深鉢	口	筋文, 外筋スス付帯			ナブ+ミギキ	V	P-1880		611	
図48-112	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口～胴上	筋文	筋文		ナブ	V	P-1762		642	
図48-113	ⅤⅢC-201	Ⅱ10	深鉢	口～胴上	筋文, 外筋スス付帯	筋文, 外筋スス付帯		ナブ+ミギキ	V	P-1800		564	
図48-114	ⅤⅢC-202	Ⅱ02	深鉢	口	筋文, 外筋スス付帯			ナブ	V	P-398		558	
図48-115	ⅤⅢC-201	Ⅱ10	深鉢	口	筋文, 外筋スス付帯			ナブ+ミギキ	V	P-1836		623	
図48-116	ⅤⅢC-201	Ⅱ01	深鉢	口	筋文			ナブ+ミギキ	V	P-5		563	
図48-117	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	筋文			ナブ	V	P-1853		597	
図48-118	ⅤⅢC-202	Ⅱ01	深鉢	口～胴上	具原形状	具原形状	具原形状	ナブ+ミギキ	V	P-23		522	
図48-119	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口～胴上	具原形, 外筋状物付帯, 内筋スス付帯	具原形, 外筋状物付帯, 内筋スス付帯	具原形状	ナブ	V	P-1804, 1794		656	
図48-120	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口～胴上	具原形状	具原形状	具原形状	ナブ	V	P-1244		658	
図48-121	ⅤⅢC-203	Ⅱ10	深鉢	口	具原形状	具原形状	具原形状	ナブ+ミギキ	V	P-1792		1053	
図48-122	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	具原形状, 外筋スス付帯			ナブ	V	P-1803		552	
図48-123	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	具原形状	具原形状	具原形状	ナブ	V	P-1819		547	
図48-124	ⅤⅢC-201	Ⅱ02	深鉢	口	具原形状	具原形状	具原形状	ナブ+ミギキ	V	P-86		564	
図48-125	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	具原形状	具原形状	具原形状	ナブ+ミギキ	V	P-1829		574	
図48-126	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	縄文	斜行縄文	ナブ	ナブ	V	P-1892		652	
図48-127	ⅤⅢC-203	Ⅱ10	深鉢	口	縄文	縄文	L&R斜行	ナブ	V	P-1818		651	
図48-128	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	胴上下	条線文	条線文	条線文	ナブ	V	P-1858		722	
図48-129	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	胴上下	条線文	条線文	ナブ+ミギキ	V	P-1787		723		
図48-130	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	胴上	条線文, 外筋状物付帯	条線文	ナブ+ミギキ	V	P-1278, 1561		718		
図48-131	ⅤⅢC-203	Ⅱ02	深鉢	口	平行波線, 縄文, 外筋むすびにスス付帯			L&R斜行	ナブ	P-409		719	
図48-132	ⅤⅢC-202	Ⅱ1	深鉢	口	小突起, 条線, 凹線付帯, 縄文, 条線, 波線			L&R斜行	ナブ	V		555	
図48-133	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	小突起, 突起外周に輪溝, 突起内面に斜線付帯, 縄文			L&R斜行	ナブ+ミギキ	V	P-15		514
図48-134	ⅤⅢC-203	Ⅱ10	深鉢	胴～胴上	波線文, 点状斜線文			L&R斜行	ナブ	V	P-1153	1352	735
図48-135	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	筋文, 内筋状物付帯			ナブ	V	P-1500		599	
図48-136	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	浅小皿鉢	口	筋文			ナブ+ミギキ	V	P-1035		622	
図48-137	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	口縁部に動物形突起, 粘土粒付, 口唇部装飾, 縄文			L&R斜行	ナブ+ミギキ	V	P-1610	1337	512
図48-138	ⅤⅢC-202	Ⅱ02	壺	壺		垂直状手取突起, 平行波線文, 縄文	L&R斜行	ナブ	V	P-83		762	
図48-139	ⅤⅢC-203	Ⅱ01	鉢小壺	胴上		條線, 波線文		ナブ+ミギキ	Ⅲ		740	733	
図48-140	ⅤⅢC-201	Ⅱ10	壺小鉢	胴上		條線, 波線文		ナブ+ミギキ	Ⅲ		733	749	
図48-141	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	胴上下		波線文		ナブ	Ⅲ		745	735	
図48-142	ⅤⅢC-203	Ⅱ10	壺	胴上下		波線文		ナブ	Ⅲ		739	745	
図48-143	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	鉢	口	小突起, 平行波線文, 縄文帯			L&R斜行	ナブ	Ⅲ		738	
図48-144	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	広口壺小鉢	胴～胴上		平行波線文, 波線, 凹線付帯, 波線文	縄文	ナブ	Ⅲ			728	
図48-145	ⅤⅢC-203	Ⅱ10	深鉢	口～胴下	筋文, 外筋状物付帯	筋文, 外筋状物付帯		ナブ+ミギキ	V	P-1781, 1785, 1796		661	
図48-146	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	広口壺小鉢	胴	筋文, 比喩に屈位付帯			ナブ	Ⅲ			726	
図48-147	ⅤⅢC-202	Ⅱ02	深鉢	口～胴上	筋文	筋文		ナブ+ミギキ	V	P-308		657	
図48-148	ⅤⅢC-203	Ⅱ03	深鉢	口	筋文			ナブ+ミギキ	V	P-731		621	
図48-149	ⅤⅢC-202	Ⅱ03	深鉢	口	筋文, 外筋むすびにスス付帯			ナブ+ミギキ	V	P-585		566	
図48-150	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口～胴上	筋文, 外筋スス付帯	筋文, 外筋スス付帯		ナブ	V			1238	
図48-151	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	筋文			ナブ	V			565	
図48-152	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	筋文			ナブ+ミギキ	V			618	
図48-153	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	筋文			ナブ	V			562	
図48-154	ⅤⅢC-203	Ⅱ10	深鉢	口～胴上	筋文	筋文		ナブ	V	P-1088		631	
図48-155	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	筋文			ナブ+ミギキ	V			606	
図48-156	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	筋文			ナブ	V			609	
図48-157	ⅤⅢC-203	Ⅱ10	深鉢	胴下～底	筋文			ナブ	Ⅲ			505	
図48-158	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	具原形状	具原形状	具原形状	ナブ+ミギキ	V	P-1132		553	
図48-159	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	具原形状	具原形状	具原形状	ナブ	V			609	
図48-160	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	具原形状	具原形状	具原形状	ナブ+ミギキ	V			524	
図48-161	ⅤⅢC-203	Ⅱ10	深鉢	口	具原形状	具原形状	具原形状	ナブ	V			526	
図48-162	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	縄文, 外筋スス付帯			L&R斜行	ナブ	V		1143	
図48-163	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	口	具原形状, 外筋スス付帯			ナブ+ミギキ	V			1050	
図48-164	ⅤⅢC-203	Ⅱ10	深鉢	胴下～底		縄文	L&R斜行	ナブ	Ⅲ			552	
図48-165	ⅤⅢC-203	Ⅱ10	深鉢	口	条線文	条線文	条線文	ナブ+ミギキ	V			724	
図48-166	ⅤⅢC-203	Ⅱ03	深鉢	口	小突起, 凹線付帯, 平行波線文, 縄文			L&R斜行	ナブ	V		732	
図48-167	ⅤⅢC-203	Ⅱ03	深鉢	口	小突起, 波線文, 縄文			L&R斜行	ナブ	V		625	
図48-168	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	胴上		縄文帯, 上割線	L&R斜行	ナブ	V	P-1133		610	
図48-169	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	胴上下		筋文, 波線文, ミギキ	L&R斜行	ナブ+ミギキ	V			732	
図48-170	ⅤⅢC-202	Ⅱ10	深鉢	胴上下		筋文, 波線文, 縄文, 波線文ミギキ	L&R斜行	ナブ	V			724	
図48-171	ⅤⅢC-201	Ⅱ02	深鉢	胴上下		波線文, 筋文, ミギキ	L&R斜行	ナブ	V			747	
図48-172	ⅤⅢC-201	Ⅱ10	深鉢	胴上		波線文, 縄文, 結帯	L&R斜行	ナブ	V			734	
図48-173	Ⅲ	深鉢	口	波状口縁, 縄文, 口付装飾, 波線文, 波線部に点状斜線文			斜行縄文	ナブ	V		735	1332	

遺構外土器観察表 4

調査 番号	グリッド	層位	遺構	部位	口 部 類	形 部	地 文	内周側底	分輪 (伊破)	備 考	高	整理 No.
050-174	ⅤⅢC-202	R10	竪穴小鉢	胴下～底		真原形状, 外底スス付	真原形状	ナデ	V			703
050-175	ⅤⅢC-201	R02	鉢	口	匳文			ナデ	V			697
050-176	ⅤⅢC-202	R10	鉢	口	匳文			ナデ	V			532
050-177	ⅤⅢC-202	R02	壺	口縁	匳文, ミガキ			ケズリ+ナデ	V			536
050-178	ⅤⅢC-202	R10	壺	口縁	匳文, ミガキ			ナデ	V			667
050-179	ⅤⅢC-202	R03	竪穴小鉢	口	山形突起, 外底突起の小突起, 外底にヒレ, 口縁に沿って外側に匳文		L.R.斜行	ナデ+ミガキ	V			515
050-180	ⅤⅢC-202	R10	竪穴口	胴上下		沈線文, 真原形状, 匳文ミガキ	真原形状	ケズリ+ナデ	V			742
050-181	ⅤⅢC-202	R10	竪穴口	口	口			ケズリ+ナデ	V			713
051-182	ⅤⅢD-205	R01	漆鉢	口～胴上	折り返し口縁, 匳文	匳文		ケズリ+ナデ	Ⅲ			1315
051-183	ⅤⅢD-205	R01	壺	口縁	沈線文		L.R.斜行	ケズリ+ナデ	Ⅲ			1207
051-184	ⅤⅢD-205	R01	壺	胴上		横穴文		ナデ	Ⅲ	1213	1211	
051-185	ⅤⅢD-205	R01	壺	胴下		横穴文		ナデ	Ⅲ	1214	1212	
051-186	ⅤⅢD-205	R01	壺	口縁	縁部に横線			ナデ	Ⅲ			1218
051-187	ⅤⅢD-205	R01	壺	胴上		横穴文		ケズリ+ナデ	Ⅲ	1221, 1222	1219	
051-188	ⅤⅢD-206	R01	壺	胴上		横穴文		ケズリ+ナデ	Ⅲ	1219, 1221	1221	
051-189	ⅤⅢD-205	R01	壺	胴下		横穴文, 平行沈線文		ケズリ+ナデ	Ⅲ	1219, 1221	1222	
051-190	ⅤⅢD-203	R01	漆鉢	胴下		横穴文+沈線文, 沈線部に斜目, 内外底に灰化付着	L.R.+L.R.斜行	ナデ	Ⅳ			1457
051-191	ⅤⅢD-203	R01	鉢	胴～胴上	平行沈線文, 沈線部に横穴文, 内外底に灰化付着	横穴文(真原形状)	真原形状	ナデ	Ⅳ			1202
051-192	ⅤⅢD-205	R01	漆鉢	口	匳文, 外底わずかにスス付			ケズリ+ナデ	V			1029
051-193	ⅤⅢD-204	R01	漆鉢	口	匳文, 外底わずかにスス付			ナデ	V			1241
051-194	ⅤⅢD-204	R01	漆鉢	口～胴上	匳文, 外底に灰化付着	匳文, 外底に灰化付着		ナデ	V			1242
051-195	ⅤⅢD-205	R01	漆鉢	口～胴上	匳文, 外底スス付	匳文, 外底スス付		ナデ	V			1505
051-196	ⅤⅢD-206	R01	漆鉢	口	匳文			ケズリ+ナデ	V			1321
051-197	ⅤⅢD-204	R01	漆鉢	口	匳文			ナデ+ミガキ	V			1454
051-198	ⅤⅢD-206	R01	漆鉢	口	匳文			ナデ+ミガキ	V			1494
051-199	ⅤⅢD-205	R01	漆鉢	口	小突起, 突起部から内面に横線正底, 匳文, 沈線文, 縁部, 外底スス付		L.R.斜行	ナデ	V	1298	1297	
051-200	ⅤⅢD-205	R01	漆鉢	口～胴上	匳文	匳文	L.R.斜行	ケズリ+ナデ	V			1139
051-201	ⅤⅢD-203	R01	漆鉢	口	真原形状			ナデ+ミガキ	V			1403
051-202	ⅤⅢD-206	R01	漆鉢	口	真原形状			ナデ+ミガキ	V			1481
051-203	ⅤⅢD-205	R10	漆鉢	口	口唇部隆起, 匳文			匳文	V			1346
051-204	ⅤⅢD-206	R10	漆鉢	胴上		匳文		ナデ+ミガキ	V			1343
051-205	ⅤⅢD-205	R10	漆鉢	胴上下		匳文, 外底スス付		ナデ+ミガキ	V			1344
052-206	ⅤⅢD-204	R01	漆鉢	口～胴上	匳文, 外底わずかにスス付	匳文, 外底わずかにスス付	匳文	ナデ	V			1510
052-207	ⅤⅢD-206	R01	漆鉢	胴上		匳文, 外底に灰化付着	匳文	ナデ	V			1253
052-208	ⅤⅢD-206	R01	漆鉢	胴下		匳文, 外底に灰化付着	匳文	ナデ	V			1382
052-209	ⅤⅢD-205	R01	漆鉢小鉢	口	匳文			ナデ	V			1501
052-210	ⅤⅢD-205	R01	漆鉢小鉢	口	匳文			ナデ	V			644
052-211	ⅤⅢD-204	R01	鉢	口	口唇部に小突起, 突起部から内面に横線正底, 匳文, 沈線文			ケズリ+ナデ	V	1191, 1192, 1194	1190	
052-212	ⅤⅢD-204	R01	鉢	胴上下		匳文		ケズリ+ナデ	V			1191
052-213	ⅤⅢD-205	R01	鉢	口	小突起, 突起部から内面に横線正底, 匳文, 沈線文		L.R.斜行	ケズリ+ナデ	V			1361
052-214	ⅤⅢD-204	R01	鉢	胴上下		上折線, 沈線		ケズリ+ナデ	V	1191, 1191	1192	
052-215	ⅤⅢD-209	R02	漆鉢	口	匳文			ケズリ+ナデ	V			1140
052-216	ⅤⅢD-205	R02	漆鉢	口～胴上	匳文, 外底に灰化付着	匳文, 外底に灰化付着	匳文	ケズリ+ナデ	V			1483
052-217	ⅤⅢD-204	R02	漆鉢	胴上			斜行匳文	ナデ	V			1489
052-218	ⅤⅢD-208	R02	漆鉢	口	折り返し口縁		L.R.斜行	ケズリ+ナデ	Ⅲ			1181
052-219	ⅤⅢD-202	R02	漆鉢	口～胴上	匳文, 外底スス付			ナデ	V	P-312		1044
052-220	ⅤⅢD-201	R03	漆鉢	胴上		匳文, 沈線文	L.R.斜行	ナデ	Ⅲ			1171
052-221	ⅤⅢD-203	R03	漆鉢	胴上		匳文, 沈線文	L.R.斜行	ナデ	Ⅲ			1178
052-222	ⅤⅢD-203	R03	漆鉢	口	匳文, 縁部沈線		L.R.斜行	ナデ	Ⅲ			1146
052-223	ⅤⅢD-200	R03	漆鉢	胴上		横線文(上に匳文), 匳文, 沈線文	L.R.斜行	ナデ	Ⅲ			1022
052-224	ⅤⅢD-205	R03	漆鉢	胴上		匳文		ナデ	Ⅲ			1204
052-225	ⅤⅢD-200	R03	漆鉢	口	折縁部, 縁部文			ナデ	Ⅳ			1333
052-226	ⅤⅢD-203	R03	漆鉢	口～胴上	匳文(沈線文に匳文)	匳文(沈線文に匳文)		ナデ	Ⅲ			1363
052-227	ⅤⅢA-204	R04	漆鉢	口	真原形状			ケズリ+ナデ	Ⅳ			1043
052-228	ⅤⅢD-203	R03	漆鉢	胴下～底		匳文		ナデ	Ⅲ			1432
052-229	ⅤⅢD-205	R03	漆鉢小鉢	胴～胴上	平行沈線文, 沈線部に斜目			ナデ	Ⅳ	1251	1349	
052-230	ⅤⅢD-206	R03	漆鉢	口～胴上	匳文, 外底に灰化付着	匳文, 外底に灰化付着		ケズリ+ナデ	V			1064
052-231	ⅤⅢA-205	R03	漆鉢	口	匳文, 外底スス付			ケズリ+ナデ	V			1288
052-232	ⅤⅢD-205	R03	漆鉢	口	匳文			ケズリ+ナデ	V			1238
052-233	ⅤⅢD-206	R03	漆鉢	胴下		匳文, 外底に灰化付着		ナデ	V			1066
052-234	ⅤⅢD-206	R03	漆鉢	口～胴上	匳文, 外底に灰化付着	匳文, 外底に灰化付着		ナデ	V			1065
052-235	ⅤⅢD-205	R03	漆鉢	口～胴上	匳文, 外底に灰化付着	匳文, 外底に灰化付着		ナデ	V			1237
052-236	ⅤⅢD-206	R03	漆鉢	口	匳文			ナデ	V			1259
052-237	ⅤⅢD-205	R03	漆鉢	口～胴上	匳文, 外底に灰化付着	匳文, 外底に灰化付着		ケズリ+ナデ	V			1271, 1270
052-238	ⅤⅢD-205	R03	漆鉢	口～胴上	匳文, 外底に灰化付着, 内面にもわずかに灰化付着	匳文, 外底に灰化付着, 内面にもわずかに灰化付着		ケズリ+ナデ	V	1270?	1271	
052-239	ⅤⅢD-203	R03	漆鉢	口	匳文, 外底に灰化付着			ケズリ+ナデ	V			1276



遺構外土器観察表 6

図号 番号	グリップ	形状	器種	部位	口 縁 部	内 部	地 文	内面調整	分層 (層別)	書 号	同一	整理 No.
図57-311	XⅡB-204	PR3	鉢	口	縄文			L&L磨行	ケズリナナド	V		1487
図57-312	XⅡB-205	PR3	鉢	口～胴上	縄文、丹波黒化動物骨	縄文、丹波黒化動物骨			ケズリナナド	V		1240
図57-313	XⅡB-205	PR3	鉢	口～胴上	縄文、丹波黒化動物骨	縄文、丹波黒化動物骨			ナド	V		1210
図57-314	XⅡB-205	PR3	鉢	口～胴上	縄文、丹波黒化動物骨	縄文、丹波黒化動物骨			ナド	V		1229
図57-315	XⅡB-205	PR3	鉢	口～胴上	口内に小突起、縄文、丹波黒化動物骨、丹波黒スリ付	縄文、丹波黒化動物骨、丹波黒スリ付	黒原磨状		ナド+ミガキ	V	1117～ 1119	1120
図57-316	XⅡB-203	PR3	壺か瓶口	口	小突起、突起部間に伸状凹溝、縄文、平行沈線文		R&L磨行		ナド+ミガキ	V		1293
図57-217	XⅡB-206	PR3	鉢	口～胴上	口内に小突起、縄文等(黒原磨状)	縄文等(黒原磨状)	黒原磨状		ナド+ミガキ	V	1108-1109	1117
図57-318	XⅡB-203	PR3	壺か瓶口	胴上		縄文等(縄文・凹紋)	黒原(凹線目)		ナド	V		1208
図57-319	XⅡB-205	PR3	鉢	胴下		縄文等(黒原磨状)、内面スリ付	黒原磨状		ナド+ミガキ	V	1117-1118	1119
図57-220	XⅡB-206	PR3	壺	胴下		縄文沈線文			ケズリナナド	V		1512
図57-221	XⅡB-206	PR3	壺か瓶口	胴上下		縄文、丹波黒化動物骨、内面わづかにスリ付			ケズリナナド	V		1524
図57-222	XⅡB-203	PR3	壺か瓶口	胴～胴上	平行沈線文、縄文	縄文、沈線文、屈曲	R&L磨行		ケズリナナド	V	1106-1107	1108
図57-223	XⅡB-204	PR3	壺か瓶口	胴上		縄文、縄文等	R&L磨行		ケズリナナド	V		1591
図57-224	XⅡB-203	PR3	壺か瓶口	胴上下		縄文等、沈線文、屈曲	R&L磨行		ケズリナナド	V	1106-1108	1107
図57-225	XⅡB-203	PR3	壺か瓶口	胴～胴上	屈状・平行沈線文				ケズリナナド	V		1209
図57-226	XⅡB-205	PR3	壺か瓶口	胴上下		縄文等(黒原磨状)	黒原磨状		ケズリナナド	V		1204
図57-227	XⅡB-204	PR3	壺か瓶口	口	平行沈線文、縄文		黒原磨状		ナド	V		1275
図57-228	XⅡB-203	PR3	壺か瓶口	胴上		縄文等(黒原磨状)	黒原磨状		ナド	V		1196
図57-329	XⅡB-203	PR3	注口	口～胴下	小突起の両隣縁に沈線、平行沈線文、縄文(R)		L&L・R&L磨行		ミガキ	V		1430
図58-330	XⅡB-202	PR3	浮鉢	胴下～底		縄文、底面に屈状底	黒原磨状		ナド	VI		1441
図58-331	XⅡB-206	PR10	浮鉢	胴上		縄文、沈線文	R&L磨行		ナド	III	1174	1178
図58-332	XⅡB-206	PR10	浮鉢	口	縄文、平行沈線文		R&L磨行		ナド	III		1177
図58-333	XⅡB-203	PR10	浮鉢	口	縄文、平行沈線文		R&L磨行		ナド	III		1265
図58-334	XⅡB-204	PR10	浮鉢	胴下		横門文			ナド	III	1181	1180
図58-335	XⅡB-205	PR10	浮鉢	胴上下		横門文(底縁文、条線文)			ケズリナナド	III		1274
図58-336	XⅡB-204	PR10	浮鉢	胴下～底		横門文、底面一度縄文			ナド	III	1180	1181
図58-337	XⅡB-206	PR10	浮鉢	口	沈線文				ナド+ミガキ	III		1527
図58-338	XⅡB-205	PR10	浮鉢か鉢	胴下		沈線文			ナド	III		1214
図58-339	XⅡB-203	PR10	鉢	口～胴上	平行沈線文、沈線部に横目	縄文等(黒原磨状)、内面スリ付	黒原磨状		ナド	IV		1193
図58-340	XⅡB-206	PR10	浮鉢	口	縄文				ナド	V		643
図58-341	XⅡB-202	PR10	浮鉢	口	縄文				ケズリナナド	V		647
図58-342	XⅡB-207	PR10	浮鉢	胴上		縄文、丹波黒化動物骨			ナド	V		1073
図58-343	XⅡB-205	PR10	浮鉢	胴上		縄文、内面黒化動物骨			ナド	V		1074
図58-344	XⅡB-205	PR10	浮鉢	口	縄文、丹波黒スリ付				ナド	V		1205
図58-345	XⅡB-207	PR10	浮鉢	口	縄文、丹波黒スリ付				ケズリナナド	V		1206
図58-346	XⅡB-205	PR10	浮鉢	口～胴上	縄文、丹波黒スリ付	縄文、丹波黒スリ付			ナド	V		1075
図58-347	XⅡB-205	PR10	浮鉢	口～胴上	縄文、丹波黒化動物骨	縄文、丹波黒化動物骨			ナド	V		1098
図58-348	XⅡB-205	PR10	浮鉢	胴上		縄文、丹波黒わづかに黒化動物骨、内面わづかにスリ付			ナド	V		1099
図59-349	XⅡB-205	PR10	浮鉢	口～胴上	縄文				ナド+ミガキ	V		1182
図59-350	XⅡB-202	PR10	浮鉢	口～胴上	縄文、丹波黒スリ付	縄文、丹波黒スリ付			ナド	V		1207
図59-351	XⅡB-202	PR10	浮鉢	口～胴上	縄文、丹波黒わづかにスリ付	縄文、丹波黒わづかにスリ付			ケズリナナド	V		1272
図59-352	XⅡB-205	PR10	浮鉢	口	縄文、丹波黒スリ付				ナド	V		1285
図59-353	XⅡB-206	PR10	浮鉢	口～胴上	縄文、丹波黒わづかにスリ付	縄文、丹波黒わづかにスリ付			ナド	V		1289
図59-354	XⅡB-206	PR10	浮鉢	口	縄文、丹波黒化動物骨				ケズリナナド	V		1291
図59-355	XⅡB-203	PR10	浮鉢	口	縄文、内面スリ付				ケズリナナド	V		1121
図59-356	XⅡB-206	PR10	浮鉢	口	縄文、丹波黒スリ付				ケズリナナド	V		1308
図59-357	XⅡB-206	PR10	浮鉢	口	縄文				ケズリナナド	V		1311
図59-358	XⅡB-202	PR10	浮鉢	口	縄文、丹波黒化動物骨				ナド	V		1309
図59-359	XⅡB-207	PR10	浮鉢	口～胴上	縄文				ナド	V		1318
図59-360	XⅡB-202	PR10	浮鉢	口～胴上	縄文				ケズリナナド	V		1320
図59-361	XⅡB-202	PR10	浮鉢	口	縄文				ケズリナナド	V		1389
図59-362	XⅡB-205	PR10	浮鉢	口	縄文				ケズリナナド	V		1393
図59-363	XⅡB-203	PR10	浮鉢	口	縄文				ケズリナナド	V		1450
図59-364	XⅡB-206	PR10	浮鉢	口	縄文				ケズリナナド	V		1491
図59-365	XⅡB-205	PR10	浮鉢	口	縄文				ケズリナナド	V		1453
図59-366	XⅡB-204	PR10	浮鉢	口	縄文、丹波黒スリ付				ケズリナナド	V		1451
図59-367	XⅡB-206	PR10	浮鉢	口	縄文、内面スリ付				ケズリナナド	V		1492
図60-368	XⅡB-205	PR10	浮鉢	口	縄文、丹波黒化動物骨				ナド	V		1403
図60-369	XⅡB-202	PR10	浮鉢	口	縄文、丹波黒わづかにスリ付				ケズリナナド	V		1476
図60-370	XⅡB-205	PR10	浮鉢	口	縄文				ナド+ミガキ	V		1502
図60-371	XⅡB-202	PR10	浮鉢	口	縄文				ナド+ミガキ	V		1507
図60-372	XⅡB-205	PR10	浮鉢	口	縄文、丹波黒化動物骨				ナド	V		1510
図60-373	XⅡB-208	PR10	浮鉢	口～胴上	縄文				ケズリナナド	V		1511
図60-374	XⅡB-205	PR10	浮鉢	口	縄文				ナド	V		1521
図60-375	XⅡB-205	PR10	浮鉢	口	黒原磨状		黒原磨状		ナド	V		1136
図60-376	XⅡB-205	PR10	浮鉢	口	黒原磨状		黒原磨状		ナド	V		1091
図60-377	XⅡB-206	PR10	浮鉢	口～胴上	黒原磨状	黒原磨状	黒原磨状		ナド	V		1048
図60-378	XⅡB-202	PR10	浮鉢	口～胴上	黒原磨状、丹波黒化動物骨	黒原磨状、丹波黒化動物骨	黒原磨状		ナド	V		1425
図60-379	XⅡB-206	PR10	浮鉢	口	黒原磨状		黒原磨状		ケズリナナド	V		1145

遺構外土器観察表7

調査番号	グリッド	層位	器種	部位	口部部	胴部	地文	内面装飾	分類(時期)	備考	同一	整理札
R040-380	文書H-205	F10	深鉢	口	黒原羽状		黒原羽状	ナデ	V			1414
R040-381	文書H-206	F10	深鉢	口	黒原羽状, 外周面化動物骨		黒原羽状	ナデ	V			1421
R040-382	文書C-203	F10	深鉢	口	黒原羽状		黒原羽状	ナデ	V			1144
R040-383	文書B-204	F10	深鉢	口	黒原羽状		黒原羽状	ナデ+ヒダキ	V			1467
R040-384	文書C-206	F10	深鉢	口~胴上	黒原羽状	黒原羽状	ナデ	V	V			1496
R040-385	文書H-205	F10	深鉢	口~胴上	黒原羽状	黒原羽状	ケズリ+ナデ	V	V			1509
R040-386	文書B-203	F10	深鉢	口	口唇部肥厚, 黒原羽状		黒原羽状	ナデ+ヒダキ	V			1458
R040-387	文書C-202	F10	深鉢	口	黒原羽状		黒原羽状	ケズリ+ナデ	V			1471
R040-388	文書B-204	F10	深鉢	口	黒原羽状, 外周面化動物骨		黒原羽状	ナデ+ヒダキ	V			1493
R040-389	文書H-205	F10	深鉢	口	黒原羽状, 外周スス付		黒原羽状	ナデ	V	1470		1469
R040-390	文書H-205	F10	深鉢	口	沢尻, 沢尻部に準状(2部), 黒原羽状(部位)		黒原羽状	ケズリ+ナデ	V			1339
R040-391	文書B-204	F10	深鉢	口	小突起, 突起部に準状(左), 黒原羽状, 内面化動物骨		黒原羽状	ナデ+ヒダキ	V			1503
R040-392	文書C-203	F10	深鉢	口	平口縁, 小突起, 突起内面に準状(左), 黒原羽状		黒原羽状	ケズリ+ナデ	V			1370
R040-393	文書B-206	F10	深鉢	口	腕文, 口唇内面に施す		黒原羽状	ナデ	V			1353
R041-394	文書C-202	F10	深鉢	口~胴下	腕文, 外周面化動物骨	腕文, 外周面化動物骨	丸, 斜行	ナデ	V			1382
R041-395	文書C-202	F10	深鉢	口	腕文		丸, 斜行	ナデ+ヒダキ	V			1484
R041-396	文書C-203	F10	深鉢	口	腕文, 外, 内スス付		丸, 斜行	ナデ+ヒダキ	V			1413
R041-397	文書H-206	F10	深鉢	口~胴上	腕文, 外周わずかにスス付	腕文, 外周わずかにスス付	丸, 斜行	ナデ	V			1423
R041-398	文書C-202	F10	深鉢	口~胴上	赤腕文, 外周スス付	赤腕文, 外周スス付	赤腕文	ケズリ+ナデ	V			1154
R041-399	文書G-206	F10	深鉢	口	赤腕文		赤腕文	ナデ	V			1181
R041-400	文書C-202	F10	深鉢	胴~胴上	縦文帯		丸, 斜行	ケズリ+ナデ	V			1183
R041-401	文書G-206	F10	深鉢	口	小突起, 突起部から内面に準状(左), 腕文, 化腕文, 外周スス付		丸, 斜行	ナデ	V	1297		1298
R041-402	文書H-206	F10	深小皿	胴下		腕文帯(黒原羽状), 外周スス付	黒原羽状	ケズリ+ナデ	V			1395
R041-403	文書B-205	F10	深小皿	胴下~底		腕文帯, 腕文	丸, 斜行	ナデ+ヒダキ	V			1427
R041-404	文書C-202	F10	鉢	口	腕文		ナデ	V	V			1508
R041-405	文書B-203	F10	巻	胴~胴上		腕文帯(黒原羽状)	黒原羽状	ナデ	V			1217
R041-406	文書B-203	F10	巻小径口	胴上		腕文帯, 化腕文, 胎座	丸, 斜行	ケズリ+ナデ	V	1191/108		1191
R041-407	文書D-206	F10	巻小径口	胴下		腕文帯(黒原羽状)	黒原羽状	ケズリ+ナデ	V			1035
R041-408	文書B-203	F10	巻	胴上		腕文帯, 胎座, 外周スス付	丸, 斜行	ナデ	V			1200
R041-409	文書D-206	F10	巻小径口	胴上~下		腕文帯(黒原羽状)	黒原羽状	ケズリ+ナデ	V			1036
R041-410	文書G-206	F10	小型浅鉢	口~底	腕文		ナデ	V	V			1442
R041-411	文書C-202	F10	小型鉢	口~底	腕文		丸, 斜行	ナデ	V			1433
R041-412	文書C-207	F13	深鉢	胴下		横文	ナデ	Ⅲ	Ⅲ			1033
R041-413	文書D-207	F13	深鉢	口	波状口縁, 平行波腕文, 横文		ケズリ+ナデ	Ⅲ	Ⅲ			1210
R041-414	文書A-204	F13	深鉢	口	波状口縁, 斜口波縁, 垂序文		ナデ+ヒダキ	Ⅲ	Ⅲ			1220
R041-415	文書C-207	F13	深鉢	口	横文		ナデ	Ⅲ	Ⅲ			1223
R042-416	文書C-207	F13	深鉢	口	波状口縁, 波頭部に斜土層付, 波頭部から内面に斜土層付, 斜口波縁, 波腕文		ナデ	Ⅲ	Ⅲ			1305
R042-417	文書D-207	F13	深鉢	口	波状口縁, 波頭部に斜土層付, 斜口波縁, 横文		ケズリ+ナデ	Ⅲ	Ⅲ			1366
R042-418	文書C-207	F13	深鉢	胴上下		波腕文, 内面スス付	ナデ+ヒダキ	Ⅲ	Ⅲ			1563
R042-419	文書D-207	F13	深鉢	胴上		横文	ナデ	Ⅲ	Ⅲ			1033
R042-420	文書D-207	F13	鉢	口	平行波縁, 横文		ナデ	Ⅲ	Ⅲ			1656
R042-421	文書B-206	F13	深鉢	口	波状縁, 波5字状縁		ナデ	IV	Ⅲ			1325
R042-422	文書B-205	F13	深鉢	口~胴上	腕文, 外周面化動物骨		ケズリ+ナデ	V	V	187/249		1077
R042-423	文書D-207	F13	深鉢	口~胴上	腕文, 外周わずかにスス付	腕文, 外周わずかにスス付	ナデ	V	V			1290
R042-424	文書B-206	F13	深鉢	口~胴上	腕文, 外周面化動物骨		ケズリ+ナデ	V	V	180/107		1072
R042-425	文書C-202	F13	深鉢	口~胴上	腕文, 外周スス付		ケズリ+ナデ	V	V			1268
R042-426	文書A-204	F13	深鉢	口	腕文		ケズリ+ナデ	V	V			1468
R042-427	文書B-202	F13	深鉢	口	腕文		ケズリ+ナデ	V	V			1517
R042-428	文書B-206	F13	深鉢	胴上		腕文, 外周面化動物骨	ケズリ+ナデ	V	V			1071
R042-429	文書D-207	F13	深鉢	口	腕文		ケズリ+ナデ	V	V			1283
R042-430	文書C-207	F13	深鉢	口~胴上	腕文	腕文	ナデ+ヒダキ	V	V			1307
R042-431	文書D-206	F13	深鉢	口~胴上	黒原羽状, 外周面化動物骨	黒原羽状, 外周面化動物骨	黒原羽状	ナデ	V			1418
R042-432	文書B-202	F13	深鉢	口	口唇部肥厚, 黒原羽状		黒原羽状	ナデ	V			1046
R042-433	文書C-207	F13	深鉢	口	口唇部肥厚, 黒原羽状		黒原羽状	ナデ+ヒダキ	V			1422
R042-434	文書B-202	F13	深鉢	口	黒原羽状		黒原羽状	ケズリ+ナデ	V			1424
R042-435	文書C-207	F13	深鉢	口	腕文		丸, 斜行	ナデ	V			1086
R042-436	文書B-206	F13	深鉢	胴下~底		腕文, 内面面化動物骨	丸, 斜行	ナデ	V			1437
R042-437	文書D-207	F13	深鉢	口	横文		ナデ	V	V	1357		1358
R042-438	文書C-207	F13	深鉢小鉢	胴下~底		黒原羽状, 外周スス付	黒原羽状	ケズリ+ナデ	V			1434
R042-439	文書A-204	F13	鉢	口	腕文帯(黒原羽状)		黒原羽状	ナデ	V			1355
R042-440	文書B-204	F13	浅口	胴上下		浅口部欠腕文	丸, 斜行	ケズリ+ナデ	V			1327
R042-441	文書B-202	F13	小型浅鉢	口~底		腕文	ケズリ+ナデ	V	V			1428
R042-442	文書B-206	F13	小型浅鉢	口~底	口縁部に小突起(上七)準状(左)	胎座	ナデ	V	V			1329
R042-443	文書B-199	F13	深鉢	胴~胴上	丸, 斜行(内), 垂序文(上七L形)	黒原羽状	黒原羽状	ナデ	I	1115		1114
R042-444	文書	深鉢	口	腕文, 波腕文			丸, 斜行	ナデ	Ⅲ			1138
R042-445	文書G-206	レキ	深鉢	口	ヒレ状突起, 内面スス付		ナデ+ヒダキ	Ⅲ	Ⅲ			1273
R042-446	文書C-203	F13	深鉢	口	腕文, 波腕文		丸, 斜行	ナデ	Ⅲ			1131

遺構外土器観察表 8

図版番号	グリッド	層位	遺跡	部位	口部形状	胴部	底文	内面調整	分層(例)	備考	同一	数量No.	
図B3-447		Ⅱ	遺跡	口	筒文			瓦葺行	ナデ	Ⅲ			1472
図B3-448	XⅡC-202	Ⅱ	遺跡	口	筒文			瓦葺行	ナデ	V			387
図B3-449		Ⅱ	遺跡	段状口	大形口縁・底文・突起部なし			ナデ	ナデ	Ⅲ			1233
図B3-450		Ⅱ	遺跡	口	筒状口			瓦葺行	ナデ	V			1490
図B3-451	XⅡC-206	Ⅱ	遺跡	口	筒文			筒文	ナデ	V			1162
図B3-452		Ⅱ	遺跡	段状口	口縁部・底文・突起部なし	筒文		瓦葺行	ナデ+ミガキ	V	512		1337
図B3-453		Ⅱ	遺跡	口	口縁部・小突起・底文・突起部なし			瓦葺行	ナデ+ミガキ	V			1328
図B3-454		Ⅱ	遺跡	段状口	筒上			有孔部・突起部・底文・突起部なし	瓦葺行	V			1326
図B3-455		Ⅱ	遺跡	口	筒上			筒文・突起部・内面入り付	瓦葺行	V			1394
図B3-456		Ⅱ	遺跡	口	筒文・口部・突起部・突起部なし	筒上		瓦葺行	ナデ+ミガキ	V			1296

遺構外土器観察表 9

図版番号	出土地	層位	遺跡	部位	口部形状	胴部	底文	内面	分層(例)	備考	同一	数量No.	
図B70-457	13C-196	Ⅱ	遺跡	口	平行状口縁5本	筒文		筒文	ミガキ	Ⅲ			1522
図B70-458	13D-196	Ⅱ	遺跡	口	平行状口縁5本	筒文		筒文	ミガキ	Ⅲ			1368
図B70-459	13C-196	Ⅱ	遺跡	口縁	平行状口縁3本			不明	不明	Ⅲ			1513
図B70-460	13A-199	Ⅱ	遺跡	口	平行・字文(筒状付によるもの)	筒文		瓦葺行	不明	Ⅲ			1028
図B70-461	13C-196	Ⅱ	遺跡	口	2部・一段の突起・平行・字文	筒文		瓦葺行	不明	Ⅲ			1458
図B70-462	13D-196	Ⅱ	遺跡	口	口縁部・筒文	筒文		瓦葺行	ミガキ	Ⅲ			1127
図B70-463	13C-195	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		不明	不明	Ⅲ			455
図B70-464	13C-191	Ⅱ	遺跡	口縁	平行状口縁・筒文					Ⅲ			1460
図B70-465	13E-192	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			483
図B70-466	13C-196	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	ナデ	Ⅲ			1387
図B70-467	13D-195	Ⅱ	遺跡	口	平行状口縁4本	筒文		筒文	ミガキ	Ⅲ			480
図B70-468	13D-196	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文・筒上		筒文	不明	Ⅲ			472
図B70-469	13D-195	Ⅱ	遺跡	口縁	平行状口縁4本	筒文		筒文	不明	Ⅲ			471
図B70-470	13D-191	Ⅱ	遺跡	口	平行状口縁3本	筒文		筒文	筒上	Ⅲ			714
図B70-471	13C-195	Ⅱ	遺跡	口	平行状口縁3本	筒文		筒文	ミガキ	Ⅲ			476
図B70-472	13D-195	Ⅱ	遺跡	口	平行状口縁3本	筒文		筒文	不明	Ⅲ			453
図B70-473	13C-192	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	ミガキ	Ⅲ			465
図B70-474	13C-192	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			469
図B70-475	13D-196	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			470
図B71-476		Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			654
図B71-477	13D-195	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	ナデ+ミガキ	Ⅲ			690
図B71-478	13C-192	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			475
図B71-479	13E-191	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			464
図B71-480		Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			474
図B71-481	13D-191	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			452
図B71-482	13D-195	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			458
図B71-483		Ⅱ	遺跡	口縁	平行状口縁			不明	不明	Ⅲ			481
図B71-484	13D-195	Ⅱ	遺跡	口縁	平行状口縁4本			不明	ナデ	Ⅲ			454
図B71-485	13D-195	Ⅱ	遺跡	口縁	平行状口縁4本			不明	不明	Ⅲ			479
図B71-486	13D-198	Ⅱ	遺跡	口縁	口縁部・筒上	筒文		不明	不明	Ⅲ			467
図B71-487	13D-195	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			450
図B71-488	13E-192	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		ナデ	不明	Ⅲ			463
図B71-489	13D-195	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			447
図B71-490	13D-195	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			463
図B71-491	13D-195	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			463
図B71-492	13C-196	Ⅱ	遺跡	口縁	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			427
図B71-493	13D-191	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			483
図B71-494	13C-212	Ⅱ	遺跡	口縁	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			1370
図B71-495	13D-198	Ⅱ	遺跡	口縁	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			1027
図B71-496	13C-196	Ⅱ	遺跡	筒上	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			448
図B71-497	13C-195	Ⅱ	遺跡	筒上	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			489
図B71-498		Ⅱ	遺跡	筒上	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			486
図B71-499	13C-195	Ⅱ	遺跡	筒上	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			485
図B71-500	13E-191	Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			498
図B71-501		Ⅱ	遺跡	口	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			698
図B71-502	13D-191	Ⅱ	遺跡	筒上	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			478
図B71-503	13E-197	Ⅱ	遺跡	筒上	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			1206
図B71-504	13D-195	Ⅱ	遺跡	筒上	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			658
図B71-505	13D+193	Ⅱ	遺跡	筒上	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			468
図B71-506	13D-196	Ⅱ	遺跡	筒上	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			458
図B71-507	13D-195	Ⅱ	遺跡	筒上	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			467
図B71-508	13D-191	Ⅱ	遺跡	筒上	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			462
図B71-509	13D-191	Ⅱ	遺跡	筒上	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			438
図B71-510	13E-193	Ⅱ	遺跡	筒上	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			488
図B71-511	13E-191	Ⅱ	遺跡	筒上	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			487
図B71-512	13A-198	Ⅱ	遺跡	筒上	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			1404
図B71-513	13A-198	Ⅱ	遺跡	筒上	筒上	筒文		筒文	不明	Ⅲ			1379





遺構外土器観察表11

図表番号	出土地	層位	形状	部 位	口縁部形状	胴 部 形 状	足 文	内 面	分類 (例題)	備 考	資料 No.	
図70	582	Ⅱ	深鉢	口～胴上	平行状縁本	縄文	LS,斜行	ナデ	Ⅴ		1204	
図70	583	Ⅱ	深鉢	口～胴上	平行状縁本	条線文	条線文	不明	Ⅴ	外周に灰化付着	1221	
図70	584	Ⅱ	深鉢	口	口縁縄文等・平行工字文	縄文	LS,縦走	ミガキ	Ⅴ	内外面に灰化付着明確	1228	
図70	585	Ⅱ	浅鉢	底	縁部ニ又の突起・内面直線工字文	縄文	LS,縦走	ミガキ	Ⅴ	内外面に灰化付着明確・底状モチーフは連続しない	1444	
図70	586	Ⅱ	浅鉢	口	おそらく直状工字文・突起下平文・縁部ニ突起			ミガキ	Ⅴ	底縁部大く平行状(底状)的	1828	
図70	587	Ⅱ	浅鉢	口	条線文		LS,斜行	Ⅴ		横文で平行工字文を表している	1440	
図70	588	127-194	Ⅰ	深鉢	口	縄文	LS,斜行	Ⅴ			1208	
図70	589	127-196	Ⅰ	深鉢	口～胴上	縄文	LS,斜行	ナデ	Ⅴ		1126	
図70	590	120-211	Ⅱ	深鉢	口	網目状底文	—	ミガキ	Ⅴ		1105	
図70	591	127-211	Ⅱ	深鉢	底	網目状底文	—	ミガキ	Ⅴ		1103	
図70	592	128-212	Ⅱ	深鉢	口	網目状底文	—	ミガキ	Ⅴ		1104	
図70	593	130-199	Ⅱ	深鉢	口～胴上	横円文	LS,斜行	ミガキ	Ⅴ	底縁部シャープ	1278	
図70	594	120-213	Ⅱ	深鉢	口～胴上	横円文	ミガキ	Ⅴ		底縁部鋭い、切り合い明確	1011	
図70	595	135-219	Ⅱ	深鉢	口	横円文			Ⅴ		1101	
図70	596	120-213	Ⅱ	深鉢	口	横円文			Ⅴ		1205	
図70	597	127-216	Ⅱ	深鉢	口	横円文・縦線文・突起部にも横円文		ミガキ	Ⅴ	口縁内面に口状縁本	1261	
図70	598	125-215	Ⅱ	深鉢	口	口唇状縁・横円文・突起等		ミガキ	Ⅴ		1386	
図70	599	Ⅱ	深鉢	突起	底状口縁部・横円文・口縁部・口縁内面に突起・外周に横円文・縄文		不明	ミガキ	Ⅴ		1083	
図70	600	13A-213	Ⅱ	深鉢	口～胴上	横円文	ナデ	Ⅴ		底縁部切り合い明確	1102	
図70	601	125-214	Ⅱ	深鉢	口	突起部・底状口縁部・口縁内面に突起			Ⅴ		1080	
図70	602	13L-175	Ⅱ	深鉢	口	縁方面のミガキ状突起			Ⅴ		1012	
図70	603	127-214	Ⅱ	深鉢	口	底縁部・突起・底状口縁部・突起			Ⅴ		1076	
図70	604	130-219	Ⅱ	深鉢	口	横円文	ナデ	Ⅴ		外周へラミガキ	1100	
図70	605	127-212	Ⅱ	深鉢	口	横円文等		ミガキ	Ⅴ	底縁部切り合い明確	1081	
図70	606	120-206	Ⅱ	深鉢	口	口縁内外に折り返し・底文		ミガキ	Ⅴ	底縁部V字形	1103	
図70	607	135-215	Ⅱ	深鉢	口	内面に口縁部・口縁部・口縁部・縄文	同心円文?・縄文	LS,斜行	ミガキ	Ⅴ	1229	
図70	608	130-212	Ⅱ	鉢	胴下	横円文・その他		不明			1028	
図70	609	127-216	Ⅱ	鉢	口	横円文		ミガキ	Ⅴ	大型	1140	
図70	610	127-215	Ⅱ	鉢	口	横円文		ナデ	Ⅴ	底状部	1142	
図70	611	127-204	Ⅱ	深鉢	口～胴上	縄文	不明	Ⅴ		外周縁部明確	1384	
図70	612	127-214	Ⅱ	深鉢	口	縄文	ナデ	Ⅴ			1405	
図70	613	130-213	Ⅱ	深鉢	口～胴上	縄文		ミガキ	Ⅴ		1003	
図70	614	130-213	Ⅱ	深鉢	底	縄文		ミガキ	Ⅴ		1009	
図70	615	127-216	Ⅱ	深鉢	口	縄文	ナデ	Ⅴ		外周縁部	1258	
図70	616	127-204	Ⅱ	深鉢	口	縄文	ナデ	Ⅴ		外周へラミガキ	1390	
図70	617	130-219	Ⅱ	深鉢	口～胴上	縄文			Ⅴ		1383	
図70	618	127-216	Ⅱ	深鉢	口	縄文		ミガキ	Ⅴ		1079	
図70	619	127-204	Ⅱ	深鉢	口～胴上	縄文・縁方面の縁部ナデ	縄文・縁方面の縁部ナデ	ナデ	Ⅴ	外周部ササエなどで底の縁部	1021	
図70	620	125-216	Ⅱ	深鉢	口	縁方面の条線	条線文	条線	Ⅴ		1380	
図70	621	127-206	Ⅱ	深鉢	口～胴下	縄文	縄文	底縁部	Ⅴ	縁部ミガキ	700	
図70	622	13-216	Ⅱ	深鉢	口	縄文	底縁部	底縁部	Ⅴ	縁部ミガキ	1130	
図70	623	130-209	Ⅱ	深鉢	口	縄文	底縁部	底縁部	Ⅴ		外周灰化付着明確	1402
図70	624	127-213	Ⅱ	深鉢	口	縄文	底縁部	ミガキ	Ⅴ		440	
図70	625	127-213	Ⅱ	深鉢	口	縄文	底縁部	ミガキ	Ⅴ		口唇内縁, 底平	949
図70	626	125-215	Ⅱ	深鉢	口	縄文	底縁部	ミガキ	Ⅴ		口唇内縁部	1415
図70	627	130-217	Ⅱ	深鉢	口～胴上	縄文	底縁部	ナデ	Ⅴ		1475	
図70	628	127-214	Ⅱ	深鉢	口	縄文	底縁部	ミガキ	Ⅴ		外周灰化付着明確	1411
図70	629	130-214	Ⅱ	深鉢	口	縄文	底縁部	ナデ	Ⅴ		口唇内縁部	1825
図70	630	13-216	Ⅱ	深鉢	口～胴上	底状突起多数・縄文	縄文	底縁部	ミガキ	Ⅴ		1532
図70	631	128-212	Ⅱ	深鉢	口	縄文	LS,斜行	ミガキ	Ⅴ		口唇平縁, 底平	1410
図70	632	127-214	Ⅱ	深鉢	口	内面に突起・底・縄文	LS,斜行	底縁部ミガキ	Ⅴ		1401	
図70	633	127-214	Ⅱ	深鉢	口	縄文・突起・底・縄文	底縁部	ミガキ	Ⅴ		底縁部突起・内周灰化付着	1416
図70	634	130-214	Ⅱ	浅鉢	底	入底状縄文・底・突起・縄文	底縁部	ミガキ	Ⅴ		入底状文内スリットで29割	1093
図70	635	130-219	Ⅱ	深鉢	口～胴上	底状突起・底状突起・入底状文	LS,斜行	ミガキ	Ⅴ		口唇内縁部	1431
図70	637-638	13F-191	Ⅱ	深鉢	口	底	LS,斜行	不明	Ⅴ		φ130mm径、7×10mm厚程度	492
図70	640	127-206	Ⅱ	深鉢	底	底	ナデ	Ⅴ			499	
図70	641	130-204	Ⅱ	深鉢	突起	底縁部・縄文	LS,斜行	ミガキ	Ⅴ		中盤	1001
図70	642	120-213	Ⅱ	深鉢	突起	底縁部	底縁部	ミガキ	Ⅴ			1011
図70	643	13A-215	Ⅱ	深鉢	口	大型突起・口唇状縁部	LS,斜行	底縁部	Ⅴ		突起上縁部	1616
図70	644	128-216	Ⅱ	鉢	口～胴上	縄文		ミガキ	Ⅴ		外周灰化付着顕著	1257
図70	645	127-206	Ⅱ	鉢	底	底		ミガキ	Ⅴ			961
図70	646	125-212	Ⅱ	鉢	口～胴上	縄文		ナデ	Ⅴ			1286
図70	647	130-218	Ⅱ	鉢	口	網目状底		ミガキ	Ⅴ		外周ミガキ	1349
図70	648	13A-213	Ⅱ	鉢	胴上	網目状底		ナデ	Ⅴ			1021
図70	649	不明	不明	高杯	底	内面に6mm径の突起多数・底縁部	外周無文	ミガキ	Ⅴ		底平土器	1341
図70	650	13A-215	Ⅱ	鉢	口	底		ナデ	Ⅴ			1288
図70	651	130-215	Ⅱ	鉢	口	底		ミガキ	Ⅴ			1189
図70	652	130-215	Ⅱ	鉢	口	山形突起・縄文		ミガキ	Ⅴ		突起多	1255



遺構外石器観察表 2

図版	掲載No.	器種	素材形態	石質	出土地	解説	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	備 考	図版No.
図67	542	叩印石		角礫岩	XⅡB-206	図10	154	56	39	476.2		159
図67	543	叩印石		角礫岩	XⅡB-202	図2	143	83	30	290.8	表面磨けハゲテ多数有	163
図67	544	叩印石		石英火山岩	XⅡA-202	図3	143	58	43	447.4		165
図67	545	叩印石		角礫岩	XⅡB-206	図10	162	52	31	357.5		160
図67	546	叩印石		石英火山岩	XⅡB-206	図10	116	78	67	964.3		172
図68	547	磨印石		石英火山岩	XⅡC-206	図13	114	92	66	950.1		177
図68	548	石鏝		角礫岩	XⅡB-202	図1	161	190	31	718.5		183
図68	549	砥石				図	185	94	48	822.9		198
図68	560	石棒?		頁岩	XⅡB-206	図10	95	38	37	214.9		184
図68	561	石刀?		礫状岩	XⅡB-205	図3	111.5	32.5	16.5	59.3		194
図76	562	石鏝	剥片	珸質頁岩	XⅡA-197 (101集)	Ⅱ	26	15	3.9	1	有茎凸基	18
図76	563	石鏝	剥片	珸質頁岩	XⅡG-192 (101集)	Ⅱ	37	19	8.7	4.1	主要側面磨	31
図76	564	石鏝	縦長剥片	珸質頁岩	XⅡD-192 (101集)	Ⅱ	73	30	9.2	24.5	つまみ側磨の向き	36
図76	565	サイドスクレイパー	剥片	珸質頁岩	XⅡC-195 (101集)	Ⅱ	64	29	14.7	24		81
図76	566	使用痕ある剥片	剥片	珸質頁岩	XⅡD-193 (101集)	Ⅱ	55	63	1.4			83
図76	567	石鏝		高嶺石	XⅡB-198	表1	30	14	3.8	1.1	有茎平基	9
図76	568	石鏝	剥片	珸質頁岩	XⅡC-199	図6	31	33	5.9	5.1	つまみ部に自然面(打面)残	42
図76	569	石鏝	縦長剥片	珸質頁岩	XⅡT-197	図13	56	38	12	22.1	つまみと直角方向の両側刃法による磨け	46
図77	580	スクレイパー	剥片	珸質頁岩	XⅡA-196	図10	71	55	14.6	51.2		84
図77	581	へう状石鏝	横長剥片	珸質頁岩	XⅡC-198	図6	53	28.8	8	10.8		161
図77	562	使用痕ある剥片	剥片	珸質頁岩	XⅡA-197	図13	74	77	15.3	64.6		167
図77	563	?		礫状角礫岩	XⅡC-196	図1	188	146	28	588.9		86
図83	584	石鏝	剥片	珸質頁岩	XⅡH-220	Ⅱ	45	15	5.5	2.9	有茎平基	25
図83	565	石鏝	剥片	玉髄珸質頁岩	XⅡT-214	Ⅱ	36	12	4	1.6	有茎凸基	27
図83	566	石鏝	剥片	珸質頁岩	XⅡH-220	Ⅱ	18	9	2.7	0.3	有茎凸基	24
図83	567	石鏝	剥片	珸質頁岩	XⅡP-215	Ⅱ	29	11	3.3	0.8	有茎凸基-縦辺部に中粒状(?)	23
図83	588	石鏝	剥片	珸質頁岩	XⅡE-201	Ⅱ	20	10	2.7	0.3	有茎凸基	21
図83	569	石鏝	剥片	珸質頁岩	XⅡF-214	Ⅱ	27	15	4.7	1	有茎凸基	19
図83	570	石鏝	剥片	珸質頁岩	XⅡC-213	Ⅱ	25	12	3.7	0.8	有茎凸基	26
図83	571	石鏝 未製品	剥片	珸質頁岩	XⅡE-215	Ⅱ	35	13	4.3	1.7	有茎-両面に磨け有り	20
図83	572	石鏝	剥片	玉髄珸質頁岩	XⅡP-213	Ⅱ	21	12	3.8	0.9	有茎平基-自然面残	22
図83	573	石鏝	剥片	珸質頁岩	博5-201	Ⅱ	77	39	11.3	37		59
図83	574	石鏝	両端剥片	玉髄	ZC-200	Ⅱ	62	36	10.5	18.6	つまみ部に自然面残	49
図83	575	石鏝	縦長剥片	珸質頁岩	XⅡE-202	Ⅱ	72	33	12.2	19.7	つまみ部に主要側面残	53
図83	576	石鏝	剥片	珸質頁岩	XⅡI-215	Ⅱ	58	31	13.4	22.6	主要側面打点斜め方向	57
図83	577	石鏝	剥片	珸質頁岩	XⅡK-206	Ⅱ	34	27	7.4	5.4		86
図83	578	石鏝	剥片	珸質頁岩	XⅡP-215	Ⅱ	41	21	4.8	4.3	主要側面打点つまみ部の反対側	54
図83	579	石鏝	縦長剥片	珸質頁岩	XⅡC-218	Ⅱ	64	34	9	10.3	主要側面打点つまみの反対側	51
図83	580	石鏝	剥片	珸質頁岩	XⅡT-214	Ⅱ	42	39	8	8.2	つまみ部に打面残	56
図83	581	石鏝	剥片	玉髄珸質頁岩	XⅡK-213	Ⅱ	39	18	4.5	2.7	小磨材	58
図84	582	石鏝	横長剥片	珸質頁岩	XⅡD-202	Ⅱ	44	28	6.5	5.5	主要側面打点斜め方向磨け剥片利用	56
図84	583	石鏝	剥片	頁岩	XⅡI-214	Ⅱ	35	27	2.9	2.2	主要側面打点縦長磨け剥片利用	52
図84	584	石鏝	横長剥片	珸質頁岩		表紙	46	62	9.7	17.8		60
図84	585	石鏝	縦長剥片	珸質頁岩	XⅡA-213	Ⅱ	38	24	6.5	7.4		63
図84	586	スクレイパー	剥片	珸質頁岩	XⅡB-214	Ⅱ	40	41	13.2	23.6		71
図84	587	サイドスクレイパー	剥片	珸質頁岩	XⅡH-215	Ⅱ	70	27	8.2	13.9		74
図84	588	サイドスクレイパー	剥片	珸質頁岩	XⅡA-213	Ⅱ	94	70	14.8	99.1		86
図84	589	スクレイパー	剥片	珸質頁岩	XⅡA-213	Ⅱ	61	29	6.5	14.7		72
図85	590	使用痕ある剥片	横長剥片	珸質頁岩	XⅡH-215	Ⅱ	39.3	81	12.8	17.7		109
図85	591	スクレイパー?	横長剥片	珸質頁岩	XⅡQ-207	Ⅱ	56	32	3.2	18.7	表面自然面居多?残	78
図85	592	チャップイン	鏝	頁岩	XⅡE-201	Ⅱ	87	84	48	445.9		180
図85	593	長形石鏝	縦長剥片	珸質頁岩	XⅡB-214	Ⅱ	60	25	8.8	7.8		65
図85	594	溝(チャップイン)	鏝	珸質頁岩	XⅡA-204	Ⅱ	60	89	36.9	169.5		189
図85	595	石棒		安山岩	XⅡF-213	Ⅱ	113	55	28	286.5		93
図85	596	石棒		安山岩	XⅡF-213	Ⅱ	135	82	28	299.1		188
図85	597	石棒		緑色角礫岩	XⅡH-220	Ⅱ	66	41	16	80.2		187
図86	598	凹石		XⅡS-213	Ⅱ	99	83	56	572.1		207	
図86	599	凹石		砂岩	XⅡB-213	Ⅱ	98	78	48	431.8		158
図86	5100	凹石		塊状岩	XⅡC-217	Ⅱ	126	43	28	230.9		161
図86	5101	叩印石		塊状岩	XⅡE-218	Ⅱ	138	48	32	265.8		162
図86	5102	磨印石		XⅡT-198	Ⅱ	167	83	64	1470.4		196	
図86	5103	磨石		安山岩	XⅡE-206	Ⅱ	113	36	75	497.1		171
図87	5104	叩石		石英安山岩	XⅡD-209	Ⅱ	132	89	62	995		175
図87	5105	台石?		礫状砂岩(砂岩)	XⅡS-2-216	Ⅱ	191	190	36	176.6		182
図87	5106	石鏝品		礫状凝灰岩	XⅡE-210	Ⅱ	49	37	12.5	31.2		191
図87	5107	石鏝品		礫状凝灰岩	XⅡT-205	Ⅱ	46.3	46.2	13	21.3		192
図87	5108	石鏝品		礫状岩	XⅡS-212	Ⅱ	29	28.8	10	8		193

## 第6章 まとめ

今回の調査では、遺構は竪穴住居跡1軒、竪穴状遺構1基、土坑30基、溝状土坑2基、ピット群2基を検出した。また、遺構ではないが、遺跡の北西側に縄文時代後期後葉・晩期後葉を主体とする旧河川跡を検出した。

遺物は段ボール箱にして約200箱分が出土した。そのうち160箱は旧河川跡からの出土である。以下、これらの遺構・遺物についてまとめ、若干の考察を加えてみたい。

### (1) まとめ

#### 1. 遺構

##### [竪穴住居跡]

竪穴住居跡は、C区で1軒検出した。出土遺物から縄文時代後期中葉から後葉にかけての遺構と思われる。遺構の約半分は市道にかかるため調査できなかったが、円形か楕円形になるものと思われる。炉は遺構のほぼ中央になるとと思われる部分に地床炉の一部を検出した。出土土器は、南郷村馬場瀬(1)遺跡の第Ⅲ群土器と同時期のものと考えられる。

##### [竪穴状遺構]

D区で1基確認した。平面形は長方形を呈する。時期は不明である。

##### [土坑]

土坑はA・C・D区で検出した。四角形か鍋底状のものが主体である。時期は縄文時代中期末葉から後期後葉にかけてのものである。A区では縄文時代後期後葉のものが主体である。C・D区では、遺物もほとんど出土せず、時期を決定するまでには至らなかった。

[土坑群] A区のXⅡQ-214～XⅡT-216グリッドの約12m四方において、15基の土坑を検出した。縄文時代後期前葉と後葉の遺物が出土した。主体を占めるのは、後期後葉の遺物で、従来の編年では「十腰内V群」相当であり、鈴木克彦の編年では、「十腰内5式」～風張式相当であろうか。遺物出土は覆土上位で目立ち、第113号土坑では覆土中位付近で盛んに火を焚いたためか、厚い焼土層が形成されている。一部の土器には縄文帯の幅狭化や粗雑な沈線文・器面調整という傾向が見られ、後期後葉でも新しい様相を示すものと思われる。148土-17(図21)は、弘前市鬼沢窪遺跡第2号出土土器2と同様の形態と考えられる。

土坑は底面から若干開くように立ち上がるものが多いが、一部オーバーハングし、フラスコ状の断面形態をとるものもある。当初貯蔵穴として機能していたものが、土坑の廃絶によって、ごみ捨て場や屋外炉のような場として利用された可能性がある。

##### [溝状土坑]

D区で2基確認した。時期は不明である。

##### [ピット群]

A区・D区で1基ずつ検出した。A区のもの、10基のピットが環状に配されており、D区のもの、約1,000㎡の区域に規則性を持たずに110基のピットが散らばっていた。どちらも用途・時期は不明

である。

## 2. 遺物

### 〔縄文時代中期から後期にかけての土器〕

旧河川跡からは多量の土器が出土したが、そのほとんどは縄文時代後期後葉の深鉢であり、全体の約80%以上を占めている。中期の土器では、末葉のものが少量出土しており、後期の土器では、初頭から前葉・中葉のものが少量出土している。また、後期後葉の土器の器種は深鉢・鉢・壺・注口であるが、深鉢が全体の80%以上を占めている。特徴としては、無文・地文のみを施した土器が全体の65%以上にのぼり、その約半数には炭化物・ススが附着しているという点である。これは、生活に使用した土器がここに廃棄、または流れ込んだことを意味していると思われる。

### 〔縄文時代晩期の土器とA区の遺構外土器〕

XⅢB-195グリッド付近とそれに隣接した旧河川内堆積土中から、縄文時代晩期後葉の土器群が出土した。有文の精製土器の出土は僅かであるが、変形工字文は完結型で、文様帯幅が狭いものが見られる。沈線も砂沢式のように断面半円形で太いものではなく、細いものが主体である。煮沸用の深鉢には、口頭部の平行沈線との組み合わせで盛んに縦位の条線文が施され、これは津軽地方に特徴的な煮沸形態であり、中部高地の浮線文土器群の「細密条痕文」(小林 1994)と同様の技法であろうか。小林青樹は、「細密条痕文」は、深鉢の擦糸文施文の模倣であり、土器製作過程の簡略化・手抜きを指摘している。両地域間での交流の有無は不明であるが、浮線文土器分布圏は、西日本と亀ヶ岡文化圏を結ぶ地域として、稲作受容のルートとしても注目されている。東北地方北部では、平行沈線文+縦走縄文の土器が晩期中葉に多く見られるが、縄文施文の面積が大きい煮沸用の深鉢が選択され、調整+縦走縄文の代用として成立した可能性も考えられる。

砂沢式期の遺物も少量見られるが、概ね、大洞A'式古段階・名川町剣吉荒町遺跡Ⅱ群土器の特徴を有するものと言えよう。

### 〔石器〕

石器は、石鏃、石錐、石匙、石篋、筒状石器、大石平型石篋、石槍、スクレイパー、使用痕ある剥片、二次加工ある剥片、チョッピングツール、礫石器、石製品等が出土している。出土土器と同様に、縄文時代後期前葉・後期後葉・晩期後葉に属するものと思われる。

まず石匙については、1999年に刊行された『山下遺跡・上野尻遺跡』の、杉野森の指摘を追認する形となるが、石匙の剥片素材の利用の仕方の特徴があり、素材剥片剥離時の打面側につまみを作成するのではなく、打面を刃部の一端に配置する。そのため、つまみは通常の剥片利用法では厚みを有するの比べ、当遺跡例では、刃部側に最大厚を有するものが多く見られる。この製作技法によって製作されるのは、縦長剥片を素材にした横型石匙である。石器全体の素材剥片中に、横長剥片を素材とするものは、横型石匙などに存在するが少ない。目的に横長剥片を剥離することが困難であった為、縦長剥片を用いてわざわざ横型石匙を製作したという解釈も考えられようが、機能的側面より考えれば、つまみ部の強度よりも、刃部側の厚みを重視した結果であるとも考えられる。つまみは着柄部ではなく、宮城県山王団遺跡出土例のように、紐で結び携帯するための部位であるため、強度を必要とせず、むしろ使用時の刃部の強度や手に持って使用する場合の握りやすさを狙ったものである可

能性がある。平成9年度調査時には、ほぼ縄文時代後期後葉の土器群とともに出土しており、この時期に特徴的な素材剥片利用法であると考えられる。他の遺跡にも類似は存在するようである。また非常に薄い剥片を用いた石匙も、数点存在する。

他に注目されるものとして、沢から出土した石刀の下半部があげられる。凝灰岩を丁寧に加工したつくりの良い例である。祭祀行為を含めた使用による欠損品であろうか。なお、縄文時代後期と晩期で、石材の利用法における違いを見出すことはできなかった。

### 3. 遺跡のまとめ

今回の調査区では、縄文時代後期後葉を主体とした遺構・遺物が検出された。縄文時代の河川跡からは、生活に使用したと思われる遺物も多量に発見されている。これらの点より、この遺跡は縄文時代後期後葉を主体とする集落跡であったと思われる。未調査部分が残っており、今後の調査により今回確認された遺物を使用した人々の集落跡が確認されることを期待したい。

(工藤 由美子、永嶋 豊)

#### (2) 『東北地方北部における縄文時代後期後葉研究について』

上野尻遺跡から出土した土器の主体を占めるのは、縄文時代後期後葉の所謂「瘤付土器」とされる一群である。旧河川や土坑中に廃棄された遺物には、煮沸用の粗製土器が圧倒的に多く、ここが生活の場であった事が理解される。

該期の東北北部の土器型式は、磯崎正彦らによる弘前市十腰内遺跡の調査により本格的に始まるが、近年、岡田康博(1986)、関根達人(1993)、金子昭彦(1994a・1994b)、鈴木克彦(1997・1998a・1998b)らによって、土器型式の再検討および編年の整備が進められている。また、宮城県では、気仙沼市田柄貝塚の調査報告(手塚 1986)によって、概ね研究者間で共通の理解が得られており、それを受けて高柳圭一の「瘤付土器四段階区分案」が提示されている。

磯崎の十腰内遺跡出土土器群の型式内容としての不備については、多くの研究者が指摘しており、そのため資料の再評価または編年の位置に関しては、各研究者間の編年観の違いにも起因して、各土器群のとらえ方に混乱が生じており、該期研究の足かせとなっているのが現状である。

東北地方北部では、該期の土器の出土量および住居跡床面出土資料を中心とした一括出土資料は比較的豊富であるが、貝塚やそれに準ずる良好な層位的出土例に乏しい。そのため、遺構内出土の一括性を有した資料を用い、編年案の確立された他地域(主に宮城県地方)との比較や各研究者の考える前後関係に基づく資料の羅列といった方法で、磯崎以後のいわゆる「十腰内編年」の再整備が図られており、一定の成果をあげつつあると評価できよう。

ここでは、縄文時代後期後葉の生活様式・上野尻遺跡の生活景観の復元を目的に、縄文時代後期後葉期の青森県を中心とした研究を概観しておきたい。

磯崎は十腰内遺跡の調査報告において、縄文時代後期の土器群を第Ⅰ～Ⅴ群へ分類した。磯崎自身は、この土器群をそのまま型式名として用いることに、消極的な姿勢であったが、1964年刊行『日本原始美術』内で型式名として、「十腰内1～5式」として用いているらしい(金子 1999)。

その後、青森県内では、青森市蛭沢遺跡(1979)、南郷村馬場瀬(1)遺跡(1982)、平館村尻高

(4) 遺跡 (1985)、八戸市丹後谷地遺跡 (1986)、八戸市風張 (1) 遺跡 (1990 a・b) 等が調査され、縄文時代後期後葉期の資料が蓄積され、報告書内において十腰内土器群への比定が盛んに行われている。また出土資料の型式学的特徴の検討および編年の位置的検討を、報告書内で行うことによって、研究の進展が見られた。

中でも北林八洲晴によって、「十腰内Ⅳ群」に併行するものとされた馬場瀬 (1) 遺跡のⅢ群土器は、一括性の高い資料であり、その後の後期後葉の土器型式理解に欠かせないものとなっている。

いずれの報告書も南東北や関東といった他地域との広域編年の問題には触れるものの、不備とされる「十腰内編年」を抜け出せない感は否めない。

しかし、出土土器群の型式内容・同時性の把握は着実に進展し、各報告書内での検討の成果が、後の岡田・関根・金子・鈴木らの、「十腰内編年」の再検討・再評価につながる。

また緊急調査の増加に伴い、蜷沢遺跡・丹後谷地遺跡・風張 (1) 遺跡・むつ市大湊近川遺跡・大畑町水木沢遺跡・平館村尻高 (4) 遺跡・岩手県軽米町大日向Ⅱ遺跡・馬場野Ⅱ遺跡等の調査で、該期の集落構成・竪穴住居跡の構造の一端が明らかになった。特に、風張 (1) 遺跡では、集落の各要素 (土坑・掘立柱建物跡・竪穴住居跡) が、環状構成をなすことが明らかにされた。縄文時代研究史においても特記される成果であり、集落の全体像の解明が待たれよう。また、尻高 (4) 遺跡、大湊近川遺跡等の主に半島部の遺跡を中心に、北海道に見られる「突縮文」が施文される土器が見られ、海峡を越えた交流が推定されている (岡田1986・鈴木 1997ほか)。

岡田康博は、「十腰内編年」を尊重しつつ、型式設定の経緯に問題がある「十腰内Ⅲ群土器」・「Ⅳ群土器」・「Ⅴ群土器」の再検討を行い、それぞれに資料を比定し、「Ⅴ群土器」の三段階への細別案を提示している (岡田 1986)。「Ⅴ群Ⅰ期」として丹後谷地遺跡他を、「Ⅱ期」として蜷沢遺跡を、「Ⅲ期」として平賀町石郷遺跡出土資料をあてている。磯崎によって時間幅を持つとされた「十腰内Ⅴ群土器」の細別案として注目されるが、馬場瀬 (1) 遺跡Ⅲ群土器を「十腰内Ⅳ群土器」に比定した岡田の論には、より後出する土器群 (「西ノ浜式」 or 「十腰内5式」) に併行すべきとする関根達人と鈴木克彦らの批判がある。

1986年の田柄貝塚の調査報告 (藤沼・手塚 1986) により、仙台湾を中心とした編年が整備され、研究者間でも一応の共通認識が得られた。「田柄編年」を受けて、高柳圭一は仙台湾地方の縄文時代後期燻付土器の4段階の変遷案を提示しており (高柳 1988)、仙台湾周辺のみならず該期の東北地方北部の編年理解にとっても不可欠のものとなっている。また該期の研究史は、小林圭一の論考に詳しい (小林 1999)。

関根達人は、研究史をたどった上で、後藤勝彦の「西ノ浜式」の型式内容を再検討し、宮城県を中心に併行する土器群の検証を行っている (関根 1993)。「十腰内編年」の不備を指摘した上で、仙台湾周辺の土器型式変遷を軸に、各地の一括資料を各段階に比定し、東北地方太平洋側を中心とした編年表を作成している。東北地方北部 (主に馬淵川・新井田川流域) では、住居跡出土の一括出土土器を検討し、「西ノ浜式」併行の土器を新旧2段階に細分し、「十腰内Ⅳ群土器」は「西ノ浜式」以前に位置付け、「十腰内Ⅴ群」は「西ノ浜式」「宮戸Ⅲa式」両段階併行の時間幅を有するものと述べている。田柄貝塚の手塚の論考とともに、東北地方南部と北部の編年関係および地域性に迫った論考である。



金子昭彦は、田柄貝塚「第Ⅲ群土器」と「第Ⅳ群土器」をそれぞれ新旧2段階に細別し、その上で宮城県・岩手県・青森県・秋田県の該期の資料の検討を通して、型式学的特徴を明らかにしている。

「田柄編年」を物差しとした、手塚・関根・金子らの論考によって、従来の「新地編年」・「十腰内編年」を発展的に消化し、縄文時代後期中後葉期の東北地方の土器型式編年・地域性が解明されつつある。

また近年、鈴木克彦により十腰内遺跡出土土器群とその型式内容の再評価が積極的に行われ、青森県および隣県遺跡の遺構内出土遺物の検討によって、新たな編年案が提示されている（鈴木 1997 1998 a 1998 b）。現段階で貝塚やそれに類する厳密な意味での良好な包含層出土例がない割に、住居・土坑などの検出例が比較的豊富な本州北端域においては、遺構内一括資料の羅列は妥当な方法ではあるといえようが、地域間での同時性・地域性の検証という問題を解決できるかが、課題といえよう。

鈴木は「十腰内式」の不備を訴える他者の研究姿勢を批判し、「磯崎正彦の十腰内式」の再検討を行い、「十腰内式」が土器型式足りうるという立場をとり、該期土器群の編年作業を行っている。

また東北地方北部の縄文時代後期末の土器型式として、「十腰内5式」に続く「5c類」→「風張式」（紐状入組み文群）→「大湊近川式」（幾何状入組み文群）→「6式」（入組み帯状文群）を提唱しており、亀ヶ岡式土器成立直前期の土器型式変遷を理解する上で、非常に魅力的な編年案であるが、今後、青森県域での再検証とともに他地域での同様の変遷の立証が待たれる。

鈴木は編年案を評価・批判できる研究者が青森県内に皆無であること自体問題であるが、今後は鈴木編年案を彼自身が咀嚼しわかりやすい形で提示し、他の研究者が彼の編年観・編年案を共有できるかどうか、当地の後期後葉土器群変遷の理解には欠かせない新たな問題である。

青森県の該期研究の課題として、鈴木克彦が想定する青森県域での土器型式変遷と仙台湾編年を基軸に据える研究者間で、整合性をもった共通理解の構築が望まれる。また北海道に面した地理的条件にあり、北海道系の技術とされる突瘤文の施された土器が出土するのは、青森県のみである。上野尻遺跡でも、北海道系の技術の可能性が高い爪形の刺突が充填される土器が出土しており（P78 173 など）、これは大湊近川遺跡でも見られるが、北海道地方の「堂林式」に後続し、「御殿山式」に先行するとされる「三ツ谷式」に特徴的な技術の可能性もあり、今後の慎重な分析が必要とされよう。

今後、東北地方北部での土器型式変遷を再検討し、周辺地域との対比において、互いの土器編年への共通認識を確立することが求められよう。小林圭一も述べているが（小林 1998）、文様・裝飾手法・形態等の研究者間での呼称の差異が、土器研究の障害となっていることは事実である。本報告書においても、最適な名称を与えることができなかったが、研究者間で、それらについては様々な主張があるだろうが、的確な用語への統一が望まれる。

各時期の物質文化・遺跡立地・遺構の構造および構成・生業形態等について、緻密な分析・調査を行うことによって、該期の生活様式解明に迫ることができると思われる。

（永嶋 豊）

## 引用・参考文献

- 青森市蜷沢遺跡発掘調査団 1979 『蜷沢遺跡』
- 青森県教育委員会 1977 『水木沢遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第34集
- 青森県教育委員会 1980 『永野遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第56集
- 青森県教育委員会 1980 『金木町 神明町遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第58集
- 青森県教育委員会 1982 『馬場瀬遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第70集
- 青森県教育委員会 1983 『鴨平(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第73集
- 青森県教育委員会 1984 『弥栄平遺跡(2)』 青森県埋蔵文化財調査報告書第81集
- 青森県教育委員会 1984 『尻高(2)・(3)・(4)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第89集
- 青森県教育委員会 1985 『大石平遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第90集
- 青森県教育委員会 1986 『沖附(1)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第100集
- 青森県教育委員会 1986 『沖附(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第101集
- 青森県教育委員会 1987 『大湊近川遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第140集
- 青森県教育委員会 1988 『上尾駝(2)遺跡Ⅰ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第114集
- 青森県教育委員会 1988 『上尾駝(2)遺跡Ⅱ』 青森県埋蔵文化財調査報告書第115集
- 青森県教育委員会 1989 『ニッ石遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第117集
- 青森県教育委員会 1999 『山下遺跡・上野尻遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第258集
- 青森県教育委員会 2000 『山下遺跡Ⅱ・米山(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第274集
- 浅川滋男編 1998 『先史日本の住居とその周辺』 奈良国立文化財研究所シンポジウム報告 同成社
- 安孫子昭二 『甕付土器様式』 『縄文土器大観4』
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986 『馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 岩手埋文調査報告第99集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986 『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 岩手埋文調査報告第100集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995 『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書 ー第2次～第5次調査ー』 岩手埋文調査報告第225集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 『和当地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 岩手埋文調査報告第259集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 『椏の木遺跡発掘調査報告書』 岩手埋文調査報告第263集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1998 『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書 ー第6次～第8次調査ー』 岩手埋文調査報告書第273集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000 『長倉Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 岩手埋文調査報告書第336集
- 金子昭彦 1994a 『東北地方北半部における縄文時代後期中葉の土器ー新山権現社遺跡Ⅲ群Ⅰ～3類土器ー』 『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要XIV』
- 金子昭彦 1994b 『十腰内Ⅲ式とⅣ式の境界ー東北地方北半部における縄文時代後期中葉から後葉への土器変遷ー』 『岩手考古学』第6号
- 金子昭彦 1995 『十腰内Ⅰ式と大湯式における型式としての諸問題ー細分、組成、併行型式の問題ー』 『岩手考古学』第7号
- 金子昭彦 1996 『十腰内Ⅰ式の三細分についての考え方ー新しい部分と最も新しい部分の分離』 『岩手考古学』第8号
- 金子昭彦 1997 『十腰内Ⅰ式と「大湯式」における壘形土器の変遷』 『岩手考古学』第9号
- 金子昭彦 1999 『東北地方 後期前半』 縄文時代10 第1分冊 縄文時代文化研究会

- 小林圭一 1999 『東北地方 後期(竊付土器)』 縄文時代10 第1分冊 縄文時代文化研究会
- 鈴木克彦 1989 「亀ヶ岡式土器」 『縄文文化の研究4』
- 鈴木克彦 1997 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・3  
—十腰内5式以降、後期終末型の研究—」 『北奥古代文化』 第26号
- 鈴木克彦 1998a・b 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・2(上)(下)  
—十腰内3, 4, 5式土器の研究—」 『考古学雑誌』第83巻 第2・3号 日本考古学会
- 須藤 隆ほか 1995 『縄文時代晩期貝塚の研究2 中沢目貝塚II』 東北大学文学部考古学研究会
- 須藤 隆 1998 『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究』 纂修堂
- 関根達人 1993 「西の浜式」とその周辺 『歴史』 第81輯
- 高橋圭一 1988 「仙台湾周辺の縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての編年動向」 『古代』第85号
- 成田滋彦 1981 「後期の土器 青森県の土器」 『縄文文化の研究4』
- 成田滋彦 1989 「入江・十腰内土器様式」 『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』
- 八戸市教育委員会 1984 『八戸新都市区内埋蔵文化財発掘調査報告書—牛ヶ窪遺跡—』 八戸埋文調査報告13集
- 八戸市教育委員会 1986 『八戸新都市区内埋蔵文化財発掘調査報告書II—丹後谷地遺跡』  
八戸埋文調査報告書15集
- 八戸市教育委員会 1988 『田面木平遺跡(1)』 八戸新都市区内埋蔵文化財発掘調査報告書V  
八戸市埋蔵文化財調査報告書第20集
- 八戸市教育委員会 1988 『八戸新都市区内埋蔵文化財発掘調査報告書VI』  
八戸市埋蔵文化財調査報告書第27集
- 八戸市教育委員会 1991 『風張(1)遺跡I』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第40集
- 八戸市教育委員会 1991 『風張(1)遺跡II』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集
- 八戸市教育委員会 1995 『八戸市内遺跡発掘調査報告書7—坂中遺跡—』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第61集
- 弘前市教育委員会 1988・1991 『砂沢遺跡発掘調査報告書—図版編・本文編—』
- 宮城県教育委員会 1986 『田柄貝塚I』 宮城県文化財調査報告書第111集



# 写 真 图 版



遺跡遺景



調査区 N→



調査区 SW→



調査風景 N→



調査風景 SW→



調査風景 SE→



A区基本層序(XIII I-219) S→



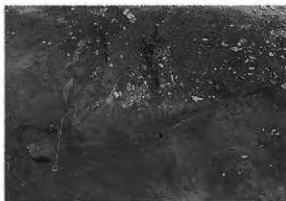
第101号土坑 遺物出土状況 S→



第101号土坑 セクション W→



第101号土坑 完掘状況 S→



第101号土坑・第104号性格不明遺構・第101号ピット 完掘状況 S→



第102号土坑 完掘状況 S→

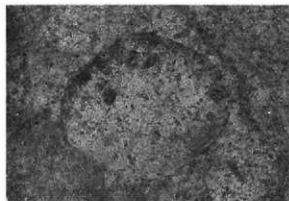


第103号土坑 セクション S→



第105号土坑 炭化物検出状況 S→





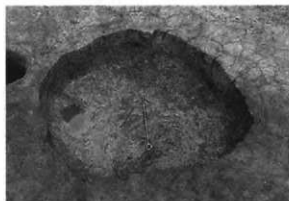
第103号土坑 完掘状況 S→



第105号土坑 セクション S→



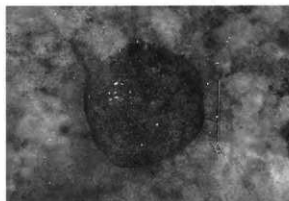
第105号土坑 遺物出土状況 S→



第105号土坑 完掘状況 S→



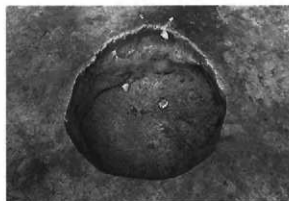
第106号土坑 遺物出土状況 E→



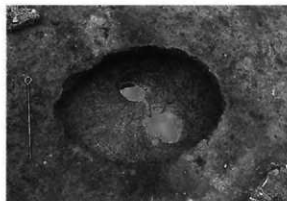
第106号土坑 完掘状況 S→



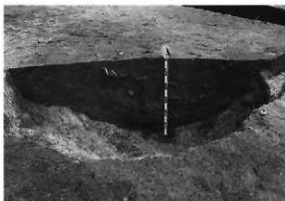
第110号土坑 セクション W→



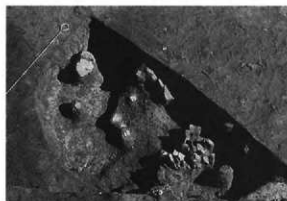
第110号土坑 完掘状況 S→



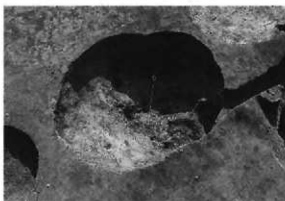
第118号土坑 完掘状況 N→



第113号土坑 セクション N→



第113号土坑 遺物出土状況 NW→



第113号土坑 完掘状況 N→



第113号土坑 遺物出土状況 N→



第114・148・149号土坑 A-Bセクション NW→



第148号土坑 セクション SE→



第114・115号土坑 G-Hセクション NE→



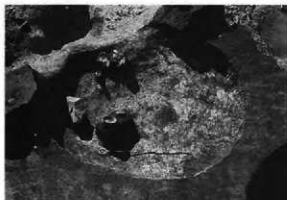
第148号土坑 E-Fセクション SW→



第149号土坑 4層遺物出土状況 W→



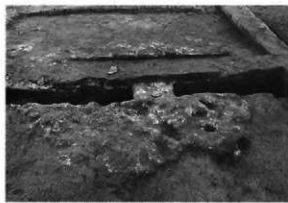
第115号土坑 セクション SW→



第115号土坑 完掘・遺物出土状況 E→



第115号土坑 遺物出土状況 W→



第148号土坑 火山灰検出状況 SE→



第148号土坑 完掘状況 SE→



第148号土坑 4層遺物出土状況 E→



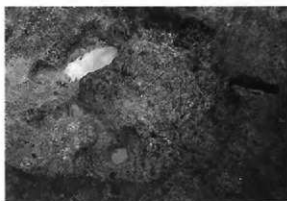
第149号土坑 遺物出土状況 NW→



第148・149号土坑 遺物出土状況 NW→



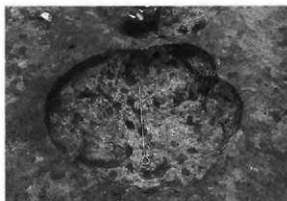
第149号土坑 C-Dベルト2層遺物出土状況 SW→



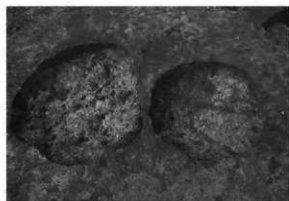
第149号土坑 完掘状況 NW→



第124号土坑 セクション E→



第124号土坑 完掘状況 S→



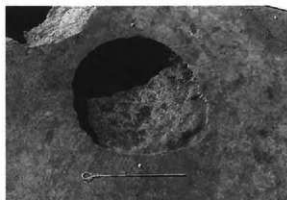
第124・123号土坑 完掘状況 E→



第125・126・141号土坑 セクション SE→



第125・126・141号土坑 完掘状況 NW→



第127号土坑 完掘状況 E→



第129号土坑 A-Bセクション SE→



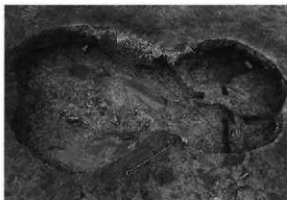
第129号土坑 C-Dセクション SW→



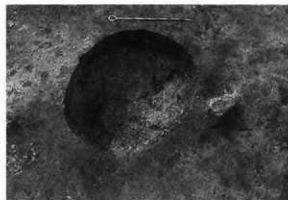
第129号土坑 碟・小型壺(70) 出土状況 S→



第131号土坑 A-Bセクション SE→



第129・131号土坑 完掘状況 E→



第142号土坑 完掘状況 E→



第143号土坑 完掘状況 S→



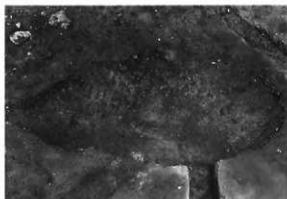
第101号性格不明遺構 S→



第108号性格不明遺構 完掘状況 E→



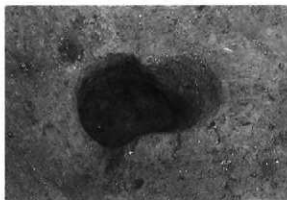
第106号性格不明遺構 完掘状況 NE→



第107号性格不明遺構 完掘状況 S→



第101号ピット群 ピット1セクション S→



第101号ピット群 ピット2完掘状況 S→



旧河川跡 調査風景 W→



旧河川跡 基本層序CDセクション SW→



旧河川跡 基本層序HGセクション N→



旧河川跡 礫堆積状況 W→



旧河川跡 基本層序EFセクション W→





第103号遺物集中区 遺物出土状況 N→



第103号遺物集中区 遺物出土状況 W→



旧河川跡 遺物出土状況 E→



旧河川跡 遺物出土状況 E→



旧河川跡 遺物出土状況 E→



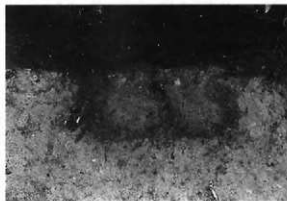
第101号遺物集中区 遺物出土状況 S→



第101号遺物集中区 遺物出土状況 W→



C区基本層序(ⅧP-202) SW→



第101号竪穴住居跡 炉検出状況 NE→



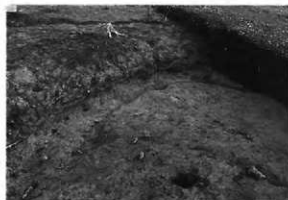
第101号竪穴住居跡 完備状況 NE→



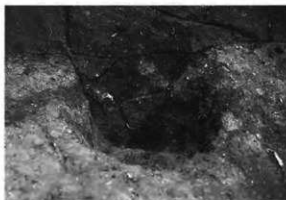
第101号竪穴住居跡 土器出土状況 E→



第101号竪穴住居跡 土器出土状況 NE→



第101号竪穴住居跡 溝跡 N→



第101号竪穴住居跡 ビット14セクション NE→



第101号竪穴住居跡 ビット15完掘状況 SW→



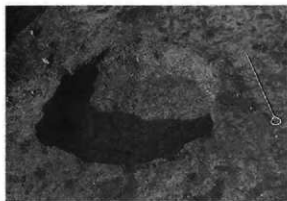
第128号土坑 セクション E→



第128号土坑 完掘状況 N→



第138号土坑 セクション SE→



第138号土坑 完掘状況 SW→



第139号土坑 完掘状況 NW→



第145号土坑 セクション W→



D区基本層序(VII T-175) NW→



第101号竪穴状遺構 東西セクション N→



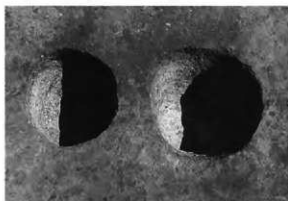
第101号竪穴状遺構 完掘状況 E→



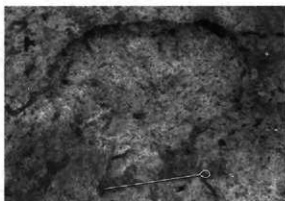
第121号土坑 セクション E→



第122号土坑 セクション E→



第121・122号土坑 完掘状況 W→



第130号土坑 完掘状況 E→



第101号溝状土坑 セクション W→



第101号溝状土坑 完掘状況 E→



第102号溝状土坑 完掘状況 E→



第102号ピット群 SE→



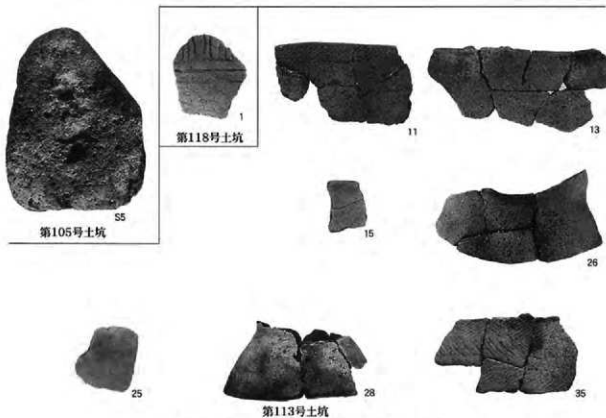
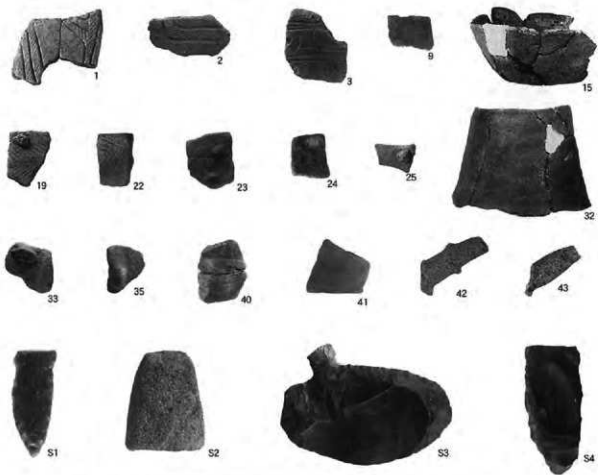
第102号ピット群 ピット54セクション S→



第102号ピット群 ピット27セクション S→



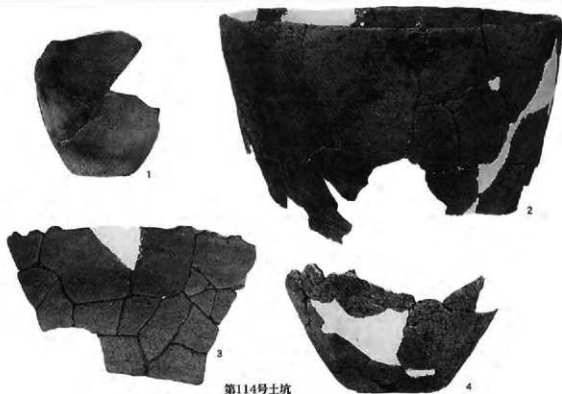
第102号ピット群 ピット完掘状況 S→



写真図版17 第105・118・113号土坑出土遺物



第113号土坑



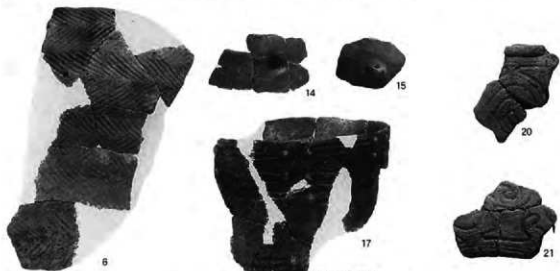
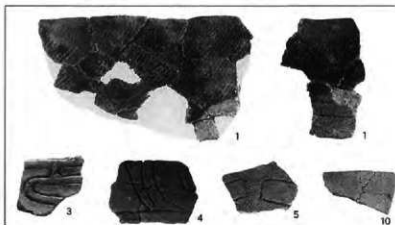
第114号土坑



第114号土坑

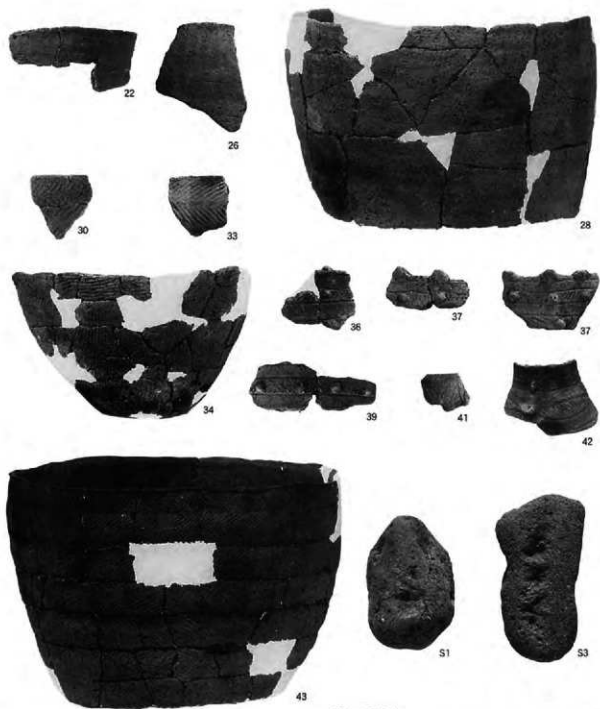


第115号土坑



第148号土坑

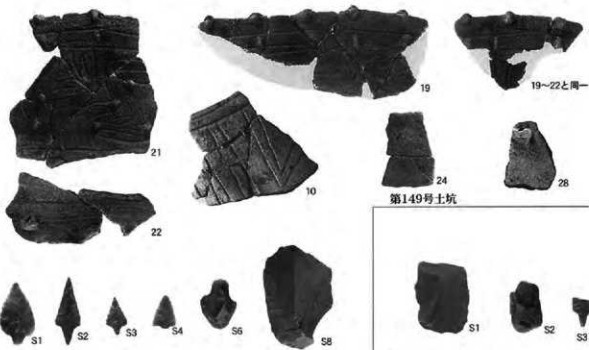




第148号土坑



第149号土坑



第149号土坑



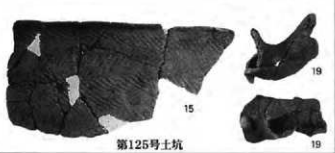
第111号性格不明遺構



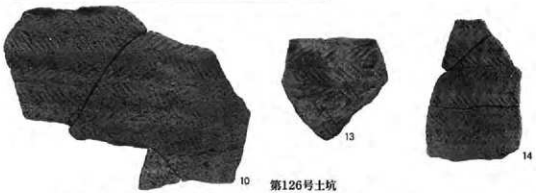
第123号土坑



第124号土坑



第125号土坑



第126号土坑



20



55



54



3



9



10



11



16



19

第126号土坑



33



36



38



40



44



47



49



45



53



60



67



69



70



S1



S2



S3



S4



S5

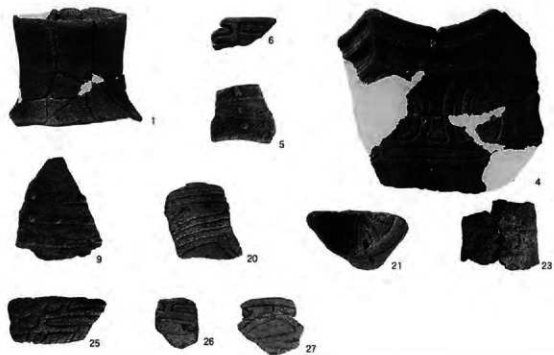


36

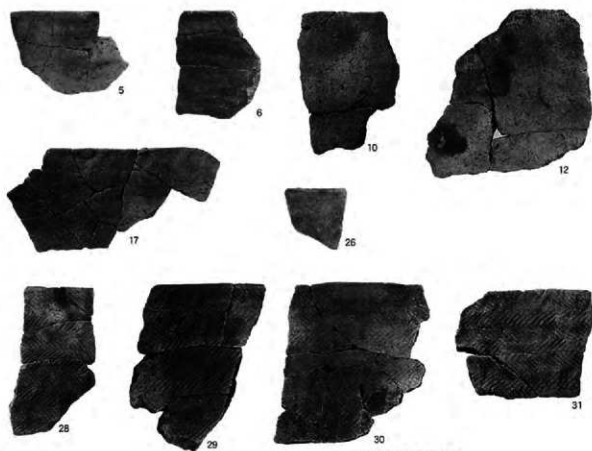


57

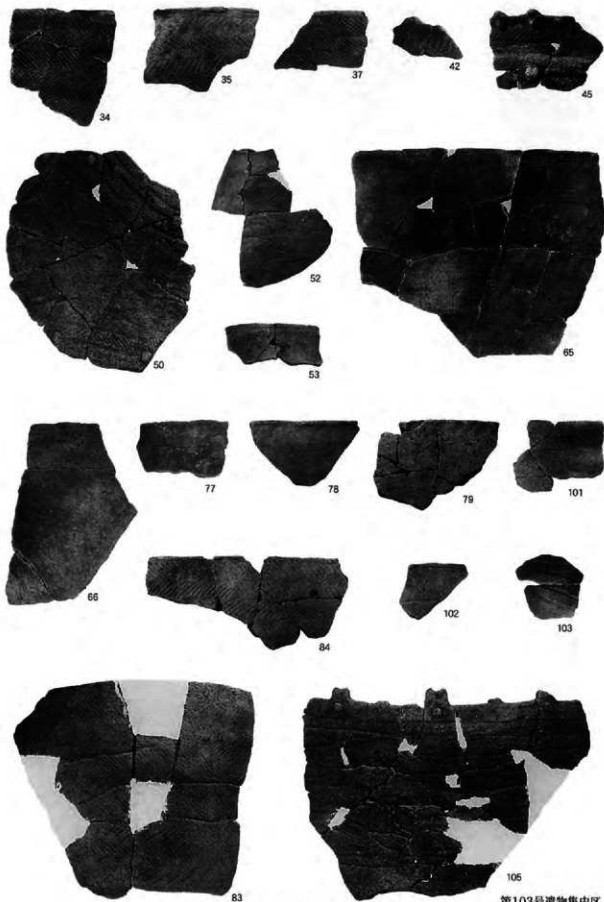
第129号土坑



第131号土坑

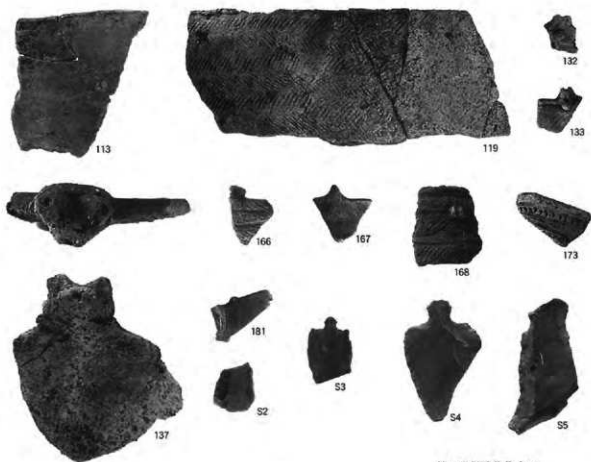


第103号遺物集中区

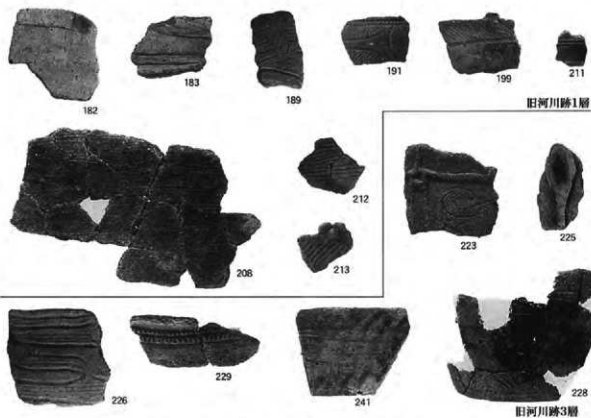


第103号遺物集中区

写真図版24 第103号遺物集中区出土遺物



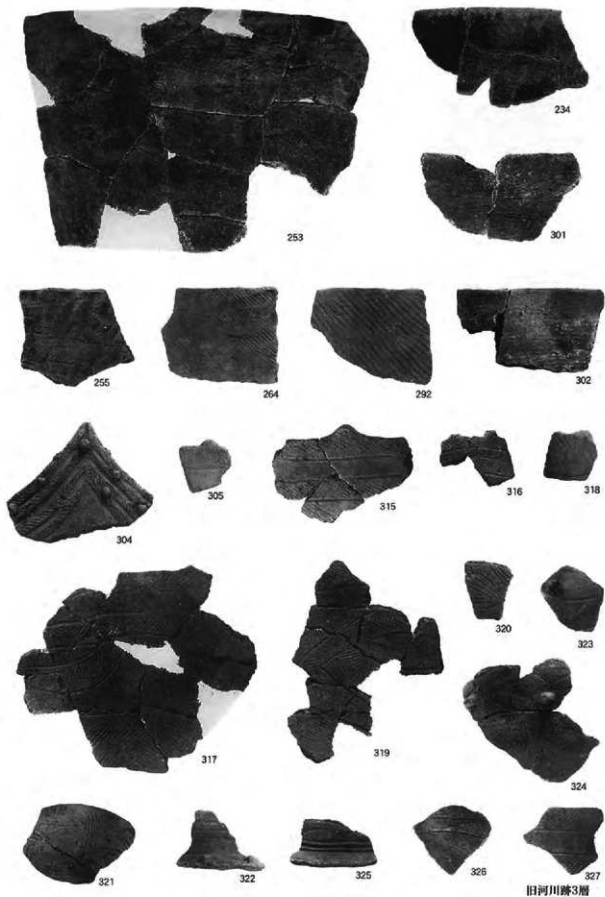
第103号遺物集中区



旧河川跡1層

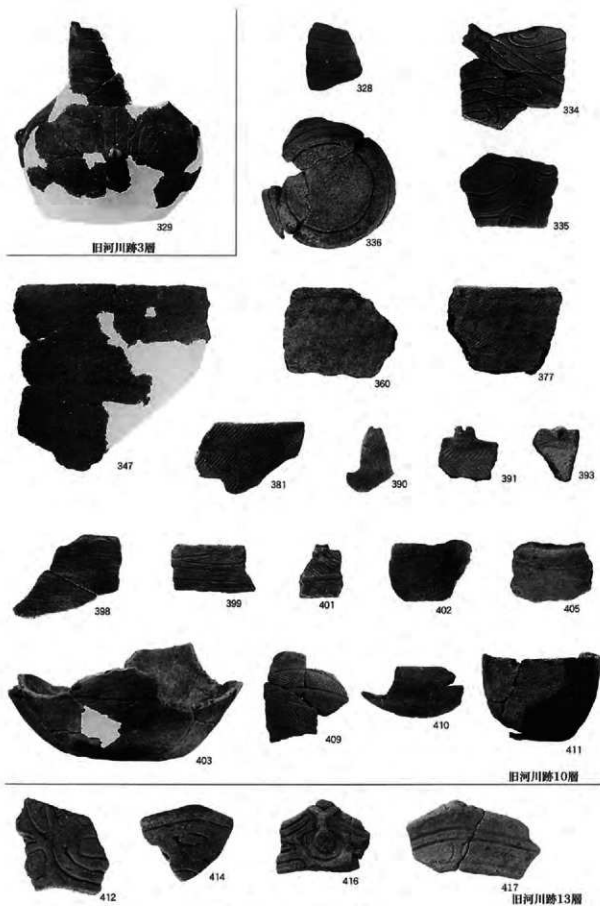
旧河川跡3層

写真図版25 第103号遺物集中区・旧河川跡出土遺物



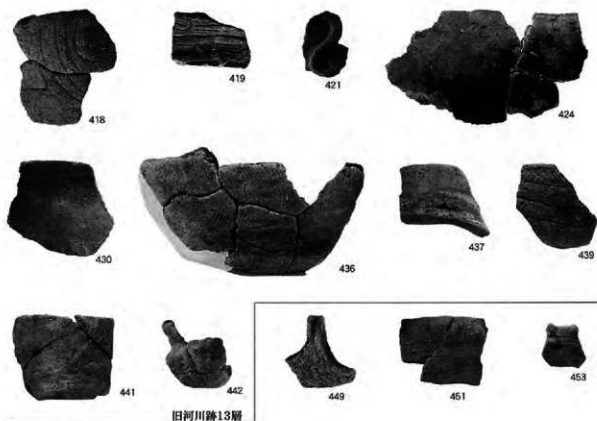
旧河川跡3層

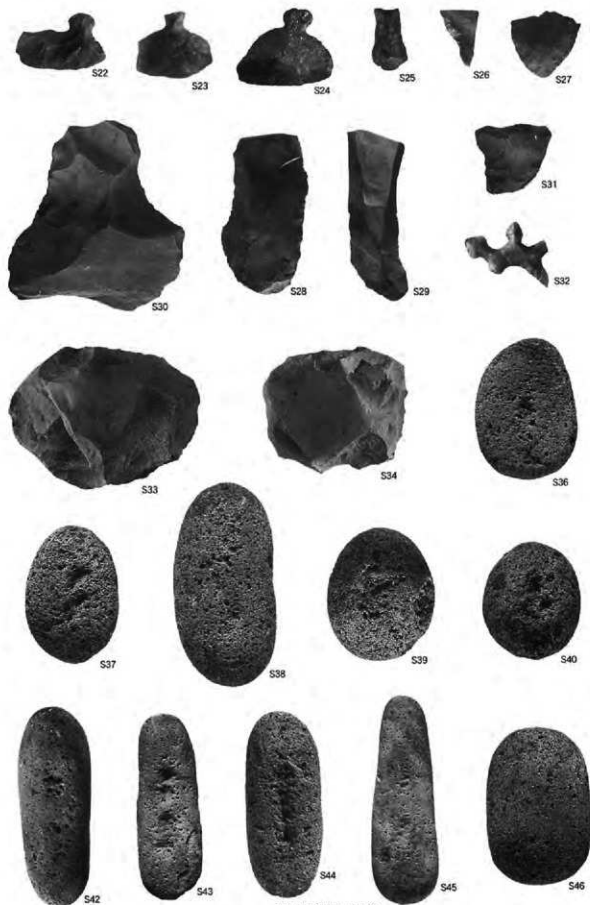
写真図版26 旧河川跡出土遺物



写真図版27 旧河川跡出土遺物







旧河川跡出土石器②  
写真図版29 旧河川跡出土遺物



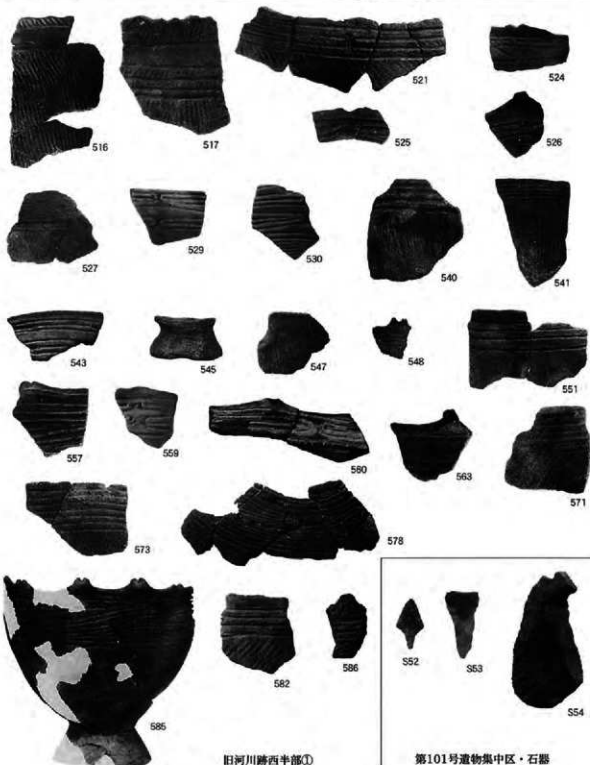
旧河川跡出土石器③



第101号遺物集中区①



第101号遺物集中区②



旧河川跡西半部①

第101号遺物集中区・石器

写真図版31 第101号遺物集中区・旧河川跡(西側)出土遺物



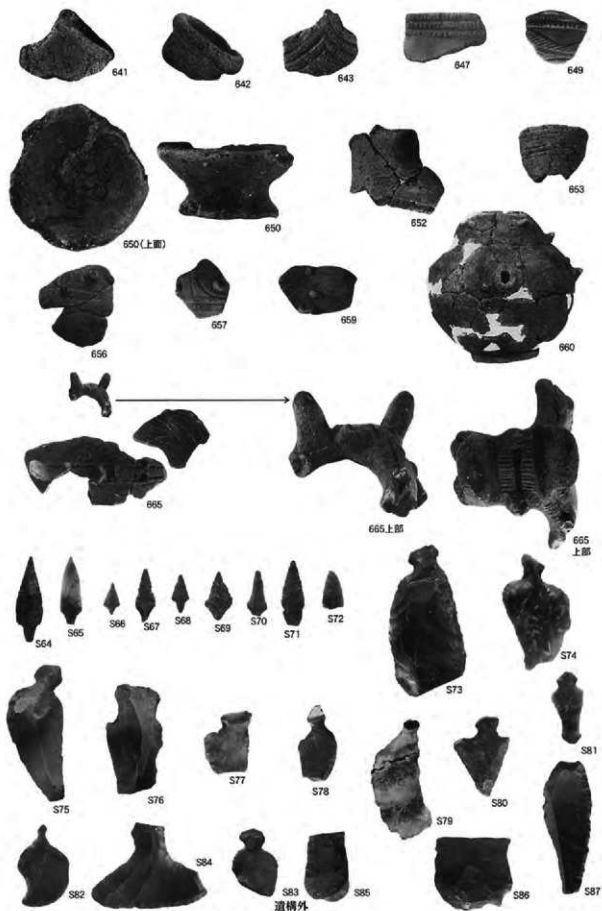
第101号遺物集中区・石器



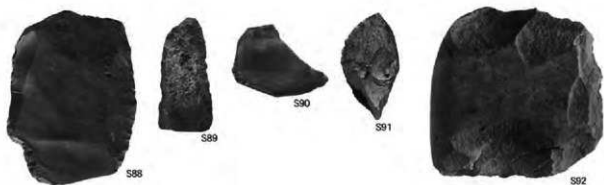
旧河川跡西半部②



遺構外

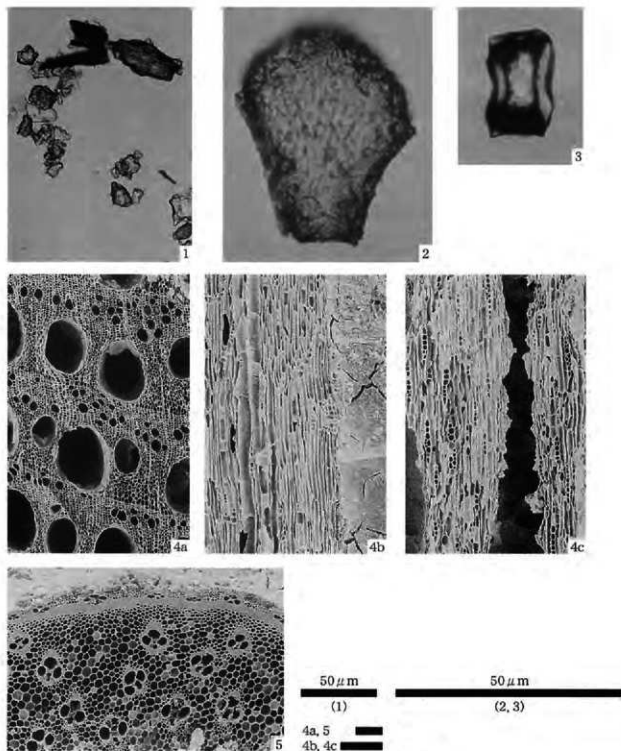


写真図版33 遺構外出土遺物



罫形土製品1

遺構外



1. 植物珪酸体分析プレパラート内の状況写真(第105号土坑:サンプルB 8層)  
 2. タケ亜科機動細胞珪酸体(第105号土坑:サンプルB 8層)  
 3. タケ亜科短細胞珪酸体(第105号土坑:サンプルB 8層)  
 4. クリ(第105号土坑:サンプルB 8層) a: 木口, b: 椋目, c: 板目  
 5. イネ科タケ亜科(第105号土坑:サンプルG 3層)横断面



## 報告書抄録

ふりがな	かみのじりいせき に							
書名	上野尻遺跡Ⅱ							
副書名	青森県新総合運動公園建設事業に伴う遺跡発掘調査報告							
シリーズ名	青森埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第302集							
編著者名	工藤由美子・永嶋 豊							
編集機関	青森埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森市新城字天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみのじりいせき 上野尻遺跡	あおもりけんあまのりし 青森県青森市 おのあざや だまび 大字矢田字 かみのじり 上野尻54、他	02201	01278	40° 50° 28"	140° 50° 58"	19990421 ～ 19991112	8,000	青森県新総合運動公園建設事業に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上野尻遺跡	集落跡	縄文時代 後期	竪穴住居跡 土坑	1軒 30基	縄文土器（中期・後期）、石器			
		時期不明	竪穴状遺構 溝状土坑 ピット群 性格不明	1基 2基 2基 5基	縄文土器（中期・後期）、石器			
	旧河川跡	縄文時代 後期・晩期			縄文土器（中期・後期・晩期）、石器			

---

青森県埋蔵文化財調査報告書第302集

## 上野尻遺跡Ⅱ

—青森県新総合運動公園建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 平成13年3月30日  
発 行 青森県教育委員会  
〒030-0801 青森市新町二丁目3-1  
編 集 青森県埋蔵文化財調査センター  
〒038-0042 青森市新城字天田内152-15  
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702  
印 刷 株式会社 誠 工 社  
〒030-0112 青森市八ツ段字上林78-42  
TEL 017-729-1611 FAX 017-729-1188

---





活彩あomor  
—暮らしあomor時代—